

上
E25

京都帝國大學
文科大學助教授

神

亮三郎著

第一版

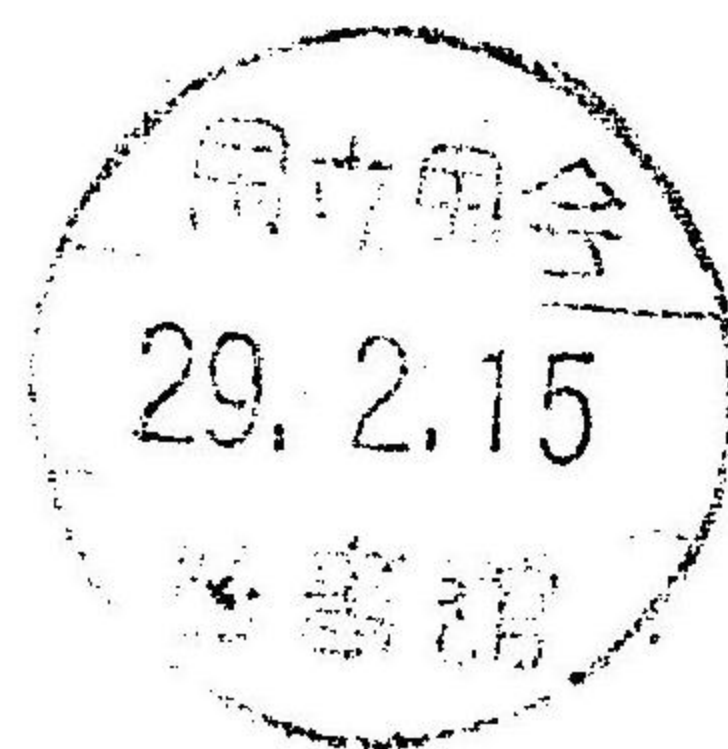
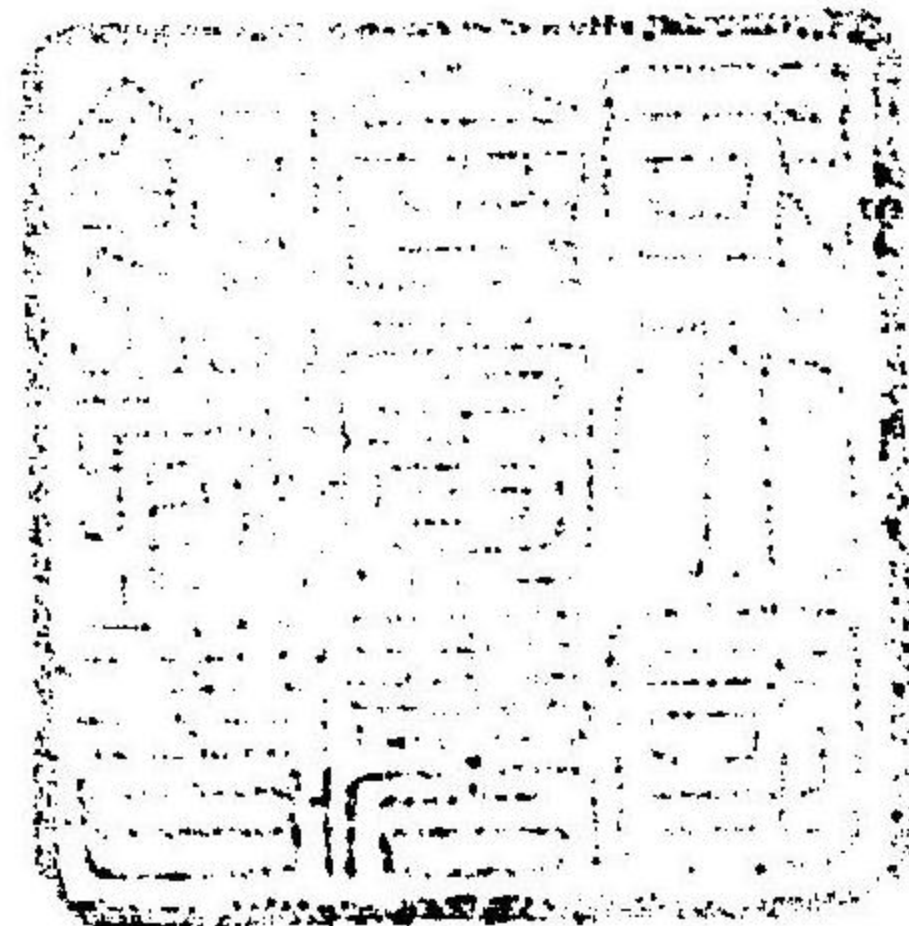
解說

梵語學

京都

古義真言宗高等中學藏版

829.895a419b



319495

遁非 窮由

說梵語學の序

本書の稿を起せしは、今を距ること九年の昔にあり。當時
 本邦の地に來り、乏を西本願寺文學寮の教職
 として、梵學研究の日に當れり。日々講說せし所は、必ずこれ
 を抄記して、筐底に藏せしが、暮年にして、略ぼ一書をなすに
 至れり。然れども、猶ほ多く意に滿たざる所あり。爲に未だ稿
 を脱するに至らず。後二年、轉じて、京都第三高等學校教授に
 任せられ、公私のこと稍々閑あるに及びて、即ち舊稿を出して
 處々に改削を施し、漸くにして、稿を竣へしを以て、勸して二
 卷となせり。本書と附卷とは、即ち是れなり。

爾來、これを公にして、世の學者に問はむとし、屢々これ
 を書肆に謀りしに、言を左右に託して、一も應ずるものなく、多
 年鉛槧の業、徒に筐底に藏して、世の知る所とならず。以て明
 治三十六年に至れり。

仁和寺派管長土宜法龍師は、眞言宗の耆宿なり。師素と東
 寺に留錫して、古義眞言宗の法務を董せり。余久しく師と相識
 る。又忘年の交をなす。師夙に歐米に遊び、印度を経て歸る。其
 の觀光採風の途次、諸國の碩學を歴訪して大に得る所あり。至
 る所、梵學の研究日に隆盛なるを見て、深く我が國に於ける斯
 學の振はざるを慨し、夙に梵學振興の志あり。明治三十六年の
 春、師偶ま余が本書の稿を藏せるを聽き、山科勸修寺門跡佐伯
 法遵師と相謀り、來りて、余に慫慂するに、本書を公にせむこ
 とを以てし、且つ自から資を出して、出版の費を助けむことを
 約せり。余深く其の志の懇懃なるに感じ、親しく神戸に抵り、金
 子印刷所に就きて、本書印刷のことを諮る。所主余が稿を見て
 其の困難なるべきを想ひ、色頗る沮む。固く請ふ。遂に諾せり
 是に於てや、始めて本書を印刷に附することを得たり。時實に

明治三十六年五月なりき。

其の後、時を経ること、四星霜、漸くにして、今や、本書の印刷を竣ふことを得たり。此の間、余の遭遇せし障礙は一再にして止まらざりき。即ち選字の困難にして、屢々誤謬を生じ易き、眞に意料の外に出づるものあり。従ふて、校正を要すること甚だ多く、殊に書中梵字を使用せる部分のごときは、余自から神戸に抵りて、選字の勞に服せざるを得ず。然れども公務のこと、往々忽諾に附すべからざるものあり。余が屢々神戸に趣くを許さず、加之雙親の相踵で、桑梓の地に簣を易ふるあり、家人の屢々病にかゝるあり。薄志弱行余のごときものを以て此の間に處す。神疲れ、氣屈せしこと幾度なりしやを知らず。印刷の進捗遅々として、意の如くならざりしは、實にこれに因る。

然れども、幸にこれを内にしては、金子印刷所の熟練なる職工のあるあり。循々として余の校正を容れて、毫も倦色なくこれを外にしては、英國オクスフォード (Oxford) 大學のクラレンドン (Clarendon Press) 印刷所の當路者あり。南條博士が東洋文獻の研究に貢與せしこと偉大なりしに省て、快く余の請を容れ、其の藏版にかゝる。阿彌陀經の梵本の複寫を許せしより、遂によく、この書の至難なりし、印刷を竣へて、世に公にすることを得たり。倘し内に金子印刷所の職工の熟練なく、外に「クラレンドン・プレス」の當路者の寛容なくむば、本書印刷の完成は、或は庶幾すべからざらむ。茲に記して、謝意を表す。

本書の校正は、余自からこれに當れり。固より嚴密ならむことを期せしも、なほ多く、誤謬あるを免れざりしは、余の遺憾に堪わざる所。其の最も甚しき部分に至りては、或は初學の人を誤らむとを恐れ、更に改版を命じて、これを正し、其の稍々忍ぶべきものは、別に誤謬を訂正して、卷尾に附するとせり。讀者先づこれを見て、而して後、本書を讀まむとを要す。

本書編纂の際、群籍を涉獵して會心の所に至る毎に、必ず

抄録して、多少の改易を加へ、後これを書中に引用せり。たゞ文例の最も適切を覺ねしものは、往々何等の損益をもなさずして、直ちに採りしものなきにあらず。此等の引用にして、今日より遡りて、其の出處を検索することを得べきものは、一々これを明記して、負ふ所ありしを示せるも、其の然らざるものは、單に書名を掲ぐるに止めたり。讀者乞ふこれを諒せよ。

本書に附隨して、別に附卷あり。已に印刷に附せり。而して、余今將に渡歐の途に上らむとす。發程期あり。日暇給せず、自らこれが校正に當る能はざるを恨む。然れども、畏友蘭田君が佛教大學の學徒を督して、余に代りて、校正の勞に服せらるゝあり。君既に歐米の大學に遊び、識古今を綜べ、學東西を兼ね、其の梵學の造詣のごときは、余の夙に推服する所。附卷君の校正を経て、世に出でむとき、惟ふに、敗素化して齊紫となるの觀あらむ。是れ余にありては、望外の幸なり。

附卷世に出づるの日は、本書と相待ちて、我が國の學徒に便益を供すること決して尠少ならざるべし。幸に、此の書により、我が國に於ける、斯學の陵遲せるを拯ひ、明治昭代の文運に涓埃の微を貢與するを得ば、余が、宿昔懷抱の志は、茲に、據ぶることを得て、多年鉛槧の業、始めて、其の效を空くせざるものと云ふべし。果して能く斯のごとくなるを得ば、是れ偏に佐伯、土宜二師の賜ならむ。謹むで、二師の好意を謝す。

明治四十年一月十五日

木水の上、茶山の麓にて

著者 じ る す

解説梵語學目次

(括弧の中なる数字は「ページ」を示す)

I. 梵語の字母.

- A. 羅馬字母. — § 1. (1); § 2 (1-2).
 B. 阿輸迦文字. — § 313. (223);
 § 314. (224).
 1. Brāhmī 字母.— § 314. (224); § 315.
 (224); § 316. (225); § 317. (225);
 § 318. (226).
 2. Kharoṣṭhī (kharoṣṭrī) 字母.—
 § 314. (224); § 315. (224); § 316. (225);
 § 317. (225); § 318. (226).
 C. Deva-nāgarī (nāgarī) 字母. —
 § 318. (226); § 319. (227).....
 § 340. (236).
 D. 印度數字. § 341. (236).

II. 梵語の聲音.

- A. 各字母の發音. — § 3. (2).....
 § 5. (2-3).
 B. 聲音機關の構造. — § 6. (8);
 § 7. (9-11).
 C. 梵語の聲音の分類. § 8. (11)...
 § 11. (12).
 D. 各種聲音の發生に關する説明.— § 11. (12)..... § 17. (18-19).
 1. a, ā, h, の發生.— § 12. (12-13).
 2. ṅ, ñ, ṇ, n, m, の發生.— § 13 (13-14).
 3. k, kh, g, gh, の發生.— § 14. (15).

4. c, ch, j, jh, の發生.— § 14. (15).
 5. ṭ, ṭh, ḍ, ḍh, の發生.— § 14. (15).
 6. t, th, d, dh, の發生.— § 14. (15).
 7. p, ph, b, bh, の發生.— § 14. (16).
 8. y, r, l, v, の發生.— § 15. (16-17).
 9. ṣ, ś, s, の發生.— § 15. (16-17).
 10. i, ī, u, ū, ri, rī, li, の發生.— § 16 (18).
 11. ṁ, ḥ, の發生.— § 17. (18-19).
 12. 梵語の聲音の分類.— § 8. (11); § 9.
 (11-12); § 18. (19); § 19. (19).

III. 語の終に存在する父音の變化.

- A. 通則 — § 102. (58-59); § 104.
 (59).
 B. 喉音.
 1. h は...k 又は ṭ となる.— § 104. 1.
 (59).
 2. kh, g, gh, は...k となる.— § 104. 1.
 (59).
 C. 顎音.
 1. ṣ; j は...ṭ となる.— § 103. (59).
 2. c, ch, j, jh は...k となる.— § 104. 2.
 (59).
 D. 舌音.
 1. ṣ は...k 又は ṭ となる.— § 104. 3.
 (59).
 2. r は...h となる.— § 32. (26).
 3. ṭh, ḍ, ḍh は...ṭ となる.— § 104. 3.
 (59).

E. 齒音.

1. s は...h となる.— § 32. (26).
2. th, d, dh は...t となる.— § 104. 4. (59).

F. 唇音.

1. ph, b, bh は...p となる.— § 104. 5 (59).

IV. 相連る二語の間に生ずる聲音の變化.

A. 母音と母音との連聲法.

1. 通則— § 55. (37); § 56. (37); § 57 (38); § 58. (38); § 59 (39).
2. 例外— § 286. (164).

B. 母音と父音との連聲法.

1. 短母音 + ch = 短母音 cch.— § 122. 2. (66).
2. ā + ch = ācch.— § 122. 2. (66).
3. mā + ch = mācch.— § 122. 2. (66).

C. 父音と母音との連聲法.

1. 通則— § 105. 1. (59).
2. n は...nn となる.— § 122. 1. (66).
3. r, s, の變化— § 32. (27); § 37. (29); § 38. (30); § 39. (30); § 40. (30).
4. bhos の s 消滅す.— § 294. (176).

D. 父音と父音との連聲法.

1. 通則— § 105. 1. 2. (66); § 293. (175).
2. t の變化— § 141. (77).
3. n の變化— § 142. (77).
4. m の變化— § 31. (25).

V. 特に一語の中又は複合詞に行はるゝ連聲法.

A. 母音の變化.

1. i, ī, u, ū は...iy, uv となる.— § 66. (42).
2. e, o は...ay, av となる.— § 45. (33).
3. ir, ur は...īr, ūr となる.— § 113. (62-63).
4. iv, uv は...īv, ūv となる.— § 113. (62-63).
5. i, u は...ī, ū となる.— § 213. (126).

B. 父音の變化.

1. s は...ś となる.— § 51. (36); § 276. (157); § 279. (157); § 309. (202); § 291. (165).
2. n は...ṇ となる.— § 33. (27); § 308. (202); § 309. (202).
3. n は...ñ となる.— § 126. (68).
4. s の消滅— § 280. (157); § 89. 1. (52).
5. 無氣の軟音は...含氣の軟音となる.— § 196. 1. (115).
6. 含氣の軟音は...無氣の軟音となる.— § 196. 2. (115).
7. t, th 等は...t, th 等となる.— § 145. 1. (79).
8. c + t は...çt となる }
c + t は...çth となる } — § 145. 2. (79).
9. j + t は...çt となる.— § 145. 3. (79-80).

VI. 梵語の語典に用ふる術語の説明.

- A. 母音の長短.— § 20. (20).
- B. 語根, 語基, 語尾, 語基構成音接頭辭.— § 21. (20).
- C. 平音, 重音 (guṇa), 複重音 (vṛiddhi) の區別.— § 23 (21); § 24 (21).

D. 諸品詞の區別.— § 22. 20-21).

E. 性, 數, 格の説明.— § 25. (22-23).

1. 性の區別.— § 25. 1. (22).
2. 數の區別.— § 25. 2 (22).
3. 格の區別.— § 25. 3. (23).

F. 諸品詞の變化.— § 22. (20-21)

1. 名詞的變化.— § 22. (21).
2. 代名詞的變化.— § 22. (21).
3. 數詞的變化.— § 22. (21).
4. 動詞的變化.— § 22. (21); § 168... § 172. (95-98).

VII. 格の用法.

A. 主格.

1. 一般の用法.— § 25. 3. a. (23).
2. iti と共に來る.— § 302. (186).

B. 業格.

1. 一般の用法.— § 25. 3. b. (23).
2. adhi-çi, adhi-çthā, adhy-ās と共に來る.— § 271. (155).
3. 二個の業格.— § 284. (159).
4. 時間の業格.— § 295. 1. (176).
5. 空間の業格.— § 295. 2. (176).
6. ā の關係詞と共に來る.— § 285. 1. (159).

C. 具格.

1. 一般の用法.— § 25. 3. c. (23); § 84. 1. 2. 3. (49); § 150. 1 (83-83).
2. kim, ko'(a)rthas, ko guṇas 等と共に來る.— § 186. 2. (108); § 296. (176); § 297. (196).
3. Tulya, sadṛiça 等と共に來る.— § 275. (155).

4. 移動の方向を示す.— § 289. (163).

5. 動作, 状態の様式を示す.— § 298. (176).

6. 事物完成の期間を示す.— § 305. (193).

7. Bhavitavyam, sthātavyam, sthiyatām と共に來る.— § 307. (193); § 150. 2. (84).

8. 別離の義ある動詞と共に來る.— § 312. (203).

9. 儼起相の動詞と共に來る.— § 208. (123-124).

D. 爲格.

1. 一般の用法.— § 25. 3. d. (23).
2. 移動の到達點を示す.— § 72. 1. (44).
3. 贈與, 報知の義ある動詞と共に來る.— § 72. 2. (44).
4. As, bhū 等の動詞と共に來る.— § 303. (193).
5. Svāgatam, kuçalam, çubham, 等の語と共に來る.— § 306. (193).
6. Namas, svāhā 等の語と共に來る.— § 343. (237).

E. 從格.

1. 一般の用法.— § 25. 3. e. (23).
2. 形容詞の比較級と共に來る.— § 166. 1. (93).
3. ārabhya, ūrdhvam, bahis, anantaram, param, pram, prabhṛiti, 等の語と共に來る.— § 285. 1. (159).
4. ā の關係詞と共に來る.— § 285. 2. (159).
5. jan, bhū, çikṣ 等の動詞と共に來る.— § 288. (165).

6. 恐怖の義ある動詞と共に來る.— § 300. (186).
 7. 保護, 救済の義ある動詞と共に來る.— § 301. 1. 2. (186).
 8. 方向を定むるさきの起點を示す.— § 344. (237).
 9. Anya, para, itara, pri thak 等の語と共に來る.— § 304. (193).
 10. Tas の從格.— § 98. (56).
- F. 屬格.
1. 一般の用法.— § 25. 3. f. (23).
 2. 贈與, 報知の義ある動詞を伴ふ.— § 72. 2. (44)
 3. As, bhū, vid 等の動詞を伴ふ.— § 130. (69).
 4. 形容詞の最上級を伴ふ.— § 166. 2. (93).
 5. Tulya, sadṛiṣa 等の語と共に來る.— § 275. (155).
 6. Ta に終る過去受動分詞と共に來る.— § 282. (159).
 7. 親信, 信任 (vieṣāsa) の義ある動詞と共に來る.— § 290. (165).
 8. 材料の屬格.— § 34 2. (237).
 9. 獨立屬格.— § 147. 2. (80); § 34 5. (237-238).
- G. 於格.
1. 一般の用法.— § 25. 3. g. (23);
 2. 贈與報知の義ある動詞を伴ふ.— § 72. 2. (49).
 3. 移動の到達點を示す.— § 72. 1. (49).
 4. 形容詞の最上級を伴ふ.— § 166. 2. (93).
 5. Anurāga, sneha 等の義ある動詞を伴ふ.— § 277. (157).

6. Tra の於格.— § 99. (56).
 7. 親信, 信任 (vieṣāsa) の義ある動詞と共に來る.— § 290. (165).
 8. 獨立於格.— § 147. 1. (80).
- H. 呼格.
- 一般の用法.— § 25. 3. h. (23).

VIII. 名詞的變化 (名詞, 形容詞, 分詞).

- A. 原則上の語尾.— § 65 (41-42; § 52 (36).
- B. 變化の區別.— § 27 (23).
- C. 變化の通則.— § 30 (25); § 52 (36).
- D. 母音語基の變化.
 1. a 語基の變化 (aṣva, dāna)— § 28. (24); § 29. (24).
 2. i 語基の變化 (agni, vāri, mati)— § 43. (32); § 46. (34); § 60. (39).
 3. u 語基の變化 (paṣu, madhu, dhenu)— § 44. (32); § 47. (34); 61. (39).
 4. ā 語基の變化 (aṣvā)— § 50. (35-36)
 5. ī 語基の變化 (nadi, cṛi, sudhi)— § 63. (41); § 67. (42-43); § 68. (43).
 6. ū 語基の變化 (vadhū, bhū, svayambhū)— § 64. (41); § 67. (42-43); § 68. (43).
 7. ṛi 語基の變化 (dāṛi, pitṛi)— § 69 (43-44); § 70. (44).
 8. āi 語基の變化 (rāi)— § 73. (45-46)
 9. o 語基の變化 (go)— § 74. (46).
 10. āu 語基の變化 (nāu)— § 75. (46).

E. 父音語基の變化.

1. 一般の概説.— § 100. (58).
2. 一様語基の變化 (marut, diṣ, vār, manas, dhanin)— § 101. (58); § 107. (59-60); § 108. (60); § 109. (60); § 111 (62); § 112. (62).
3. 二様語基の變化 (tudat; paṣumat, bhagavat, bhavat, ātman, karman, cṛeyas)— § 117. (65); § 118. (65) § 119. (65); § 120. (65-66); § 121 (66).
4. 三様語基の變化 (rājan, nānan, vidvas, prāc, pratyac, udac, nyac)— § 125. (68); § 127. (68-69); § 128. (69); § 129. (69).

IX. 男性名詞を女性名詞に改むる方法. § 76 (46-47).

X. 形容詞の比較.

- A. 比較級の構造.— § 164 (92-93); § 165 (93); § 166 (93); § 167 (93).
- B. 最上級の構造.— § 164 (92-93); § 165 (93); § 166 (93).

XI. 分詞體.— § 170 (96); § 176 (97); § 243 (140); § 244 (141-142).

- A. 分詞體の種類.
 1. 現在分詞.
 - 能動調.— § 115. (64); § 117. (65);

- § 185. (108); § 203. (120); § 267. 4. (151).
- 受動調.— § 214. (126).
2. 過去分詞.
 - 能動調.— § 240. (139); § 267. 5. 7. (151); § 241. 3. (140).
 - 受動調.— § 82. (48-49); § 83. (49); § 84. (49); § 241. (139-140); § 242. (140); 267. 6. (151).
3. 未來分詞.
 - 能動調.— § 225 (130); § 267. 8. (151)
 - 受動調.— § 225. (130) § 267. 8. (151).
4. 義務分詞 (可能法の未來受動分詞).
 - § 149. (83) § 267. 9. (151); § 150. (83-84).

XII. 代名詞的變化.

- A. 代名詞の區別.— § 85 (50-51).
- B. 人稱代名詞. § 85. 1. (50).
 1. Mat, asmat の變化.— § 86. (51).
 2. Tvat, yuṣmat の變化.— § 87. (51).
 3. Tat の變化.— § 88. (51-52).
- C. 指示代名詞.
 1. Tat の變化.— § 88. (51-52).
 2. Etat の變化.— § 90. (52).
 3. Idam の變化.— § 91. (53).
 4. Adas の變化.— § 92. (53-54).
- D. 關係代名詞.
 - yat の變化.— § 94. (55).
- E. 疑問代名詞.
 - Kim の變化.— § 95. (55).
- F. 不定代名詞.
 - kim + cana.— § 95. (55).
 - kim + cid.— § 95. (55).
 - kim + api.— § 95. (55).

XIII. 數詞的變化. § 131.(71)

..... § 138 (75).

A. 基数の變化.

1. Eka.— § 132. 1. (71).
2. dvi.— § 132. 2. (71).
3. Tri.— § 132. 3. (71-72).
4. catur.— § 132. 3. (71-72).
5. pañcan.— § 133. (72).
6. ṣaṣ.— § 133. (72).
6. saptan....daçan.— § 133. (72).

B. 序数の變化.

§ 137. (74) § 138. (75).

XIV. 六種の複合詞. (六合釋). § 153...§ 164. (86-90).

- A. 依主. § 154. (86-87).
- B. 相違. § 155. (87); § 156. (87).
- C. 持業. § 157. (87-88).
- D. 帶數. § 158. (88).
- E. 隣近. § 159. (88-89).
- F. 有財. § 160..... § 163 (89-90).

XV. 動詞的變化.

- A. 一般の叙説.— § 168..... § 172. (95-98).
- B. 動詞の五種の相. § 168 (98).
 1. 原始相. 4. 重複相.
 2. 催起相. 5. 擬名詞相.
 3. 希求相.
- C. 動詞の調.— § 109 (95-96).
 1. 能動調. (他動. 自動). 2. 受動調.

D. 動詞十種の時法.— § 170 (96-97).

1. 法. (現實, 可能, 命令, 條件).
2. 時. (現在, 第一過去, 第二過去, 第三過去; 第一未來, 第二未來).

E. 動詞の語基.— § 171. (97).

F. 動詞の語尾.— § 172. (97-98).

1. 爲他語尾. (parasmāi-padaの語尾).
2. 爲己語尾. (ātmane-padaの語尾).

G. 動詞の人稱.— § 172. (98).

H. 現實法.— § 170. 1. (96).

1. 現實法現在の用法.— § 71. (44).
2. 現實法過去の用法. (第一第二第三の過去).— § 180. 備考. (103).
3. 現實法第一未來の用法.— § 217 (128)
4. 現實法第二未來の用法.— § 217 (128)

I. 可能法.— § 170. 2. (96).

1. 可能法現在の用法.— § 182. (104); § 184. 備考. (107-108).
2. 可能法第三過去の用法.— § 257. (145-146).

J. 命令法.— § 170. 3. (96).

命令法の用法.— § 184. (107-108).

K. 條件法.— § 170. 4. (96); § 224. (130).

條件法の用法.— § 223. (130).

L. 動詞三種の體.— § 170. (96).

1. 分詞體. 3. 連續體.
2. 不定體.

M. 分詞體. XI を見るべし.

N. 不定體.

1. 不定體の構造.— § 151. (84); § 266. (151); § 267. 1. (151).

2. 不定體の用法.— § 152. (84); § 266. (151).

O. 連續體.

1. 連續體の構造.— § 143. (79); § 144. (79); § 146. (80); § 207. (123). § 266. (151); § 267. 2. (151).

XVI. 動詞の原始相. 能動調 (他動. 自動).

A. 現在語基の構成法.— § 173. (98-99); § 193 (114).

B. 現在語基に附する語尾.

1. 第一類動詞の語尾.— § 174. (99-100); § 179. (102-103); § 183 (106-107)
2. 第二類動詞の語尾.— § 188. (110).

C. 現實法の現在.

1. 第一種動詞. (√bhū, √ruh) § 41. 2. (30); § 174. (99-100)... § 178. (101).
2. 第二種動詞. (√as, √dviṣ) § 41. 3. (30); § 186. (109)... § 191. (111).
3. 第三種動詞. (√hu, √dā, √dhā) § 192. (113-114); ... § 195. (115).
4. 第四種動詞. (√naç) § 48. (34-35); § 174. (99-100)... § 178 (101).
5. 第五種動詞. (√su, √çru, √āp) § 197. (116); § 198. (117).
6. 第六種動詞. (√tud) § 41. 1. (30); § 174. (99-100)... § 178. (101).
7. 第七種動詞. (√bhid) § 199. (117).
8. 第八種動詞. (√kri) § 200. (119).

9. 第九種動詞. (√aç, √grah, √jñā) § 201. (120); § 202. (120).

10. 第十種動詞. (√cur) § 174. (99-100)... § 177. (101).

D. 現實法の第一過去.

1. 第一種動詞.— § 180. (103).
2. 第二種動詞.— § 189. (103).
3. 第三種動詞.— § 194. (114).
4. 第四種動詞.— § 180. (103).
5. 第五種動詞.— § 198. (117).
6. 第六種動詞.— § 180. (103).
7. 第七種動詞.— § 199. (118).
8. 第八種動詞.— § 200. (119).
9. 第九種動詞.— § 201. (120).
10. 第十種動詞.— § 180. (103).

E. 可能法の現在.

1. 第一種動詞.— § 181. (103-104).
2. 第二種動詞.— § 189. (103).
3. 第三種動詞.— § 194. (115).
4. 第四種動詞.— § 181. (103-104).
5. 第五種動詞.— § 198. (117).
6. 第六種動詞.— § 181. (103-104).
7. 第七種動詞.— § 199. (118).
8. 第八種動詞.— § 200. (120).
9. 第九種動詞.— § 201. (120).
10. 第十種動詞.— § 181. (103-104).

F. 命令法.

1. 第一種動詞.— § 184. (107).
2. 第二種動詞.— § 189. (103).
3. 第三種動詞.— § 194. (114).
4. 第四種動詞.— § 184. (107).
5. 第五種動詞.— § 198. (117).
6. 第六種動詞.— § 184. (107).
7. 第七種動詞.— § 199. (118).

- 8. 第八種動詞.— § 200.(119).
- 9. 第九種動詞.— § 201.(120).
- 10. 第十種動詞.— § 184.(107).
- G. 現實法の第二過去.
 - 1. 語基の構成法.— § 192. (113-114) ; § 226.(132-133) ; § 230. (133-134)... § 235.(136).
 - 2. 語尾.— § 227.(133).
 - 3. 變化.— § 228.(133)... § 237.(136).
- H. 現實法の第三過去.
 - 1. 語基の構成法.— § 245.(142)... § 254. (145).
 - 2. 語尾.— § 245.(142).
 - 3. 變化.— § 245.(142)... § 254.(145).
- I. 可能法の第三過去. § 255 (145)... § 257 (146).
- J. 現實法の第一未來.
 - 1. 語基の構成法.— § 218. (128-129) ; § 238.(139).
 - 2. 語尾.— § 174.(99-100); § 238. (139).
 - 3. 變化.— § 220.(129) ; § 238.(139).
- K. 現實法の第二未來.
 - 1. 語基の構成法.— § 221.(129).
- L. 條件法.
 - § 222.(130).

XVII. 動詞の原始相. 受動調.

- A. 現在語基の構成法.— § 210 (125); § 212 (125-126); § 213 (126).
- B. 現在語基に附する語尾.— § 210 (125).

- C. 現實法の現在. § 210 (125)
- D. 現實法の第一過去.— 都て原始相能動詞第四種動詞に同じ § 210(125).
- E. 可能法の現在.— § 210(125).
- F. 命令法.— § 210 (125)
- G. 現實法の第二過去.— § 239 (139).
- H. 現實法の第三過去.— § 254 (145).
- I. 可能法の第三過去.
- J. 現實法の第一未來.— § 224 (130).
- K. 現實法の第二未來.— § 224 (130).
- L. 條件法.— § 224 (130).

XVIII. 動詞の催起相.

- A. 能動調.(他動,自動).
 - 1. 現在語基の構成法.— § 204. (122)... § 266.(123).
 - 2. 現實法の現在.
 - 3. 現實法の第一過去.
 - 4. 可能法の現在.
 - 5. 命令法.
 - 6. 現實法の第二過去. § 238.(139).
 - 7. 現實法の第三過去. § 238.(139).
 - 8. 可能法の第三過去.
 - 9. 現實法の第一未來. § 219.(129).
 - 10. 現實法の第二未來.
 - 11. 條件法.

B. 受動調.

- 1. 現在語基の構成法.— § 211.(125)
- 2. 現實法の現在.
- 3. 現實法の第一過去.
- 4. 可能法の現在.
- 5. 命令法.
- 6. 現實法の第二過去.
- 7. 現實法の第三過去.
- 8. 可能法の第三過去.
- 9. 現實法の第一未來.
- 10. 現實法の第二未來.
- 11. 條件法.

XIX. 動詞の希求相. 重複相. 擬名詞相.— § 258 (146)... § 264 (148).

A. 希求相.

- 1. 現在語基の構成法.— § 259.(147).
- 2. 現實法の現在.
- 3. 現實法の第一過去.
- 4. 可能法の現在.
- 5. 命令法.
- 6. 希求相の名詞,形容詞.— § 260.(147)

B. 重複相.— § 261 (147-148).

C. 擬名詞相.— § 262(148)... § 264 (148).

XX. 語基構成音.— § 265 (150)... § 270 (154).

- A. Kṛit-pratyaya. (uṇādi-pratyaya)— § 266 (151)... § 268(153).
- B. Tad-dhita-pratyaya. § 265(150). ; § 269 (153)... § 270 (154).

XXI. 不變化詞.— § 22 (21).

A. 接續詞.

- Iti. (52); § 302. 1. 2. (186-187).
- Iti...evam. § 302. 3. (187).
- Iva... § 36. (29).
- Etādriç...yat. § 310. (202).
- Etāvāt...yena. § 311. (202).
- Ca § 36. (29).
- tu. (52).
- yat. § 392. (165).
- yat...iti, evam, tathā § 302. 2. (187).
- yat...tat. § 148. (81).
- yatas § 98. (56).
- yathā. § 99. 3. (57).
- yathā...iti, evam, tathā. § 30. 2. 3. (186-187).
- yatra. § 99. (56).
- yatra...tatra, tat. (67).
- yad yat...tat tat § 273. (155).
- yadā. § 99. 2. (57).
- yadi...tadā (67).
- yadā yadā...tadā tadā § 273.(155).
- vā. § 36. (29).

B. 副詞.

- Atas. § 98. (56).
- Atra. § 99. (56).
- Atha. § 99. (56-57).
- Anyathā. § 99. 3. (57).
- Api. § 287. (164-165); § 299.(185-186)
- Api nāma. (257).
- Itas. § 98. (56).
- It tham. § 98. (56).
- Uccāis. § 148. (81).
- Ekatra. § 99. (56).

Ekadā. § 99. 2. (57).
 Evam. (52); § 302. 2. 3. (187).
 Katham. § 99. (57)
 Katham api. § 99. 3. (57).
 Kadā. § 99. (56-57).
 Kada cana. § 99. (56-57).
 Kasmāt (n) nimittāt. § 148. (81).
 Kasya hetoh. § 148. (81).
 Kim. § 148. (81).
 Kutas. § 98. (56).
 Kuto'pi. § 98. (56).
 Kutra. § 99. (56).
 Kutrāpi. § 99. (56).
 Kutra cid. § 99. (56).
 Kena kāraṇena. § 148. (81).
 Kṣaṇam. § 148. (81).
 Kṣaṇāt. § 148. (81).
 Tatas. § 98. (56).
 Tatra. § 99. (56).
 Tathā. § 99. (56).
 Tathāpi. § 99. 3. (57).
 Tadā. § 99. 2. (57).
 Tāvāt. § 148. (81).
 Na katham api. § 99. 3. (57).
 Na kadā cana. § 99. 2. (57).
 Nāma. § 148. (81); (82).
 prakṛityā. § 148. (81).
 balāt. § 148. (81).
 Sarvatra. § 99. (56).
 Sarvadā. § 99. 2. (57).
 Sukham. § 148. (81).
 Vai. (81).

C. 關係詞.

Anantaram. § 285. 1. (159).
 ā. (67); § 285. 2. (159); 286. (164).

ūrdhvam. § 285. 1. (159).
 param. § 285. 1. (159).
 prabhṛiti. § 285. 1. (159).
 Vinā. (67)
 Saha. (45); (73).
 Bahis. § 285. 1. (159).

D. 間投詞.

Aho. § 286. (164).
 ā. § 286. (164)
 bhos. § 294. (176).

- ❖—
1. 獅子と鼠と猫. (156).
 2. 陶工の家に於ける婆羅門. (157).
 3. 驢馬と犬. (160).
 4. 輕卒なる婆羅門と忠實なる黄鼠. (161).
 5. 老婦と鈴を持てる猿. (162).
 6. 獅子と兎. (163).
 7. 空想に耽りし婆羅門. (166).
 附. La Latière et le pot au Lait
 (La Fontaine) (167)
 The Country-maid and her
 milk-pail. (168).
 8. 虎皮を被れる驢馬. (169).
 9. 刹帝利種と理髮師. (170).
 10. 象と野狐. (171).
 11. 藍壺に染りし野狐. (173).
 12. 牝雀と猿. (174).
 13. 猿と楔子. (177).
 14. 烏の夫婦と黒蛇. (177).
 15. 三人の詐欺者. (178)—甲.
 16. 悪き烏と善き雁. (179).

17. 貧慾の罰. (180).
18. 狡兎と象王. (182).
19. 三人の詐欺者. (184)—乙.
20. 虎に化せる鼠. (187).
21. 孝順の報. (188).
22. 三人の學者と一人の無學者. (189).
23. 小兒を奪ひ去りし鷹と鐵の秤を噉
 ひし鼠. (191).
24. 野狐と鳥と鹿. (194).
25. Hitopadeṣa 書の序辭. (198).
26. 旅人と虎. (203).
27. 鷲と猫. (207).
28. 池魚と鷲. (211).

29. 兩雁と龜. (213).
 附. 三魚の話. (213).
 附. 黄鼠と鷲. (215).
30. 身を殺して、仁をなせし鳥. (216).
31. 屍鬼二十五物語. (vetalapañca-
 vimcatika) の序辭.
 勇軍王と瑜珉の行者. (219).
32. 娘一人と婿四人. (221).
23. 般若波羅密多心經. (239).
34. 般若心經の梵本. (241-244).
35. 廣般若波羅密多心經. (245).
36. 般若心經の趣旨. (247).
37. 般若心經の梵本批評. (249).
38. 佛說阿彌陀經の梵文. (250-265).

—❖—
本書引用書目

- Apte. (v. sh.) The Student's Guide to Sanskrit Composition, being a Treatise on
 Sanskrit Syntax with a Glossary. 4th. ed. (Poona. 1898).
- Bergaigne. (A.) & Henry (V.) Manuel pour étudier le Sanscrit Védique.
 (Paris. 1890).
- Bhandarkar. First Book of Sanscrit. 7th. ed. (Bombay).
 " Second Book of Sanscrit. 5th. ed. (Bombay).
- Boehtlingk. (O.) Sanskrit-chrestomathie. 2te Auflage. (Sankt Petersburg. 1877).
- Bühler. (G.) Leitfaden für den Elementarcursus des Sanskrit. (Wien. 1883).
- Fick. (R.) Praktische Grammatik der Sanskrit-sprache. (Wien, Pest, Leipzig. Hart-
 lebens verlag).
- Lanman. (C. R.) A Sanscrit Reader. (Boston. 1884).
- Mādhavācārya. Sarva-darśana-Saṅgraha. (Calcutta. Vidyā-sāgara. 2nd. ed.).

- Max Mueller. (Fr.) A Sanscrit Grammar for Beginners. (London. 1870).
 „ The Science of Language. 2nd. Series. (P. 143-P. 152). (New York).
 „ Sacred books of the East XIII. (Buddhist mahāyānā-sūtras).
 Max Mueller & Nanjio. Anecdota Oxoniensia. (Aryan Series).
 Vol. 1. Part II. Sukhāvati-vyūha. (P. 92.-P. 100).
 Vol. 1. Part III. The Ancient Palm leaves. (P. 48-P. 54).
 Pāṇini. Aṣṭakam Pāṇiniyam. (Calcutta. Vidyā-Sāgara).
 Vidyā-Sāgara. (I. K.). Introduction to Sanskrit Grammar in Bengali. translated
 by Banerjea. (R.) (Calcutta. 7th. ed).
 Stenzler. (A. F.) Elementarbuch der Sanskrit-Sprache. (Breslau. 1892).
 Varada-rāja. Laghu-Kāumudī. (Bombay. Nirṇaya-Sāgara. Press 1890).
 Viṣṇu-ṣarman. Hitopadeśa. (Bombay. Nirṇaya-Sāgara Press).
 „ Pañca-tantra. (Bombay. Nirṇaya-Sāgara Press).
 Whitney. (W. D.) A Sanskrit Grammar, including both the Classical Language,
 and the older Dialects, of Veda and Brāhmaṇa. 3rd. ed. (1896).

葛城. 高貴寺慈雲尊者,	梵 函 三 本
同	七 九 略 鈔
稱讚淨土佛攝受經.	(支 炎 譯)
佛說阿彌陀經.	(羅 什 譯)
佛說無量壽經.	(康 僧 鎧 譯)



第 一 章

梵語の字母——梵語發音の概要

§1. 梵語の字母は、通例四十八の符號より成る。母音十三、父音三十五、即ちこれあり、今此等の符號を記するに梵字を以てせず、代ふるに羅馬字を以てすれば下のごとし。

1) 母音 Svāra-varṇāḥ.

a (ア). ā (アー). i (イ) ī (イー). u (ウ). ū (ウー). ri (リ). rī (リー).
 li (リ[^]). e (エー). ai (ア-イ). o (オー). āu (アーウ)。

2) 父音 Vyañjana-varṇāḥ.

- | | |
|---------------------|---|
| 1. ka 等 Ka-vargaḥ. | k (ク) kh (ク ^フ) g (グ) gh (グ ^フ) ṅ (ン ^フ) |
| 2. ca 等 Ca-vargaḥ. | c (チュ) ch (チュ ^フ) j (ヂュ) jh (ヂュ ^フ) ñ (ニユ) |
| 3. ṭa 等 Ṭa-vargaḥ. | ṭ (ト [°]) ṭh (ト ^フ) ḍ (ド [°]) ḍh (ド ^フ) ṇ (ヌ [°]) |
| 4. ta 等 Ta-vargaḥ. | t (ト) th (ト ^フ) d (ド) dh (ド ^フ) n (ヌ) |
| 5. pa 等 Pa-vargaḥ. | p (プ) ph (プ ^フ) b (ブ) bh (ブ ^フ) m (ム) |
| 6. 半母音 Antah-sthāḥ. | y (イ) r (ル) l (ル [^]) v (ヴ) |
| 7. 吹氣音 Uṣma-varṇāḥ. | ç (シュ) ś (ス [°]) s (ス) h (フ) |
| 8. 空點 Anu-svārah. | m̄ (ン) |
| 9. 涅槃點 Visargaḥ. | h̄ (フ [^]) |

§2. 上に記せるもの、外、五個の符號あり。

1. 専ら吠陀時代の梵語を記するに使用せらる。後代の梵語に於ては、ḍ を以て之に代ふ。
2. li li の短母音なるにむかへて、有名ある語典家 Vopa-deva の設けしものなれども、畢竟するに一種の擬制に過ぎず、なほ國音の「ヤ」行の「イ」、「ワ」行の「ウ」のごとし。

- 3. ṁ, Anu-nāsikah と稱し、後代の梵語に於ては、時ありて使用せらるゝことあるも、通例 m を以て之に代ふ。
 - 4. kh, Jihvā-mūliyah (舌の根に於て生ずる音)。
 - 5. ph, Upadhmanīyah (少しく息を吹きて生ずる音)。
- 此の二者は、使用せらるゝこと稀にして、通例 h を以て之に代ふ。

§3. 母音中 a より ū に至る六個の音は、國音のア、アー、イ、イー、ウ、ウーと比して大差あり。

ri, ri, li に至りては、我が國音の「ラ」行とは全く其の性質を異にし、英語の r, l に i, ī を添加して「リ」「リー」と發音すれば大差なかるべし。學者或は梵語の ri, ri 等を以て r, l と i, ī とを結合したるに過ぎずとし、從て此等の音を一個の聲音となすを怪むものあらむ。然れども、此等の場合に於ける i, ī は決して眞個の獨立せる i, ī にあらずして、其の本音の發生に附隨して生ずる一種の餘音にすぎず、恰も b の發音に伴ふて生ずる「ウ」、t の發音に伴ふて生ずる「オ」のごとし。蓋し一聲音の發生するに當り、知らず知らず一種の餘音を誘起するは、孰れの國語に於ても存在する現象にして、梵語の ri 等の場合に於てのみ然るにあらず、學者もし英語の beggar (乞食)、佛語の tenir (把持す) 獨語の lieben (愛す) の a, e の性質を仔細に觀察せば、思ひ半に過ぐるものあらむ。

- §4. 1. e, o は「エー」「オー」と發音すべし、[エ]「オ」と短く發音すべからず、急促にして短き「エ」と「オ」とは、梵語に於て存在せず。
- 2. āi, āu も「アーイ」「アーウ」と發音すべし、「アイ」「アウ」と發音すべからず、即ち ka カ, kā カー, ki キ, kī キー, ku ク, kū クー, kṛi クリ°, kṛī クリ°ー, kḷi クリ^°, ke ケー, kāi カーイ, ko コー, kāu カーウ。のごとし。

- §5. 1. c は「チュ」ch (チュ) と發音すべし、即ち a を附して發音すれば、ca チャ, cha チュ。のごとし。
- 2. t は舌端を上顎の中央部に緊接せしめて「ト」と發音すべし。ta タ°, tha ト°。のごとし。

- 3. ç は「シュ」、s は舌端を上顎の中央部に近づけて「ス」と發音すべし。ça シヤ, çu シユ, ça サ°, ši シ°のごとし。
- 4. ñ は勤學 kin-gaku と云ふ場合の ñ なり、ンッ を以て之に配す。
- 5. ñ̄ は般若 han-nya と云ふ場合の ny に同じ、(ニユ) を以て之に配す。
- 6. ṅ は t と同じき所に舌端を移し、「ヌ」と發音すれば之を得、ヌ° を以て之に配す。
- 7. n は國語の「ヌ」とは甚だしき差違あるも、今暫らく「ヌ」を以て之に配すべし。
- 8. m は國語の「ム」なり。
- 9. ṁ は國語の「ン」あり。
- 10. h は暫らく「フ^」を以て之に配すべし。

—❖—
第 一 課
問 題

1.—通例梵語を記するに當り、使用する字母の數幾何。 2.—其中、母音の數如何。 3.—母音を列擧すべし。 4.—父音を分ちて幾何の階級をなすか。 5.—國音に於て ñ の發生する場合は如何なる時なるか。 6.—ç の發音如何。 7.—ñ̄ が國音に於て發生する場合如何。 8.—t の發音は如何にしてなし得べきか。 9.—ri, ri 等の [i] は如何なる性質の聲音なるか。 10.—e の發音如何。 11.—āi, āu の發音如何。

下の梵文を讀むべし、但し下に施せる發音中 ti, di 等は トイ, フイとせずして、テイ、デイとせるは、速解を主として、誤解なからしめむ爲めなり、讀者テイ等の音を發音するに際し、決して「テ」「イ」「テ」「イ」と別ちて讀むべからず恰も「ヂ」「ヂ」のごとく發音すべし。梵語聲音の性質は、もし苛細に之を論ぜば、決して世人の想像するごとく、簡易なるものにあらずして、其の中、往々不規則なるものあるを發見すべし、例せば、[a]のごときは、世人大抵「ア」と發音し去りて、毫も怪むものなしと雖も、a の音にして、r を介して、他の父音の前にあるときは、殆むご「エ」と發音し、一父音を介して、u の前に來るときは、殆むご「オ」と發音すべきことあり又ある場合に「オ」と「エ」の中間音となることあり、garbha は殆むご gerbha のごとく、bahu は殆むご bohu のごとく、karma は殆むご forma のごとく是なり、本書簡明を主として、煩冗を厭ふ、故に此等小異の點を捨て、移めて、大同に就くこととせり、學者下に記する邦字の音譯を見て、梵語の發音は一に斯のごとしと思ふべからず、但し一事の看過すべからざるものあり、jñ の發音是れなり、j は「ヂユ」ñ は「ニユ」なれば、jñ は「ヂユニユ」となるべき理なるも、其の實 gy のごとく發音すべきものにして、決して「ヂユニユ」と發音すべからず、Vijñāna は「弁ギヤーナ」となるかのごとし。

गर्ह = エ कर्म = オ
वृह = オ

Asti kasmiṇṇ cid vanoddeṇe Caṇḍa-ravo nāma
 アステイカスミンシュチッドヴノードデーシェーチャズダ°ラゾーナーマ

ṣṛigālah. Sa kadā cit kṣudhānvito jihvā-
 シュリ°ガーラ°フ° サカダーチットクズド°ハ°ヌヱト° デフゾー

lāulyān nagara - madhye praviṣṭah. Atha tam
 ラ°ウリ°ヤ°ヌ ナガラマド°エ° プラヱズダフ° アットハ タン

sārameyā vilokya sarvataḥ ṣabdāyamānāḥ
 サ°ラ°メ°ヤ° 弁ロ°キヤ サルゾダフ° シャブダーヤマーナーフ°

paridhāvya tivra - dantāir bhakṣayitum
 バリド°ハ°ヱヤ ティヴラ タヌターイル ブクザイツム

ārabdhāḥ. So'pi tāir bhakṣyāmāṇah
 ア°ラ°ブ°ド°ハ°フ° ソ°ピ タ°イル ブクジャ°マーゾフ°

prāṇa - bhayāt pratyāsanna — rajaka — gṛiham
 プラ°ナー° ブ°ハ°ヤ°ト プラテ°ヤ°サヌナ ラチャカグリ°ハム

praviṣṭah. Tatra nīli-rasa — paripūrṇa — mahā -
 プラヱズダフ° タットラ ニ°リ°ラ°サ バリプ°ール° マハ°

bhāṇḍam āsīt. Tatra sārameyāir
 ブ°ハ°ヌ°ダム ア°シート タットラ サ°ラ°メ°ヤ°イル

ākṛānto bhāṇḍa — madhye patitah. Atha
 ア°クラ°スト° ブ°ハ°ヌ°ダ マト°エ° バテ°タフ° アットハ

yāvan niṣkrāntas tāvan nīli - varṇah
 ヤ°ヴ°ヌ ニズクラ°ヌ°タヌ タ°ヴ°ヌ ニ°リ°ラ°ヅル°フ°

sañjātaḥ. Tatrāpare sārameyās tam
 サニ°ジャ°タフ° タットラ°バレ° サ°ラ°メ°ヤ°ヌ タン

ṣṛigālam ajānanto yathābhīṣṭa — diṣaṇ
 シュリ°ガーラム アチャ°ナ°スト° ヤットハ°ブ°ヒ°ズ°ダ° ティ°シ°ニ°

jagmuḥ
 ジャ°グム°フ°

Caṇḍa - ravo'pi dūra - taram pradeṣam āsādyā
 チャ°ヌ°ダ°ラ°ゾ°ピ ヅ°ラ°タラム プラ°デ°シ°ム ア°サ°ディ°ヤ

kānanābhimukham pratasthe .na ca nīla - varṇena
 カー°ナ°ナー° ブ°ヒ°ム°ク°ム° プラ°タ°スト°ハ° ナ°チャ° ニ°ラ°ヅル°ネ°ナ°

kadā cin nija - raṅgas tyajyate Uktaṇ
 カダ° チヌ ニ°チャ°ラ°ン°ガ°ス ティ°ヤ°チ°テ° ウク°タ°ニ°

ca
 チャ

Vajra-lepasya mūrkhasya nārīṇān karkaṭasya ca /
 ヴ°ヂ°ラ°レ°バ°ス°ヤ° ム°ルク°ハ°ス°ヤ° ナ°リ°ネ°ン°ガ° カルカダ°ス°ヤ° チャ

Eko grahas tu mīnānān nīli - madyapayor
 エ°コ° グラ°ハ°ス ツ ミ°ナ°ナ°ヌ ニ°リ°ラ°マ°ディ°ヤ°バ°ヨ°ル

yathā //
 ヤットハ°

Atha tam Hara-gala-garala-tamāla-sama-prabham
 アットハ タン ハ°ラ°ガ°ラ°ガ°ラ°タ°マ°ラ°サ°マ°ラ°ブ°ハ°ム

apūrvam sattvam avalokya sarve simha-
 アプ°ール°ヴ°ン サットヴ°ム アヴ°ロ°キ°ヤ° サル°ゾ° シン°ハ

vyāghra — dvīpi — vṛikaprabhṛitayo' ranya — nivā-
 ヱ°ヤ°グ°ラ° ド°ヱ°ピ° ヴ°リ°カ°ブ°ラ°ブ°リ°タ°ヨ° ラ°ニ°ヤ°ニ°ヱ°

sino bhaya — vyākulita — cittāḥ samantāt
 シノ° ブ°ハ°ヱ°ヤ°クリ°タ° チッタ°フ° サマ°ヌ°タ°ト

palāyana — kriyān kur- vanti
 バラ°ヤ°ナ° クリ°ヤ°ン°ガ° クル° ヴ°ヌ°テ°

第 二 課

Caṇḍaravo'pi bhaya — vyākulitān vijñāyedaṃ
 チャ°ヌ°ダ°ラ°ゾ°ピ° ブ°ハ°ヱ°ヤ°クリ°タ°ヌ° 弁°ギ°ヤ°エ°ダ°ム

āha. " Bho bhoḥ ṣvāpadāḥ kiṇa yūyam
 ア°ハ° ブ°ホ° ブ°ホ°フ° シュ°ヱ°バ°ダ°フ° キン° ユ°ヤ°ム

mān dṛiṣṭvāiva santrastā vrajatha ?
 マ°ヌ° ド°リ°ズ°ド°ヱ°イ°ヱ° サ°ヌ°ト°ラ°ス°タ° ヴ°ラ°ヂ°ヤ°ト°ハ°

Tan na bhetaṃyam. Aham Brahmanādyā
 タ°ヌ° ナ° ブ°エ°タ°ヱ°ヤ°ム° ア°ハ°ム° プラ°フ°マ°ナー°ディ°ヤ°

svayam eva sṛiṣṭvābhīhitah. Yac chvā-
 ス°ヱ°ヤ°ム° エ°ヱ° ス°リ°ズ°ド°ヱ°ブ°ヒ°タ°フ° ヤ°チ°ツ° チ°ヱ°ヱ°

padānān kaç cid rājā nāsti tat
 パダーナーンカ カシユ チッド ラーチャーナースティ タット

tvam mayādyā sarva — çvāpada — prabhutve'
 トヴム マ ヤーディヤ サルヴ シュヴーパダ ブラブトヴェー

bhīkṣtas tato gatvā tān sarvān
 ブヒクダス タトー ガットヴー ターヌ サルヴーヌ

paripālayeti. Tato' ham atrāgataḥ Tan mama
 バリパーラ[△]エティ タトー ハム アットラーガタフ[△] タヌ ママ

cchatra — cchāyāyām sarvāir api çvā-
 チュチュハットラ チュチュハ[△]ヤーヤーン サルヴーイル アピ シュヴー

padāir vartitavyam. Ahañ Kakuddrumo
 パダーイル ヴルティタヅヤム アハヅカクドドルモー

nāma rājā trāilokye' pi sañjātaḥ.
 ナーマ ラーチャー トラーイ ローキエー ピ サニユチャータフ[△]

Tac chrutvā simha — vyāghra — puraḥ — sarāḥ
 タッチュ チュフルットヴー シンハ ンヤ[△]グッラ フラフ[△] サラーフ[△]

çvāpadāḥ svāmin prabho samādiçeti
 シュヴーパダーフ[△] スヴーミス プラブホー サマーディシエティ

vadantas tam parivavruḥ. Atha tena
 ヴダスタス タム パリヴヴルフ[△] アッタ テーナ

simhasyāmātya — padavi pradattā vyāghrasya
 シンハサヤマーティヤ パダヅ[△] プラダッター ンヤ[△]グッラサヤ

çayyā — pālakatvan dvīpinas tāmūlādhikāro
 シャイヤ[△]バーラ[△]カトヴス ドヅ[△]ピナス タームブーラ[△]ード[△]カーロー

vrikasya dvāra — pālakatvam. Ye cātrniyāḥ
 ヴリ[△]カサヤ トヴーラ[△]バーラ[△]カトヴム エー チャートミーヤ[△]フ[△]

çrigālās tāih sahlāpamātram api
 シュリ[△]ガーラ[△]ース ターイフ[△] サハ[△]ラー[△]バマートラム アピ

na karoti. Çrigālāḥ sarve'pi nihsāri-
 ナ カロティ シュリ[△]ガーラ[△]ーフ[△] サルゼー ピ ニフ[△]サーリ

tāḥ. Evam rājya — kriyayā tasya varta-
 ターフ[△] エーヴン ラーチャ[△] クリヤヤー タサヤ ヴルタ

mānasya simhādayo mṛigān vyāpādyā
 マーナサヤ シンハ[△]ダヨ[△] ムリ[△]ガース ンヤ[△]バーディヤ

tat — purataḥ prakṣipanti. So'pi prabhu-
 タット プラタフ[△] プラクシッパスティ ソーピ プラブ

dharmēna sarveṣān tān pravibhajya pra-
 ドルメネ[△] サルゼーザース タース ブラヅ[△]ハヂ[△] ブラ

yacchati. Evañ gacchati kāle kadā
 ヤッチュチュハティ エーヴン[△] カッチュチュハティ カーレー カダー

cid dūra — deçe çabdāyamānāḥ çri-
 チッド ヴーラ[△] デーシェー シャ[△]ブダーヤマーナーフ[△] シュリ[△]

gālā ākarṇitāḥ. Teṣāñ çabdarā çrut-
 ガーラ[△] アーカルニターフ[△] テーザ[△]ン シャ[△]ブダン シュルット

vā pulakita-tanur ānandāçru — pūrṇa — nayanās
 ヴー プラ[△]キタタヌル アーナヌダーシュル プールヅ[△] ナヤナス

tāra — svareṇa virotum ārabdhaḥ. Atha te
 ターラ スヴレーヅ[△] ン[△]ロツム アーラブト[△]フ[△] アッタ テ

simhādayas tañ svaram ākarṇya çrigālo'
 シンハ[△]ダヤス タン スヴラム アーカルニヤ シュリ[△]ガーロー

yam iti matvā lajjayādho — mukhāḥ
 ヤム イティ マットヴー ラ[△]チュ[△]チャード[△]ホー ムクハーフ[△]

kṣanarā sthitvā procuḥ. "Bho vāhitā
 クザ[△]ン ストヒトヴー プロチュフ[△] ブホー ヴーヒター

anena vayam. kṣudra — çrigālo'yam. Tad
 アネーナ ヴヤム クズドラ シュリ[△]ガーローヤム タッド

vadhyatām iti." So'pi tad ākarṇya
 ヴド[△]ヒヤターム イティ ソーピ タッド アーカルニヤ

palāyitum iccharṁstatra sthāna eva
 パラ[△]イツム イチュチュハ[△]ンスタットラ スト[△]ハ[△]ナ エーヴ

simhādibhiḥ khañḍaçaḥ krito mṛitaç
 シンハ[△]ディ[△]ブ[△]フ[△] ク[△]ハ[△]ズダ[△]シャフ[△] クリ[△]ト[△]ー ムリ[△]タシュ

ca. Ato'ham bravīmi
 チャ アト[△]ハム ブラヅ[△]ーミ

Tyaktāç cābhyantarā yena bāhyāç
 ティヤクダーシュ[△] チャ[△]ブ[△]ヒヤスタラー[△] エーナ[△] バーヒヤ[△]シュ

cābhyantarīkritāḥ / Sa eva mṛityum
 チャ[△]ブ[△]ヒヤスタリ[△]クリ[△]ターフ[△] サ エーヴ[△] ムリ[△]ティ[△]ユム

āpnoti yathā rājā Kakuddrumaḥ. //
 アープノ[△]ティ ヤット[△]ハ[△] ラーチャー[△] カクドドルマフ[△]

第二章

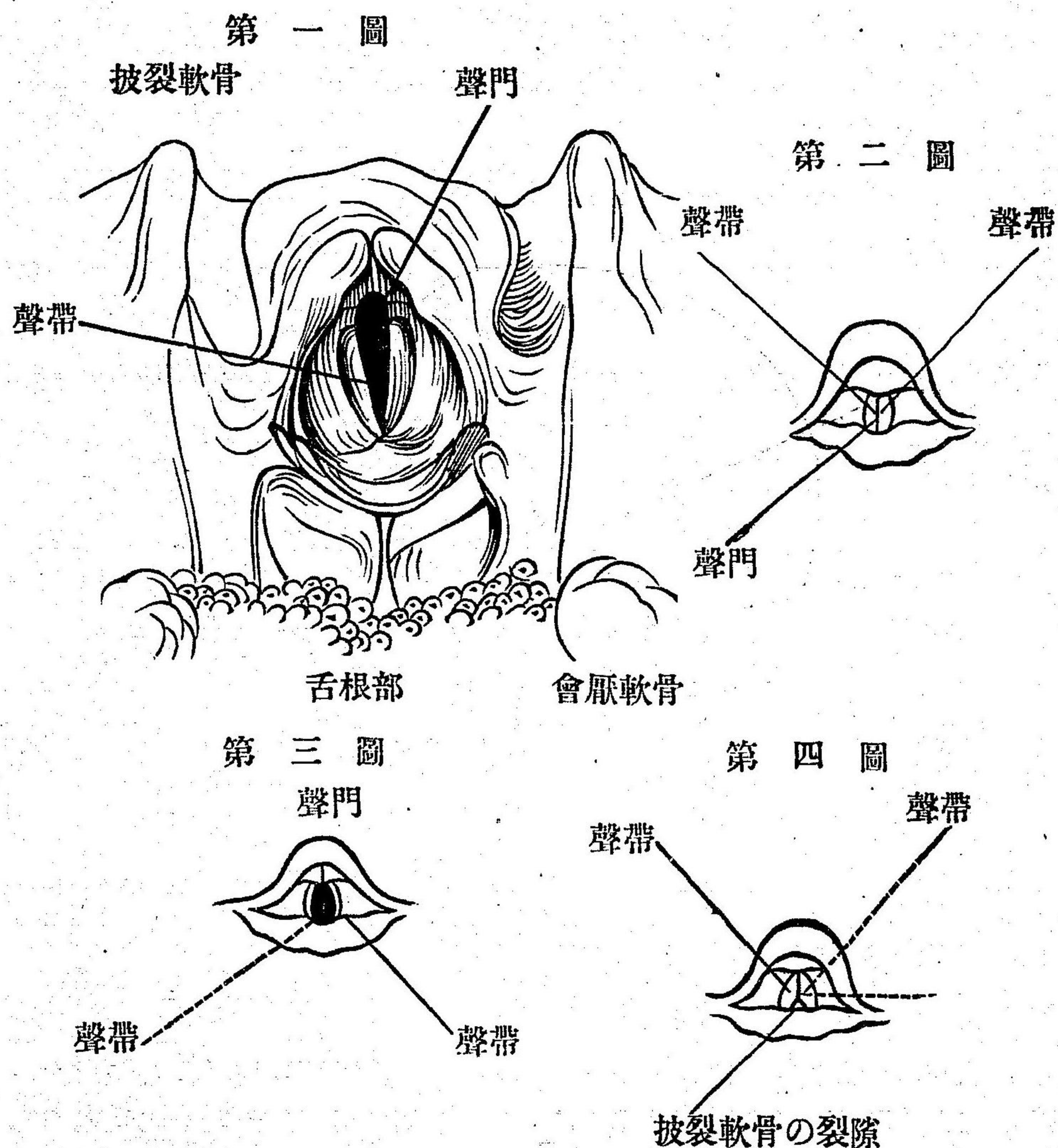
聲音機關の説明—各種聲音發生の状態

§6. 吾人の有する身體の諸機關中、聲音の發生に關し、直接の關係を有するものを總稱して、聲音機關と云ふ、聲音機關に四種あり 1 胸腔、2 喉腔、3 鼻腔、4 口腔是れなり。

1. 胸腔が聲音機關として、通例有する機能は、肺臟を壓迫して、聲音を作るべき氣息の迸出を催起するにあり。
2. 喉腔は、肺より出づる氣息を聲門 (Rima glottidis 第一圖) に要し、此の部分に存在する聲帶 (chordae vocales. 第一圖) 及び聲帶の後端に連續せる披裂軟骨 (Arytenoids 第一圖) の開閉により、時ありて、全然、時ありて一部分、氣息の迸出せむとするを阻止することあり、かくて、氣息聲門を通過せむとするとき、緊張せる聲帶の縁邊之に激して顫動することあらば、(第二圖參照)、其の際、發生する聲音は所謂軟音 (ghoṣa-vantas) と稱するものにして、國音の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」, 「ラ」行, 「ヤ」行, 「マ」行「ナ」行, 其の他所謂濁音と稱するものは、即ち之に屬す。

氣息もし聲門を通過する際、聲帶全く弛緩して、毫も其の迸出を阻止せず(第三圖)或は聲帶相接近して殆むど全く其の迸出を阻止するも、披裂軟骨の間に裂隙を存する爲め、氣息之を通過して、(第四圖)聲帶の縁邊、何等の顫動を生ぜざることあり、かくて發生する聲音は、硬音 (a-ghoṣa-vantas) と云ふ、「カ」行「サ」行等の音は即ち硬音なりとす。

此の故に、聲帶顫動の有無は、聲音硬軟の岐る、所にして、其の重要なる因より論を俟たざるなり、聲音の硬軟を識別なる方法は、一にして止まらずと雖も、其の中、最も簡易にして、且つ正確なるは、双手耳を掩ふて、試に其の聲音を發音するにあり、耳底もし響々として響あるを覺ゆれば、是れ聲帶の顫動喉腔より、耳に通じたる故にして、即ち其の聲音の軟音たることを知るべく、然らざるものは、盡く硬音なりとす。

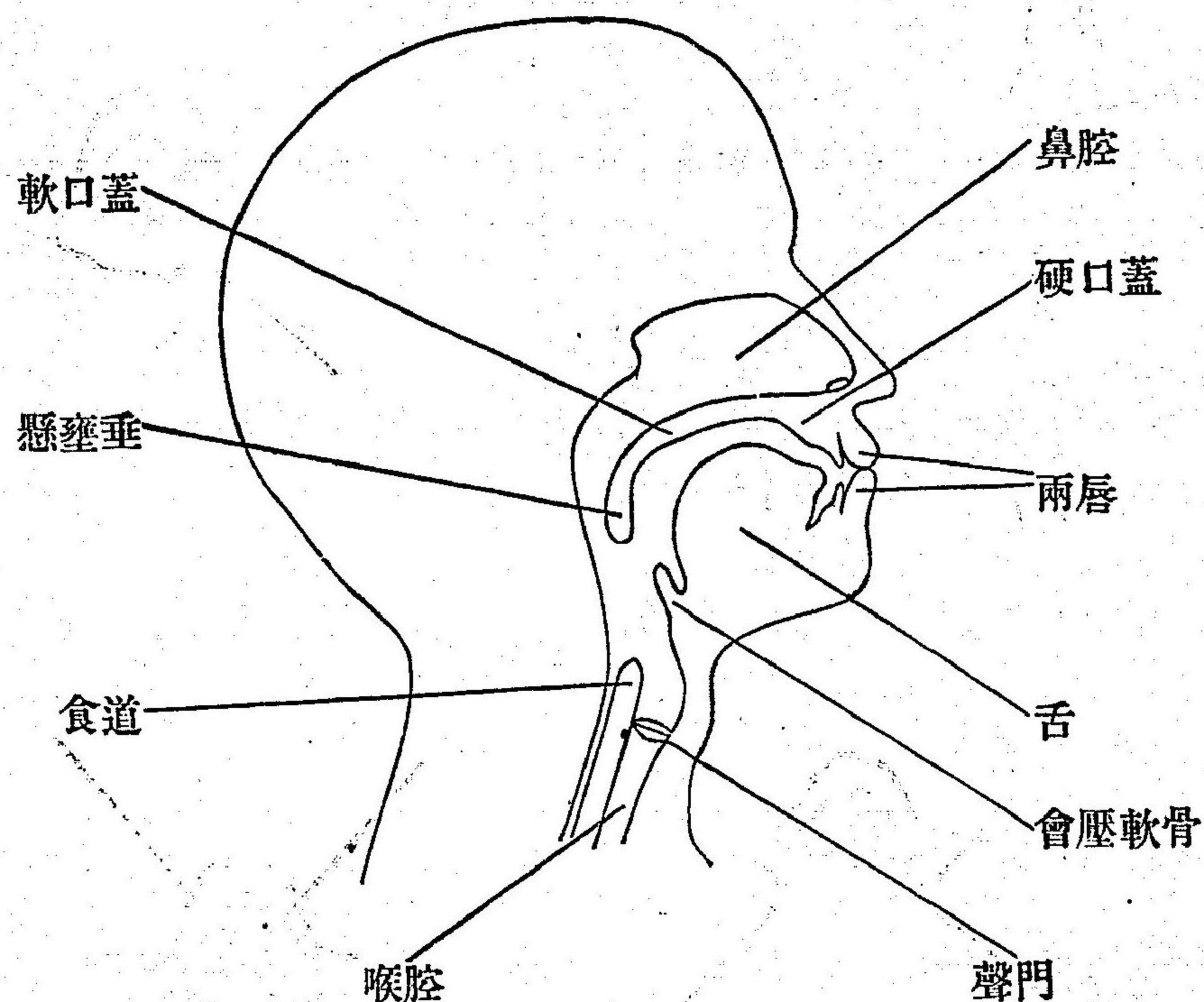


§7. 口腔内に於て、直ちに聲音の發生に關係あるものは、大別して四種とす。

1. 上顎、上顎の前半は齒齦に至るまで硬骨より成るも後半は軟骨より成り、而も其の末端遊離し懸垂垂と稱する部分に終る、かくのごとく、上顎の後半は軟骨にして、其の末端は遊離し口腔中孰れの部分にも繋連せず、故に、善く上向して鼻腔と喉腔との連絡を絶ち、氣息をして獨り口腔より迸出せしめ、毫も鼻腔を通過するを許さず、又善く下向して舌根を壓し、口腔と喉腔との連絡を絶ち、氣息をし

て鼻腔をのみ通過して外に出でしむ。
上顎の軟骨より成れる部分を軟口蓋と云ひ、其の硬骨より成れる部分を硬口蓋と云ふ。

第五圖



2. 舌は、上顎又は上齒に緊着して、時ありて、全然氣息の外に出づることを阻塞することあり、即ち k. g. c. j 等の音は、舌が上顎に緊着して、生ずるの音にして、t. d の音のごときは、舌が上齒に緊着して、發生する音なりとす。
 嘗いに、これのみならず、舌は上顎又は上齒に接近し、未だ全く、之に緊着せず、彼此の間、多少の空隙を存することあり、此の場合には氣息容易に之を通過して、外に出づることを得べし、かくて、發生する音の一例を擧ぐれば ç のごとき音、これなり、其の他 s, s, h のごとき比々皆然りとす。
3. 上齒は舌と相會するのみならず、まだよく下唇と相會し、全然若しく

ば一部分氣息の外に出づることを阻塞することあり、英語の f 又は v の音は、即ち其の好適例なり。

4. 唇は齒と相會する外、又よく上下兩唇相會し又は相接近して、聲音を發生せしむ、p. b. 又は梵語の v のごとき、即ち此なり。
- § 8. 上に述べたるごとく、口腔の中に存在する四種の聲音機關の活動 (prayatna) により、氣息は、時ありて、全然外に出づる途を阻塞せられ、時ありて、此等機關の間に存在する孔隙の壁面を掠めて、外に出づることなり。
 1. 前者の場合に於て發生する音を閉音 (sparçāḥ) と云ふ、蓋し聲音機關の接觸せる (sprīṣṭa) より發生せる音の義なり sparçāḥ は觸音の義にして、かの五塵即ち色聲香味觸の觸も即ち sparça あり國音の「カ」行「タ」行等は閉音と云ふを得べし。
 2. 後者の場合に於て發生する音を開音 (vi-vṛitāḥ) と云ふ、開音に三種あり。
 - a. iṣat-sprīṣṭāḥ (聲音機關の少しく閉塞したるより生せる音)、通例半母音と稱する音、y. r. l. v は之に屬す。
 - b. iṣad-vivṛitāḥ (聲音機關が少しく、開通せるより生せる音)、所謂吹氣音と稱するもの、ç. ś. s. h. は之に屬す。
 - c. vivṛitāḥ (聲音機關が全然開通せるより生せる音) 所謂母音は之に屬す。
- 語典家により、半母音を iṣat-sprīṣṭāḥ と稱せずして、duḥ-sprīṣṭāḥ (聲音機關の不完全なる接觸より生ずるもの) 又は iṣad-a-aprīṣṭāḥ (觸接せざる程度少なきより生ずるもの) 又は iṣad-vivṛita (少しく開通せるより生ずるもの) と稱し、吹氣音を iṣad-vivṛitāḥ と稱せず Nema-sprīṣṭa (半ば觸接せるより生ずるもの) vivṛitāḥ (全然開通せるより生ずるもの) と稱し、母音を vivṛitāḥ とも稱し、又は a-sprīṣṭāḥ (全然觸接せざるより生ずるもの) とも稱せり。
- § 9. 或る聲音が開音なるか閉音なるかを驗するの法は、極めて、簡易なるものにして、即ち其の聲音を連呼し得ると否とによりて之を知るを得べし、例せば S は開音なり、連呼し得ればなり K は閉音なり、もし之を連呼せむとせば「ウ」のみとなりて、K は消滅すべければなり。

半母音及び吹氣音を總稱して、西洋の學者は、fricatives (摩擦より生ずるもの) と

云へり、蓋し、此種の聲音は、氣息が聲音機關の間に存在する孔隙の壁面を掠めて、生ずる音なればなり、故に古代印度の語典家の下せる名稱とは、全く異なる名稱なれども、歸趣する所は即ち一なりとす。

§ 10. 聲音已に發生し終るも、進出する氣息なほ已まず、連りに口腔の壁面を摩擦して、爲めに耳に感すべき一種の餘音を生ずることありかかる餘音に伴はれたる父音を含氣音 mahāprāṇāḥ (大に氣息ある音) と云ふ、kh, gh, th, dh 等即ちこれなり、然らざるものは無氣音 alpa-prāṇāḥ (少しく氣息ある音) と云ふ、k, g, t, d, 如きは即ちこれなり。鼻腔の用は聲音を化して鼻音たらしむるにあり、故に口腔より通過すれば g, j, d, 等となるべき氣息が途を鼻腔に籍るときは即ち ṅ, ṅ, ṅ 等となるなり。

第三課

問題

- 1.— 聲音機關を列擧すべし。
- 2.— 喉腔の中にある聲門の用如何。
- 3.— 聲音の硬軟は何によりて成る、か。
- 4.— 上顎の構造如何。
- 5.— 軟口蓋の用如何。
- 6.— 舌と齒との用如何。
- 7.— 摩擦音とは如何。
- 8.— 閉音とは如何。
- 9.— 聲音の閉音なるか開音なるかを知らむとせば其の方法如何。
- 10.— 含氣音と無氣音との區別如何。

第三章

梵語に於ける聲音の分類

§ 11. 聲音の分類は種々の點より之をあすことを得べし、古代印度の語典家が梵語の聲音を分類するに當り、主として憑據せる點は四種あり。

1. 聲音發生に直接の關係ある機關より見て喉音、顎音、齒音等の別をなせり。
2. sprīṣṭa (全く接觸せる) 又は īsat-sprīṣṭa (少しく觸接せる) 又は a-sprīṣṭa (全く接觸せざる) なるかによりて閉音開音の別をなせり。
3. 聲音の含氣音なるか無氣音なるかによりて、mahā-prāṇāḥ 又は alpa-prāṇāḥ の別をなせり。
4. 聲音の硬軟如何によりて、aghoṣāḥ (硬音) 又は ghoṣavantaḥ (軟音) の別をなせり。

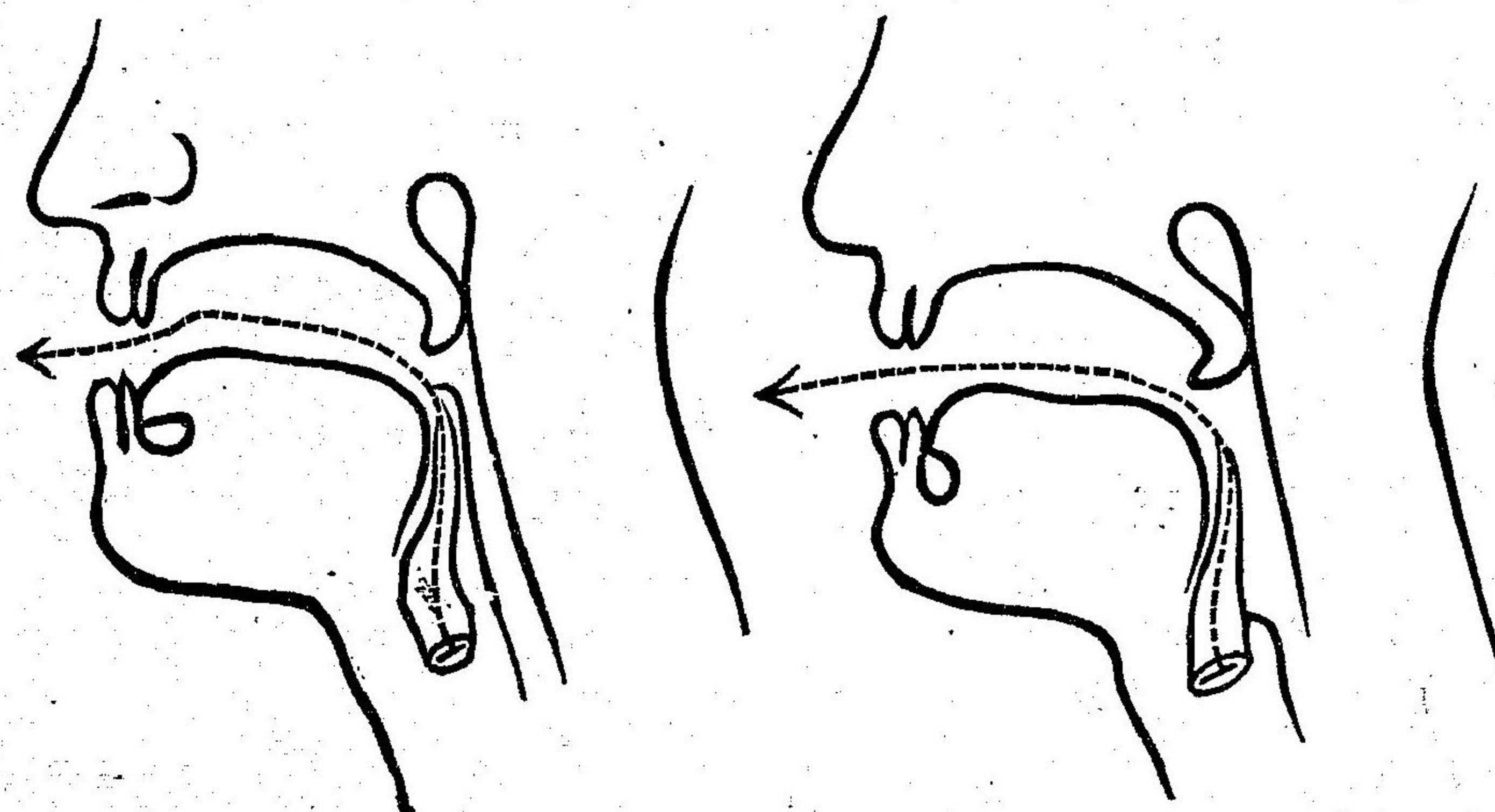
§ 12. a, ā, h の發生に際して、鼻腔は勿論、口腔に於ける聲音機關は何等

の自動的變化をなさず、全く喉腔の中に於て發生す、故に純然たる喉音ありと云ふを得べし、h は此の點に於ては國音の「ハ」行音に肖似せりと雖も、印度の語典家は、h を以て軟音なりとせるより見れば、國音の「ハ」行音とは全然同一視すべからざるものあり、且つ h は元來 gh, dh, bh より轉訛したる音なれば、h を軟音なりとせるは至當の説と云ふべし。

dugha (搾乳者)	duh (搾乳す)
dhā (置く)	hita (置かれたる)

a の發生の状態

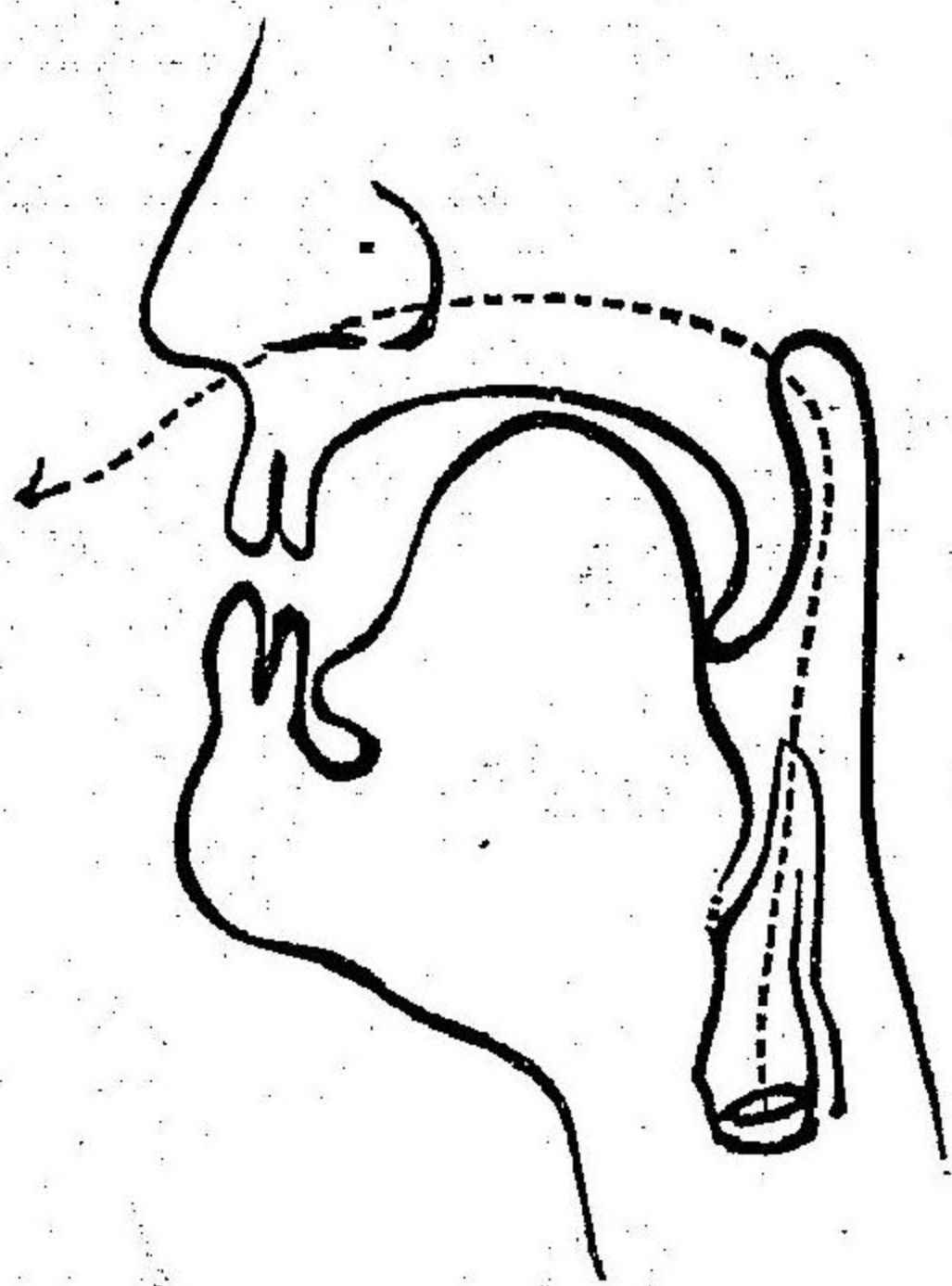
h の發生状態



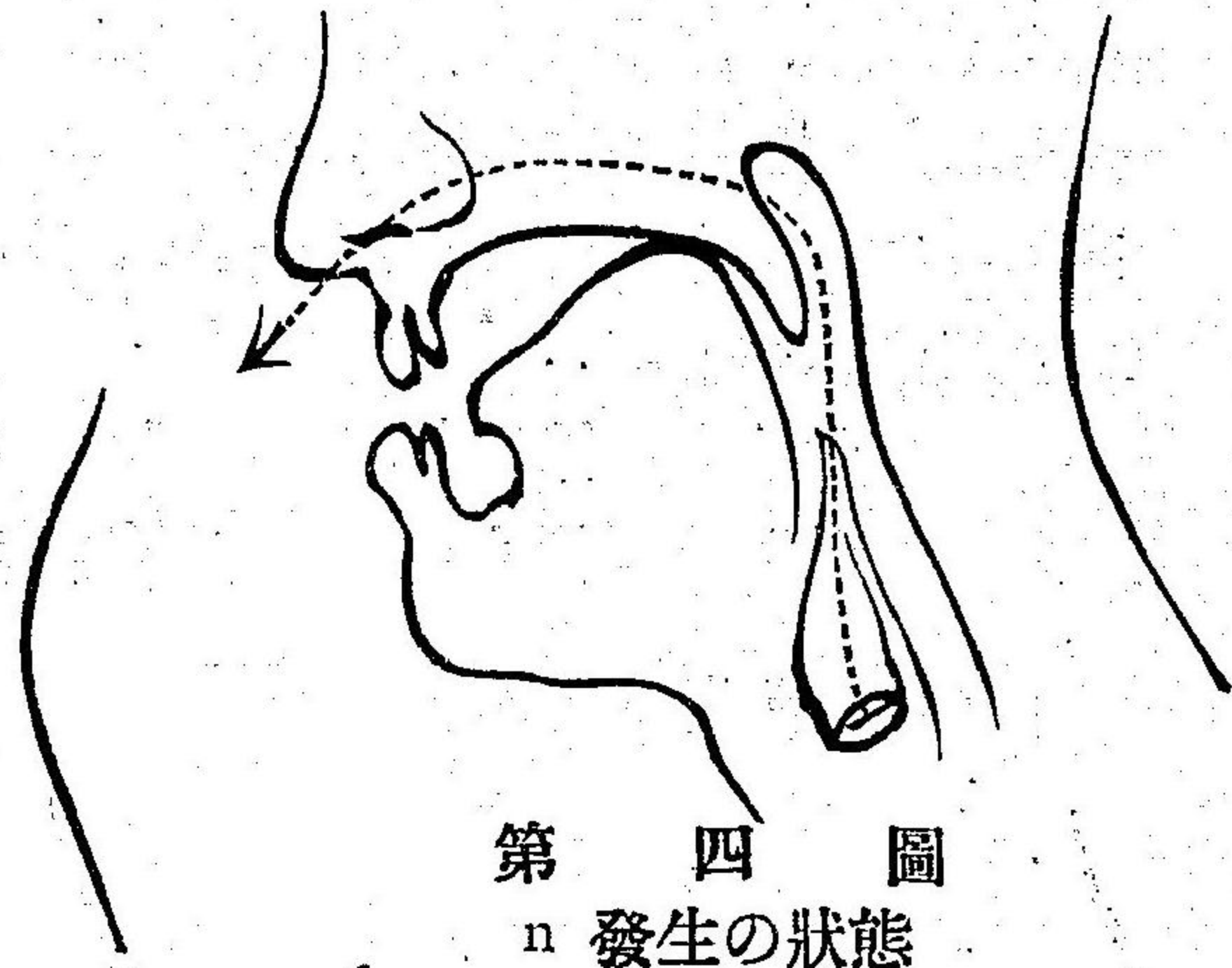
§ 13. 口喉の中に存在する聲音機關が相會して、全然氣息の口腔より外に出づることを防遏し、鼻腔獨り氣息の外に出づることを許すときは、各種の鼻音發生す。

1. 相會せる部分は、舌根と軟口蓋とに存在すれば、ṅ 發生す。第一圖
2. 相會せる部分は、舌背の中央部と硬口蓋とに存在すれば、ñ 發生す。第二圖
3. 相會せる部分は、舌端と硬口蓋の前部に存在すれば、ṅ 發生す。第三圖
4. 相會せる部分は、舌端と上齒とに存在すれば、ṅ 發生す。第四圖
5. 相會せる部分は、上下の兩唇に存在すれば、m 發生す。第五圖

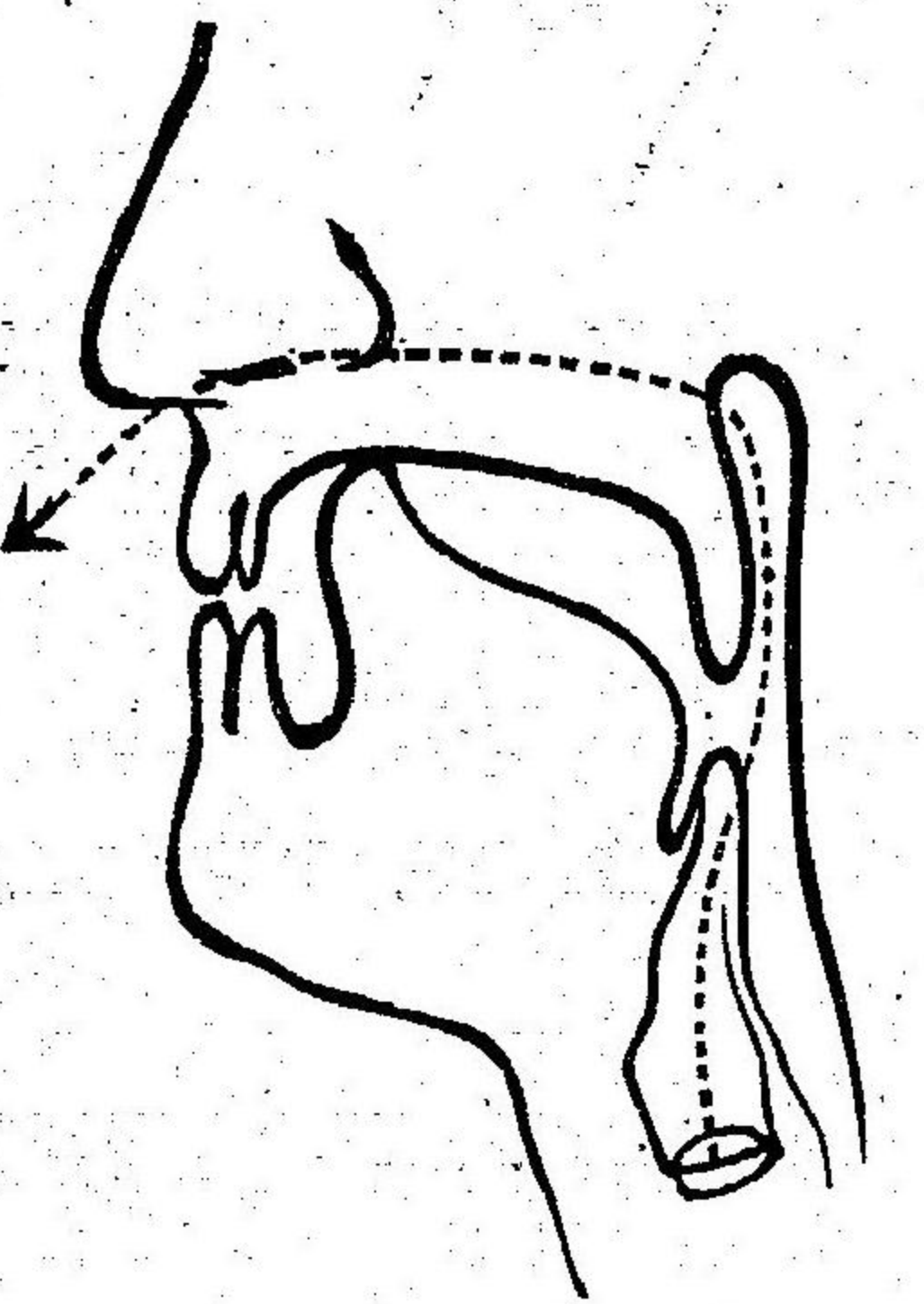
第一圖
ñ 發生の狀態



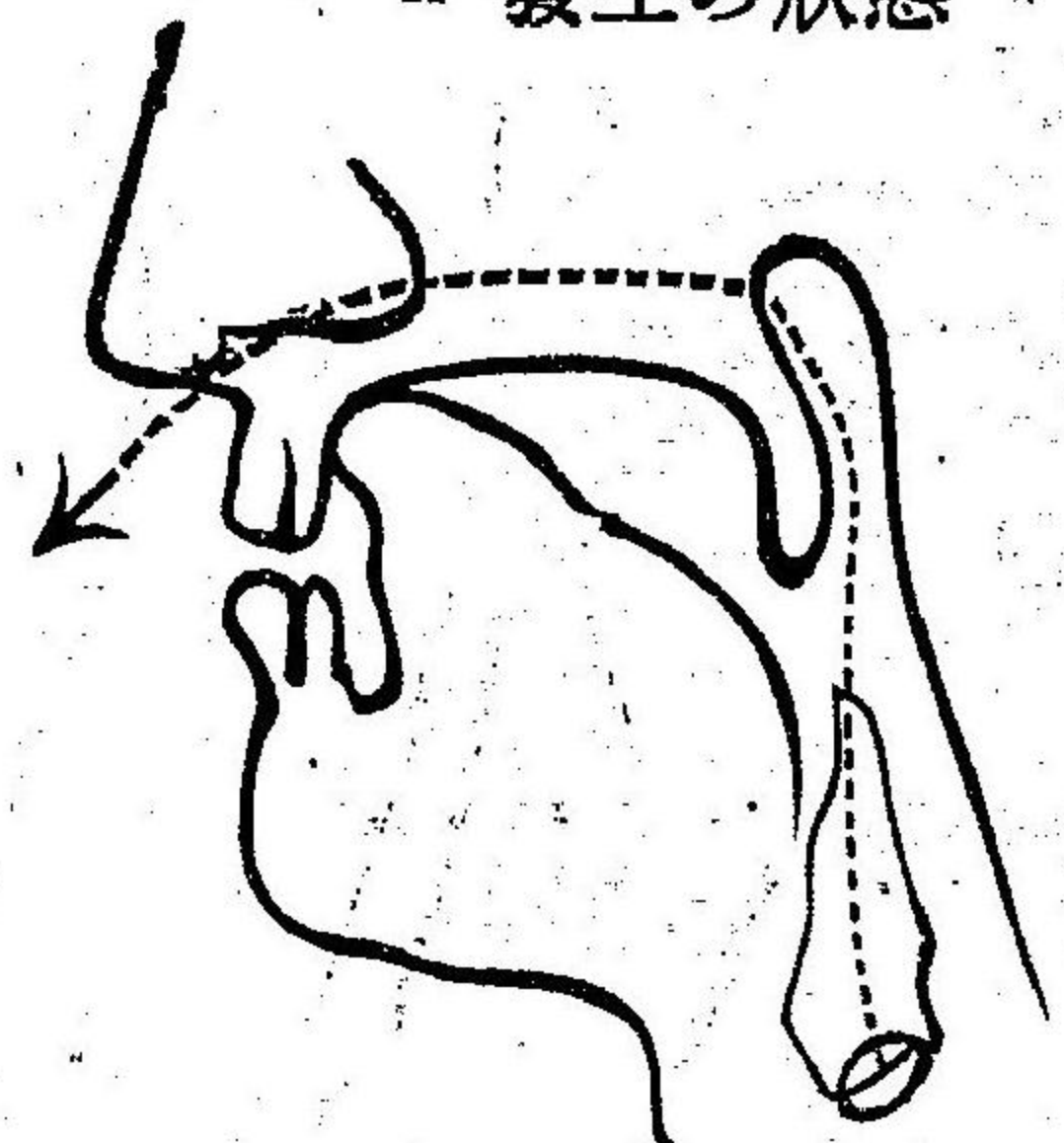
第二圖
ñ 發生の狀態



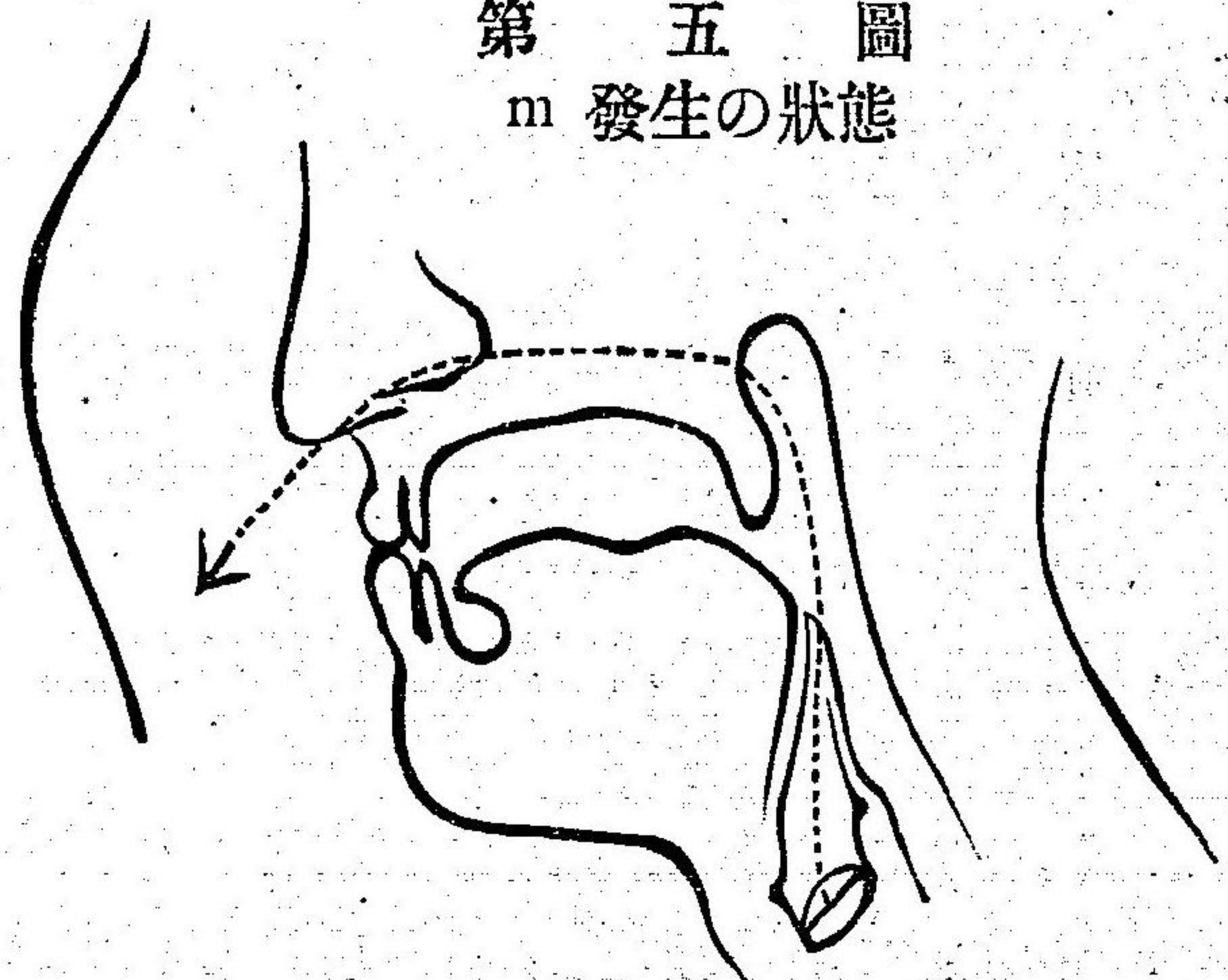
第三圖
n 發生の狀態



第四圖
n 發生の狀態



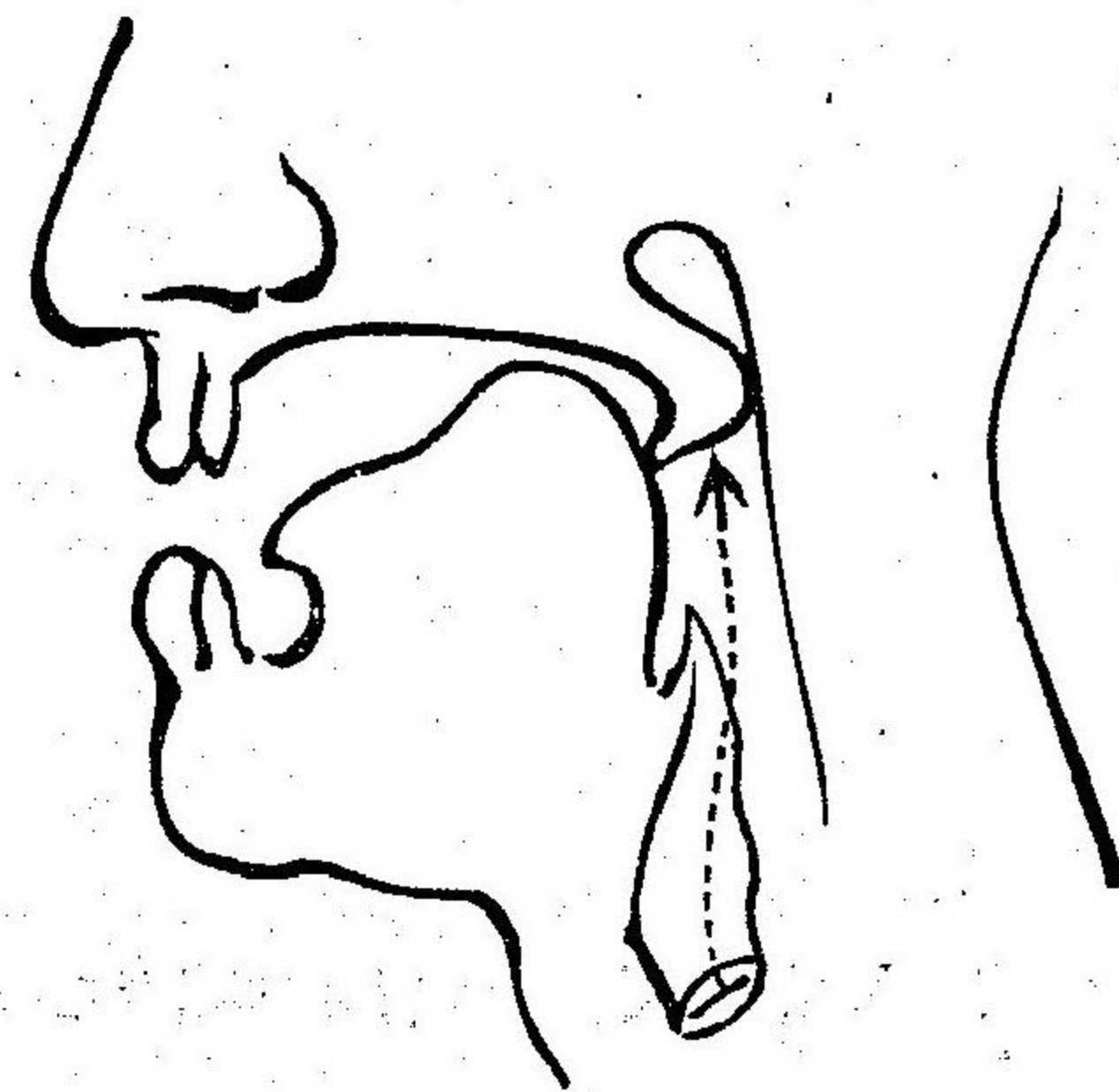
第五圖
m 發生の狀態



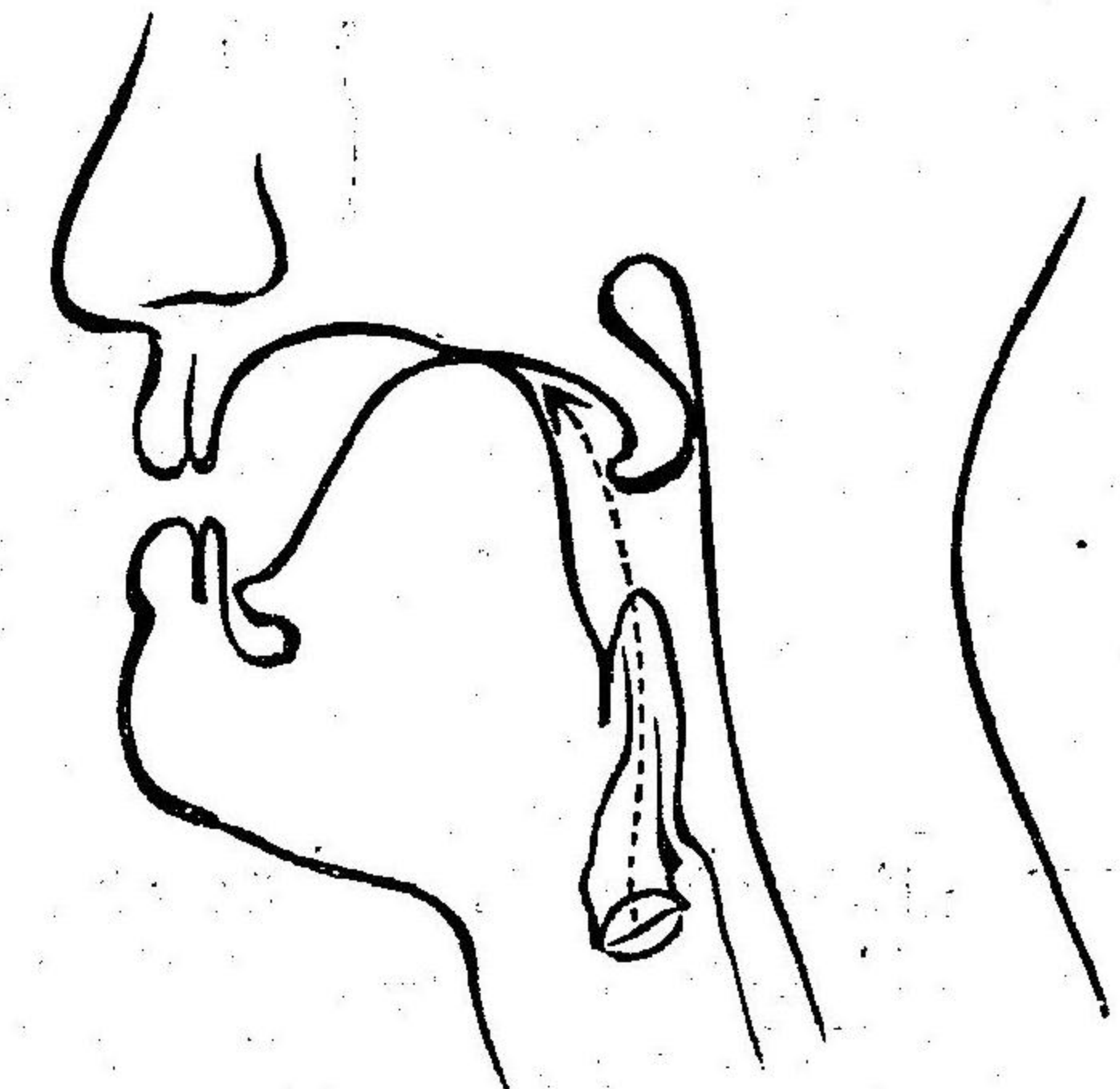
§ 14. 其の他の條件は、都て第十三節に記せるものと同じきも、唯だ軟口蓋上向して、鼻腔の喉腔に通ずる途を杜絶することゝなるときは、氣息は、口鼻軌れの途よりするも、外に迸出する途なきことゝなるべし、かくて口腔獨り其の禁を解くときは、鼻音以外の各種の閉音發生す。

- | | | | | |
|------|----|---|----|-----|
| 1. k | kh | g | gh | 第六圖 |
| 2. c | ch | j | jh | 第七圖 |
| 3. t | th | d | dh | 第八圖 |
| 4. t | th | d | dh | 第九圖 |
| 5. p | ph | b | bh | 第十圖 |

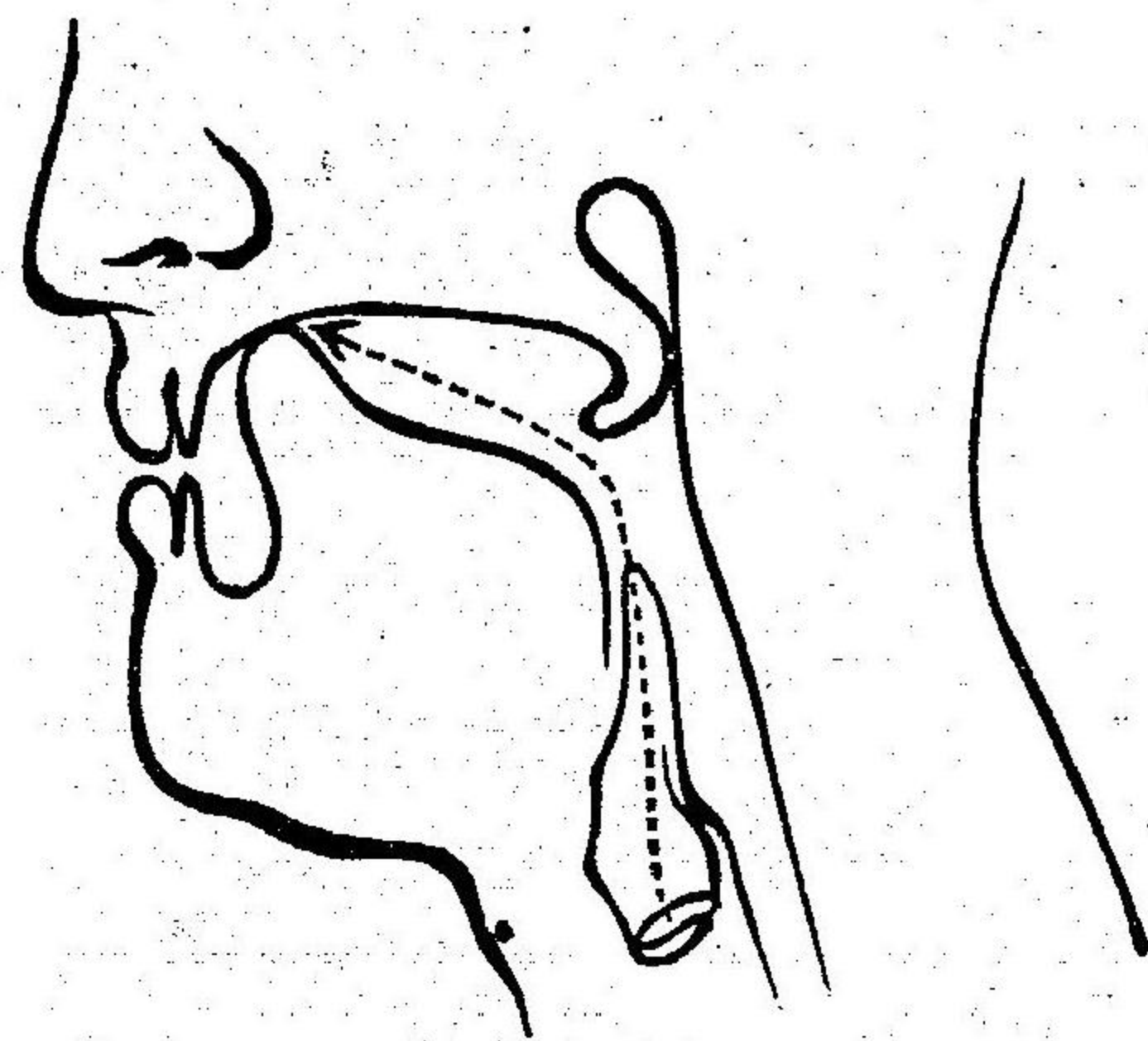
第六圖
k, kh, g, gh 發生の狀態



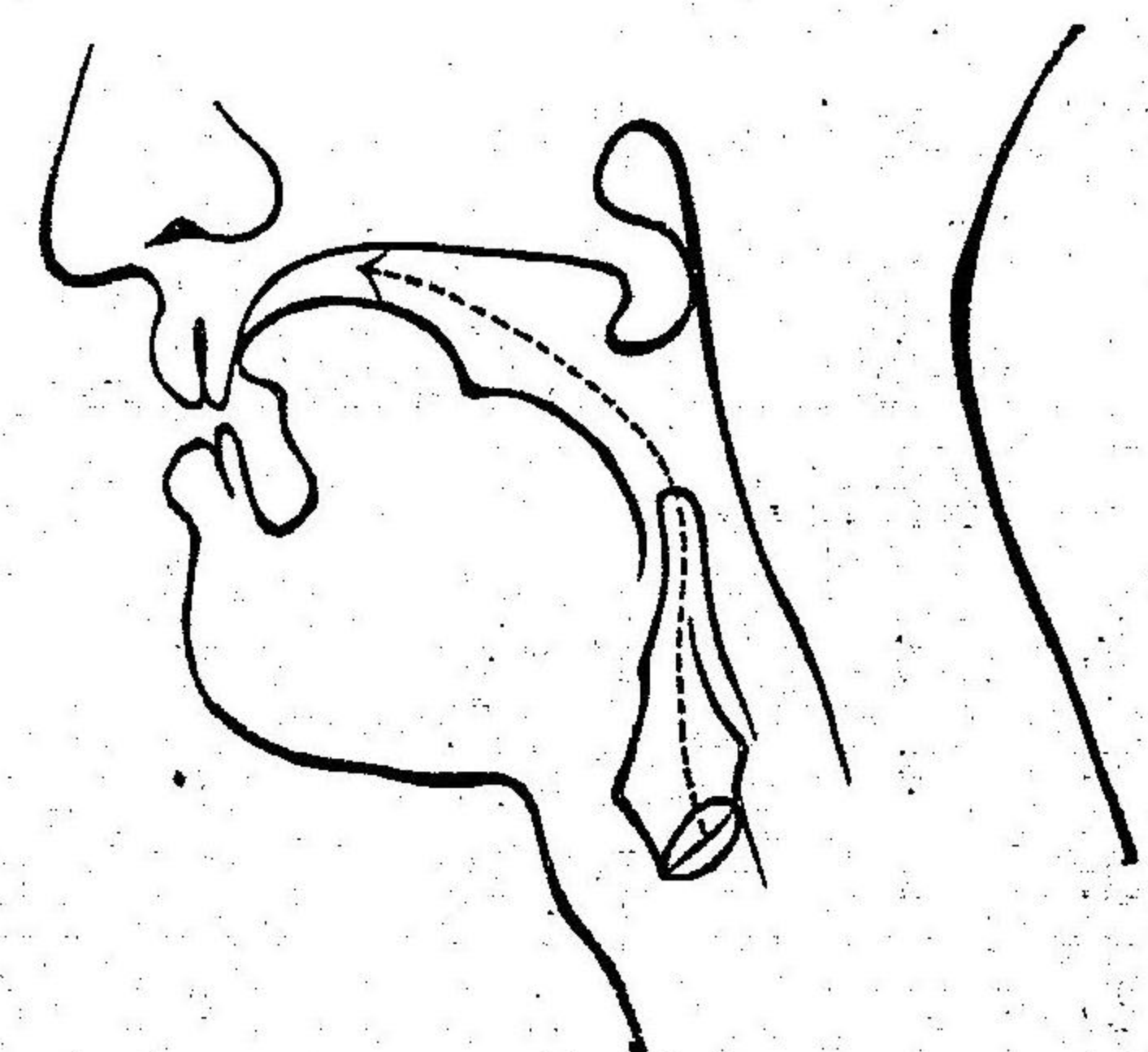
第七圖
c, ch, j, jh 發生の狀態



第八圖
t, th, d, dh 發生の狀態

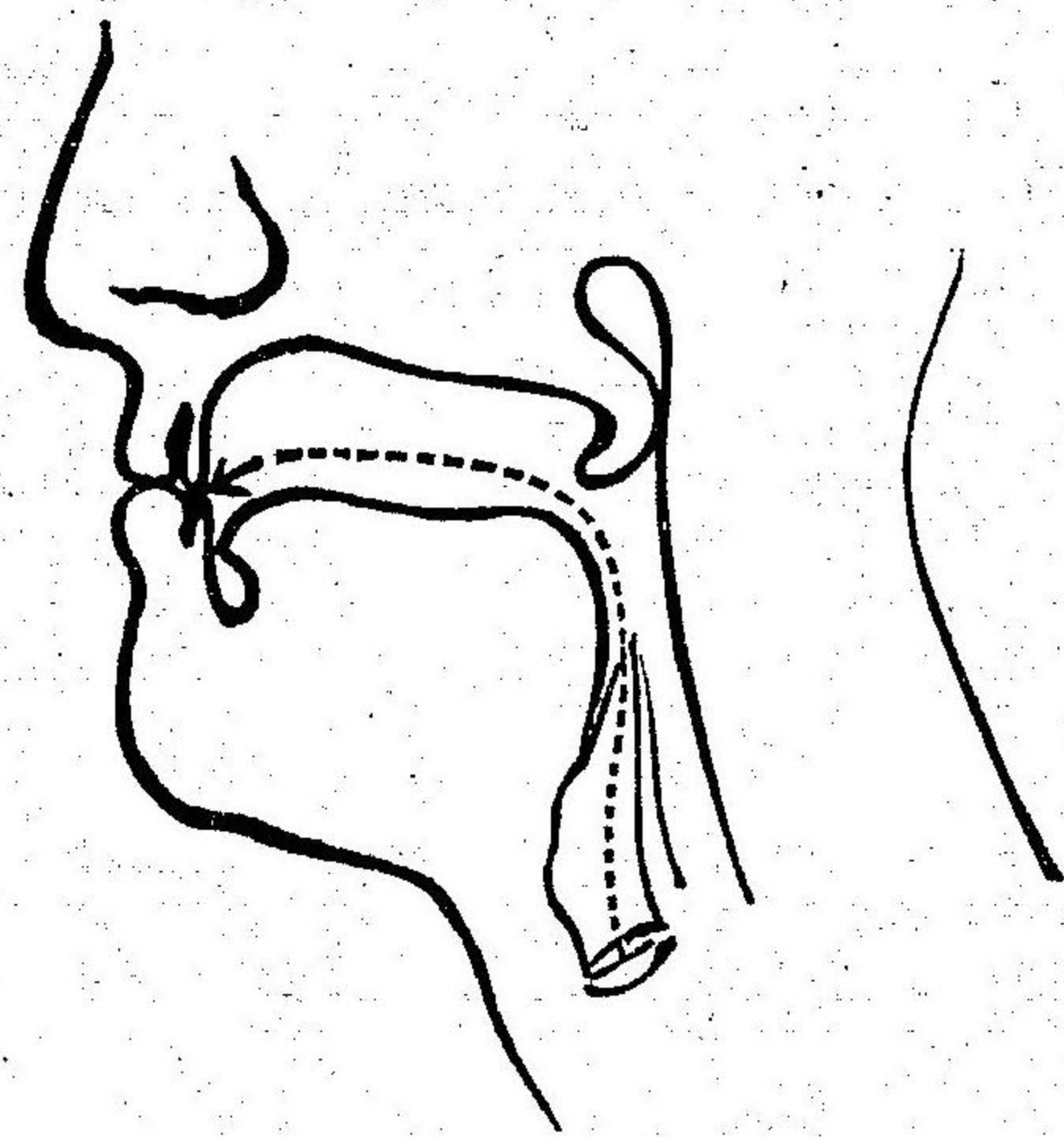


第九圖
t, th, d, dh 發生の狀態



第十圖

p, ph, b, bh 發生の狀態



而して k, kh, g, gh, 等の間に存する區別は、含氣音と無氣音、硬音と軟音との區別なれば、前章第六節及び第十節を参照すべし。

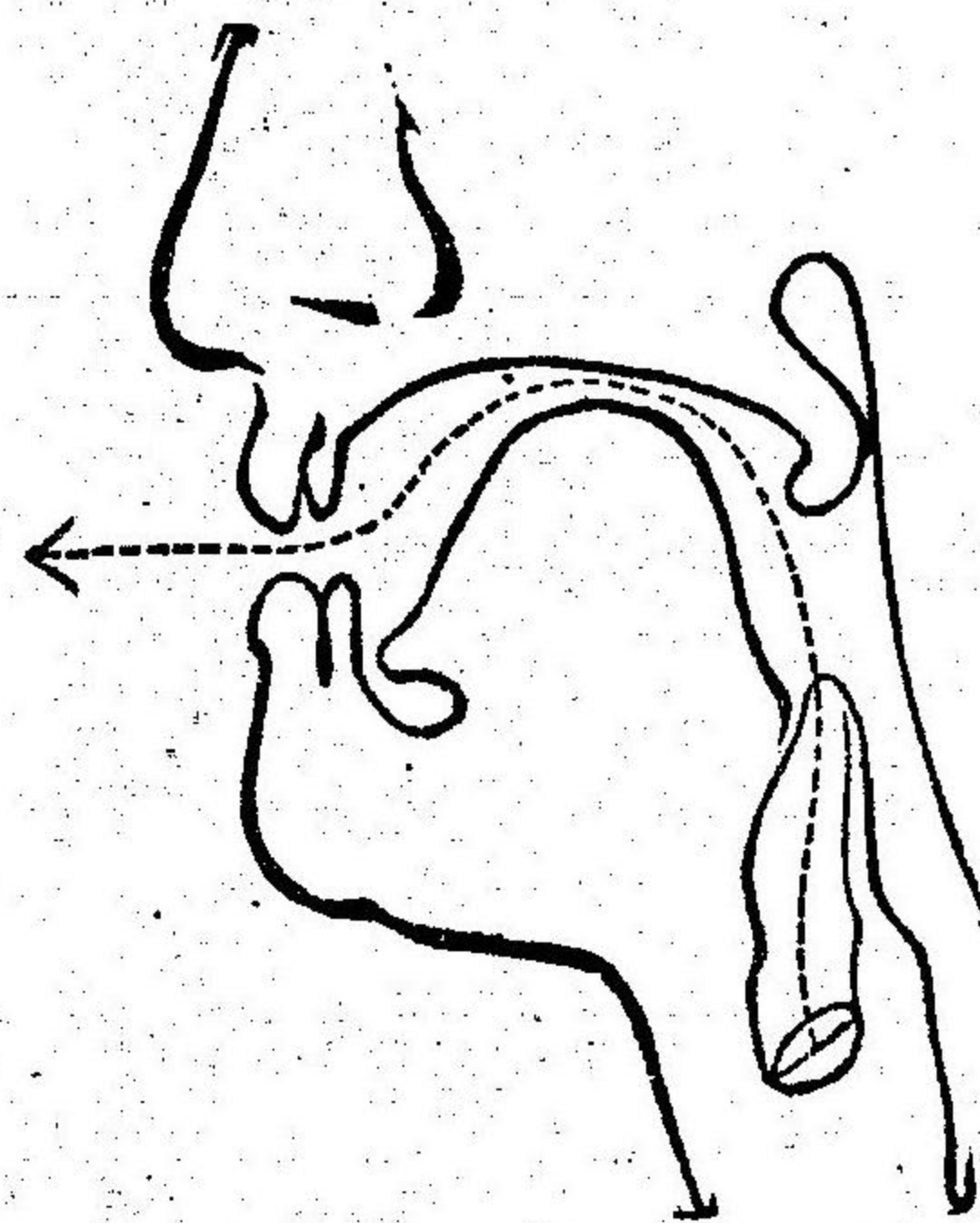
又 k, kh, g, gh ṅ は第十三節及び本節に於て述べしごとく、本來舌根と軟口蓋と相會して生ずるものなれば、舌根音 jihvā-mūliyah と稱するを以て當れりとす、然れども波爾尼仙人 (pāṇini) は之をも喉音と稱し a, ā, h と同一の種類に入れたり。吾人も便宜上之を踏襲することとせり。

§ 15. 其の他の條件は、都て第十四節に同じきも、口腔の中に於て、聲音機關の各部が相接近すること斯の如く緊切ならずして、其の間に多少の孔隙を存し、氣息其の壁面を摩擦して外に迸出す、かくて發生する聲音は、

- | | | | |
|----|---|------|--------|
| 2. | ç | 第十一圖 | y |
| 3. | ṣ | 第十二圖 | r |
| 4. | s | 第十三圖 | l 第十四圖 |
| 5. | | | v なり |

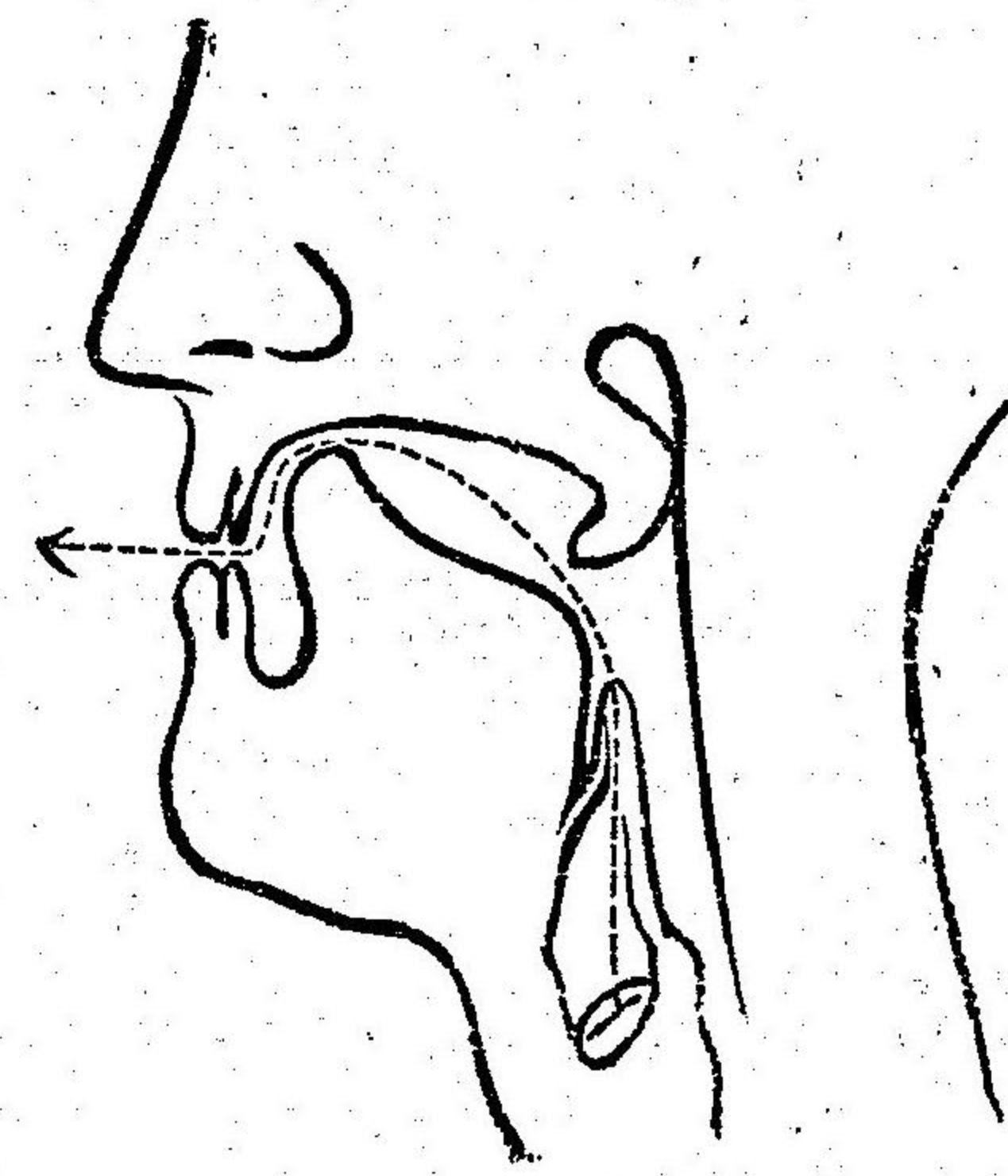
第十一圖

ç 發生の狀態



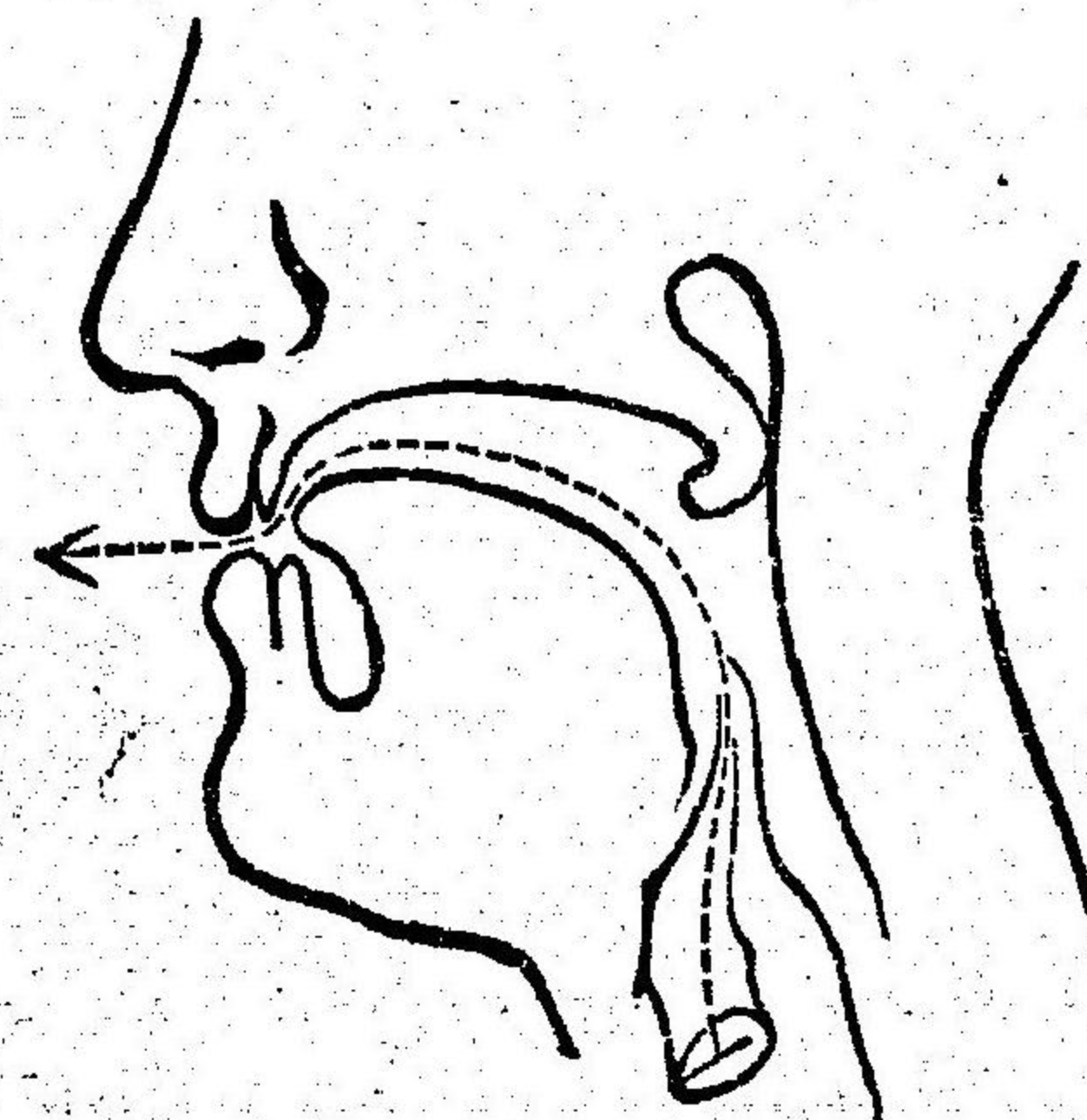
第十二圖

ṣ 發生の狀態



第十三圖

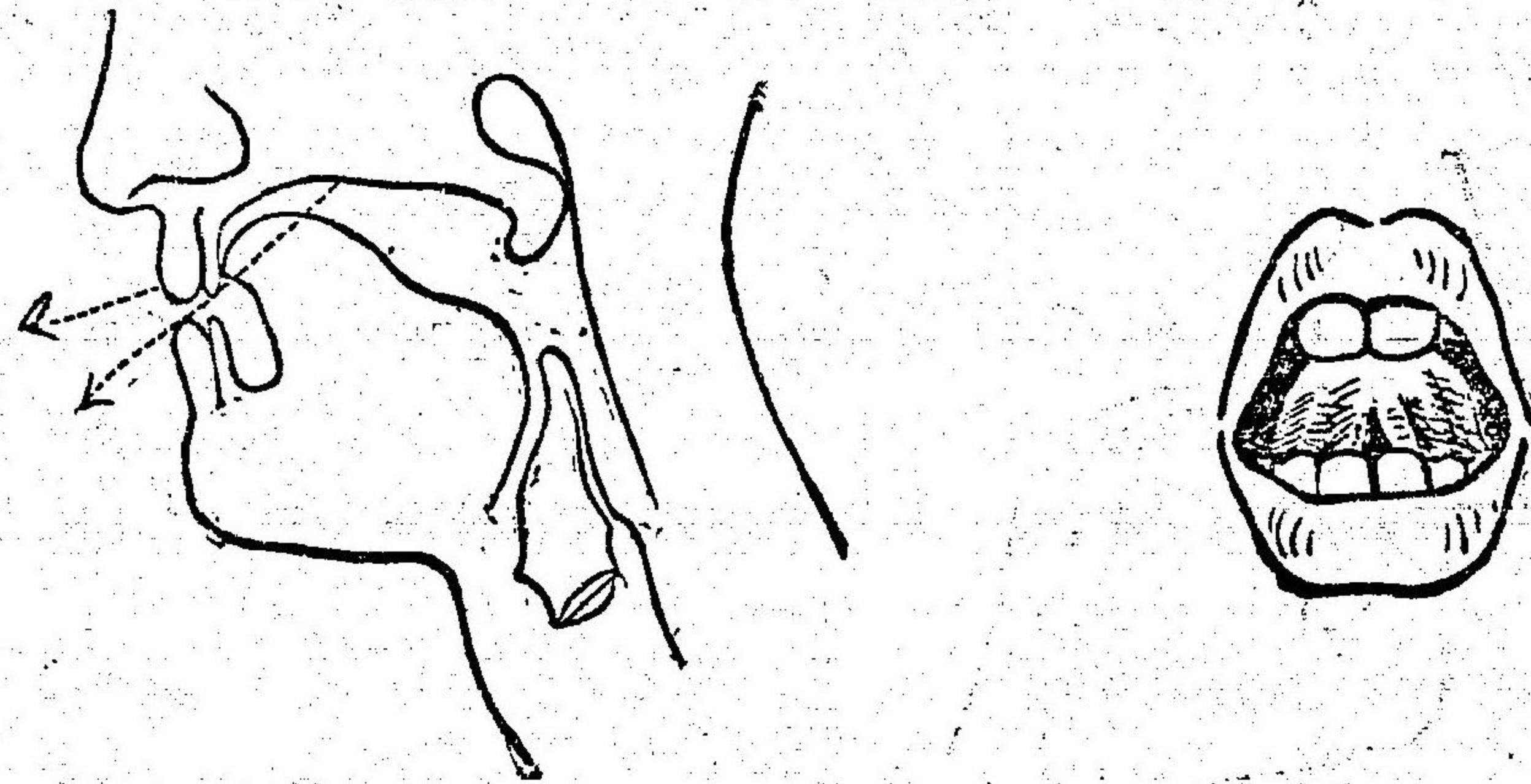
s 發生の狀態



r, h も又一種の摩擦音なるが、其の摩擦面は口腔全體にありて、必ずしも y, ç 等のごとく其の一部分に存在せざるなり。

2. l と r との差違を述べむに、l の場合には、其の摩擦面は、舌の左右の側面と上顎の齒齦とにあり、(第十四圖) 之に反して r の場合には其の摩擦面は舌端と上顎の前部にあり。

第十四圖
1 發生の状態



§16. 其の他の條件. 都て第十五節に同じきも, 口腔各部の聲音機關が相近づく度は, 前者に比すれば更に一層緩やかにして, 氣息の口腔より出づるもの, かすかに其の壁面を摩擦して出づ. 此の際發生する音は即ち各種の母音なりとす.

2. i ī; 3. ri rī; 4. li; 5. u ū.

§17. m と h.

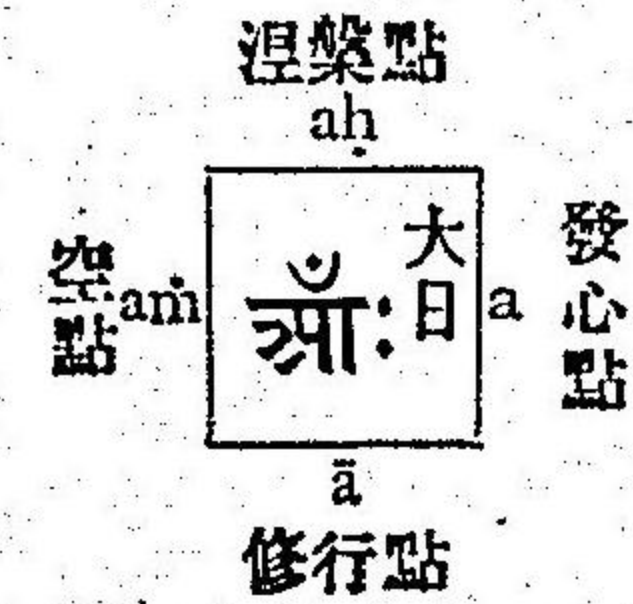
口腔より出づれば普通の母音となるべき氣息が, 一旦鼻腔に入りて, 之より外に出づるときは, 鼻音化せらる, 是れ即ち空點 m なり, 故に空點は母音の鼻音化せるものに過ぎず, 印度の學者は之を anu-svāra (母音に隨ふ音) とせるは當れり, 空點は常に母音の後に來る音なればなり.

h は常に母音と伴ふ, 發し母音の發生に伴ふて生ずる一種の摩擦音に外ならず, h の發生に際しては, 口腔の中に存在する聲音機關は特に位置を變ずることなく, 常に h の前にある母音を發生せしめたる同一の位置を存して, h を發生せしむ, 印度の語典家 h に定義を下して ācāya-sthāna-bhagī と云へり, 即ち h は前にある母音と同一の聲音機關の位置を有するものと云ふの義なり, 例せば ih の場合に於て, i を發音し, 其の聲音機關が有する位置を變更せずして, h を發音し得べきなり, 然れば印度の學者が h を發音するに當り恰も ihī aha uhū と云ふがごとく, 前にある母音の傍を h の後に止むるは, 畢竟 h が上に述べたる性質あるに依る, 獨乙語の ch が, 如何に發音せらるゝかを知悉せる人は, 梵語の h が同一の性質あることを容易に會得するならむ.

上に記せる理由により, 印度の語典家は, 字母の表に於て, 母音の部に m と h とを掲げ居れり, 悉曇字記等, 我國在來の梵學書を見ろべし.

所謂空點, 涅槃點なる名稱は, 眞言の教相に於て, 大日如來 (mahā-vairocana) の德を標せむ爲, 大日を中心にして, 之を滿位とし, 其の四方に發心, 修行, 菩提又は空, 及び涅槃の四分位點を書し, 所謂分滿不二, 生佛一如の理を表するよりして, 悉曇學者は, 其

の四者の中より, 空點の am と涅槃點の ah とをとりてかく呼びたるなり故に決して anu-svārah 又は visargaḥ の譯語にはあらざるなり, 今四分位點を圖解にて示さむに.



故に本來空點, 涅槃點の意義は m 又は h に a を添加せるものにて, 印度語典家も am, ah を anusvārah, visargaḥ と呼べり, 吾人は茲に便宜上 a を省きたるなり.

讀者もし, 上に述べたる四分位點を見むとせば, 塔婆 (stūpa) の傍に往きて, 之を見るべし, 或る一方には, 地水火風空を表せる kha, ha, ra, va, a 次には khā, hā, rā, vā, ā 次には kham, ham, ram, vam, am 終に khaḥ, haḥ, raḥ, vaḥ, aḥ と記せるを見るべし.

§18. 今梵語の語典家が, 聲音分類をなす際, 使用する用語を擧げむに,

- 喉音 kaṇṭhya. 顎音 tālavya. 硬音 { aghoṣāḥ. 軟音 ghoṣavantaḥ. aghoṣavantaḥ.
- 舌音 mūrdhanya. 齒音 dantya. 含氣音 mahā-prāṇāḥ. 無氣音 alpa-prāṇāḥ.
- 唇音 oṣṭhya. 鼻音 nāsikya. 閉音 sparśāḥ. 開音 { isat-sprīṣṭāḥ. isad-vivṛitāḥ. vivṛitāḥ.

§19. 第二章と第三章との所説を表にて示せば下のごとし.

	閉音					開音	
	硬音		軟音			摩擦音	母音
	無氣	含氣	無氣	含氣	鼻音		
喉音	k	kh	g	gh	n	h	a ā } e
顎音	c	ch	j	jh	ñ	ç	y i ī } ai
舌音	ṭ	ṭh	ḍ	ḍh	ṇ	ṣ ḥ	r ri rī } o
齒音	t	th	d	dh	n	s	l li } au
唇音	p	ph	b	bh	m		v u ū }

第四課

問題

- 1.—a, ā, h の聲音は本來如何なる音なるか.
- 2.—各種鼻音の發生する際, 聲音機關の状態如何
- 3.—鼻音以外の各種閉音の發生する際, 聲音機關の状態如何.
- 4.—ç, y, s, r, s, l, v の發生する際, 聲音機關の状態如何.
- 5.—i, ī, u, ū, ri, rī 等の各種母音の發生する際, 聲音機關の状態如何.
- 6.—m と h との性質を擧ぐべし.
- 7.—舌音の開音とは如何.
- 8.—顎音の開音とは如何.
- 9.—喉音の含氣音とは如何.
- 10.—唇音の無氣音とは如何.

第 四 章

用語の解説

§20. 母音を別ちて、長短二種とす。

1. 短母音 hrasva-svarāḥ a, i, u, ṛi, ḷi.
2. 長母音 dīrgha-svarāḥ ā, ī, ū, rī, e, āi, o, āu.

但し短母音と雖も、二個以上の父音及び m, h の前にあるときは、詩學上之を長母音と視做す、かゝる短母音は性質上の長母音にはあらずも、位置上の長母音なり、例せば agni (火) の始にある a は性質上短母音なれども、g と n との前にあるを以て、位置上の長母音と云ふ、agniḥ (火は) の i は h の前にあるが故に、同じく位置上の長母音と云ふべし、母音の長短を識別するは、梵語の詩形を論じ、又は一語の中に於ける語勢符(アクセント)の位置を定むるに當り、最も必要なりとす。

又母音を別ちて、單複二種とす、1 單母音 (samānākṣara) a, ā, i, ī, u, ū, ṛi, rī, ḷi, 2 複母音 (samdhyakṣara) e, āi, o, āu.

§21. 一語の要素を分解すれば、四者に分つことを得べし。

1. 語根 (prakṛiti, dhātu) man (思惟す)のごとし。
2. 語基構成音 (pratyaya) man + as = manas (心) の asのごとし。
語根に語基構成音を附加したるものを語基と云ふ。manasのごときは即ち語基なり
3. 語尾 (vibhakti) manas + i = manasi (心に於て) 又は manas + ā = manasā (心にて) の i 又は āのごとし。
4. 接頭辭 (upasarga, gati) vi-manas (失心せる) の viのごとく alamkṛitya (莊嚴して) の alamのごとし、接頭辭は必ず語根の前に存在す。

語根は通例梵語に於て dhatu と云ふ、所謂字界又は語界と稱するものこれなり、語基は通例 aṅga と稱するも、名詞、形容詞等の語基は prātipadika と稱せらる、語基構成音は語根と語尾との間に介して、之が媒をなすものなれば、pratyaya (縁) と云へるなり、所謂字縁又は語縁これなり、一個の完全なる語、即ち、語基に語尾を添加したるものを pada と云ふ、manasi は即ち pada、(語) なり。

§22. 梵語の言語を大別して、變化するものと、變化せざるものとの二種となす、前者は、其の語根又は語基が、語尾の添加により、種種の意義を有するものを云ひ、後者は、何等の語尾をもとらざるものを云ふ、例せば manas (心) の語は變化する語なり、i を之に附加すれば manasi (心に於て) となり、ā を附加すれば manasā (心にて) となるがごとし。

1. 變化する語は

- a. 名詞 Viçeṣya. b. 形容詞 Viçeṣaṇa. guṇa-vācaka. c. 代名詞 sarva-nāma. d. 數詞 samkhyā-vācaka. e. 動詞 kriyā-pada.

名詞と形容詞とは其の變化全然相同じ、故に二者の變化を併稱して名詞的變化と云ふ。

代名詞、數詞、動詞は各自相異なる變化を有す、之を代名詞的變化、數詞的變化、動詞的變化と云ふ。

代名詞的變化と數詞的變化とは時ありて同じきことあり、又ある語は、時ありて名詞的變化をなし、時ありて代名詞的變化をなす。

通例、梵語の字書に於て、名詞、形容詞、代名詞、數詞として掲げたるは、即ち其の語基なり、例せば agni (火)のごとし、之に反し動詞として掲げたるは、即ち其の語根なり、man (思惟す)のごとし、故に動詞的變化をなさむには、如何なる語尾を附加すべきかを研究するに先ち如何なる語基構成音を附加して、語基を作るべきかを研究するを要す。

2. 不變の語は (avyaya 又は nipāta)
 1. ca (...と、而して、然るに) 等の接續詞、副詞、間投詞之に屬す。
 2. pra (...の前に) 等の關係詞之に屬す、pra 等は關係詞として、名詞、代名詞の前後に用ひらるゝときは、Karma-pravacaniya と云ふ。
Pra 等にしてもし接頭辭として、用ひらるれば、upasarga 又は gati と云ひ、副詞にしてもし接頭辭として、用ひらるゝときは又 gati と云ふ、alam 等は gati の一例なり。

§23. 語根、語基の變化に際し、注意すべきは、平音、重音、複重音の區別なり。

1. 平音 a ā i ī u ū ṛi rī ḷi
 2. 重音 guṇa a ā e o ar(ra) al(la)
 3. 複重音 vriddhi ā āi āu ār
- | | | |
|-----------------|--------------|---------------|
| 平. budh (覺る) | vid (知る) | kṛi (作爲す) |
| 重. bodhi (覺) | veda (吠陀) | kara (作爲者) |
| 複. būddha (佛弟子) | vāidya (吠陀の) | kārya (行はるべき) |

ār の一層簡單なる形は ar なり、更に一層簡單なるものは ri なり、故に r と ri とは決して同一視すべきものにあらず、是れ梵語の語典家が ṛi, ḷi を母音とし、r, l を父音とし、二者を類別せし所以なりとす。

§24. 蓋し平音が、重音となり、複重音となるは、語勢符の影響に基く、一語の中に於て、語勢符の來る所は最も力を用ひて發音すべき音なれば、其の母音は重音となり、複重音となるなり。

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| pitṛi 父 | pitṛi' + am = pita'ram 父を |
| dātṛi 施與者 | dātṛi' + am = dātā'ram 施與者を |

語勢符の所在に依り、母音の變化する現象は、吠陀時代の梵語に於て、已に多少の違例あり、後代に至りては、殊に多しとす、故に概論し難きものありと雖も、基づく所は一に上に記せるがごとし。

第五課

問題

1. 一母音を別ちて長短二種とす、長母音、短母音を列挙すべし。 2. 一位置上の長母音と、性質上の長母音との區別を示すべし。 3. 一母音を別ちて、單複二種とす、所謂單母音を擧げよ。 4. —manasā (心にて) を分解して、其の要素を指示すべし。 5. 一梵語の品詞中よく變化するものを列挙すべし。 6. 一名詞的變化とは、如何なる品詞の變化を含むか。 7. 一平音、重音、複重音の區別を示すべし。 8. —i, u, li の重音は如何。 9. —u と ū との重音は如何。 10. 一語の中に於ける平音が、重音となり、複重音となる理由如何。

第五章

性・數・格—名詞的變化—各種母音語基の區別
a 語基の男性中性變化

§25. 名詞、代名詞、形容詞、數詞は、性 (linga)、數 (vacana) 格 (vibhakti) を逐て變化す。

1. 性に三種あり、男性 (pumī-linga)、女性 (strī-linga) 中性 (kliṣa-linga) 是れなり、從來悉曇家は、之を男聲、女聲、非男非女聲と云へり。

凡そ、語典上の性は主として語基等の如何によりて定まるものにして、甚だ形式的のものなれば、必ずしも實際の性と一致するものにあらず、例せば獨乙語の weib なる語は、妻又は婦人の義を有するものなれば、實際上の性より云へば、其の女性なるは疑なきことなれども、語典上の性は、常に中性なり、かゝる現象は、性の觀念を有する語にては、常に見る所なりと雖も、梵語に於ては殊に甚しとす、例せば、均しく婦の義を有するものなれども、dāra は男性、kalatra は中性、bhāryā は女性なるがごとく、又均しく身體の義を有するものなれども、kāya は男性、tanu は女性、carira は中性なるがごとし。

2. 數に三種あり、單數 (eka-vacana) 雙數 (dvi-vacana) 複數 (bahu-vacana) 是れなり、古來これを一言聲、二言聲、多言聲と云へり、aṣvas (一馬は) aṣvāu (二馬は) aṣvās (諸馬は) のごとし。

雙數の形は、āryan 語族の言語中、所謂近世語と稱せらるゝ英語、佛語、獨乙語等には、存在せざるも、是れ本來なかりし故にあらずして、ありしも、滅びたるが故なり、希臘語のごとく、梵語に雖、アリヤン語族の言語中、悠古の時代に於ける發展を代表するものには、明に雙數の形の存在せるを見るべし。殊に、Homer, Hesiod の詩中に用ひたる epic Greek に於て然りとす、然れども、本來雙數なる形は、比較的古代に於て、混滅に就きし形にして、梵語が轉訛して、俗語となるに及びて、全く其の跡を絶てり、かの南方佛教の

經典の用語たる pāli 語には、已に双數なるものなく、希臘語にても、epic Greek より classic Greek に至るに従ひ、漸次廢滅し、新約全書の希臘語即ち New Testament Greek には、全くこれを用ひざるなり。

3. 格には、主、業、具、爲、從、屬、於、呼の八種あり、所謂八轉聲是れなり。

- a. 主格. 人來る、花は開く、人は來る、花と云ふと云ふがごとき場合の人又は花のこるべき格にして、通例、「は」又「が」にて譯すべし。
- b. 業格. 人を打つ、市に往くと云ふがごとき場合の「を」又は移動の到達點を示す「に」。
- c. 具格. 馬にて往く、彼によりて殺さる、彼と共に往くと云ふ場合の「にて」「によりて」「と共に」。
- d. 爲格. 救助せむ爲に、人に物を與ふ、と云ふ場合の「爲に」又は「に」。
- e. 從格. 家より來る、師より書を學ぶ、花より園子と云ふ場合の「より」にして「從」の語は、「したかふ」と訓むべからず、「より」と訓むべし。
- f. 屬格. 余の家と云ふ場合の「の」。
- g. 於格. 家にあり、此の時に於て、家に於て、と云ふ場合の「に」又は「於て」。
- h. 呼格. 「友よ」と云ふ場合の「よ」。

§26. Kāraka と稱する語あり、通例譯して「格」と稱す雖も、未だ盡さざる所あり、本來此の語は名詞が動詞に對して有する六種の關係を總稱せる語なれば、名詞が名詞に對し若しくは關係詞に對し有する格の關係は、Kāraka と云ふを得ず、されば格即ち Vibhakti の中にも、Kāraka-vibhakti (動詞が名詞に對し有する格の關係) upapada-vibhakti (關係詞が名詞に對し有する格の關係) 等種々の區別あるべきものにして、kāraka は畢竟其の一部分に過ぎざるなり。

所謂 kāraka の語は、六種の關係を包含す、即ち

- 1. kartṛi 作爲者、動作の主體。 2. karma 動作の容體。 3. karaṇa 具。 4. saṃpradāna 與ふること。 5. apādāna 奪ふこと。 6. adhikaraṇa 動作のありし所。

§27. 名詞的變化は、其の語基が母音に終れると、父音に終れるとにより、大別して二種とす、母音語基及び父音語基これなり母音語基は小別して十種とす。

- 1. a. 語基 aṣva (男) 馬. dāna (中) 施物. kṛiṣṇa (形) 黒き等 都て a に終る名詞形容詞之に屬す。
- 2. ā. 語基 aṣvā (女) 牝馬. kanyā (女) 少女. kṛiṣṇā (形) 黒き等之に屬す。
- 3. i 語基 agni (男) 火. mati (女) 慧. vāri (中) 水. su-mati (形) 賢なる。等之に屬す。
- 4. u. 語基 paṣu (男) 家畜. dhenu (女) 牝牛. madhu (中) 蜜. sādhu (形) 善き等之に屬す。

- 5. i. 語基 senānī (男) 將軍. nadi (女) 河. çri (女) 吉祥. su-dhī (形) 賢なる等之に屬す。
- 6. ū. 語基 vadhū (女) 婦. bhū (女) 大地. svayam-bhū (男) 大自在天. svayam-bhū (形) 自己より生じたる. 等之に屬す。
- 7. ri. 語基 pitri (男) 父. mātri (女) 母. kartri (男) 作爲者のごとし。
- 8. āi. 語基 rāi (男) 財物. 富。
- 9. o. 語基 go (男. 女) 牛。
- 10. āu. 語基 nāu (女) 船。

此の中、重要なものは、1. 2. 3. 4. 7. にして、1. a 語基は其の性、男性か、然らざれば、中性にして、2. ā 語基は常に女性なり、7. ri 語基は、其の意義、父子兄弟等の親族の關係を示すにあらざれば、大抵、動作の作爲者を示すものごとし、例せば pitri, dātri のごとし。

§28. a 語基の男性變化 açva (男) 馬 (拉丁語の equu-s と比較すべし)

	單	雙	複
主	açva-s 馬は	açvāu = 馬は	açvās 諸馬は
呼	açva 馬よ	açvāu = 馬よ	açvās 諸馬よ
業	açva-m 馬を	açvāu = 馬を	açvān 諸馬を
具	açvena 馬にて	açvābhyām = 馬にて	açvāis 諸馬にて
爲	açvāya 馬の爲に	açvābhyām = 馬の爲に	açvebhyas 諸馬の爲に
從	açvāt 馬より	açvābhyām = 馬より	açvebhyas 諸馬より
屬	açvasya 馬の	açvayos = 馬の	açvānām 諸馬の
於	açve 馬に於て	açvayos = 馬に於て	açveṣu 諸馬に於て

§29. a 語基の中性變化. dāna (中) 施與. 施物. (拉丁語の donu-m に同じ)

	單	雙	複
主	dāna-m	dāne	dānāni
呼	dāna	dāne	dānāni
業	dāna-m	dāne	dānāni
具	dānena	dānābhyām	dānāis
爲	dānāya	dānābhyām	dānebhyas
從	dānāt	dānābhyām	dānebhyas
屬	dānasya	dānayos	dānānām
於	dāne	dānayos	dāneṣu

§30. 名詞的變化の通則。

1. 同一語基の男性變化と中性變化とに於て、男性の具、爲、從、屬、於の諸格は、數を同じくする中性の具、爲、從、屬、於の諸格に大抵相同じとす、例せば、a 語基の男性變化に於て、單數の具格等 açvena, açvāya, açvāt, açvasya, açve は、同一語基の中性變化に於て、單數の具格等 dānena, dānāya, dānāt, dānasya, dāne に同じきかごとし。但し、此の通則には、多少の違例あり、§43. §44. §46. §47 を比較すべし。
2. 中性變化に於て、數を同じくする主格と業格とは、常に相同じ、例せば、單數主格の dānam は、單數業格の dānam に同じく、雙數主格の dāne は、雙數業格の dāne に同じきかごとし、此の通則は、音に梵語の名詞的變化に於て然るのみならず、希臘語、拉丁語、獨乙語等總べて、「アリヤン」語族の言語を通じて然りとす。
3. 雙數の主呼業の三格は、常に相同じく、複數の主呼二格は、常に相同じ、例せば、a 語基の男性變化に於て、雙數の主呼業は、均しく açvāu, açvāu, açvāu にして、複數の主呼二格は均しく açvās açvās なるかごとし。
4. 雙數の具、爲、從、の三格は、常に相同じく、其の屬、於の二格も常に相同じ、例せば、a 語基の中性變化に於て、雙數の具、爲、從は、均しく dānābhyām にして、其の屬於の二格は、均しく dānayos なるかごとし。複數の爲從二格も、常に相同じ、中性變化にては、共に dānebhyas, 男性變化にては、共に açvebhyas なるかごとし。
5. 母音語基の複數屬格は、性の如何を問はず大抵 nām の語尾を有す、又其の複數業格は男性に於ては、n, 中性に於ては ni の語尾を有す、而して、此等語尾の n の前にある語基の母音は、常に長母音となる açva + nām = açvānām, dāna + ni = dānāni, açva + n = açvān のごとし。

§31. 一語の終にある m は、次の語の始にある父音に會して、m̄ となる。
açvānām + dānāni = açvānām̄ dānāni. 諸馬の施與は。

但し m̄ が實際 m̄ の音となるは、半母音及び吹氣音即ち y, r, l, v, ç, ś, s, h の音と會するごとのみにして、其の他の場合には、假令 m̄ と書することあるも、實際の發音は次に來る父音と同種類の鼻音のごとくなすべし、açvānām + dānāni = açvānāndānāni と發音するごとし、故に學者により往々實際の發音のごとく書せるものすらあり、本書は第一課第二課に於て、これに従ひしも、自今これを採らず、要は簡易を尙び便宜を主とすればなり。

第六課
問 題

1. 一名詞的變化に關する語基を大別して二種とす、其の名稱を擧ぐべし。
2. 母音語基中最も重要なもの如何。
3. a 語基の性如何。
4. ri 語基の意義如何。
5. 一格に幾何ありや。
6. 此等の格の主要なる意義を示すべし。
7. açva の變化を記すべし。
8. dāna の變化を記すべし。
9. 一語の終にある m は次に來る語の始にある父音に會して如何に變化するか。

雑語

deva. (男)神.	jala. (中)水.	puṣpa. (中)華.
simha. (男)獅子.	dāna. (中)施物.	phala. (中)果實.
açva. (男)馬.	griha. (中)家.舍.	punar. (副)再び.また.
sūda. (男)庖人.厨夫.	vana. (中)林.森.	vā. (接)または.
kāka. (男)鳥.	mitra. (中)友.	ca. (接)並に.と.
khaga. (男)鳥.	tāraka. (中)星.	iva. (接)...のごとく.
vāidyā. (男)醫師.	vār. (中)水.	

下の梵文を國語に譯すべし。

1. vāidyasya griham. 2. vane. 3. tārake. 4. sūdānām aṣvān. 5. mitreṣu.
 6. vāidyānām sūdān. 7. tārakābhyām. 8. kākena. 9. sūdasya grihāt.
 10. vanāt kākān. 11. vāidyāya. 12. khagānām. 13. phalānām. 14. phalasya. 15. devānām. 16. devābhyām. 17. simhena. 18. jalāt. 19. phalāni. 20. simhān.

下の邦文を梵文に譯し、上記の梵文と比較すべし。

1. 醫師の家は。 2. 林に於て。 3. 兩星は。 4. 諸の庖人の諸馬を。 5. 諸の友に於て
 6. 諸の醫師の諸の庖人を。 7. 兩星と共に。 8. 鳥と共に。 9. 庖人の家より。 10. 林より
 諸の鳥を。 11. 醫師の爲に。 12. 諸の鳥の。 13. 諸の果實の。 14. 果實の。 15. 諸神
 の。 16. 二神と、二神に、二神より。 17. 獅子と共に。 18. 水より。 19. 諸の果實は
 20. 諸の獅子を。

第六章

一語の終にある s 及び r が h となる場合。一語の中にある n が ṅ となる場合。su 及び dus の接頭辭の意義。

§ 32. 一語の終にある s 及び r が h となる場合に三種あり。

1. 其の語が一文の終にあるとき。

vanāt + kākāś = vanāt kākāh. 林より諸の鳥は。

2. 其の語が獨立して存在するとき。

aṣvās = aṣvāh 諸馬は。 aṣvāś = aṣvāih 諸馬と共に。

punar. また = punaḥ. vār 水 = vāh. (§ 108).

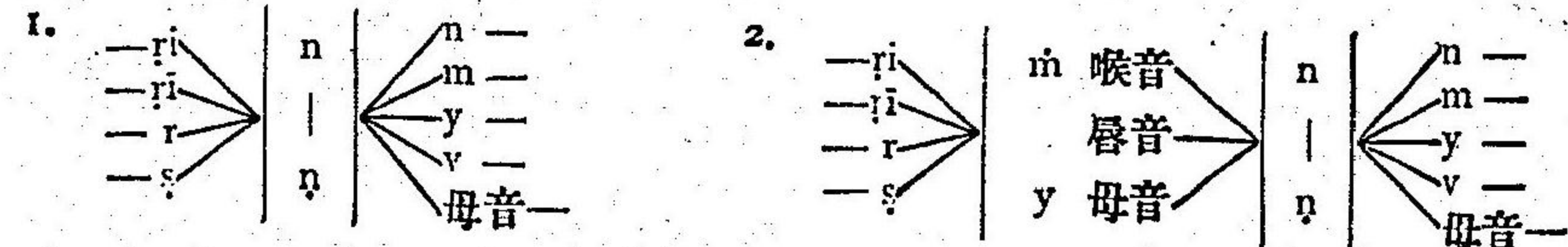
3. 次に來る語の始にある k, kh, p, ph, ç, ś, s に會するとき。

aṣvās + sūdasya = aṣvāh sūdasya 庖人の諸馬は。

sūdas + kākam = sūdaḥ kākam, 厨夫は鳥を punar + punar = punaḥ punaḥ またまた。

§ 33. 一語の中に於て、母音 n, m, y, v の前にある n が ṅ となる場合に二種あり。

1. n が一語の中に於て直に舌音中の開音 ri, ri, r, ś の後に來るとき。
 2. n が一語の中に於て、母音、喉音、唇音, y, m, を介して ri, ri, r, ś の後に來るとき。



mitreṇa 友と共に — r + 母音 + n + 母音。

mitrāṇām 諸の友の — r + 母音 + n + 母音。

griheṇa 家と共に — ri + 喉音 + 母音 + n + 母音。

tārakāṇam 諸の星の — r + 母音 + 喉音 + 母音 + n + 母音。

puṣpāṇi 諸の華は — ś + 唇音 + 母音 + n + 母音。

§ 34. 本書に於て、聲音變化の原則を説くに際し、一語の中にある云々の語を用ふることもあり、又一語の終にある云々の語を用ふることもあり。

前者の場合には、其の原則は、接頭辭、語根、語基、語基構成音及び語尾の間に行はるゝものなり。

後者の場合には、其の原則は、主として、一文の中に存在する二個の語、及び一複合詞中に存在する二個の語基の間に、行はるゝものなれども、特に違例あることを示せるもの、外は、移して之を一語の中に於ける聲音變化の現象に適用することを得べし、故に讀者もし一語の終にある云々の語を見れば、其の原則は同時に一語の中にも行はるゝものと認め、大差なかるべし。

§ 35. 1. su なる接頭辭あり、妙・好・甚・易等都て國語の「よく」の義を有す。

Su (好) + kha (運命) = sukha 好運. Su (易) + labha (得) = sulabha 得易き. 希臘語の eu 拉丁語の su は、皆これに同じ。拉丁語の Su + dum 好天氣. 希臘語より來り英語になれる eu-phony. 好音調等を見るべし。

2. dus なる接頭辭あり、惡又は難の義を有す。

dus (惡) + kha (運命) = duḥkha 惡運 (§ 32) 希臘語の dys と比較すべし。かの希臘語より英語になれる dys-pepsy (消化不良). dys (難) phony (調・聲) = dysphony (言語不通) 等皆然り。

第七課

問 題

1.—語の終にある s 及び r が h となる場合を示すべし。 2.—語の中にある n が ṅ となる場合を示すべし。 3.—su 及び dus の接頭辭の意義如何。 4.—puṣpa の複數屬格が puṣpāṇām となる理由を示せ。 5.—griha の複數屬格が grihāṇām となる理由如何。 6.—tāraka の單數具格を記すべし。 7.—mitra の複數屬格を記すべし。

雜 語

vṛikṣa. (男) 樹.	mitra. (中) 友.
ratha. (男) 車. 軍車.	cakra. (中) 輪.
nṛipa. (男) 王者.	mūla. (中) 根.
sūrya. (男) 日. 太陽.	sukha. (中) 安樂. 好運.
candra. (男) 月. 太陰.	duḥkha. (中) 苦痛. 惡運.
dharma. (男) 法. 道.	dhana. (中) 財物. 富.
mṛiga. (男) 鹿.	pattra. (中) 葉.
buddha. (男) 佛.	anna. (中) 食物.

1. vṛikṣāṇām puṣpāṇi. 2. buddhānām dharmāḥ. 3. vṛikṣasya mūlāt.
4. sukhasya mūlam. 5. duḥkhānām mūlāni. 6. mṛigāṇām. 7. sūryeṇa.
8. candrasya. 9. nṛipāṇām dharmeṇa. 10. nṛipeṇa. 11. candrāṇām.
12. buddhān. 13. nṛipasya rathāḥ. 14. sūryāṇām. 15. dharmeṇa.
16. mṛigeṇa. 17. devāḥ. 18. candrāt. 19. pattrāṇi. 20. sukhāni.
21. rathānām cakrāṇi. 22. dhanāni. 23. vṛikṣasya pattrāṇi. 24. nṛipāṇām dharmāḥ.
25. sukheṇa. 26. mṛigāḥ. 27. buddhāḥ. 28. dhanāḥ. 29. cakrāḥ. 30. vāidyebhyaḥ. 31. mitrāṇām grihebhyaḥ.
32. khagāḥ. 33. jale. 34. annāni. 35. jalāt. 36. nṛipasya rathāt.
37. sūdānām grihebhyaḥ. 38. buddhānām dharmān. 39. candrāu. 40. mṛigāu.
41. mitrasya duḥkham. 42. mitrāṇām grihāṇi. 43. nṛipāṇām dhanāni.
44. sūdāya dhanam. 45. sukhāya. 46. devāya puṣpam.
47. mitrāya dhanam. 48. sukhānām mūlāni.

1.—諸の樹の諸華は。 2.—諸佛の諸の法は。 3.—樹の根より。 4.—好運の根源は。 5.—諸の惡運の諸の根源は。 6.—諸鹿の。 7.—太陽によりて。 8.—月の。 9.—諸王の法によりて。 10.—王と共に。 11.—諸の月の。 12.—諸佛を。 13.—王者の諸車は。 14.—諸の大陽の。 15.—法によりて。 16.—鹿と共に。 17.—諸神は。 18.—月より。 19.—諸の葉は。 20.—諸の安樂は。 21.—諸車の諸輪は。 22.—諸の財物は。 23.—樹の諸葉は。 24.—諸王の諸法は。 25.—安樂を以て。 26.—諸の鹿によりて。 27.—諸佛によりて。 28.—諸の財物を以て。 29.—諸の輪にて。 30.—諸の醫師に。 31.—諸の友の家より。 32.—諸鳥によりて。 33.—水に於て。 34.—諸の食物は。 35.—水より。 36.—王者の車より。 37.—諸の厨夫の諸の家より。 38.—諸佛の諸法を。 39.—二の大陰は。 40.—兩鹿は。 41.—友の苦痛は。 42.—諸友の諸家は。 43.—諸王の諸の財物は。 44.—厨夫に財を。 45.—安樂の爲に。 46.—神に華を。 47.—友に財物を。 48.—諸の安樂の諸の根を。

第七 章

ca, vā, iva の用法.—語の終にある s 又は r が, ṣ, ś, s となる場合.—語の終にある as の變化.—語の終にある ās の變化.—語の終にある is, īs, us, ūs 等の變化.—動詞の語根より, 現在語基を作る方法三種.—a, an の接頭辭の意義。

§36. ca (並に.と), vā(または), iva (...のごとく) 等の接續詞は. 其の接續する語又は. 文の後に附加せらる。

pattrāṇi ca puṣpāṇi ca (諸の葉と. 諸の花とは) aṣvam iva (馬を.....のごとく).

§37. 一語の終にある s 又は r は. 次に來る語の始にある, c, ch, t, ṭh, t, th に會せば, 變じて ṣ, ś, s となる。

s + c = ṣc. s + ch = ṣch. s + t = ṣt. ṣ + ṭh = ṣṭh. s + t = st. s + th = sth のごとし。

sūryas + ca + candras + ca = sūryaṣ ca candraṣ ca 日と月とは。

candras + tārakam + ca = candras tārakam ca 月と星とは。

§38. 一語の終にある as は. 次に來る語の始にある。

1. 軟父音に會して, o となる。

aṣvas + mṛigas + vā = aṣvo mṛigo vā (馬はまたは鹿は) (馬か又は鹿かは)。

2. a に會するときは, o となるも, a は消滅す, 此の a の消滅を表せむ爲め, 「=」の記號を附す。

sūdas + annam = sūdo = nnam (庵人は食物を)。

☞ 本書にては「=」に代ふるに「/」を以てす。

3. a 以外の母音に會するときは, s 消滅す。

açvas + iva = açva iva (馬は……のごとく)のごとし。

§39. 一語の終にある ās は, 次に來る語の始にある軟音に會すれば, s 消滅す。

açvās + mṛigās + ca = açvā mṛigāç ca 諸馬と諸鹿とは,
açvās + ive = açvā iva 諸馬は……のごとく,

§40. is, īs, us, ūs 等都て a ā 以外の母音に次ぐ s は, 軟音に會して r となる, もし, 其の軟音 r なるときは s 消滅して s の前にある短母音は長母音となる。

sūdāis + annam = sūdair annam 厨夫によりて食物は。
mitrāis + grīhāt = mitrāir grīhāt 諸友と共に家より。
grīhayos + vāidyah = grīhayor vāidyah 兩家に於て醫師は。
nis(なし) + ruj(病) = niruj. 無病の。

§41. 1. ある動詞の語根に a を加へ, 現在語基を作る, tud 打つ + a = tuda のごとし。(第六種動詞)

2. 此の際, 或る動詞は, 語根の母音を重音に變化せしむ. budh 覺る + a = bodha のごとし。(第一種動詞)

3. 又或る動詞は, 語根に何等の語基構成音を加へず, 單に語根に多少の變化を施すのみに止めて, 直ちに, これを現在語基となすものあり. as あり. は as 又は s を以て, 現在語基とあすがごとし。(第二種動詞)

斯くして, 得たる現在語基に .ti, tas, anti; 又は te, ete, ante を附加せば, 第三人稱の現在動詞を得べし。

tuda + ti = tudati かれは, 打つ, bodha + ti = bodhati かれは覺る, 等のごとし, 但し現在語基にして, a に終るものあれば, 此の a は, 語尾の始にある e 又は a に遭ひて, 消滅す (§175 参照) bodha + anti = bodhanti かれ等は, 覺る, tuda + ete = tudete かれ等二人は, 打つ, 等のごとし。

tudati,	tudatas,	tudanti;
彼は打つ.	彼等二人は打つ.	彼等は打つ.
tudate,	tudete,	tudante.
かれは打つ.	彼等二人は打つ.	彼等は打つ.
bodhati,	bodhatas,	bodhanti;
彼は覺る.	彼等二人は覺る.	彼等は覺る.

bodhate,	bodhete,	bodhante;
彼は覺る.	彼等二人は覺る.	彼等は覺る.
asti,	stas,	santi.
彼はあり.	彼等二人はあり.	彼等はあり.

動詞の現在變化を示すに, 其の第三人稱單數を掲ぐるは, 梵語の常例なり. 例せば, tud 打つ (tudati, tudate) のごとし, 讀者もし, 此の第三人稱單數より, 語尾を除けば, 直ちに, 現在語基を得べく, 随つて, 現在變化を知るを得, tudati-ti = tuda 現在語基. 動詞は, 一文の主辭と (§54 参照) 數及び人稱に於て, 一致するを要す, 主辭にして, 第三人稱單數ならば, 動詞も第三人稱, 單數なるべく, 第一人稱雙數ならば, 動詞も, 第一人稱雙數なるべし. buddhas + bodhati = buddho bodhati (§38.1) (一人の佛は覺る), buddhau bodhataḥ (二人の佛は覺る)のごとし。

§42. a の接頭辭は否定の義を有す dharma (男) 法. a-dharma (男) 不法. の如し. 母音を以て始むる語の前には a に代ふるに an を以てす。

anta (男) 限界, 極度. an-anta (男) 無限.

希臘語の a, an, 拉丁語の in, 英語の un 等は皆梵語の a, an に同じ, 希臘語より英語となれる a-gnostic (宇宙本體の不可思議を主張する論者) 又は an-onymous (無名の) 等を見るべし。

第八課

問題

1.—一語の終にある s が ç, ś, s となる場合如何. 2.—一語の終にある as が軟父音に會するときは其の變化如何. 3.—一語の終にある as が a に會すれば其の結果如何. 4.—同一の as が a 以外の母音に會するときは其の結果如何. 5.—一語の終にある ās が軟音に會するときは其の變化如何. 6.—is, īs 等都て a, ā 以外の母音の後にある s が軟音に會するときは其の變化如何. 7.—動詞の語根より現在動詞を得る方法中, 其の三種を擧ぐべし. 8.—a の接頭辭の意義如何. 9.—a もし母音を以て始むる語の前に来るときは 如何なる接頭辭を以て之に代ふるか。

雜語

dharma.	(男) 法. 道.	nara.	(男) 人.
a-dharma.	(男) 不法. 無道.	tud.	打つ.
an-ārtha.	(男) 不幸.	tudati.	
ārtha.	(男) 意義. 財物.	rakṣ.	守る.
		rakṣati.	
		budh.	覺る. 知る.
		bodhati.	

samtoṣa. (男) 満足. 怡悦.	vrit. あり. 存在す. vartate.
a-samtoṣa. (男) 不満足. 不平.	as. あり.....なり. asti.
pālaka. (男) 守護者.	eva. こそ.....れ. やがて.
laguḍa. (男) 杖.	

1. nṛiṇo dharmeṇa narān rakṣati. 2. narā laguḍāir aḥvaṁ tudanti. 3. narāu dharmāṇām arthān bodhete. 4. adharma duḥkhānām mūlam asti. 5. nṛipā narāṇām pālakāḥ santi. 6. narāu vṛikṣasya mūle staḥ. 7. a-samtoṣa eva mūlam anarthānām asti. 8. samtoṣaḥ sukhānām mūlam asti. 9. narāu laguḍābhyām mṛigāṁ tudete. 10. naro duḥkhe vartate. 11. nṛipā narān rakṣanti.

- 1.-王は法によりて諸人を守る. 2.-諸人は杖にて馬を打つ. 3.-二人は諸法の意義を覺る. 4.-不法は諸の苦痛の根なり. 5.-諸王は諸人の守護者なり. 6.-二人は樹の根に居る. 7.-不満足こそ不幸の根なれ. 8.-満足は諸の好運の根なり. 9.-二人は二本の杖にて鹿を打つ. 10.-一人は不幸に處す. 11.-諸の王は, 諸人を護る.

第八章

i 語基. u 語基の男性變化

§ 43. agni (男) 火. 火神. 阿耆尼 (拉丁語より英語となれる igni-te と比較すべし)

	單	雙	複
主	agni-s.	agnī.	agnayas.
呼	agne.	agnī.	agnayas.
業	agni-m.	agnī.	agnin. (§ 30. 5)
具	agninā.	agni-bhyām.	agnibhis.
爲	agnaye.	agni-bhyām.	agnibhyas.
從	agnes.	agni-bhyām.	agnibhyas.
屬	agnes.	agny-os.	agninām. (§ 30. 5)
於	agnāu.	agny-os.	agni-ṣu.

§ 44. paçu (男) 家畜. 獸畜. 拉丁語の pecu-s 家畜及び之より來れる pecu-nia 及び英語の pecuniary (金錢又は金錢上の) と比較すべし.

此の變化にては agni 語基の i, i, e, y を u, u, o, v に改むれば可なり.

	單	雙	複
主	paçu-s.	paçū.	paçavas.
呼	paço.	paçū.	paçavas.
業	paçu-m.	paçū.	paçūn. (§ 20. 5)
具	paçunā.	paçu-bhyām.	paçu-bhis.
爲	paçave.	paçu-bhyām.	paçu-bhyas.
從	paços.	paçu-bhyām.	paçu-bhyas.
屬	paços.	paçvos.	paçūnām.
於	paçāu.	paçvos.	paçu-ṣu.

§ 45. 一語の中に於ける. e 並に o は. a と會して ay 並に av となることあり。

bhū あり...となる. bho + a + ti = bhavati 人はあり. (§ 41. 2)
ni 連れ往く. ne + a + ti = nayati. 人は連れ往く. (§ 41. 2)

雜語

agni. (男) 火. 火神	sādhu. (男) 善人	yaj. 祭る yajati.
kavi. (男) 詩人	ghṛita. (中) 酥	vah. 運ぶ vahati.
paçu. (男) 家畜	iha. (副) 此の世にて	pac. 煮る pacati.
paraçu. (男) 斧. 鉞	dhāv. 走る dhāvati.	bhram. さまよふ bhramati.
ṛiṣi. (男) 仙人	dah. 焼く dahati.	nī. 連れ往く nayati.
budbuda (男) 泡	tyaj 捨つ tyajati.	

第九課

1. puraçudhiḥ. 3. sād'havaḥ. 3. ṛiṣeḥ. 4. kavaye. 5. paraçūn. 6. ṛi-
ṣir ghṛitena devaṁ yajati. 7. agnir gṛihaṁ dahati. 8. mṛigā vane bh-
ramanti 9. annam pacanti sūdāḥ. 10. aḥvāu dhāvataḥ. 11. Sūdo ghṛi-
tam vahati. 12. kavayo dhanam tyajanti. 13. Sād'havo'gnim ghṛitena
yajanti. 14. Sūdāḥ aḥvān nayanti. 15. budbudā iva. 16. sirmā dhāvanti.

1. 一諸の斧にて。 2. 一諸の善人は……よ。 3. 一仙人より……の。 4. 一詩人に。 5. 一諸の斧を。 6. 一仙人は酥にて神を祭る。 7. 一火は家を焼く。 8. 一諸鹿は林に於て彷徨す。 9. 一食を煮る諸の庖人は。 10. 一馬は走る。 11. 一庖人は酥を運ぶ。 12. 一諸の詩人は財物を捨つ。 13. 一諸の善人は火神を酥にて祭る。 14. 一諸の庖人は諸馬をつれ往く。 15. 一泡のごとく。 16. 一諸の獅子は走る。

第九章

i 語基—u 語基の中性變化。

§46. vāri. (中) 水.

	單	雙	複
主	vāri.	vāriṇī.	vāriṇi. (§ 30.5)
呼	vāri. (vāre)	vāriṇī.	vāriṇi.
業	vari.	vāriṇī.	vāriṇi.
具	vāriṇā. (§ 33)	vāri-bhyām.	vāribhis.
爲	vāriṇe.	vāri-bhyām.	vāribhyas.
從	vāriṇas.	vāri-bhyām.	vāribhyas.
屬	vāriṇas.	vāriṇos.	vāriṇām. (§ 30.5)
於	vāriṇi.	vāriṇos.	vāriṣu.

§47. madhu. (中) 蜜. 蜜漿 (希臘語の methy 英語の mead 等比較すべし)

	單	雙	複
主	madhu.	madhunī	madhūni. (§ 30.5)
呼	madhu. (madho)	madhunī	madhūni.
業	madhu.	madhunī	madhūni-bhis.
具	madhunā.	madhu-bhyām.	madhu-bhis.
爲	madhune.	madhu-bhyām.	madhu-bhyas.
從	madhunās.	madhu-bhyām.	madhu-bhyas.
屬	madhunās.	madhu-nos.	madhūnām. (§ 30.5)
於	madhuni.	madhu-nos.	madhu-ṣu.

§48. 或る動詞の語根に. ya の語基構成音を附加して. 現在語基を作る. naç 消ゆ. 亡ぶ + ya = naçya の如し. (第四種動詞)。

これに. ti, tas, anti, e, ete, ante の語尾を附加すれば. 現在動詞を得. 但し此の際. 語基の終にある a 又は e は. 語尾の始にある a 又は e に會して. 消滅するは. 一に §41 に述べたるがごとし。

naç 消ゆ, 亡ぶ.	naçya	naçyati, naçyatas, naçyanti.
vid あり, 存在す.	vidya	vidyate, vidyete, vidyante.

§49. 又或る動詞は. 不規則なる方法によりて. 現在語基を得。

語根	現在語基	語根	現在語基
gam. 往く.	gaccha.	sthā 立つ.	tiṣṭha.
mri 死す.	mriya.	pā 飲む.	piba.
jan 生る.	jāya.	driç 見る.	paçya.
iṣ 希求す.	iccha.	dā 與ふ.	yaccha.

第十課

1. açvāu vane tiṣṭhataḥ. 2. narā gṛihaṇā gacchanti. 3. kavayo dhanam icchanti. 4. nṛpaḥ kavaye dhanam yacchati. 5. mṛigo vṛikṣasya mūle tiṣṭhati. 6. sūdo madhu pibati. 7. gṛiheṣu narā vidyante. 8. kaver gṛihāt sūdā vanam gacchanti. 9. kavayo nṛipeṇa vāriṇi tiṣṭhanti. 10. narā iha jāyante ca mriyante ca budbudā iva vāriṇi.

1. 一兩馬は林に於て佇立す。 2. 一諸人は家に往く。 3. 一諸の詩人は財物を希求す。 4. 一王は詩人に財物を與ふ。 5. 一鹿は樹の根に於て佇立す。 6. 一庖人は蜜を飲む。 7. 一諸の家に於て諸人はあり。 8. 一詩人の家より. 諸の庖人は林に行く。 9. 一諸の詩人は王と共に水に於て佇立す。 10. 一諸の人は此の世界に於て生じ又は死す, 水に於ける諸の泡のごとく。

第十章

ā 語基の變化

§50. açvā. (女) 牝馬

	單	雙	複
主	açvā.	açve.	açvās.
呼	açve.	açve.	açvās.
業	açvām.	açve.	açvās.
具	açvayā.	açvābhyām.	açvābhis.

爲	açvāyāi.	”	açvābhyas.
從	açvāyās.	”	”
屬	”	açvayos.	açvānām.
於	açvāyām	”	açvāsu.

單數の具格・爲格・從格等の語尾は ā, ai, ās, ām ながらも、語基と語尾との間に y を挿入せるものなれば、y は音便より來れる挿入音に過ぎず。

§ 51. 一語の中にある s が ś となる場合二種あり。(s の舌音化)

1. 直に a, ā 以外の母音若くしは k, l, r の後に來るとき、
2. m 及び h を介して、a, ā 以外の母音又は k, l, r の後に來るとき。

1. —a ā 以外の母音	s	—	2. —a ā 以外の母音	m	s	—
k		—	k			—
r		—	r			—
l		—	l			—
		—	h			—
		—	h		ś	—

例. açveṣu, dāneṣu, agniṣu 等の ś のごとし。

açvāsu の s は ś とならず。何となれば、s は ā の後に來るを以てなり。

k, r, l の後に來れる s の變化は、§ 107 等を見るべし。

§ 52.

1. 母音語基の女性變化には、複數の業格は常に s に終る而して此の s の前には、母音常に長母音となる。açvā + s = açvās. dhenu + s = dhenūs (諸の牝牛を) となるがごとし。
2. また其の變化には、單數の具格は ā, 爲格は ai, 從格及び屬格は ās, 於格は ām に終る。

§ 53. prati なる接頭辭は、名詞に附加せらるゝときは、「毎」又は「各」の義を有することあり。

prati-dinam 毎日. prati-diçam 各の方處に於て. prati-deçam 各處に於て。

§ 54. 邦語に於て「王は諸人の守護者なり」と云ふ場合の「なり」は繫辭と云ひ、「王」の語は主辭と云ひ、「守護者」の語は賓辭と云ふ。此等の場合の「なり」は、通例梵語に於て as 又は bhū を以て譯すべ

し。nripo narāṇām pālako'sti = nripo narāṇām pālako bhavati 王は諸人の守護者なり。

然れど、時ありて、繫辭を省略することあり。nripo narāṇām pālakaḥ. かゝる際には、先づ as 又は bhū の動詞を、繫辭として補足するを要す。

1. 邦語の性質より見れば、かゝる場合に主辭、賓辭、繫辭を分つは、時ありて、頗る妥當を缺くことあり。烏は黒しと云へる文にて、烏の語は主辭、黒は賓辭、しは繫辭なりとせば、必ずしも通ぜざるにあらず、されど、寧ろ「黒」と「し」を合して賓辭とするを勝れり。此の二分説は、邦語の性質上、至つて便宜ある區別にして、殊に論理學上、頗る實用あるを覺ゆ、然れども、吾人が強めて茲に三分説を採れるは、梵語の性質上、此の區別を便宜なりとすによる。

2. 「王は諸人の保護者なり」の文中、「諸人」の語は、賓辭たる「保護者」の補足言にして、其の意義を補足し、制限するに過ぎず、故に賓辭の一部分なりと思ふべからず。

§ 55. 一語の終にある單母音は、(§20) 次に來る同種類の母音と會せば、合して長母音となる。即ち

-a+a-	= -ā-	-i+i-	= -ī-	-u+u-	= -ū-
-a+ā-	= -ā-	-i+i-	= -ī-	-u+ū-	= -ū-
-ā+a-	= -ā-	-ī+i-	= -ī-	-ū+u-	= -ū-
-ā+ā-	= -ā-	-ī+i-	= -ī-	-ū+ū-	= -ū-

agninā + agniḥ = agnināgniḥ 火は火にてのごとし。

sūdasya + annam = sūdasyānnam 庖人の食物は、のごとし。

§ 56. 一語の終にある a 及び ā は、次に來る異種類の母音と會して下に記するとき變化をなす。

-a. ā + i. ī -	= - e -	a. ā + e =	- āi -
-a. ā + u. ū -	= - o -	a. ā + āi =	- āi -
-a. ā + ri. rī -	= - ar -	a. ā + o =	- āu -
-a. ā + li -	= - al -	a. ā + āu =	- āu -

第 十 一 課

雜 語

男性名詞

中性名詞

pravāsa (男)旅の空. 羈旅. mitra (中)友 an-āratam (副)間断なく
 vyādhita(男)病めるもの. āuśadha (中)醫藥. 藥草 prati-deçam (副)都ての處に
 mṛita (男)死せるもの. jñāna (中)智 prati-diçam (副)都ての方處に
 muni (男)隱者. 聖者 jala (中)水 tu 然れども. 之に反して.
 vidyā (女)學識. 智識 sthala (中)陸 caと. また, 而して.
 bhāryā (女)婦 pāpa (中)罪業.

1. vidyāiva narāṇāṃ mitram pravāse. 2. bhāryā griheṣu mitram asti.
 3. āuśadham vyādhitasya mitram asti. 4. dharma eva mṛitasya mitram
 asti. 5. jñānasyāgninā pāpāni dahati munih 6. an-āratam iha narā
 mriyante ca jāyante ca.

7. vidyā mitram pravāse ca bhāryā mitram griheṣu ca |
 vyādhitasyaūśadham mitram dharmo mitram mṛitasya ca ||

8. an-āratam prati-diçam prati-deçam jale sthale |
 jāyante ca mriyante ca budbudā iva vāriṇi ||

1. 學識こそ羈旅に於ける諸人の友なれ. 2. 婦は諸の家に於ける友なり. 3. 醫藥は病人の
 友なり. 4. 法こそ死人の友なれ. 5. 隱者は智の火にて罪業を焼く. 6. 間断なく此の世
 界に於て諸人は死し且つ生ず. 7. 學識はこれ羈旅の友. 婦はこれ家に於ける友. 醫藥はこれ病
 めるもの. 友. 法はこれ死人の友なり. 8. 一. 間断なく孰れの方處にても, 孰れの處にても, 水に
 於ても, はた陸に於ても, 諸人は水に於ける泡のごとく生じまた死す.

第 十 一 章

i 語基, u 語基女性の變化

§ 57. 一語の終にある i, ī は次に來る異種類の母音と會して y となり,
 u, ū は次に來る異種類の母音と會して v とあり,
 ri, rī は次に來る異種類の母音と會して r となる.

例. vāriṇi + agnih = vāriṇyagnih 水に於て火は

但し, 双数の主呼業の終にある i, ī は何等の場合と雖も, y, v となることなし.

§ 58. 一語の終にある e, o は次に來る a に會して. a 消滅す. 此の際「,」
 を以て a の消滅を表す. 此の記號を ava-graha (分離) と云ふ
 vane + agnih = vane'gnih なり。

sūdas + annam pacati = sūdo + annam pacati = sūdo'nnam pacati

庖人は食を煮る (§ 38. 2)

§ 59. 1. 一語の終にある e, o は. 次に來る a 以外の母音に會して通例 a

となる. vane + iva = vana iva 林に於けるごとく。

2. 一語の終にある ai, āu は次に來る母音に會して ā 又は āy, āv と
 なる. aṣvāu + aṣve ca = aṣvāvaṣveca 二の牡馬と二の牝馬とは
 aṣvāyāi + annam yacchati = aṣvāyāy annam yacchati かれは食物を牝馬
 に與ふ

devāu + iva = devāviva 二柱の神はのごとく。

§ 60. mati (女) 慧. 意見 希臘語の mēti-s と比較すべし。

ti に終る無形名詞は常に女性なり, ma-ti, stu-ti 讚歌のごとし, mati の變化は agni
 の變化に同じきもの. 外, 又 aṣvā の變化に同じき形あり。

	單	雙	複
主	mati-s	matī	matayas
呼	mate	”	”
業	mati-m	”	matīs (§ 52. 1)
具	maty-ā (§ 52.2 § 57)	mati-bhyām	mati-bhis
爲	mataye, matyāi (§ 52.2 § 57)	”	matibhyas
從	mates, matyās (”)	”	”
屬	mates, matyās (”)	matyos	matīnām
於	matāu, matyām (”)	matyos	mati-ṣu

§ 61. dhenu (女) 牝牛も paçu の變化に準ずる外 aṣvā に準ずる形あり。

	單	雙	複
主	dhenu-s	dhenu	dhenavas
呼	dhenō	”	”
業	dhenu-m	”	dhenūs (§ 52.1)
具	dhenvā (§ 52.2 § 57)	dhenu-bhyām	dhenu-bhis
爲	dhenave, dhenvāi	”	dhenu-bhyas
從	dhenos, dhenvās	”	”
屬	” ”	dhenvos	dhenūnām
於	dhenāu, dhenvām	”	dhenu-ṣu

雜語

第十二課

問題

1. 一語の終にある母音は、次に来る同種類の母音と會して如何に變ずるか。2. 一語の終にある a, ā は次に来る i, ī, u, ū, ri, rī と會して、如何に變化するか。3. 一語の終にある i, ī, u, ū, ri, rī は次に来る異種類の母音と會して、如何なる變化をなすか。4. 一語の終にある e, o は次に来る母音に會して、如何なる變化をなすか。5. —mati の變化を暗誦すべし。6. —dheuu の變化を暗誦すべし。

男性名詞	女性名詞	中性名詞
mahā-puruṣa (男)大丈夫	çruti (女)啓示録.吠陀	nayana(中)目
vipra (男)婆羅門	smṛiti (女)傳説録.法典	
nīca (男)下賤の人	sampātti (女)幸福	dāiva (中)宿命
gopa (男)牧牛者	vipatti (女)不幸	
(go = 牛. pa = 守)	kīrti (女)聞譽	kāraṇa(中)原因
pārthiva (男)國王	kṣānti (女)忍辱	
kalaha (男)鬭爭	çānti (女)寂靜	lakṣaṇa(中)特徴.相
vraṇa (男)潰瘍.腫物	makṣikā (女)蠅.蚊.	

1. çrutiḥ smṛitiçca viprāṇām nayane. 2. dāivam eva sampatteçca vipatteçca kāraṇam. 3. kavayaḥ kīrtim icchanti. 4. kṣāntir eva mahā-puruṣāṇām lakṣaṇam. 5. çrutāu ca smṛitāu ca viprā dharmāṇām artham paçyanti. 6. pārthivo dhanam prati-dinam viprebhyo yacchati. 7. nīcāḥ kalaham icchanti. 8. munayaḥ çāntim icchanti. 9. gopā dhenūr vane rakṣanti.

10. makṣikā vraṇam icchanti dhanam icchanti pārthivāḥ |
nīcāḥ kalaham icchanti çāntim icchanti sādavaḥ ||

1. 吠陀と法典とは諸の婆羅門の兩目なり。2. 宿命こそ幸福と不幸との源因なれ。3. 諸の詩人は聞譽を希求す。4. 忍辱こそ大丈夫の特徴なれ。5. 吠陀と法典とに於て諸の婆羅門は諸の法の意義を見る。6. 國王は財寶を毎日諸の婆羅門に與ふ。7. 諸の下賤の人は鬭爭を希求す。8. 隱者は寂靜を希求す。9. 諸の牧牛者は諸の牝牛を林に於て守る。10. 諸の蠅蚊は潰瘍を希求し、諸の國王は財寶を希求す、諸の下賤の人は鬭爭を希求し、諸の善人は寂靜を希求す。

第十二章

i, ū 語基の變化

§ 62. i, ū 語基の女性變化に二種あり。一綴音の語基と二綴音の語基是れなり。

例せば nadi (女) 河. vadhū (女) 婦のごときは二綴音の語基なり。çri (女) 吉祥 bhū (女) 大地等は二綴音の語基なり。此の二種は多少變化を異にす。nadi, vadhū の變化は概して § 50 に準すべし。

§ 63.	單	雙	複
主	nadi	nadyāu	nadyas
呼	nadi	"	"
業	nadi-m	"	nadis
具	nadyā	nadi-bhyām	nadibhis
爲	nadyāi	"	nadibhyas
從	nadyās	"	nadibhyas
屬	nadyās	nady-os	nadinām
於	nadyām	"	nadiṣu

但し lakṣmi (女) 幸福の女神、は單數主格に於て lakṣmis となる。

§ 64.	單	雙	複
主	vadhūs	vadhvāu	vadhvas
呼	vadhu	"	"
業	vadhūm	"	vadhūs
具	vadvā	vadhūbhyām	vadhūbhis
爲	vadvāi	"	vadhūbhyas
從	vadvās	"	"
屬	vadvās	vadvos	vadhūnām
於	vadvām	"	vadhūṣu

§ 65. 名詞的變化に於ける原則上の語尾

	單	雙	複
主	s	āu (中性-i)	as (中性-i)

呼	-	āu (,)	as (,)
業	am	āu (,)	as (,)
具	ā	bhyām	bhis
爲	ε	"	bhyas
從	as	"	"
屬	as	os	ām
於	i	os	su

1. 從來述べ來りし語基の中には、上記原則上の語尾を有せるものあり、有せざるものあり例せば、açvaのaçvāt açvasya, açvāis のごときは、原則上の語尾をさらざしも açva+i= açve 馬に於て (§56) açva+āu= açvāu (§56) 又は dāna+i= dāne 二個の施物は (§56) mati+ā= matyā 慧にて (§60) のごときは、此の語尾をされるなり。
2. 印度の語典家から上記原則上の語尾を記するに當り、下のごとき記號を用ふ。

單	雙	複
主.....su (u をとり去るべし)	āu	jas (j をとるべし)
呼.....特に語尾を有せず	欠	欠
業.....am	āuḥ (ḥ をとるべし)	ças (ç をとるべし)
具.....tā (t をとり去るべし)	bhyām	bhis
爲.....ñe	"	bhyas
從.....ñasi	{先づ ñ をとり去り次に 從格の i をとり去るべし}	"
屬.....ñas		os
終.....ñi		os
		sup. (p をとり去るべし)

かくのごとき、名詞は su のごとき語尾をとるものなれば sup に終れるもの即ち sub-anta (蘇漫多)-pada (聲)と云ふなり。但し sup の p が、此の場合に b となる理は、§ 105. I を参照すべし。

§ 66. 一語の中に於て i, ī, u, ū は次に來る母音と會して iy, uv となることあり。

çrī + am = çriyam 吉祥を, bhū + am = bhuvam 大地を。

かゝる現象は、一綴音の語根語基の場合に多く、又 i, ī, u, ū が二個以上の父音に先たれたる場合に多し。

§ 67. çrī (女) 吉祥. bhū (女) 大地.

	單	雙	複
主	çrī-s.	bhū-s.	çriyāu. bhuvāu
呼	çrī-s.	bhū-s.	" "
業	çriy-am.	bhuv-am.	çriy-as. bhuv-as.

具	çriy-ā.	bhuv-ā.	çrī-bhyām.	bhū-bhyām.	çrī-bhis.	bhū-bhis.
爲	çriy-e.	bhuv-e.	" "	" "	çrī-bhyas.	bhū-bhyas.
從	çriy-as.	bhuv-as.	" "	" "	" "	" "
屬	çriy-as.	bhuv-as.	çriy-os.	bhuv-os.	çrī-nām.	bhū-nām.
於	çriy-i.	bhuv-i.	çriy-os.	bhuv-os.	çrī-ṣu.	bhū-ṣu.

此の外 çrī, bhū 等は、單數爲格より以下於格に至るまで、また açvāのごとき變化す。
çriy-āi, çriy-ās のごとし。

§ 68. i 語基, ū 語基の男性名詞は都て çrī, bhū のごとき、原則上の語尾をとりて變化す。

su-dhī (男) 好き思慮あるもの。賢者。 senā-nī 軍兵を引率するもの。將軍。 svayam-bhū (男) 自己より生せるもの。(self-existent) 大自在天の一名、等皆然り。

第十三課

問題

- i 語基, ū 語基の女性變化に幾何の種類ありや、之を列挙すべし。
- nadi の變化を暗誦すべし。
- vadhū の變化を暗誦すべし。
- çrī の變化を暗誦すべし。
- bhū の變化を擧ぐべし。
- 一名詞的變化に於ける原則上の語尾如何、列挙すべし。
- çrī+am=çriyam となる理由如何。
- bhū+ā=bhuvā となる理由如何。
- su-dhī, senā-nī 等の i, ū 語基の男性名詞は如何に變化するか。

第十三章

i 語基の變化

§ 69. dātrī 施與者。

	單	雙	複
主	dātā.	dātārāu.	dātāras.
呼	dātas.	"	"
業	dātār-am.	"	dātrīn (§ 30.5)
具	dātrā (§ 57)	dātrī-bhyām.	dātrī-bhis.
爲	dātre (§ 57)	"	dātrī-bhyas.

從	dātus.	„	„
屬	dātus.	dātr-os (§ 57)	dātrīnām.
於	dātari.	„	dātri-ṣu.

§ 70. 1. 親族の關係を表示する ri 語基は、單數の業格、雙數の主、呼、等
 都て dātri の語基が -tār となる場合に tar となるを常例とす。
 pitri 父 pitar-am, pitarāu, pitaras.

2. mātri 母. svasri 姉妹 duhitri 女子等が女性語基は § 52.I に従ひ。
 複數の業格に於て mātris, svasris, duhitris となる。

§ 71. 現在動詞に三種の用法あり。

1. 現在 gacchati かれは、人は往く。
2. 直接の未來 gacchati かれは、人は往かむ。
3. 過去、此の場合には通例 sma と共に來る。gacchati sma かれは、人は
 行きぬ。然れども、また往々 sma を省略することあり。

§ 72. 1. 爲格於格は業格と同じく移動の方向、即ち到達點を示すこと
 あり。

vanam gacchati 人は林に往く。= vanāya gacchati = vane gacchati.

2. 爲格屬格於格は、贈與、報知の義ある動詞と共に來るときは、均
 しく「に」と譯すべし。

viprāya dhanam yacchati = viprasya — = vipre —. かれは財物を婆
 羅門に與ふ。

雜 語

Janaka (男) ジャナカ	Sitā (女) シーター
Daça-ratha(男) 十車王	Kāuçalyā(女) カーウシャリヤー
Rāma (男) ラーマ王	Gangā (女) 恒河
Lakṣmaṇa(男) ラクシュマナ	duhitri (女) 女子
Bharata (男) ブハラタ	mātri (女) 母
pitri (男) 父	patni (女) 婦

bhrātri (男) 兄弟	nārī (女) 婦女
pati (男) 夫、主人	smṛi 念ふ、追念す smarati.
rākṣasa (男) 羅刹	hri 奪ふ、とる harati.
piçācaka (男) 吸血鬼	ji 征服す jayati.
Rāvaṇa (男) 羅刹王、羅婆那	tri 渡る tarati.
hṛidaya (中) 心	saha 共に(具格を支配す)

第十四課

1. Rāmasya pitā Daçarathaḥ. 2. Lakṣmaṇo Rāmaṁ bhrātaraṁ sma-
 rati. 3. Rāmaḥ Sītayā patnyā saha pitur gṛiham tyajati. 4. Rāvaṇaḥ
 Sītām Janakasya duhitaraṁ harati. 5. Rāmo Lakṣmaṇena saha Gaṅ-
 gām tarati. 6. Rāmaḥ Sītayāḥ patih. 7. Sita Rāmaṁ patim smarati.
 8. Rāmo Rāvaṇaṁ rākṣasaṁ jayati. 9. Rāmaṁ smarati Bharataḥ.
 10. Rāmo Lakṣmaṇaḥ Daça-rathaṁ pitaraṁ smarataḥ. 11. Kāuça-
 lyā Rāmasya mātā mriyate. 12. Nāryaḥ piçācakā iva narāṇām hṛida-
 yāni haranti.

1. ラーマ王の父は十車王なり。2.—「ラクシュマナ」は兄弟なる「ラーマ」王を念ふ。3.—「ラ
 マ」王は婦なる「シーター」と共に父の家を捨つ。4.—羅刹王は「ジャナカ」王の女子なる
 「シーター」を奪ふ。5.—「ラーマ」王は「ラクシュマナ」と共に恒河を渡る。6.—「ラーマ」王
 は「シーター」の夫なり。7.—「シーター」は夫なる「ラーマ」王を念ふ。8.—「ラーマ」王は
 羅刹なる「ラーヴナ」王を征服す。9.—「ブハラタ」は「ラーマ」王を念ふ。10.—「ラーマ」王及び
 「ラクシュマナ」は父なる十車王を念ふ。11.—「ラーマ」王の母なる「カーウシャリヤー」は死
 す。12.—諸の婦人は吸血鬼のごとく諸の人の心を奪ふ。

第十四章

ai, o, au の語基の變化

§ 73. rāi (男) 財物。(拉丁語の re-s 物件及び之より來れる英語 re-public, common-wealth
 と比較すべし)。

單	雙	複
主 rā-s.	rāy-āu.	rāy-as.
呼 rā-s.	„	„
業 rāy-am.	„	„
具 rāy-ā.	rā-bhyām.	rā-bhis.
爲 rāy-e.	„	rā-bhyas.

從	rāy-as.	rābhyām.	rābhyas.
屬	rāy-as.	rāy-os.	rāy-ām.
於	rāy-i.	rāy-os.	rā-su.

§74. go (男女) 牛.

	單	雙	複		單	雙	複
主	gāu-s.	gāv-āu.	gāv-as.	主	nāu-s.	nāv-āu.	nāv-as.
呼	gāu-s.	gāv-āu.	gāv-as.	呼	nāu-s.	nāv-āu.	nāv-as.
業	gā-m.	gāv-āu.	gās.	業	nāv-am.	nāv-āu.	nāv-as.
具	gav-ā.	go-bhyām.	go-bhis.	具	nāv-ā.	nāu-bhyām.	nāu-bhis.
爲	gav-e.	go-bhyām.	go-bhyas.	爲	nāv-e.	nāu-bhyām.	nāu-bhyas.
從	gos.	go-bhyām.	go-bhyas.	從	nāv-as.	nāu-bhyām.	nāu-bhyas.
屬	gos.	gav-os.	gav-ām.	屬	nāv-as.	nāv-os.	nāv-ām.
於	gav-i.	gav-os.	go-ṣu.	於	nāv-i.	nāv-os.	nāu-ṣu.

§75. nāu (女) 船.

§76. 男性語基を變じて、女性語基とあすに、其の方法大略五種あり。

1. 男性語基もし a 語基ならば、語基の終にある a を ā に變ずべし。açva(男)牡馬...açvā(男)牝馬; bāla(男)男兒...bālā(女)女兒...dāraka(男)男兒...dārakā(女)女兒。kṛiṣṇa(形)黒き...kṛiṣṇā(女)黒き。
2. 又 dāraka のごとく、男性語基もし aka に終らば、大抵これを ikā に變ずべし。bālaka(男)童兒...bālīkā(女)女兒。putraka(男)男子...putrikā(女)女子。vācaka(男)談話者。vācīkā(女)談話者。
3. 又語基の終にある a を i に變ずべし。deva(男)神...devī(女)女神; putra(男)男子...putrī(女)女子; kākā(男)烏...kākī(女)牝烏; sarpa(男)蛇...sarpī(女)牝蛇。
4. 又語基に、i を附加すべし。此の方法は、男性の父音語基より、女性語基を作る際多く使用せらるゝも、又母音語基の場合にも、行はれざるにあらず。sādhu(男)善人...sādhu+i=sādhi(女)善女; dātri(男)施與者...dātri+i=dātrī(女)施與する女。
5. 其の他、極めて、不規則なる方法にて、女性語基を作ることあり。pati(男)主...patnī(女)主婦; Indra(男)帝釋...Indrāṇī(女)帝釋妃。

第十課

問題

1.—dātri の變化を暗誦すべし。2.—pitri, mātri 等親族の關係を表示する ri 語基の名詞の變化は dātri に比して如何なる差違あるか。3.—mātri, svasri の複數の業格を書すべし。4.—移動の到達點を表示する格は業格の外に何格なるか。5.—屬格、爲格、於格の「に」を以て譯すべき場合如何。6.—rāi の變化を暗誦すべし。7.—go の變化を暗誦すべし。8.—nāu の變化を暗誦すべし。9.—男性名詞より女性名詞を作る方法に五種あり、例を擧げて之を説明すべし。

第十五章

形容詞の變化、一分詞の變化

§77. 形容詞の變化は、一に名詞の變化に同じきことは、已に §22 及び §27 に於て述べたり。

☞ kṛiṣṇa 等の a 語基の形容詞は、açva, dāna 等の a 語基の名詞の變化 (§28, §29) に準じて變化し、kṛiṣṇā 等の ā 語基の形容詞は、açvā 等の ā 語基の名詞變化 (§50) に準じて變化す。其の他 i 語基の形容詞は、§43, §46, 又は §60, 準じ、ii 語基の形容詞は、§63, §67, に準じ、u 語基の形容詞は、§44, §47, §61, に準じて變化す。父音語基の形容詞と雖も、皆例に照して、知るべし。

本來形容詞の用法に二種あり、一は一文の賓辭として用ひらるゝことにして「馬は黒し」と云ふ場合の「黒し」のごとき是れなり、二は、名詞の附加辭として用ひらるゝことにして「黒き馬」と云ふ場合の「黒き」のごとし。

☞ 二者擇みて、孰れに居るも、性と數と格とに於て、一文の主辭又は、名詞に一致するを要す。即ち主辭又は名詞にして、男性單數主格ならば、形容詞も又男性單數主格ならざるべからず、女性複數主格ならば、形容詞も又同一ならざるべからず、唯だ、一文の主辭たるものは、其の格常に主格なるが故に、賓辭として用ひられたる形容詞も、其の格をとりて、主格となり、他の格をとることなし。若し夫れ、名詞の附加辭として用ひらるゝに至りては、一に名詞の性數格に隨ふを要す、形影相趁ひ、聲響相應するがごとく、毫もこれと乖離するを許さざるなり、今例を以て、これを示さむに。

§78. sarpa (男) 蛇. kṛiṣṇa (形) 黒き.

	單	雙	複
主	kṛiṣṇaḥ sarpas.	kṛiṣṇāu sarpāu.	kṛiṣṇāḥ sarpās.
呼	kṛiṣṇa sarpa.	” ”	” ”
業	kṛiṣṇaṁ sarpam.	” ”	kṛiṣṇān sarpān.
具	kṛiṣṇena sarpeṇa.	kṛiṣṇābhyām sarpābhyām.	kṛiṣṇāiḥ sarpāis.
爲	kṛiṣṇāya sarpāya.	” ”	kṛiṣṇebhyaḥ sarpebhyas.
從	kṛiṣṇāt sarpāt.	” ”	” ”
屬	kṛiṣṇasya sarpasya.	kṛiṣṇayoḥ sarpayos.	kṛiṣṇānām sarpāṇām.
於	kṛiṣṇe sarpe.	” ”	kṛiṣṇeṣu sarpeṣu.

§79. vāsas (中) 衣. (§109). kṛiṣṇa (形) 黒き.

	單	雙	複
主業	kṛiṣṇaṁ vāsas.	kṛiṣṇe vāsasi.	kṛiṣṇāni vāsāṁsi.
呼	kṛiṣṇa vāsas.	” ”	” ”

具	kṛiṣṇena vāsasā.	kṛiṣṇābhyām vā-obhyām.	kṛiṣṇāir vāsobhis.
爲	kṛiṣṇāya vāsase.	" "	kṛiṣṇebhyo vāsobhyas.
從	kṛiṣṇād(t) vāsasas.	" "	" "
屬	kṛiṣṇasya "	kṛiṣṇayor vāsasos.	kṛiṣṇānām vāsasām.
於	kṛiṣṇe vāsasi.	" "	kṛiṣṇesu vāsasū.

§ 80. kanyā (女) 少女. kṛiṣṇā (形) 黒き. (§ 76.1)

	單	雙	複
主	kṛiṣṇā kanyā.	kṛiṣṇe kanye.	kṛiṣṇāḥ kanyās.
呼	kṛiṣṇe kanye.	" "	" "
業	kṛiṣṇām kanyām.	" "	" "
具	kṛiṣṇayā kanyayā.	kṛiṣṇābhyām kanyābhyām.	kṛiṣṇābhiḥ kanyābhis.
爲	kṛiṣṇāyāi kanyāyāi.	" "	kṛiṣṇābhyāḥ kanyābhyas.
從	kṛiṣṇāyāḥ kanyāyās.	" "	" "
屬	" "	kṛiṣṇayor kanyayos.	kṛiṣṇānām kanyānām.
於	kṛiṣṇāyām kanyāyām.	" "	kṛiṣṇāsū kanyāsū.

§ 81. 形容詞が、一文の賓辭として、其の主辭と、性數格に於て、一致する例を擧げむに。

1. sarpāḥ kṛiṣṇo'sti.	sarpāu kṛiṣṇāu staḥ.	sarpāḥ kṛiṣṇāḥ santi.
蛇は黒し	二蛇は黒し	諸蛇は黒し。
2. kanyā kṛiṣṇāsti.	kanye kṛiṣṇe staḥ.	kanyāḥ kṛiṣṇāḥ santi.
少女は黒し	二人の少女は黒し	諸の少女は黒し。
3. vāsāḥ kṛiṣṇam asti.	vāsasi kṛiṣṇe staḥ.	vāsāmsi kṛiṣṇāni santi.
衣は黒し	兩衣は黒し	諸衣は黒し。

§ 82. 形容詞の一種にして分詞と稱せらるゝものあり。蓋し動作状態を示す點に於ては、動詞と同じく、名詞を形容して性と數と格と逐ふてこれと一致する點に於ては、形容詞と同じく、二者の性質を兼有するを以て此の名稱あるなり。梵語に於て分詞と稱せらるゝものは素より多しと雖、其の中、最も重要なるは ta, na に終れる過去受動分詞なりとす。此の分詞は動詞の語根に直接又は i を介して、ta 又は na を附加して之を作る。

çru 聞く. çruta 聞かれたる. ji 征服す. jita 征服されたる.
pā 飲む. pita 飲まれたる. rakṣ 守護す. rakṣita 守られたる。

kṛi 作る. kṛita 作られたる. nī 連れ行く. nīta 連れ行かれたる
dā 贈る. datta 贈られたる. smṛi 念ふ. smṛita 念はれたる。
hṛi 奪ふ. hṛita 奪はれたる. dṛiṣ 見る. dṛiṣṭa 見られたる。

§ 83. 上に記せる他動動詞のみならず、自動動詞も、また過去受動分詞を有す。然れども、此の場合には、受動の意義の外に、自動の意義あり。

gam 往く. gata 往かれたる. 往ける。
jan 生る. jāta 生れられたる. 生れたる。
pat 仆る. 墜つ. patita 仆れられたる. 仆れたる。
mṛi 死す. mṛita 死せられたる. 死せる。
sthā 立つ. 留まる. sthita 立たれたる. 立てる。
svap 眠る. supta 眠られたる. 眠れる。

§ 84. 1. 過去受動分詞は、具格と共に使用せられ、普通の動詞に代用せらるゝことあり。此の場合には、具格を「よりて」と譯すべし。
Sītā Rāvaṇena hṛitā 「シーター」は羅刹王によりて奪はれたり。
Rāvaṇo Rāmeṇa jitaḥ 羅刹王は「ラーマ」王によりて征服されたり。
2. 特に主辭を書せずして、過去受動分詞を中性單數の主格に變化せしめ、具格名詞と共に用ふる事あり。
Rāmeṇa jitam 「ラーマ」王によりて征服されき。=「ラーマ」王は征服せり。
3. 自動動詞の過去受動分詞は、Rāmeṇa gatam 「ラーマ」王によりて往かれたり。=「ラーマ」王は往けりと云ふがごとく、構造の外 Rāmo gataḥ と云ふがごとく、一文の主辭と同格に用ふるも可なり。

第十六課

問題

1. 名詞が一文の賓辭たる場合には、如何なる點に於て其の主辭を一致すべきか。
2. 形容詞が一文の賓辭として用ひられたる場合に、其の主辭を一致すべき點如何。
3. 過去受動分詞の構成法如何。
4. 過去受動分詞が如何なる動詞の場合に於て、受動の意義の外に、自動の意義あるか。
5. 自動動詞の過去受動分詞が通常の動詞と同一に使用せらるゝ場合二者あり、列擧すべし。
6. 動詞が一文の賓辭たるときは、繫辭と賓辭との關係如何。

雑 語

sūda	(庖人)	na.....	せず. なし.
putra	(男)男子	hi	實に. 何となれば.....ばなり
udyama	(男)努力. 勉勵	khaṇḍa-çaḥ	切々に
mano-ratha	(男)希望	khaṇḍa-çaḥ krita	裂かれたる
chāyā	(女)蔭. 影	sidh	成就す sidhyati
Lankā	(女)楞伽島	pra-viç	進み入る praviçati
mukha	(中)口		
kārya	(中)事		

1. Annam sūdena kṛitam. 2. Sītā Janakena Rāmāya dattā. 3. Jalam açvena pītam 4. Rāmo Lakṣmaṇena Sītayāca saha Gaṅgām gataḥ. 5. Kavaye nṛipeṇa dhanam dattam. 6. Sītā Rāvaṇena hṛitā I ankāyām nītā ca. 7. Vṛikṣāt patitāni puṣpāny riṣinā dṛiṣṭāni. 8. nṛipāu kavibhir dṛiṣṭāu. 9. Nṛipasyāçvaḥ simhena khaṇḍa-çaḥ kṛitaḥ. 10. pitarah putraih smṛitāḥ. 11. mātaro duhitṛibhiḥ smṛitāḥ. 12. Vanam gato naro vṛikṣāṇām chāyāyām sthitaḥ.

13. Udyamena hi sidhyanti kāryāni, na mano-rathāḥ |
na hi sūptasya simhasya praviçanti mukhe mṛigāḥ. ||

1. 食物は庖人によりて作られぬ. 2.—「シーター」は「サヤナカ」王によりて「ラーマ」王に與へられぬ. 3.—水は馬によりて飲まれぬ. 4.—「ラーマ」王は「ラクシュマナ」及び「シーター」と共に恒河に往けり. 5.—王は詩人に財物を與へき. 6.—「シーター」は「ラーグナ」によりて奪はれ且つ楞伽島に連れ往かれたり. 7.—樹より落たる諸の華は仙人によりて見られき. 8.—二王は諸の詩人によりて見られき. 9.—王の馬は獅子によりて裂かれき. 10.—諸の父は諸の男子によりて念はれき. 11.—諸の女子は諸の母を念ひぬ. 12.—林に往ける人は諸の樹の蔭に於て立てり. 13.—諸の事は努力によりて實に成就す, 希望によりては成就せず, 何となれば諸の鹿は眠れる獅子の口には進み入らざればなり.

第 十 六 章

代名詞 (Sarva-nāma)

§85. 代名詞に五種あり。

1. 人稱代名詞 mat われ. asmat われ等. tvat 汝. yuṣmat 汝等. tat かれ. かれ等.
2. 指示代名詞 tat かの. idam この. かの. adas この. かの. etat この. 等.

3. 關係代名詞 yat.....するもの.あるもの.
 4. 疑問代名詞 kim 何人. 何物.
 3. 不定代名詞 kim cid 或る人. 或る物等.
- 此等の代名詞中. 相似たる變化をあすものあり.

§86. 人稱代名詞 第一人稱 mat われ. asmat われ等.

	單	雙	複
主	aham	āvām	vayam
業	mām. mā (略體)	āvām. nāu (略)	asmān. nas (略)
具	mayā	āvābhyām	asmābhis
爲	mahyam. me (略)	āvābhyām. nāu (略)	asmābhyam. nas (略)
從	mat	”	asmat
屬	mama. me (略)	āvayos. nāu (略)	asmākam. nas (略)
於	mayi	āvayos	asmāsu

§87. 第二人稱 tvat 汝. yuṣmat 汝等.

	單	雙	複
主	tvam	yuvām	yūyam
業	tvām. tvā	yuvām. vām	yuṣmān. vas
具	tvayā	yuvābhyām	yuṣmābhis
爲	tubhyam. te	” vām	yuṣmābhyam. vas
從	tvat	”	yuṣmat
屬	tvat. te	yuvayos. vām	yuṣmākam. vas
於	tvayi	”	yuṣmāsu

§88. 第三人稱代名詞 tat かれ. かれ等.

	單			雙			複		
	男	中	女	男	中	女	男	中	女
主	sas	tat	sā	tāu	te	te	te	tāni	tās
業	tam	”	tām	”	”	”	tān	”	”
具	tena	tayā	tābhyām	”	”	”	tāis	tābhis	”
爲	tasmāi	tasyāi	”	”	”	”	tebhyas	tābhyas	”

從	tasmāt	tasyās	tābhyām	tebhyas	tābhyas
屬	tasya	tayās	tayos	teṣām	tāsām
於	tasmin	tasyām	tayos	teṣu	tāsu

§ 89. 1. sas の終にある s は、次に來る父音に會して消滅す。

Sas + gaççhati = sa gacchati かれ往く。

Sas + putram smarati = sa putram smarati かれは子を念ふ。

2. tat は形容詞のごとく名詞と同格に用ひらるゝことあり。此の場合には英語に於ける定冠詞のごとき意義あり。故に「かの」若しくは「有名なる」と云ふがごとき義を有す。

tasmin vane かの林に於て

sa pitā かの父は

§ 90. etat は、tat のごとく變化す。故に tat の變化中 s を以て始むるものは s を ṣ に變ず。eṣas, eṣā のごとし、[§ 51 参照]。

eṣa pitā この父は、eṣā mātā この母は

第十七課

問題

1. 代名詞の種類如何。 2.—mat, asmat の變化如何。 3.—vat, yuṣmat の變化如何。 4.—tat の男性變化を暗誦すべし。 5.—tat の中性變化を暗誦すべし。 6.—tat の女性變化を暗誦すべし。 7.—sas の s は次に來る父音に會して如何に變化するか、例を示すべし。 8.—tat の形容詞のごとく、名詞と同格に用ひらるゝときは其の意義如何。 9.—etat の變化は tat の變化に比して如何なる差あるか。

雜語

cāura (男)盜	kanyā (女)女子	evam かく、かくのごとく
çiṣya (男)弟子	putrī (女)女子	tu されど、之に反して
guru (男)師、長上	khaṭvā (女)臥床	iti ...と(云ふ)
vyādhita (男)病人	cāstra (中)書	paṭh 誦す paṭhati
çūdra (男)首陀	nagara (中)都城	vad 語る vadati
vaiçya (男)毘舍	bahu (形)多くの	çūdrām vadati かれは首陀に語る

1. aham viprasya putrī tvam tu çūdrasya putra iti sā çūdrām vadati. 2.

Evam mayā çrutam. 3. Sa nriṣo mām tudatīti sā mātaram vadati. 4. Tasyām khaṭvayām vyādhito mayā dṛiṣṭaḥ. 5. Tasmin vane bahavaḥ simhā yuṣmābhir dṛiṣṭaḥ. 6. Sa gurur bahubhiḥ çiṣyāiḥ saha çāstrāṇi pathati. 7. Tasya guror grīhe bahūni çāstrāṇi vidyante. 8. Mama pitaram tasmin nagare nayatīti sā kanyārṣim vadati. 9. Asmākam nriṣas tubhyām dhanam yacchati. 10. Tena cāureṇa yuṣmākam dhanam hṛitam iti te çiṣyā vadanti. 11. etāni çāstrāṇi mama guruḥ tasmāi yacchati. 12. Tasyām nadyām bahavaḥ kākā jalām pibanti.

1. われは婆羅門の女子なり、然れども汝は首陀の男子なりと、かの女は首陀に語る。 2. 一如是我聞、かくのごとく余によりて聞れたり。 3. かの王は余を打つと、かの女は母に語る。 4. かの臥床に於て、病人は余によつて見られき。 5. かの林に於て、多くの獅子は汝等によりて見られき。 6. かの師は多くの弟子と共に諸の書を誦す。 7. かの師の家に於て多くの書あり。 8. かの父をかの都城に連れ往くと、かの女子は仙人に語る。 9. われ等の王は汝に財物を與ふ。 10. かの盜によりて汝等の財物はさられたりと、かの弟子は語る。 11. 此等の書をわが師は彼に與ふ。 12. かの河に於て多くの鳥は水を飲む。

第十七章

idam,—adas,—の變化

§ 91. idam この。かの。(i + dam にして、拉丁語にては i-dem これなり)。

	單			雙			複		
	男	中	女	男	中	女	男	中	女
主	ayam	idam	iyam	imāu	ime	ime	ime	imāni	imās
業	imam	idam	imām	"	"	"	imān	"	"
具	anena	anayā		ābhyām			ebhis	ābhis	
爲	asmāi	asyāi		"			ebhyas	ābhyas	
從	asmāt	asyās		"			"	"	"
屬	asya	"		anayos			eṣām	āsām	
於	asmin	asyām		"			eṣu	āsu	

§ 92. adas かの。

	單			雙			複		
	男	中	女	男	中	女	男	中	女
主	asāu	adas	asāu	amū			amī	amūni	amūs
業	amum	"	amūm	amū			amūn	"	"
具	amunā	amuyā		amūbhyām			amūbhis		amūbhis

爲	amuṣmāi	amuṣyāi	amūbhyām	amībhyas	amūbhyas
從	amuṣmāt	amuṣyās	”	”	”
屬	amuṣya	”	amuyos	amīṣām	amūṣām
於	amusmin	amuṣyām	”	amīṣu	amūṣu

§93. 1. 此等の指示代名詞も tat と同じく名詞と同格に用ひらるゝことあり。

asāu putraḥ 此處なる男子 iyam kanyā 此處なる女子

2. etat 及び idam は第一人稱、第三人稱の代名詞及び名詞と共に來ることあり。かゝるときは「此處に」「彼處に」と譯すべし。

ayam aham 余は此處にあり。

ayam naḥ pitā 此處に吾等の父あり。

第十八課

問 題

1. Idam の男性變化を問ふ。 2.—Idam の女性變化を問ふ。 3.—Idam の中性變化を問ふ。 4.—adas の男中女の單數主格を問ふ。 5.—adas の男性單數の業格及び於格を問ふ。 6.—etat 及び idam 等を「こゝに」「かしこに」と譯すべき場合如何。

雜 語

bālaka (男) 小兒. 童子	sthāna (中) 處
ṛigāla (男) 野狐. 野干	āsana (中) 座席
rasa (男) 漿	bhojana (中) 食物
atithi (男) 客	snāna (中) 澡浴
khatvā (女) 臥床. 牀	ghṛita (中) 酥
drākṣā (女) 葡萄. 蒲桃	vastra (中) 衣服
kathā (女) 物語	tīra (中) 岸. 邊

1. Eṣa bālakaḥ phalāni tyajati. 2. Asmin sthāne ṛigālāu tiṣṭhataḥ. 3. Idam mama gṛiham iti kavir vadati. 4. Asāu naro mama bhrātā. 5. Idam āsanam idam jalam snānāya vastrāṇimānyam khatveti nara' tithim vadati. 6. Te guror grihe drākṣāṇām rasam pibanti. 7. Amuṣmin grihe mayā snānam kṛitam, 8. Snānāya Gaṅgāyās tīram gacchati. 9. Ime bālakā

bhojanam icchanti. 10. saptasya narasya dhanam anena cāureṇa hṛitam.

1.—此の童子は果實を捨つ 2.—此の處に於て二匹の野狐は立つ 3.—これは余の家なりと詩人は語る 4.—かの人余の兄弟なり 5.—此處に座席あり. 此處に澡浴の爲に水あり, 此處に衣服あり, 此處に臥床ありと, 人は客に語る 6.—彼等は師の家に於て蒲桃の漿を飲む 7.—かの家に於て余は浴をなせり 8.—浴する爲にかれは恒河の岸に往く 9.—かの童子等は食物を希求す 10.—眠れる人の財物はかの盜によつて奪はれたり。

第十八章

yat—kim.—anyat等の變化

§94. 關係代名詞 yat は tat に準じて變化す。

	單			雙			複		
	男	中	女	男	中	女	男	中	女
主	yas	yat	yā	yāu	ye	ye	ye	yāni	yās
業	yam	yat	yām	yāu	ye	ye	yān	”	”
具	yena		yayā	yābhyām			yāis		yābhis
爲	yasmāi		yasyāi	”			yebhyas		yābhyas
從	yasmāt		yasyās	”			”		”
屬	yasya		yasyās	yayos			yeṣām		yāsām
於	yasmin		yasyām	yayos			yeṣu		yāsu

§95. 疑問代名詞 kim も tat に準じて變化す。

	單			雙			複		
	男	中	女	男	中	女	男	中	女
kas	kim	kā	kāu	ke	ke	ke	kāni	kās	
kam	kim	kām	”	”	”	”	kān	”	”
kena		kayā	kābhyām				kāis		kābhis

§96. 不定代名詞は. 疑問代名詞 kim に api, cana, cit の不變化詞を附加して. 之を作る。

ko'pi 誰かは. あるものは. ko'pi na 誰人も...せず. kaṅcana na 誰人も...せず. kam cit 誰かを. あるものを. kena cana 誰れかと共に. あるものと共に。

§97. 形容詞中, tat に準じて變化するものあり. 茲に其の主要なるも

のを擧ぐれば,

		男	中	女
1. anya	(他の)	—as	—at	—ā
2. itara	(他の)	—as	—at	—ā
3. anya-tara	(二者の一)	—as	—at	—ā
4. eka-tama	(多数の一)	—as	—at	—ā
5. katara	(二者の孰れか)	—as	—at	—ā
6. katama	(多数の孰れか)	—as	—at	—ā

又數詞・形容詞中原則としては、tat に準じて變化するも、中性單數の主業に於ては m の語尾をとり、t の語尾をとらざるものあり。

1. eka	(一の)	—as	—am	—ā
2. viçva	(都ての)	—as	—am	—ā
3. ekatara	(二者の一)	—as	—am	—ā
4. ubhaya	(二者共に)	—as	—am	—ā
5. sarva	(一切の・都ての)	—as	—am	—ā

§ 98. 名詞及び代名詞の語基に tas を附加すれば、從格の意義を示す。但し時あり於格の義を有することあり。

vāri + tas = vāritas = vāriṇas 水より。

tatas	それより。	kuto'pi(kutas + api)	何處よりか・或る處より。
yatas	...より	a-tas	こゝより
kutas	何より・何處より	i-tas	こゝより。

§ 99. I. 數詞、代名詞等の語基に tra を附加して於格の意義を表示することあり。

tatra	そこに	kūtra...cid	ある所に
yatraの處に	sarvatra	都ての處に・到る處に。
atra	こゝに・そこに	ekatra	一處に
kutra	いづこに	kutrāpi	いづこかに・ある處に。

故に此等の語は數詞、代名詞等の於格に同じ。即ち

tatra = tasmin. tatra vanē = tasmin. vane かの林に於て。

atra = asmin. atra vane = asmin. vane この林に於て。

2. dā を附加して時を示すことあり。

tadā その時 sarva-dā 常に

yadāの時に kadā cana あるとき

kadā 孰れの時にか na kadā cana 決して、...せず、なし。

ekadā あるとき・一時

3. thā, tham を附加して方法、状態を示す。

tathā かやふに。 katham 如何にして・何故に。

atha かくて anya-thā 他の様に

yathāの様に。 na katham api 如何にしても...せず。

tathāpi 然れど。 katham api 如何にしても。

第十八課

問題

1. yat, kim は如何なる代名詞に準じて變化するか。 2.—不定代名詞は如何にして作るか。
3. anya 等は如何なる代名詞に準じて變化するか。 4.—eka 等は tat の變化と如何なる點に於てのみ變化を異にするか。 5.—名詞、代名詞の語基に tas を附加すれば如何なる意義を生ずるか。
- 6.—代名詞等の語基に tra, dā, thā, tham を附加すれば如何。

雑語

vṛiddha (男)長老	prajā (女)庶民	a-phala (形)結果なき・効驗なき。
poṣaka (男)養育者	sabhā (女)集會	a-jña (形)愚なる。
saṅgha (男)割勢の人	vākya (中)言語	an-ṛiça (形)聖詩を知らざる
vyavahāra (男)動作	citta (中)思・心	api (副)...も・亦...と雖も
strī (女)婦人	satya (中)眞理・諦	

1. yathā nṛipās tathā prajāḥ. 2. yathā cittam tathā vākyam. 3. yathā vṛikṣas tathā phalam. 4. sa pitā yaḥ poṣakaḥ. 5. sa nṛipo yaḥ prajā rakṣati. 6. nāsāu dharmo yatra na satyam asti. 7. kas tvam? 8. kutas tvam? 9. ko'pi tava gṛihe tiṣṭhati. 10. kaçcit kāmicit kanyām gṛihe nayati. 11. kenāpi tava kathā çrutā.

12. na sâ sâbhâ yatra na santi vṛiddhâh |
vṛiddhâ na te ye na vadanti dharmam ||

13. yathâ śaṅdho'phalaḥ strīṣu. yathâ gâur gavi cāphalâ |
yathâ cājñe'phalaṁ dānam tathâ vipro'nṛico'phalaḥ ||

1.—王者のなす所、庶民之に倣ふ。 2.—心のある所、語之に従ふ。 3.—果實は樹に従ふ。 4.—養育者は父なり。 5.—庶民を守るものは王なり。 6.—其の中に眞理なきものは是れ法にあらず。 7.—汝は誰なるか。 8.—汝はいつこより來れるか。 9.—あるものは汝の家に佇立す。 10.—あるものはある少女を家に連れ往く。 11.—あるものによりて汝の物語は聞かれたり。 12.—其の中に長老なきものは集會にあらず、法を語らざるものは長老にあらず。 13.—割勢の人は婦人に對し(於て)結果なきがごとく、また (ca) 牝牛は牝牛に對し(於て)結果なきがごとく、また贈與は愚者に對し結果なきがごとく、聖詩を知らざる婆羅門は効驗なし。

第十九章

父音語基の名詞的變化

§100. 父音語基. 通例. は原則上の語尾をとる. 今大別して三種とす。

1. 一様語基. marut (男)風. diç (女)方處. manas (中)心. 等にして, 強中弱の區別なく, 都ての變化を通じて一種の語基を有するのみ。
2. 二様語基. tudat (男. 中) 等にして, tudant, tudat の強弱二種の語基を有す。
3. 三様語基. rājan (男)等にして, rājān, rajan, rājñ の強中弱の三種の語基を有す。

§101 一様語基 marut (男)風. の變化。

	單	雙	
主. 呼	marut	marut-āu	marut-as
業	marut-am	”	”
具	marut-ā	marud-bhyām	marud-bhiḥ
爲	marut-e	”	marud-bhyas
從	marut-as	”	”
屬	marut-as	marut-os	marut-ām
於	marut-i	marut-os	marut-su

§102. 二個以上の父音は. 一語の終にあるを許さず. もしこれあらば. 其

の最も中にあるもののみを止めて, 余は消滅す。

marut + s = marut 風は

§103. 顎音の父音は. 一語の終にあるを許さず. もしこれあれば k となる. 但し j と ç とは時ありて t となることあり。

diç + s = diç (§102.) = dik 方處は

ṛic + s = ṛic (§102.) = ṛik 梨俱の讚誦

viç + s = viç (§102.) = viṭ 毘舍族は

§104. 軟音の閉音と. 都ての含氣音と吹氣音とは. 一語の終にあるを許さず. もしこれあらば盡く之を無氣の硬音に變すべし. 故に

1. 喉音は k となる. h は時ありて t となる.

madhu-lih = madhu-lit 蜜を嘗むるもの. 蜜蜂.

2. 顎音は k となる. vañij 商賈 = vañik (§103.)

3. 舌音は t となる. dviṣ (男)仇敵. dviṭ のごとし. 但し. s は時ありて k となることあり。

4. 齒音は t となる. s の變化に至りては, 已に従來說きしがごとし.

5. 唇音は p となる.

§105. 1. 一語の終にある硬音は, 次に來る軟音に會して軟音となる.

sup + anta = subanta 蘇漫多. 名詞 (§65).

grihāt + vāidyah = grihād vāidyah 家より醫は。

2. 父音は. 硬軟の別なく, 鼻音に會すれば, 皆自己と同種類の鼻音となる.

kas + cit + na = kaçcinna 何人も.....せず.

grihāt + narah = grihānnarah 家より人は。

§106. §103. §104. §105. の原則は. 語基の終にある父音が. 語尾の始にある父音に會する場合にも適用せらるゝことあり。

marut + bhīḥ = marudbhīḥ 諸の風によりて. (§105.1)

diç + bhyaḥ = dik + bhyaḥ (§103) = dig-bhyaḥ (§105.1)

§107. diç (女)方處の變化。

	單	双	複
主. 呼	dik (§103)	diç-āu	diç-as
業	diç-am	”	”
具	diç-ā	dig-bhyām	dig-bhis
爲	diç-e	”	dig-bhyas
從	diç-as	”	”
屬	diç-as	dic-os	diç-ām
於	diç-i	diç-os	dik-su (§51)。

§108. vār (中) 水。

	單	双	複
主. 呼	vār (ḥ) (§32)	vārī	vārī
業	vār (ḥ) (§32)	”	”
具	vārā	vārbhyām	vārbhis
爲	vāre	”	vārbhyas
從	vāras	”	”
屬	vāras	vāros	vārām
於	vārī	”	vārṣu (§51)

§109. manas (中) 心. 意。

	單	双	複
主. 呼	manas	manasī	manānsi
業	”	”	”
具	manasā	manobhyām (§38.1)	manobhis (§38.1)
爲	manase	”	manobhyas
從	manasas	”	”
屬	”	inanasos	manasām
於	manasi	”	manas-su

第 十 九 課

問 題

1.—父音語基に幾何の種類ありや. 2.—marut の變化を暗誦すべし. 3.—marut+s は marut となる, 理由如何. 4.—marut +bhis=marudbhis となる, 理由如何. 5.—一語の終に存在するこ

とを得ざる軟音の閉音, 含氣音及び吹氣音は如何に變化するか. 6.—dic, の變化を暗誦すべし. 7.—dic,+bhis=dig—bhis となる, 理由如何. 8.—diç+su=dikṣu となる, 理由如何. 9.—manas の變化を暗誦すべし. 10.—硬軟の父音, 鼻音に會するときは, 其の變化如何.

雜 語

megha (男) 雲	āpad (女) 不幸
jana (男) 人民	saṁpad (女) 幸福
dvija (男) 婆羅門	nabhas (中) 天空. 碧落
gandha (男) 香	cakṣus (中) 目
cāra (男) 間牒	saras (中) 池
kṣitipa (男) 國主	āyus (中) 壽命
prabhu (男) 王. 主	nidhāna (中) 財寶
pada-stha (男) 在位の人.	a-cakṣus (形) 目なき
suhṛid (男) 親友	para (形) 最高の. 最上の. 他の
veda. (男) 吠陀	itara (形) 他の (§97.2)
ripu (男) 仇敵	dur-labha (形) 得難き
loka (男) 世界. 世間	anātha (形) 保護者なき. 孤獨
nātha (男) 保護者. 主. 夫	vāi 實に

1. nabhasi meghe na vidyate. 2. çrutih smṛitiçca dvijānām cakṣuṣī.
3. vāidyō na prabhur āyusaḥ. 4. kṣitipānām cakṣuṣī cārāh. 5. Udyama
eva saṁpadaḥ kāraṇam. 6. āyur eva param nidhānam. 7. sarve
narāḥ pada-sthasya suhṛidaḥ. 8. āpadi mitraṁ durlabham. 9. snānāya
sarasas tīram sa gacchati. 10. sūryaç candraçca lokasya cakṣuṣīti kavir
vadati. 11. nripaç cakṣur acakṣuṣām nāthaçcānāthānām.
12. gandhena gāvaḥ paçyanti vedāih paçyanti vāi dvijāh, |
cārāih paçyanti kṣitipāç cakṣurbhyām itare janāh. ||
13. na kaçcit kasya cinmitraṁ na kaçcit kasya cid ripuḥ. |
vyavahāreṇa mitrāni jāyante ripavas tathā ||

1.—天空に於て雲なし. 2.—吠陀と法典とは(啓示録と傳説録とは)婆羅門の両目なり. 3.—醫
は壽命の主にあらず. 4.—間牒は國主の両目なり. 5.—努力こそ幸福の源因なれ. 6.—壽命
こそ最高の珍寶なれ. 7.—一部ての人は在位のもの、友なり. 8.—不幸に於て友は得難し. 9.—洗
浴の爲にかれば池塘に往く. 10.—日月は世界の両目なりと, 詩人は語る. 11.—國王は目なき

もの目なり、孤獨のもの、保護者なり。12.—諸の牛は香によりて見、婆羅門は實に吠陀にて見、國主は間牒によりて、其の他の人々は両目によりて見る。13.—何人もあるもの、(本來の)友にあらず、何人もあるもの、仇敵にあらず、動作によりて友生ず、仇敵も斯のごとくして生ず。

第二十章

§110. a 語基又は ā 語基の名詞に. in を附加して、所有の義を有する名詞又は形容詞を作る。此の際 a 及び ā は消滅す。

dhana 財物	dhanin 財物あるもの. 富人
pakṣa 翼	pakṣin 翼あるもの. 鳥
çaça 兎	çaçin 兎あるもの. 月
phala 果實	phalin 果實あるもの. みのれる
guṇa 能. 德	guṇin 能ある人, 有徳の人

§111. かく作れる in 語基の名詞は、一樣語基にして下に記するがごとき變化をなす。

	單		雙		複	
	男	中	男	中	男	中
主	dhanī	dhani	dhanināu	dhaninī	dhaninas	dhanīni
呼	dhanin	„	„	„	„	„
業	dhaninam	„	„	„	„	„
	dhaninā		dhanibhyām		dhanibhis	

§112. 1. as 語基は男性女性の單數主格に於て ās となる。
 su-manas (形) 好意ある. sumanās 好意ある人は. 又は女は
 2. as 語基, is 語基, us 語基は, 中性の複數主呼業に於て, āmsi, īmsi, ūmsi となる
 manas (中) manāmsi 諸の心は. (§109)
 havis (中) havīmsi 諸の焼きて神に供する物は. 焼供は.
 dhanus (中) dhanūmsi 諸の弓は

§113. 語根の終にある ir, ur, iv, uv は y 又は其の他の父音を以て始むる語尾に會して, īr, ūr, īv, ūv となることあり。
 gir (女) 語. gir + s = gīr 語は. (§32. §102)

gir + bhis = gīrbhiḥ 諸の語によりて
 gir + su = gīrṣu 諸の語に於て (§51)
 pur (女) 都城. pur + s = pūr 都城は
 pur + su = pūrṣu 諸の都城に於て

第二十課

問題

1.—名詞の語基に in を附加すれば、如何なる意義となるか。 2.—dhanin を變化せしむべし。
 3.—as 語基が ās となるは如何なる場合なるか、 4.—as, is, us の語基が āmsi, īmsi, ūmsi となる場合は如何、例を擧ぐべし。 5.—ir, ur, iv, uv は īr, ūr 等となる場合如何。

雜語

mṛityu (男) 死	phalin (形) 實ある
mūrkhā (男) 愚者	dhanin (形) 富める
sundara (男) 好む人. 美しき人	daridra (形) 貧しき
çūra (男) 勇者	guṇin (形) 能ある
sudhī (男) 思慮ある人. 賢者	niyata (形) 確かなる. 必然の
kāṇa (男) 眇目の人	snigdha (形) 情ある.
pur (女) 都城	a-nitya (形) 無常なる
veçyā (女) 娼婦	dehin (形) 生ある (deha 身體)
Çrī-devī (女) 吉祥天. 幸福の神	nam 屈す.
Bhāratī (女) 辨財天. 文藝の神	namati
jīvita (中) 生命	

1. phalino vrikṣā namanti. 2. sarve janāḥ cakṣurbhyām paçyanti kṇās-tu cakṣuṣā. 3. Dhanino dhanam daridrāya yacchanti. 4. sarvo dhanino mitram. 5. Daridrāṇām suhrīdo durlabhāḥ. 6. asminpuri no nṛipo vasati. 7. munayo vaneṣu vasanti nṛipās tu pūrṣu. 8. guṇino janā namanti na tu mūrkhāḥ. 9. niyato dehinām mṛityur anityam tu jīvitam. 10. Bhāryāyāḥ sundaraḥ snigdho veçyāyāḥ sundaro dhanī |
 Çrī-devyāḥ sundaraḥ çūro Bhāratyāḥ sundaraḥ sudhīḥ. ||

1.—實ある樹は屈す。 2.—すべての人々は両目にて見る、然れども眇目の人は一目にて見る
 3.—富人は財物を貧人に與ふ。 4.—すべての人は富人の友なり。 5.—貧人の友は得難し。

6.—此の都城に於て、吾等の王は住む。7.—隠者は林に於て住む、然れど王者は都城に於て。8.—能ある人々は屈す、然れど愚者は屈せず。9.—生あるもの、死は必然なり、然れど其の生は無常なり。10.—妻の好む人は情あるものなり、娼婦の好むは富人なり、吉祥天の好むは勇者なり、辨財天の好むは賢人なり。

第二十一章

at,—mat,—vat. 語基の變化

§ 114. 吾人は已に動詞の語根より語基を作る方法に、四種あることを述べたり。即ち

- | | | | |
|--------|----------|-----------|-----------|
| 1. as | asti, | stas, | santi. |
| 2. tud | tudati, | tudatas, | tudanti. |
| 3. bhū | bhavati, | bhavatas, | bhavanti. |
| 4. vid | vidyate, | vidyete, | vidyante. |

as の場合に於ける s. 其の他の場合に於ける tuda, bhava, vidya, は現在語基なり。此の現在語基に at 又は t を加ふれば、現在分詞を得べし。

sat ある。tudat 打つ。bhavat ある。等即ち是なり。

§ 115. かくして作れる現在分詞は、強弱二種の語基を有す。

sat 強—sant 弱—sat
tudat 強—tudant 弱—tudat

然れば、此等の現在分詞の強語基は、現在動詞の複數第三人稱より最後の母音を去りたるに同じ。tudanti (かれ等は打つ)—i=tudant 是れ此の種の現在分詞を記憶するに、最も簡明なる方法なりとす。

§ 116. 二様語基の變化中、強語基の來る場合は

1. 男性に於ては、單雙複を通じて主呼の二格及び單雙を通じて業格これなり。其の他の場合には、常に弱語基を用ふ。

☞ 女性に於ては、通例弱語基に i を附加して語基を作るが故に其の語基は、常に母音語基にして、(§ 76.4) 強弱又は強中弱の別あることなし。tudat + i = tudati 打つ女の (nadi ごとく變化す) ごとし。

2. 中性に於ては、複數の主呼業、是れなり。其の他の場合には常に弱語基を用ふ。

§ 117. tudat 打つもの。tudant (強) tudat (弱).

	單		雙		複	
	男	中	男	中	男	中
主	tudan (t+s)	tudat	tudantāu	tudatī	tudantas	tudanti
呼	tudan	”	”	”	”	”
業	tudant-am	”	”	”	tudatas	”
具	tudat-ā		tudadbhyām		tudadbhis	
爲	tudat-e		”		tudadbhyas	
從	tudat-as		”		”	
屬	”		tudat-os		tudat-ām	
於	tudat-i		”		tudat-su	

§ 118. mat, vat を名詞、代名詞の語基に附加して、所有の義を示す。

例. paçu-mat 家畜を有する。

bhaga-vat (榮光ある)世尊。薄伽梵。

dhana-vat 財ある。富める等是れなり。

此等は、男性、單數の主格に於て man, van とはならずして、mān, vān となる。例せば、paçumān, bhagavān, dhana-vān のごとし。但し其の他の變化は tudat に同じ。

§ 119. bhū の現在分詞 bhavat は、現在分詞として使用せらるゝ外、第二人稱代名詞の尊稱として使用せらるゝことあり、此の場合には、男性、單數の主格は、bhavān となり bhavan とはならず。

第二十二課

問題

1.—現在分詞の構成法如何。2.—tudat は何様語基に屬するか。3.—二様語基の變化中、強語基の來る場合を列擧すべし。4.—tudat の變化を暗誦すべし。5.—tudat + bhyām = tudadbhyām となる理由如何。6.—mat, vat を名詞、代名詞に附加して、如何なる意義を示すか。7.—bhavat は、本來の意義の外に、如何なる意義を有するか、且つ其の場合の變化を示すべし。

第二十二章

§ 120. ātman (男) 自我。精神。靈魂 karman (中) 業、行爲、等のごとく

man, van の前に. 父音来るときは, 下のごとき變化をなす。

	單		雙		複	
	男	中	男	中	男	中
主	ātma	karma	ātmānau	karmaṇi	ātmānas	karmāṇi
呼	ātman	„ (karman)	„	„	„	„
業	ātmānam	„	„	„	ātmānas	„
具	ātmanā,	karmaṇā	—mabhyām		—mabhis	

§121. yas 語基. çreyas (形) 一層よき. 勝れたる. çreyāms, 強 çreyas. 弱

	單		雙		複	
	男	中	男	中	男	中
主	çreyān	çreyas	çreyāmsāu	çreyasī	çreyāmsas	çreyāmsi
呼	çreyan	„	„	„	„	„
業	çreyāmsam	„	„	„	çreyasas	„
具	çreyasā	„	çreyobhyām		çreyobhis	
爲	çreyas-e	„	„		çreyobhyas	

§122. I. 短母音につぎて. 一語の終にある n は. 次の語の始にある母音に會して nn となる. 即ち

—短母音 + n + 母音 = —短母音 nn 母音—なり。

例. tudan + api = tudannapi 打ちながらも. —an + a— = —anna—
tiṣṭhan + api = tiṣṭhannapi 立ちながらも. —()

2. 短母音. 若しくは mā (なかれ) ā (まで) に先だたれたる ch は. cch となる. 即ち

—短母音 + ch— = —短母音 cch—

— mā + ch— = —mācch—

— ā + ch— = —ācch—

例. Vṛikṣasya + chāyāyām = Vṛikṣasya cchāyāyām 樹の蔭に於て。

第二十三課

問題

I.—ātman の變化を暗誦すべし. 2.—karman の變化を暗誦すべし. 3.—Yas 語基の變化を暗誦すべし. 4.—一語の終りにある n は. nn となる場合如何. 5.—ch が cch となる場合如何。

雜語

puruṣa	(男) 人. 丈夫. 臣. 士. 僕	para	(形) 他の. 最高の
sva-jana	(男) 親族	nir-arthaka	(形) 益なき
para-jana	(男) 他人	çreyas	(形) 勝れたる. 一層よき
dhī-mat	(男) 賢者	nir-guṇa	(形) 能なき
svarga	(男) 天上	saṃtuṣṭa	(形) 満足せる. 悦豫せる.
çrī	(女) 吉祥, 幸福	çuc	哀む çocati
pañḍita	(男) 學者	tat...yatra ...處には. 其の處には	
vipad	(女) 不幸	...處は. 是れ	
gati	(女) 進行	yadi...tadā する時は. その時は	
mānasa	(中) 心	dinād-dinam 日々(日より日に)	
karman	(中) 業	ā (關係詞) に至るまで(從業を支配す)	
yāuvana	(中) 青年	vinā (關係詞) なければ(業具從を支配す)	

1. sādthur naro vipadi tiṣṭhannapi na dharmam tyajati.
2. ayam sva-janaḥ para-jano veti vadanti mūrkhāḥ (vā + iti = veti).
3. yadi mānasam saṃtuṣṭam tadā ko dhana-vān ko daridrah?
4. sarve janāḥ sva-janā iti vadanti pañḍitāḥ.
5. dāivam eva param udyamas tu nirarthaka iti mūrkhāṇām matih.
6. yathā hyekena (hi + ekena = hyekena) cakreṇa na rathasya gatiḥ bhavaty evam (i + e = ye) puruṣāṇām udyamena vinā dāivam na sidhyatīti dhīmatām matih.
7. Dinād dinam gacchati yāuvanam ity evam çocanti te bālakāḥ.
8. ā mṛityoḥ sarve narāḥ çriyam icchanti.
9. yatra tvarṇ tatra hi vayam tat sukham yatra vāi bhavān | nagaram tad bhavān yatra sa svargo yatra no nṛpaḥ ||
10. guṇavān vā para-janaḥ sva-jano nirguṇo'pi vā | nirguṇaḥ svajanaḥ çreyān yaḥ paraḥ para eva saḥ ||

I.—善人は不幸に處るも道を捨てず. 2.—これは親族なり, 若くば他人なりと愚者は語る. 3.—心にして満足せば, 誰人は富人にして誰人は貧人なりや. 4.—都ての人は親族なりと學者は語る. 5.—運命こそ最高のものなれ, 之に反して努力は無益なりとは愚者の意見なり. 6.—隻輪によりて實に車の進行なきがごとく, 人の努力なくして運命は成就せずとは賢者の意見なり. 7.—一日日青年は去るごかくかの童兒等は哀む. 8.—死に至るまで都ての人は幸福を希求す. 9.—汝

のある所には吾等實にあり、實に汝のある所には幸福あり、汝のある所は是れ都城なり、吾等の王のある所は是れ天上なり。 II.—能ある他人と、能なきも親族なるとは(孰れか善き)能なき親族を勝れりせず、他人は即ち他人なればなり。

第二十三章

an 語基の男性中性語基の變化—ac 語基の變化

§ 123. 三様語基は通例 vas, ac, an に終る。強語基の來る場合は

1. 男性 單雙複の主格
單雙の業格
雙複の呼格
2. 中性 複數の主呼業格

§ 124. 中語基の來る場合は

1. 男性單數の呼格及び父音を以て始むる語尾の前。
 2. 中性 單數の主呼業及び父音を以て始むる語尾の前。
- 其の他の場合には、常に弱語基を用ふ。

§ 125. rājan (男) 國王. rājān (強) rājan 父音の前にては rāja (中) rājñ (弱)

主	rāja	rājānāu	rājānas
呼	rājan	„	„
業	rājānam	„	rājñas
具	rājñā	rāja-bhyām	rāja-bhis
爲	rājñe	„	rāja-bhyas
從	rājñas	„	„
屬	rājñas	rājños	rājñām
於	rājñi (rājani)	„	rājasu

§ 126. 一語の中に於て、n もし j の後に來るときは、變じて ñ となる。
rāj + n = rājñ のごとし。

§ 127. nāman (中) 名. (拉丁語の nomen 名. 英語の name と比較すべし)
nāmān (強) nāman, nāma (中) nāmñ (弱)
單 雙 複

主・業	nāma	nāmani	nāmāni
呼	„ (nāman)	„	„
具	nāmñā	nāma-bhyām	nāma-bhis
爲	nāmne	„	nāmabhyas
從	nāmñas	„	„
屬	nāmñas	nāmños	nāmñām
於	nāmñi (nāmani)	„	nāmasu

§ 128. vas 語基

vidvas (形) 學ある・智ある 強—vidvāms 中—vidvat 弱—vidus

	單		雙		複	
	男	中	男	中	男	中
主	vidvān	vidvat	vidvāmsāu	viduṣī	vidvāmsas	vidvāmsi
呼	vidvan	„	„	„	„	„
業	vidvāmsam	„	„	„	viduṣas	„
		viduṣā		vidvadbhyām		vidvadbhis

§ 129. ac 語基

prāc	東方の	強—prāñc	中—prāc	弱—prāc
pratyac	西方の	強—pratyāñc	中—pratyac	弱—pratic
udac	北方の	強—udañc	中—udac	弱—udic
nyac	下方の	強—nyañc	中—nyac	弱—ñic

(ñica 下賤の人と比較すべし)

§ 130. as, bhū, vid 等の動詞が、一文の賓辭として(繫辭としてにはあらず)用ひられ「あり」の義を有するときは、之と共に來れる屬格は「には」又は「は……を有す」の語尾を附して譯すべし。例せば
yasya dhanam asti tasya mitram asti.

財物ある人には友あり。=財物を有する人は友を有す。

yasyārthas tasya balam. (asti を補足して譯すべし)

富ある人には力あり。=富める人は力を有す。

yasya buddhis tasya balam.

智慧あるものには力あり。=智者は力を有す。

其の場合に於ても、屬格は、往々「には」を以て譯すべきことあり。例せば

amṛitam durlabham nṛiṇām asti. 甘露味は人の得難きものなり。=人間には甘露味は得難きものなり。

第二十四課

問題

- 1.—三機語基は通例如何なる父音に終るか。 2.—三機語基の變化中強語基り來る場合如何。 3.—中語基の來る場合如何。 4.—rājan の變化を暗誦すべし。 5.—nāman. の變化を暗誦すべし。 6.—vidvas の變化を暗誦すべし。 7.—屬格を「には」と譯すべき場合如何。

雜語

vaktri	(男)語る人・能辯の人	saṁtuṣṭa	(形)満足せる
rājan	(男)王	kuḷīna	(形)門地ある
vāiçya	(男)毘舍族	guṇa-jñā	(形)能を知れる
çūdra	(男)首陀族	çrutimat	(形)博聞の・博學の
kāñcana	(中)黄金	darçanīya	(形)見るに堪ゆる・美なる
bala	(中)力	ā-çrī	依る・歸す・適歸す
sāinya	(中)軍兵・甲兵	āçrayati	(業)格於格を支配す
vitta	(中)財物		
ākimcanya	(中)無一物の状態 (a-kim-cana)		
kaniṣṭha-tā	(女)最も微賤なる状態		

1. sampadas tasya yasya saṁtuṣṭam mānasam. 2. āpadas tasya yasya vittam na vidyate. 3. ākimcanyam nidhānam viduṣām. 4. eṣā kanyā darçanīyā. 5. Rāmasya bhrātarāu vidyete sma. Lakṣmaṇaṣca Bharata-çceti. 6. Rāmasya Sītetī patnī asti sma. 7. āuṣadham na vidyate mṛitasya. 8. yasya vittam nāsti tasya mitrāni durlabhāni. 9. yasyāsti vittam sa naraḥ kuḷīnaḥ sa paṇḍitaḥ sa çrutimān guṇa-jñāḥ | sa eva vaktā sa ca darçanīyaḥ sarve guṇāḥ kāñcanam āçrayanti || 10. Balam vidyā ca viprānām rājñām sāinyam balam tathā | Balam vittam ca vāiçyānām çūdrānam ca kaniṣṭhatā ||

- 1.—満足せる心ある人には幸福あり。 2.—財物なき人には不幸あり。 3.—無一物の状態は學者の財寶なり。 4.—此の少女は美なり。 5.—「ラーマ」王には、二人の兄弟ありき、「ラクシュマナ」と「アハラタ」と是れなり。 6.—「ラーマ」王には「シーター」と云ふ妃ありき。 7.—死せるものには藥なし。 8.—財物なき人の友は得難し。 9.—財ある人は門地ある人なり、學者なり、博學なり、(他人の)材能を知る人なり、かれこそ雄辯家なれ、又美なれ、一切の才能は、黄金に依る。 10.—婆羅門の力は學識なり、同じく國王の力は甲兵なり、又毘舍族の力は財物なり、而して首陀族の力は其の最も微賤なる状態なり、(探るに足らざる状態にあり)。

第二十四章

數詞 (sānkhyāvācaka)

§131. 數詞の中、一より十迄の數詞を擧ぐれば。

1. eka
2. dvi (希臘語. dvo. di. 拉丁語. duo. bi.)
3. tri (希. treis. 拉. tres)。
4. catur (拉. quatuor)。
5. pañca(n) (希. pente)。
6. ṣaṣ (希. hex. 拉. sex)。
7. saptan (希. hepta. 拉. septem)。
8. aṣṭan (希. oktō. 拉. octo)。
9. navan (拉. novem)。
10. daṣan (希. deka. 拉. decem)。

§132. 1. eka の變化は、已に §97 に於て述べし如く、中性單數の主業兩格に於て m の語尾を有する外は、tad に準じて變化す。

2. dvi は、意義上、雙數のみなることを俟たず。

	男	中	女
主呼業	dvāu		dve
具爲從		dvābhyam	
屬於		dvayos	

3. tri 等は、意義上、複數に於て變化すること又明白なり。

	男	中	女	男	中	女
主呼業	trayas	trīni	tisras	catvāras	catvāri	catasras
業	trīn	”	”	caturas	”	”

具	tribhiḥ	tisribhis	caturbhis	catasribhis
爲從	tribhyas	tisribhis	caturbhis	catasribhis
屬	trayāṇām	tisriṇam	caturṇām	catasriṇām
於	triṣu	tisriṣu	caturṣu (§51)	catasriṣu

§133. 1. pancan より以上. daṣan に至るまでは. 複數に於てのみ變化し. 性の區別なし. 但し. aṣtan には. 二種の變化あり.

主呼	pañca	ṣaṭ (§104.3.)	aṣṭāu	aṣṭa
業	pañca	„	aṣṭāu	aṣṭa
具	pañcabhis	ṣaḍbhis (§105)	aṣṭābhis	aṣṭabhis
爲從	pañcabhyas	ṣaḍbhyas	aṣṭābhyas	aṣṭabhyas
屬	pañcānam	ṣaṇṇām	aṣṭānām	
於	pañcasu	ṣaṭsu	aṣṭāsu	aṣṭasu

其の他. saptan, navan, daṣan, は pañcan 準じて變化す.

第二十五課

問題

1.—より十に至る數詞を暗誦すべし. 2.—其の中に於て性の區別ある數詞如何. 3.—eka の變化如何. 4.—dvi の變化如何. 5.—tri の變化如何. 6.—catur の變化如何. 7.—Pañcan の變化如何. 8.—ṣaṣ の變化如何.

雜語

kiyat (形) 幾何の	hīna (形) なき(具格を支配す)
mūlya (中) 代價. 價格.	andha (男) 盲人
pustaka (中) 書籍	jñāne(a+i)ndriya (中) 知根. 感官
jagat (中) 世界	karna (男) 耳
ric (女) 梨俱(四吠陀の一)	tvac (女) 皮膚
sāman (中) 傒馬(四吠陀の一)	rasanā (女) 舌(味ふもの)
yajus (中) 夜珠(四吠陀の一)	nāsikā (女) 鼻
atharvan (中) 阿達婆(同上)	varṣa (中) 年
darṣana (中) 哲學. 見.	māsa (男) 月
ritu (男) 時候	pakṣa (男) 半月分. 半分. 分.

çukla (形) 白き	brāhmaṇa (男) 婆羅門
çukla-pakṣa 白分. 上半月.	veda (男) 吠陀經.
kriṣṇa (形) 黒き	vi-kṛita (形) 賣られたる
kriṣṇa-pakṣa 黒分. 下半月.	saha (關係詞) 共に(具格を支配す)
nirgam (nis + gam) 出で行く.	
nirgacchati	rūpaka (中) ルービー(銀錢)

1. Pañcabhiḥ putrāiḥ saha pitā nagarān nirgacchati (§105.2) 2. Kiyatā mūlyena tvayā tat pustakam vikṛitam? 3. Rāpakāis tribhis tat pustakam mayā vikṛitam. 4. Dve cakṣuṣi jagati vidyete : Sūryaḥ candraçceti. 5. Catvāro vedāḥ santi : rik sāma yajur atharva ceti. 6. Ṣaḍ darṣanāni vartante. 7. Ekena cakṣuṣā hīnah kāṇa iti sarve vadanti. 8. Dvābhyām cakṣurbhyām hīno' ndhaḥ. 9. Pañca jñānendriyāni : cakṣuḥ karnaṣ tvag rasanā nāsikā ceti. 10. Ekasmin māse dvāu pakṣāu vidyete : çuklaḥ kriṣṇaḥ. 11. Asmākaṁ nṛiṣas trīṇi rūpakāni prati-dinam brāhmanebhyo yacchati. 12. Ekasmin varṣe ṣaḍ ṛitavaḥ santi.

1.—五人の男子と共に. 父は都城より出で行く. 2.—幾何の代價にて, 汝は, かの書を賣りしや. 3.—三「ルービー」にてかの書を余は賣れり. 4.—世界には日と月との二個の目あり. 5.—四の吠陀あり, 梨俱, 傒馬, 夜珠, 阿達婆これなり. 6.—哲學は六派あり. 7.—目なきものを眇目の人と, 諸人は語る. 8.—両目なきものは盲人と云ふ. 9.—知根に五あり, 目と耳と皮膚と舌と鼻とはこれなり. 10.—一月には二半分あり, 白分と黒分とは是なり. 11.—吾等の王は日々三「ルービー」を婆羅門に與ふ. 12.—一年に於て六の季候あり.

第二十五章

§134. 數詞の十以上を擧ぐれば

11. ekādaṣan.	20. vimṣati.	300. trīṇi ṣatāni.
12. dvādaṣan.	30. trimṣat.	triṣata.
13. trayodaṣan.	40. catvārimṣat.	1000. sahasra.
14. caturdaṣan.	50. pañcāṣat.	2000. dve sahasre.
15. pañcadaṣan.	60. ṣaṣṭi.	3000. trīṇi sahasrāni.
16. ṣoḍaṣan.	70. saptati.	10.000. ayuta. 萬
17. sapta-daṣan.	80. aṣṭi.	100.000. lakṣa. 洛叉. 十萬
18. aṣṭa-daṣan.	90. navati.	1.000.000. prayuta 百萬
19. navadaṣan.	100. ṣata.	10.000.000. Koti. 俱胝. 千萬.

19. ūna-vimṣati. 200. dve ṣate.

19. ekona-vimṣati. 200. dviṣata.

§135. 上記の数中

1. daṣan に終るものは. pañcan と同じく變化す。
2. vimṣati の如く. i に終るものは. 女性と視做し. mati と同じく變化せしむ。
3. trimṣat の如く. t に終るものは. 女性と視做し. 一樣語基に準じて變化せしむ。
4. ṣata, sahasra 以上は. 中性と視做し. dāna と同じく變化せしむ。

§136. vimṣati (二十)より以上の數詞にして. 形容詞の如く使用せらるる時は. 單數のみに於て變化す. 故に性と數とに於ては. 必ずしも名詞と一致せず. 唯格に於て一致すれば足るなり。

vimṣatir narāḥ trimṣat striyaḥ ṣatām narāḥ

二十人の 男子 三十人の 婦人 百人の 男子

sahasraṁ striyaḥ ṣaṣṭyām varṣeṣu 六十年に於て

千人の 婦人

然れども. 名詞の如く使用せらるときは單双複を通じて變化す。

catvāri ṣatāni strīṇām 婦人の四百人

dve sahasre narāṇām 男子の二千人

vimṣatir narāṇām 男子の二十人

vimṣatī narnāṇām 男子の二十人の二倍(四十人)

ṣatāir narāṇām 男子の數百人によりて

§137. 數詞の一種に序數と稱するものあり。

男中 女 男中 女

1. prathama 第一 ā 6. ṣaṣṭha 第六 ī

2. dvitīya 第二 ā 7. saptama 第七 ī 1. 2. 3. を除く外. 序數

3. tṛtīya 第三 ā 8. aṣṭama 第八 ī の女性は ī に終る. 例せ

4. caturtha 第四 ī 9. navama 第九 ī ば caturthī pañcamī 等の

5. pañcama 第五 ī 10. daṣama 第十 ī 如し。

十より十九に至るまでは. 最後の n を除きて. 之れを作る。

11. ekādaṣa 第十一 15. pañcadaṣa 第十五 19. navadaṣa 第十九

12. dvādaṣa 第十二 16. ṣoḍaṣa 第十六 ūnavimṣa 第十九

13. trayodaṣa 第十三 17. saptadaṣa 第十七

14. caturdaṣa 第十四 18. aṣṭadaṣa 第十八

§138. 二十より以上は. tama を附加すべし。

vimṣati-tama 第二十 eka-vimṣati-tama. 第二十一 trimṣat-tama 第三十等これなり。

或は vimṣati の ti, 其の他の數の終にある t を除くも可なり。

vimṣa 第二十, eka-vimṣa 第二十一, trimṣa 第三十, eka-trimṣa 第三十一等これなり。

第二十六課

問題

- 1.—一より十九に至る數詞を暗誦すべし. 2.—二十より以上百に至る十位の數を暗誦すべし.
- 3.—十より十九に至る數詞の變化如何. 4.—vimṣati の如く i に終るものは變化如何. 5.—trimṣat の如く t に終るもの. 變化如何. 6.—ṣata の變化如何. 7.—vimṣati 以上の數にして形容詞の如く變化するとき. 名詞の如く變化するときは. 變化に區別あり如何. 8.—一より十に至る序數を暗誦すべし. 9.—十より十九に至るまでの序數の構成法如何. 10.—二十より以上の序數の構成法を問ふ。

雜語

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| svarga | (男) 天. 天上の歡樂. 天國 |
| ṣākhā | (女) 樹枝. 支派 |
| svāmin | (男) 主人. 所有者 |
| tithi | (男. 女) 日 (曆日の) |
| lakṣādhipa | (男) 十萬を有するもの (lakṣa + adhipa) |
| rājya | (中) 王位. 社稷 |
| ih 希ふ. | ihate |
| daṣṭa | 噛まれたる (蛇などに) |
| marañātmaka | (形) 致命の (marañā + ātmaka) |
| krītā | (形) 買はれたる |
| garhita | (形) 非難されたる. 禁せられたる. 忌まれたる |

çatin (形) 百を有する (§110)
 sahasrin (形) 千を有する (同上)

1. Trīṇi çatāni gavām pañca-daça. nagarāṇām ca nṛipeṇa brāhmaṇebhyo dattāni. 2. Kiyatā mūlyena etad gṛihaṁ yuṣmābhiḥ krītam. 3. Rūpā-kāṇām tribhiḥ sahasrāir etad gṛihaṁ asmābhiḥ krītam. 4. Caturṇām vedānām bahavaḥ çākhāḥ santīti paṇḍitānām matiḥ. 5. Lakṣasya svāmī lakṣādhipaḥ. 6. Dvādaça māsā varṣe vidyante. Etasmin vṛikṣe pañca çatāni phalānām mayā dṛiṣṭāni.

8. Pañcamī navamī ṣaṣṭhī caturdaçy aṣṭamī tathā |
 tithayo garhitā hyetā daṣṭasya maraṇātmakāḥ ||

1.—牝牛三百と都城十五とを國王は婆羅門に與へき。 2.—幾何の代價にて此の家を汝等買ひしか。 3.—三千ルービーにてこの家を我等は買へり。 4.—四吠陀には多くの支派ありとは學者の意見なり。 5.—十萬(ルービー)の所有者は「ラックス・ヤード・セバ」なり。 6.—一年には十二ヶ月あり。 7.—この樹に於て余は五百の果實を見たり。 8.—半月の第五日と第九日と第六日と第十四日と同じく(tathā) 第八日とは忌まれたる日なり、何となれば此等の日は(etās) 毒蟲に噛まれたるものには、致命の日なればなり。

第二十六章

接頭辭 upa-sarga. gati.

§139. 接頭辭を語根又は語基に附加して、其の意義を補足し、限定し、變更せしむる現象は、發達せる國語に於ては常に見る所なりと雖も、梵語に於ては殊に甚しとす。吾人は已に、その二三を挙げたり。即ち avanam, nir-gam, pra-viç 等これなり。

此等接頭辭の主要あるものを擧ぐれば

1. ati 過ぐ、越ゆ。 ati-gacchati すぎ往く。
2. adhi 越ゆ、上に。 adhi-gacchati 越え往く、成就す、通讀す。
3. anu 従ふ、後に。 anu-gacchati 跟ひ往く。
4. antar 中に。 antar-gacchati 中に往く、入る。
5. abhi 對す、近く。 abhi-gacchati 近づく。
6. ava 下へ、離れて。 ava-gacchati 下る。
7. alam 充分。 alam-kṛita 飾られたる。
8. ā まで、戻る。 ā-gacchati 來る。 ā-gata 來れる。

9. ut 上へ。 ud-gacchati 上る。
10. upa 近く。 upa-gacchati 近づく。
11. ni 下に。 ni-ṣīdati 坐す、沈む。(ni-sad)
12. nis 外に。 nir-gacchati 出で往く。
13. pra 前に。 pra-viçati 進み入る。
14. prati 戻る、反對に。 prati-gacchati 戻り往く、歸る。
15. vi 分離す、消滅す。 vi-gacchati 死す。
16. sam 會合す。 sam-gacchate 會す。

§140. 上記の接頭辭の意義は、その主要なるものに止まりて、其の他の意義甚だ多し、従ふて、其の語根語基の意義に及ぼす影響は種々にして一律に論じ難きものあり、要するに接頭辭を有する動詞の意義は、其の儘に記憶する外なく、必ずしも接頭辭の意義と動詞本來の意義とより推知すべきものに非ず、強ひて之をなすときは附會に近きことあり、かかる現象は、梵語に於てのみ然るに非ず、發達せる國語に於ては到底免るゝことを得ざるなり。

§141. 一語の終にある t は、次に來る

1. c, ch, j, jh と會すれば c, j となる。即ち
 -t+c. ch- = -cc. cch- vanāt + ca = vanācca 而して林より。
 -t+j. jh- = -jj. jjh- kūpāt + jalam = kūpājalam 井より水を。
2. ç と會すれば t は c となり、ç は ch となる
 -t+ç- = -cch- etat + çrutam = etacchrutam これは聞かれたり。
3. l と會すれば l となる
 -t+l = -ll- etat + lakṣaṇam = etallakṣaṇam この相を、この特徴を。

§142. 一語の終にある n は、次に來る

1. c, ch; ṭ, ṭh; t, th; と會して mç. mṣ. ms. となる、即ち
 -n+c. ch- = -mçc. mçch- mṛigān + ca = mṛigāmçca 而して群鹿を。
 -n+ṭ. ṭh- = -mṣṭ, mṣṭh-
 -n+t. th- = -mṣṭ mṣṭh-mṛigān + tān = mṛigāmṣṭān かの群鹿を。
2. ç に會して ñ となる。此の際 ç は ch となるも可なり
 -n+ç- = -ñch- 又は -ñç-
3. j, jh; ḍ, ḍh; d, dh; に會して ñ. ṇ. n. となる。

-n + j. jh- = -ñj. ñjh- etān + janān = etāñjanān 此等の人々を。
 -n + d. dh- = -ñd. ñdh-
 -n + d. dh- = -nd. ndh- etān + dharmān = etāndharmān 此等の法を。

4. l と會して ml となる

amuṣmin + loka = amuṣmimlloke かの世界に於て。

第二十七課

問題

1. §139に記せる十六の接頭辞を列挙すべし。 2. 此等接頭辞の意義を記すべし。 3. 一語の終にある t は顎音の閉音に會して、如何に變化するか。 4. 同一の t. もし ç と會するときは如何。 5. -l に會するときは如何。 6. 一語の終にある n は c. ch に會して如何なる變化をなすか。 7. 同一の n は t. th に會して如何なる變化をなすか。 8. -ç に會するときは如何。 9. 同一の n は j. jh, d. dh, d. dh に會するときは如何。 10. 一語の終にある n が l に會するときは、如何に變化するか。

雑語

chala (男中) 詐謀・詐欺。	bāndhava (男) 親族・友。
lobha (男) 貪慾。	pura (男) 丈夫。
krodha (男) 嗔恚。	pura 丈夫は
kāma (男) 色慾・慾望。	anu + viddha (形) 交へられたる
moha (男) 痴。	pra + bhū 發生す。prabhavati.
nāça (男) 滅亡。	pra + jan 發生す。pra-jāyate.
pāpa (中) 罪業・災厄。	
artha (男) 富。	

1. Nāsāu dharmo yatra na satyam asti |
Na tat satyam yacchalenānuviddham ||
2. Lobhāt krodhaḥ prabhavati, lobhāt kāmaḥ pra-jāyate |
Lobhan mohaḥ ca nāçaḥ ca ; lobhaḥ pāpasya kāraṇam ||
3. Yasyārthās tasya mitrāṇi yasyārthās tasya bāndhavāḥ |
Yasyārthaḥ sa purāmilloke yasyārthāḥ sa hi paṇḍitah ||
4. Icchāti çatī sahasraṁ sahasrī lakṣam ihate |

Laksādhipas tato rājyam rājyācca svargam ihate ||

1. 其の中に (yatra) 眞理なきものは、是れ (asāu) 道にあらず、詐謀を交へたる (交へられたる) ものはこれ (tat) 眞理にあらず。 2. 嗔恚は貪慾より生ず、慾望は貪慾より生ず、痴と滅亡とは貪慾より生ず、貪慾は禍の源なり。 3. 富あるものには友あり、富あるものには親族あり、富あるものは世間に於て丈夫なり、富あるものは、實に學者なり。 4. 百を有するものは、千を希ひ、千を有するものは、十萬を希ふ、十萬を有するものは、それより王位を希ひ、而して、王位より天上の歡樂を希ふ。

第二十七章

動詞の連續體—獨立於格—獨立屬格。

§143. 動詞の語根又は語基に。直接又は i を介して。tvā を附加して。連續體を作る。連續體は、如何なる場合に於ても變化することなし。

çru + tvā = çrutvā 聞きて pat + i + tvā = patitvā 落ちて。

vas 棲む。弱語基 us + i + tva = uṣitvā 棲みて (§51)

kaver vacanam çrutvā rājā hasati

詩人の言を聞きて王は笑ふ

§144. 動詞の語根又は語基にして、接頭辞を有するものは、tvā を附加せずして、代ふるに ya を以てす。語根語基もし短母音に終らば、ya に代ふるに tya を以てすべし。

āgam 來る。	āgatya 來りて。
praviç 入る。	pravicya 入りて。
ādā とる。	ādāya とりて。
alamkṛi かざる。	alamkṛitya かざりて。

- §145. 1. 一語の中にある t, th, d, dh, 及び ç は、齒音に遇ふときは、齒音も又舌音となる。iç + ta = iṣṭa 希求せられたる。
2. 一語の中にある ç は、t 及び th に遇ふときは、ç は變じて s となり、t 及び th も同種の舌音即ち t, th, とある。
 driç + ta = driṣṭa 見られたる。
 driç + tvā = driṣtvā.
3. 一語の中にある j は、一語の終にある j と同じく、通例 k とな

るも (§104.2). t に遇ふときは. 往々 s となることあり。

yaj 祭る. 供す ij + ta = iṣṭa 祭られたる. 供へれたる。

srij 作る. srij + ta = sriṣṭa 作られたる。

§146. kaver vacanaṁ ṣrutvā rājā hasati 詩人の言を聞いて王は笑ふ。

pitā vanaṁ gatvā putraṁ tatra tyajati 父は林に往きて彼處に子を捨つ。

かくの如く. 連續體を用ふるに當り. 連續體が表示する動作の主體

と. 主文の動詞が表示する動作の主體とは. 常に同一人ならざるべから

ず. 即ち上記の例に於て. 聞くものと笑ふものとは共に rājā なり.

往くものと捨つるものとは共に pitā なるがごとし。

故に二個の動作の主體が同一の人なるときは. 乃ち足る. 必ずしも

その主體が一文の主辭たることを要せず. 例せば

sarvāir janāir militvā sa nripo vṛitah.

諸の民によりて集りて(られて)かの王は選ばれき。

は. 語典上完全なる文なり. 何となれば集合せしものも. 選びしものも
共に. 諸民なればなり. 然れども。

sarvāir janāir militvā sa nripo bhavati.

諸の民によりて集りて(られて)かれは王となる。

は不可あり. 何となれば. 集まれるものは. 諸民にして. 王となれるもの
は. かれなればなり。

§147. 若し. 上の例に於けるが如く. 二個の動作の主體が相異なるときは.
乃ち獨立於格若しくは. 獨立屬格を用ふ。

1. 獨立於格は. 於格にある名詞代名詞. 及び之と性と數と格とに於て
一致せる形容詞分詞より成る。

mṛite pitari Rāma āgataḥ 父死して「ラーマ」王は來れり。

na rājānaṁ vinā rājyaṁ balavatsvapi mantriṣu. (balavat-su + api)

王なければ 國なし 力あれども 大臣は

假令ひ. 大臣は力あるも. 王なければ. 社稷なし。

2. 獨立屬格は. 屬格の名詞又は代名詞と形容詞より成る。

paçyato me dhanam cāureṇa hritam. (paçyat + as §115. §117)

見つ. 余は財は盜によりて奪はれき (me = mama §86)

余が見つゝあるにも拘らず. 盜は財を奪ひき。

獨立於格と獨立屬格とは. 往々同一に使用せらるゝことありと雖も
獨立屬格の特色は. 國語に於て「……にも拘らず」と云ふが如き場合
に使用せらるゝにあり。

§148. 1. 名詞. 形容詞. 等の中性. 單數の業格は. 通例副詞として用ひらる。

yat.....tat ...するときは. ...そのときは; ...の故に...その故に。

yāvat...tāvat ...するだけ...それだけ; ...する間は...その間は。

nāma 名づくる. (nāman の單數業格なり §127)

sukham 容易に. たやすく. 泰然として。

tāvat 暫らく. 且らく. ともあれ. (俗語の「まあ」にあたる)

kim 何故に. 如何にして。

2. 但し. 其の他の性と數と格とを用ふることなきに非ず。

bala (中)力 balāt 強ひて prakṛiti (女)性質 prakṛityā 素より。

ucca (形)高く uccāiḥ 高く kṣaṇa (男)刹那 kṣaṇena 刹那の間に
kṣaṇāt 刹那の後に

3. 殊に. 原因. 理由. 動機等. 都て nimitta, hetu, kāraṇa の義を有する
語にして. 代名詞と共に來るときは. 主呼於爲以外の格ならば. 如何
なる格に變化するも. 常に副詞として用ひらるゝことを得べし。

kena kāraṇena 何故に, tena kāraṇena 此の故に。

kasya hetoḥ 何に困りてか. kasmān nimittāt 如何なる故に等の。

ごとし。

第二十八課

問 題

1. 動詞の連續體を作る方法に二種あり. 列挙すべし. 2. 一語の中にある t, th, d, dh, 及び s は
齒音と遇ふときは如何. 3. 一語の中にある ṣ は t 及び th に遇ふときは如何. 4. 一語の中
にある j は t に遇ふときは如何. 5. 連續體は如何なる場合に使用せらるゝか. 6. 獨立於格
獨立屬格の構造如何. 7. 獨立屬格の特色如何. 8. 獨立於格及び獨立屬格の使用せらるゝ
場合如何。

雑 語

ji	征服す.	jitvā	hata	(形)殺されたる.
sthā	居る	sthitvā	mṛita	(形)死せる.
gam	往く	gatvā	dhāvita	(形)走れる.
grah	執ふ.とる	grihitvā	grihita	(形)執へられたる.
cint	思惟す	cintayitvā	arthavat	(形)富める.
han	打つ.殺す	hatvā	patita	(形)倒れたる.
hri	奪ふ.	hritvā	vyāpādita	(形)殺されたる.
pat	落つ.倒る.	patitvā	palāyita	(形)逃れたる.
mil	集まる.	militvā	Bhāirava	(男)人名.
cur	偷む.	corayitvā	vyādha	(男)獵夫.
āgam	來る.襲ふ.	āgatya	dhanus	(中)弓.
ni-dhā	下に置く.卸す.	çara		(男)矢.
ni-dhāya		jyeṣṭha		(形)最も年長じたる.
ādāya	とる.携ふ.	çūkara		(男)猪.
astam̐ gata	西に没せる.	ravi		(男)太陽.
bhūmi (女)	大地.	nāma		(副詞)名づくる.

1. Cāuro dhanam̐ corayitvā grihād dhāvitaḥ. 2. Rāvaṇaḥ Sitām̐ hritvā Laṅkāṁ palāyitaḥ. 3. Rāmo Rāvaṇam̐ jitvā Sitām̐ cādāya Lakṣmaṇena sahāgataḥ. 4. Manasi saṁtuṣṭe ko' rthavān ko daridraḥ? 5. Mama pitā snānāya nadyās tīre tiṣṭhatīti cintayitvā sā kanyā tatra gacchati. 6. Pitari mṛite jyeṣṭho bhrātā griham̐ rakṣati. 7. Astam̐ gate ravāu vyaṁ vanād griham̐ āgataḥ. 8. Vane tiṣṭhataḥ putrasya ravir astam̐ gataḥ. | Asti¹ Bhāiravo nāma vyādhaḥ | sa cāikadā dhanur ādāya vanam̐ gataḥ tatra tena mṛiga eko vyāpāditaḥ | Tam̐ mṛigam̐ ādāya gacchatā² tena çūkaro dṛiṣṭaḥ | Tatas tena tam̐ mṛigam̐ bhūmāu³ nidhāya çūkarah çareṇa hataḥ | Etena tu çūkareṇāpy āgatya⁴ sa vyādho hataḥ |

1.—asti. 物語のときは一文の初に來るを常とす、過去に譯して「ありき」とすべし. 2.—gacchatā gam の現在分詞 gacchat の單數具格なり. 3.—bhūmāu. bhūmi の單數於格なり. 4.—çūkareṇa+

api+āgatya. āgatya は受動に譯し「襲はれて」をすべし. 1.—盜は財物を偷みて、家より走れり. 2.—羅刹王は「シーター」を奪ひて楞伽島に逃れたり. 3.—「ラーマ」王は羅刹王を征服し而して「シーター」を携へて、「ラクシュマナ」と共に來れり. 4.—心満足すれば、何人が富み、何人が貧しき. 5.—わが父は、洗浴せむ爲め、川の岸に居ると考へて、かの少女は彼處に往く. 6.—父死したるときは、長兄は家を守る. 7.—日西に没したるときに吾等は林より家に歸れり. 8.—男兒林に居るとき日は西に没せり. 9.—「アハーイラヴ」と名くる獵夫ありき、而して、彼、あるとき、弓をとりて林に往けり、彼處に於て、彼は一疋の鹿を殺せり、この鹿を携へて往く中、彼は猪を見たり、是に於て(tatas)かれ、かの鹿を地上に卸し矢にて猪を殺せり、然れど、かの獵夫もこの猪に襲はれて、殺されき.

第二十八章

義務分詞—不定體

§149. 動詞の語根又は語基に直接又は i を介して .tavya, anīya, ya を附加し. 義務分詞を作る. 此の際. 語根語基の母音は. 變じて重音又は複重音となる.

kri 作爲す. kartavya, karaṇīya (§23.2) kārya. 作爲せらるべき.

bhū 存在す.....となる bhavitavya, bhavaniya, bhāvyaṁ. 存在さるべき.

vac 語る. vaktavya, vacanīya, vācya. 語らるべき.

ji 征服す. jetavya jeya 征服せらるべき.

gam 往く. gamtavya 往かるべき.

grah 握む. とる. grāhya. grahaṇīya とらるべき.

sah 堪忍す. sahya, sahaniya 堪忍せらるべき.

anuṣṭhā 履行す. anuṣṭheya anuṣṭhātavya 履行せらるべき.

dṛiç 見る. draṣṭavya. (§23.2) darçanīya 見らるべき.

dā 與る. dātavya. deya 與へらるべき.

かくして作られたる義務分詞は、過去受動分詞と同じく、形容詞のごとく變化し男性中性のときは a 語基に準じ、女性のときは ā 語基に準じて、變化す、常に義務若しくは能力を示すに用ひられ其の行爲の當に、なさるべきこと、又は、なされ得べきことを示す、例せば darçanīya の語のごときは、一方に於て見ざるべからざる義、他方に於ては見られ得べき義を有するがごとし従つて、見るに堪ゆる義となり、美なり、佳なりの義となるなり. されば、或る學者が此の分詞を呼びて、可能分詞なりとせりこれまた通ぜざるにあらず. 義務分詞を邦語に譯するには常に「べく」を以てすべし.

§150. 1. 義務分詞は、過去受動分詞と同じく、中性單數の主格に於て變化せらるゝことあり. (§84.2參照)例せば

Evam mayā karaṇīyam かく余によりて、なさるべし。余は、かくあすべし。余は、かくなさるべからず。

I. 此の際、特に注意すべきは、下に記するがごとく構造を有せる義務分詞なりとす。

nripeṇa dhīreṇa bhavitavyam.

剛勇なる王によりてあらるべし=王は剛勇なるべし。

§151. 動詞の語根又は語基に、直接又はiを介してtumを附加し、動詞の不定體を作る。此の際、語根語基の母音は、變じて重音となる。(拉丁語の amā 愛す、amātum 愛すべく、と比較すべし)。

gam gamtum 往く爲に driç 見る draṣtum 見る爲に。(§23.2参照)

ji jetum 征服する爲に hri 奪ふ hartum 奪ふ爲に。

kṛi kartum 作爲するため。nī netum 連れ往くために。

かく作られたる不定體は、決して變化することなし。又連續體と同じく、時ありて、受動調に譯すべきことあり。

§152. I. 梵語の不定體は、主として目的を表示す。

Rāmo Rāvaṇam jetum Lāṅkāṁ gataḥ

藍摩王は 羅刹王を征服せむため 楞伽島に行きぬ

2. 能力・希望・着手・適當等の義を有する形容詞又は動詞と共に來ることあり。

asmākaṁ nripas taṁ jetum samarthah (能力)

吾等の 王は かれを 征服する 力あり

Rāvaṇaḥ Sitāṁ hārtum icchati (希望)

羅刹王は「シーター」を奪はむ ことを希ふ

Sa naraḥ nagarāya gamtum ārabdhaḥ (着手)

かの 人は 都城に 往きかけたり (§72.1参照)

rājā vinā sthātum na yuktaḥ (適當)

王なくして居るは 不可なり

第二十九課

問題

I.—義務分詞の構成法如何。 2.—不定體の構成法如何。 3.—不定體の用法如何。

雜語

kṛi kartavya, karaṇīya, kārya 作爲さるべき。

tyaj tyājya 捨てらるべき

spriç spriçya 觸らるべき。 duḥ-spriçya 觸れ難く。

grah grāhya さらるべき dur-grāhya 捕捉し難き

vac vācya 非難さるべき

anuṣṭhā anuṣṭheya 従はるべき。 履行せらるべき。

bhū bhāvya bhavi-tavya あるべき。 生ずべき。

jivita (中) 生命 bhavitavyatā (女) あるべき所以存在

nimitta (中) 原因・緣由。 すべき所以。 生ずべき所以

nimitteの爲めに。 kara-tala (男)

pāni (男) 手 kara-tala-gata (形) 掌裡にある。

vāyu (男) 風 doṣa (男) 過失・罪過

çatru (男) 仇敵 guṇa (男) 徳・能

himśra (形) 兇惡なる。 yatna (男) 努力。

viçvāsa (男) 信用・信任。

1. Evarṁ tvayā kartavyam. 2. kim mayā kāryam? 3. jivitasya nimitte dhanam puruṣeṇa tyājyam. 4. dharmasya nimitte jivitam api tyājyam.

5. Dur-grāhyaḥ pāṇinā vāyur duḥ-spriçyaḥ pāṇināgniḥ. 6. Çatror api guṇā grāhyā doṣā vācyaḥ guror api. 7. Tathā bhavadbhir anuṣṭheyam.

8. Yathāsmākaṁ rājā vadati tathāsmadbhiḥ kartavyam. 9. Daridrāya dhanam deyam na tu dhanine. 10. Tathā tena bhavitavyam. 11. Na himśreṣu viçvāsaḥ kartavyaḥ.

12. Na hi bhavati yan na bhāvyaṁ, bhavati bhāvyaṁ vināpi yatnena |

kara-tala-gatam api naçyati, yasya hi bhavitavyatā nāsti ||

I.—汝は、かくなすべし。 2.—余は、如何になすべきか。 3.—生命のためには、人は財物を捨つべし。 4.—法の爲めには、生命をも捨つべし。 5.—風は手にて捕捉すべからず、火は手にて觸るべからず。 6.—仇敵と雖も(api)その徳は採るべし、長上と雖もその罪過は非難すべし。 7.—爾等はかく實行すべし。 8.—吾等の國王が語るごとく、その如く吾等はなすべし。 9.—財物は貧人に與へらるべし、然れど富者に與へらるべからず。 10.—かくかれはあるべし。 11.—兇惡のものに於て信用をなすべからず。 12.—生ずべからざるものは、實に生ずることなし、生ずべ

きものは、力を致さざるも生ず、實に存在すべき所以なきものは、掌中にあるものといへども (api) 消滅す。

第二十九章

六合釋—依主—相違—持業—帶數

§153. 複合詞を作るに六種の方法あり。これを説くは、即ち六合釋の目的たり。吾人は既に二三の複合詞を擧げたり。kara-tala-gata 「掌中にある」、prati-dina 毎日、等是れなり。

複合詞は、至て梵語に多し。人もし正しく之れを會得することを得ば、梵語修習の業、已に其の半を了せりと云ふべし。六合釋の梵名は、ṣaṭ-samāsa にして、慈恩大師の義林章に所謂梵云殺三磨娑、此云六合、殺者六也、三磨娑者合也、は (殺=ṣaṣ + 三磨娑=samāsa ṣaṣ + samāsa =ṣaṭ samāsa §104. 3 参照) 即ち是れなり。

名詞的複合詞

1. 依主釋 tat-puruṣa (かれの臣僕) 邦語に於て、山中の寺を「やまでら」と云ふが如し。
2. 相違釋 dvandva (對比) 邦語に叡山、三井寺を指して山寺「やまでら」と云ふが如し。
3. 持業釋 karma-dhāraya (作用を持するもの) 邦語に長き袖を長袖と云ふが如し。
4. 帶數釋 dvigu (兩牛) 邦語に三界、三都といふが如し。

副詞的複合詞

5. 隣近釋 avyayi-bhāva (變化せざるもの) 船は、岸近くありと云ふ場合の「岸近く」是れなり。

形容詞的複合詞

6. 有財釋 Bahu-vrihi (多く米を有する) 長袖善舞、多錢善買の長袖多錢は、此等を有するもの、義なれば、即ち有財釋なり。

§154. 依主釋の特質は、其の前節にある語が後節の語に對し、常に格の關係を有するにあり。故に依主釋を分離せしむるときは前節は、必ず業格より於格に至る語尾を有せざるべからず。従て前節は名詞若しくは名詞の如く視做さるべきものなるを要す。

業 grāma-gataḥ 邑落に行けるものは grāmam gataḥ
具 deva-dattaḥ 神より授けられたるものは devena dattaḥ

爲	pādodakam	足の爲めの水(足を洗ふ水)	pādāya udakam
從	svarga-patitaḥ	天より落ちたるものは	svargāt patitaḥ
屬	mat-pitā	余が父は	mama pitā
	asmat-pitaraḥ	余等の父等は	asmākam pitaraḥ
於	vana-vāsaḥ	林中の住居は	vane vāsaḥ

§155. 相違釋の特質は、二個以上の名詞が、相對峙して連合し、之を分離せしむれば、ca の如き接續詞を要するにあり。

kāka-mṛigāu — 鳥と鹿とは = kākaḥ ca mṛigaḥ ca.

kāka-mṛigāḥ — 鳥と鹿とは = kākaḥca mṛigāḥca.

kāka-mṛiga-mūṣikāḥ — 鳥と一鹿と一鼠とは。

かくのごとく相違釋は、雙數又は複數に於て變化するも、若し性及び語基の種類を異にする二個以上の名詞來らば、通例最後にある名詞の性と變化とに従ふべし。

çandra-tāraḥ 月と群星とは。

nadī + parvata = nadīparvatāu 山と川とは。

§156. 相違釋の一種に samāhāra-dvandva 聚合相違釋と稱する構造あり。常に中性の單數に於て變化す。

pāṇi + pādāu = pāṇi—pādām 手足は、兩手と兩足とは。

gāvas + aḥvās = go + aḥvam = gavaḥvam 牛馬は、諸牛と、諸馬とは。

此の場合には、啻々に各個々々の名詞を列擧するに止まらずして、其の聚合の觀念を表示するものなり。即ち

gāvaḥcaḥvāḥca teṣāṃ samāhāraḥ.

諸牛と 諸馬と 其の聚合とは = 牛馬の聚合は。

§157. 持業釋の特質は、其の前節の語が、通例後節の語に對し、形容詞、副詞又は同格の名詞たる關係を有するにあり。

dus + janaḥ = durjanaḥ 惡人は } 形容詞的關係
kṛiṣṇaḥ sarpaḥ = kṛiṣṇa-sarpaḥ 黑蛇は }

su + kṛita = sukṛita よくなされしもの } 副詞的關係
na + jñāta = ajñāta 知られざるもの }

arṇava iva gambhīrah = arṇava-gambhīrah 海の如く深き者は同格
時ありて、前節に位すべき語が後節に來りて、前後相轉倒することあり。

antārah + simhaḥ = simhāntarah 他の獅子は

simhas + iva + puruṣaḥ = simhaivapuruṣaḥ = puruṣa-simhaḥ

(獅子の如き人は)人中の獅子は

simham iva puruṣam = puruṣa-simham 人中の獅子を

} 同格

mahat (大なる)は、持業釋に於ては、mahāとなる、mahādhanam 大なる財産は、を

§158. 帶數釋の特質は、其の前節が、常に數詞なるにあり、通例聚合即 samāhāra の義を有して、最後の語基は *i* に終り、女性の如く變化するか、然らざれば *a* に終りて、中性單數の變化をなす。

trayaṇām lokāṇām samāhārah = tri-lokī 三世 (女性)

caturṇām vedāṇām samāhārah = caturvedam 四吠陀 (中性)

第三十課

問題

1. 六合釋の梵名を擧ぐべし。 2. 六合釋の名稱を列擧すべし。 3. 邦語に於ける六合釋の例を示すべし。 4. 依主釋の特質如何。 5. 前節の語が後節の語に對し從格の關係を有する依主釋の例を示すべし。 6. 相違釋の特質如何。 7. 相違釋中の一種にして、samāhāra-dvāndva の例を示すべし。 8. 持業釋の特質如何。 9. 前節が後節に對し同格名詞の關係を有する持業釋の例を示すべし。 10. 前節が後節に對し副詞の關係を有する持業釋の例を示すべし。 11. 帶數釋の特質如何。 12. 聚合を示す帶數釋の變化如何。

第三十章

六合釋—隣近—有財

§159. 隣近釋は、複合詞中の副詞にして、二個の特質あり。

1. 前節の詞が、副詞關係詞の如き、變化せざる語なり。
2. 而して之に屬する複合詞は、通例、中性單數の業格に於て、變化するも、時ありて、他の格に於ける語尾を有することあり。(§148. 參照)
隣近釋の有する意義は、通例、下に記するがごとし。

1. 反復(vipsā)

I.	反復(vipsā)	}	prati(毎) + dina(日) = prati-dinam: 毎日、日々。
			prati(各) + deça(處) = prati-deçam: 各處に

2. 隣近(sāmīpya) upa(近く) + kūla(岸) = upakūlam 岸近く
3. 依違(anatikrama) yathā(如く) + vidhi(法) = yathā-vidhi 法のごとく、法に従ひて。
4. 限界(paryanta) ā(至るまで) + samūdra = āsamūdrām 海に至るまで。
5. 闕如(a-bhāva) nir-viçeṣam. 差別なく、同じく、一樣に。

§160. 有財釋は、複合詞中の形容詞にして、他の五種の複合詞は、盡く有財釋たることを得べし。此等五種の複合詞は或は依主或は帶數或は隣近の複合詞として使用せらるゝときこそ、一定の性あれ、一朝形容詞として、使用さるれば、一定の性なく、名詞に従て性を定めざるべからず。例せば upakūla なる語が、隣近の複合詞として用ひらるゝときは upa-kūlam となるも、一旦有財釋として用ひらるれば、形容する名詞の如何に應じて、或は男性となりて upa-kūlo vṛikṣaḥ 岸に近き樹は、となり、或は女性となりて upa-kūlā vasatiḥ 岸に近き住居は、となり、或は中性となりて upa-kūlam nagaram 岸に近き都城は、とならざるべからず。

§161. 故に有財釋以外の複合詞にして、自己が當然保有すべき性と語尾とを失ひて、他の性と語尾とを有するときは、直に之れを有財釋の複合詞と視做すことを得べし。例せば

mahat + dhanam = mahādhanam (中) 大なる財産は、といふときは、是れ持業釋なり、然るに時ありて其の語基は mahādhanā 又は mahādhanā とあることあり、此等の場合は、是れ有財釋にして「大なる財産を有する」「富める」の義にして必ず一定の名詞を形容せるものたるを知る。例せば
mahā-dhano naraḥ 富める人、又は mahādhanā nārī 富める女は、の如し。

- §162. 1. 複合詞を作るには、凡て語基を以てするを法とす。
mat-pitā 余の父を tvat-putram 汝の子を (依主)
2. 語基若し二種以上に亘らば、通例、弱語基又は中語基を以てすべし
bhavat-putram 御身の子を (依主) の如し。(弱語基の例)

rāja-putraḥ 王子は(依主) (中語基の例)
 pitṛi-samaḥ 父に伴しきもの(依主) (弱語基の例)

3. 然れども、前節の語は、時ありて、語尾を取ることもあり。
 sarasi + jan = sarasi-ja (中) 池に於て生ずるもの、蓮
 ātmane + pada = ātmanepada (中) 自己の爲めの語
 parasmāi + pada = parasmāipada (中) 他の爲めの語
 manasi-ja (中) 心に於て生ずるもの、戀。

§ 163. 有財釋等の複合詞の終にある

1. ā. 若し男性中性の語尾を取らむとせば、通例 a となる (§76. 参照)
 vidyā 學識, alpa-vidyo naraḥ 學識に乏しき人は(有財)
 bhāryā 婦人 sa-bharyo naraḥ 有婦の人は(有財)

2. ī, ū, ṛi 及び其の他の母音、及び父音に終れるものは、往々 ka を附加す。

bahu + putrī, bahuputrīko naraḥ 多く女子を有する人は
 多き 女子

mṛita + bhartrī, mṛita-bhartrīkā nārī
 死せる夫を有する婦は=寡婦は

mṛita + vadhū mṛitavadhūkaḥ patīḥ 死せる婦を有する夫は、鰥夫は。

bahu + dhanin, bahu-dhanikā nagarī 富人多き都城は
 多き 富人

時ありて、ka を附加せずし原則上の語尾をとることもあり。又 a 若しくは其の他の母音に變ずることあり。

su + dhī 善き思慮 sudhīḥ putraḥ 善き思慮ある子は

svayam + bhū 自ら成立する、自存する

svayambhur devaḥ 自ら成立せる神は(梵天)

dvi + go dvigu (有財釋) 二牛にて購ひ得たるもの
 二 牛

sahasra + akṣi sahasrākṣo devaḥ 千眼ある神は(帝釋天)
 千 眼

第三十一課

問 題

1.—隣近釋に二個の特質あり如何。2.—隣近釋の通例有する意義如何。3.—有財釋と他の五種の複合詞との區別如何。4.— upakūlan なる隣近釋を有財釋とせば其の變化如何。5.—複合詞を作らむとする際、之に用ふる語もし二種以上の語基ありとせば、如何なる語基を採るべきか。6.—複合詞の前節、時ありて語尾あることあり、例を示すべし。7.—複合詞の終にある ā は其の複合詞の有財釋に變化する際如何に變化するか。8.—同一の i ū ṛi 及び其の他の聲音は、有財釋に於ける變化如何。

雜 語

kāvya (中)詩・歌	kṣamā (女)忍辱
çāstra (中)書	a-lobha (男)無慾
vinoda (男)娛樂	mārga (男)途
kāla (男)時	nija (形)自己の
dhīmat (形)賢なる	laghu-cetas (形)輕き心を有する、輕慮の 小心の。
vyasana (中)遊蕩	udāra (形)高き・高貴の・廣大なる
nidrā (女)睡眠・惰眠	smṛita (形)記憶せられたる・傳へら れたる(古より)
gaṇanā (中)計・量・量見・計度	udāra-carita (形)行高き・宏量なる。
vasudhā (女)地・世界	vidhā (女)種類
carita (中)行	artha (男)富
kuṭumbaka (中)家	mokṣa (男)解脱
ijyā (女)祭祀・供養	ajā (女)牝の山羊
kalaha (男)鬭爭	gala (男)頸
adhyayana (中)讀書	stana (男)贅肉
dāna (中)施與・布施	janman (中)出產
tapas (中)苦行	
dhṛiti (女)剛毅	

1. Kāvya-çāstra-vinodena ¹ kālo gacchati dhīmatām. |

Vyasanaena ca ² mūrkhānām nidrayā kalahena vā. ||

2. Ayam nijah paro veti ³ gaṇanā laghu-cetasām ⁴ |

Udāra-caritānām ⁵ ca vasudhāiva kuṭumbakam. ||

3. Ijyādhyayana-dānāni ⁶ tapaḥ satyam dhṛitiḥ kṣamā |

Alobha iti mārgo'yam dharmasyāṣṭa-vidhaḥ⁷ smṛitaḥ ||

4. Dharmārtha-kāma-mokṣāṇām⁶ yasyāiko'pi na vidyate |

Ajā-gala-stanasyeva⁸ tasya janma nirarthakam. ||

1. 依主釋. 2. kālo を補ふ可し. 3. ……と云ふはと譯すべし.
4. 持業釋より來れる有財釋. 5. 同前. 6. 相違釋. 7. 帶數釋より來れる有財釋. 8. 依主釋.

1.—賢者の時は、詩書の娛樂によりて過ぎ去り、而して愚者の時は、遊蕩惰眠若しくは争闘にて過ぎ去る。2.—これは自己のものなり(親族なり)若くば他のものなりは小心のもの、最見なり、而して宏量ものには、世界にそ一家なれ。3.—祭祀と讀書と施與と苦行と眞實と剛毅と忍辱と無慾とは是れ法の八種の道なり古より傳へらる。4.—法と富と女色と解脱との一だも(eko'pi) なき人の(yasya tasya) 出産は、山羊の頸に贅肉の出づる(janma)の如く(iva)、益なきものなり。

第三十一章

形容詞の比較

§164. 邦語に於て、櫻花は梅花より美なり、櫻花は都ての花の最美なるものなり。と云ふ場合に「梅花」と「都ての花」とは、比較の標準となり、此の標準より見て、櫻花の美は、比較級(より美なり)と、最上級(最も美なり)との二箇の階級に分るゝことを知るべし。

梵語の形容詞も、また二箇の階級あり、之れを作る方法に三種あり。

1. 語基に tara, tama を附加す、語基若し二種已上に亘らば、弱語基または中語基を用ふべし。

priya 愛すべき priyatara 一層愛すべき priyatama 最も愛すべき
dhanya 幸福なる dhanyatara. 一層幸福なる dhanyatama. 最幸福なる
balavat 力ある —balavattara. 一層強き balavattama. 最も強き

2. 語根に iyas, iṣṭha を附加す、此の際、語根の母音は重音となる。但し字書には、形容詞を擧ぐるに語基を以てすれども語根を以てせず、故に、此の方法に依りて、形容詞の比較をなすは、最も困難なり、其の語基 u, ra に終るものは、通例之を去りたるものを語根とす。

kṣipra 速かなる kṣepiyas kṣepiṣṭha

dūra 遠き dāvīyas daviṣṭha

guru 重き gariyas gariṣṭha

laghu 輕き laghīyas laghiṣṭha

3. 語根に iyas, iṣṭha を附加せるものに、更に tara, tama 附加す。
gariyastara gariṣṭhatama

§165. 然れど、時ありて不規則なる比較をなすことあり。

praçasya 勝れる çreyas(çri 善なる) çreṣṭha
alpa 小なる 賤少なる. kaniya kaniṣṭha

§166. 1. 比較級又は之れと同じき意義を有する形容詞、もし一文の中に来るときは、比較の標準となれる語は、從格をとる。

nāsti lobhat paro ripuḥ 慾より勝れる敵はなし。

dhanād dharmah çreyān 法は財より勝れり。

aham tvad dhanya-tarah 余は汝より幸福なり。

2. 最上級又はこれと同じき意義を有する形容詞、若し一文の中に来るときは、比較の標準となれる語は、通例屬格又は於格をとる。此の場合には、屬格於格を「の中にて」と譯すべし。

sarva-dravyeṣu vidyāiva dravyam uttamam.

都ての財物の中にて學識こそ最上の財物なれ。

dhanvinām çreṣṭhaḥ 弓とるものの中にて、最も勝れたるもの(射手の最も巧あるもの). dhanva(弓)+in(持つもの)=弓手。§110.

§167. 二箇の名詞を比較するに當り、時ありて varam (勝れり)—na(然らず)を用ふ。此の際、二箇の名詞は、共に主格の語尾をとる。

varam eko guṇī putro na ca mūrkhā-çatānyapi.

一人の能ある子は勝れり、而して百人あるも愚人は然らず。

百の愚人あらむより寧ろ一人の能ある子あれ。

此等の場合には、na は通例 ca (而して) punar (他方に於ては) tu (然れど) と共に來るを法とす。然れどこれなきことあり。

varam—na は、説くものより見て均しく、好まざる二物の間に優劣を定めむとする際、用ひらる。例せば、百の愚人あることも、能ある子が唯だ一人なることも、共に欲せざることも、已むなくむば、寧ろ、一人なるも、能ある子を勝れりとするがごとし。

第三十二課
問題

1.—形容詞の比較級を作る方法に三種あり如何。 2.—形容詞の最上級を作る方法に三種あり如何。 3.—iyas 及 iṣṭha を形容詞の語根に附加するに當り、語根の母音の變化如何。 4.—文の中に比較級の形容詞又はこれと同意義の語、來る時は、比較の標準となる語の格如何。 5.—最上級の形容詞もし一文の中に來るときは比較の標準となる語の格如何。 6.—varam.....na の用法如何。

雜語

bala 強く	baliyas	baliṣṭha.
guru 重く	gariyas	gariṣṭha.
vara 勝れる	variya	variṣṭha.
tivra 烈しき、恐るべき	tivra-tara	tivra-tama.
dāiva (中)運命	Bhāgī-rathī (女)	恒河.
sama (形)比すべき、均しき	parvata (男)	山.
bandhu (男)親族、朋友	Himālaya (男)	雪山.
adhika (形)勝れる	vibhūti (女)	權力、(君主などの)
peya (形)飲まるべき	bhūmi (女)	土地.
peya (中)飲料	suhrid (男)	親友.
uttama (形)最上の	gaṇa (男)	群、聚合.
an-ṛita (中)虚偽	tārā (女)	星宿.
vitta (中)財物	tamas (中)	闇黒.
han 殺す、除く、hanti.	doṣa (男)	罪過、過失.

1. Dāivam eva sarvato baliyam. 2. Na vidyā-samo bandhur vidyate.
3. Na lobhād adhiko doṣaḥ. 4. Na satyād adhiko dharmāḥ. 5. Na dānād adhiko guṇaḥ. 6. Sarveṣām peyānām jalam eva uttamam. 7. Sarvāsu nadiṣu Bhāgī-rathī variṣṭhā. 8. Sarveṣām parvatānām Himālaya eva variṣṭhaḥ.
9. Varam eko guṇī putro na ca mūrkhā-ṣatānyapi Ekaṣ candras tamo hanti na ca tārā-gaṇo'pi ca ||
10. Nāstiḥ satya-samo dharmo na satyād vidyate param | Na hi tivra-taram kimcid anṛitād iha vidyate ||

11. Guru vittam tato mitram tasmād bhūmir gariyasi |
Bhūmer vibhūtayaḥ sarvās tābhyo bandhu-suhrid-gaṇāḥ ||

1.—運命こそ一切のものより強けれ。 2.—學識に比すべき朋友なし。 3.—貪慾より勝れる罪過なし。 4.—眞理に勝る法なし。 5.—施與に勝る徳なし。 6.—水こそ都ての飲料の最上のものなれ。 7.—都ての河の中に於て恒河は最も勝れり。 8.—雪山こそ都ての山の最も勝れるものなれ。 9.—百人の愚人あらむより寧ろ一人の能ある子あれ。月は(唯だ)一なるも(よく)闇黒を破る、之に反して星は群をなすもよくこれをなさず。 10.—此の世に於て眞理に比すべき道なく、眞理より勝れるものなし、如何なるものも、此の世に於て虚偽より怖るべきものは實にあることなし。 11.—財物は重し夫れよりも友は重し、友よりも土地は重く、土地よりも一切の權勢を重しとす、されど權勢より重きものは、親族親友の聚合なり。

第三十二章

動詞論

§168. 動詞は、本來の意義より見れば、一文の賓辭として、行爲、不行爲を表示する語なり。梵語の動詞に五種の相あり。

1. 原始相 (dhātu). かれ往く、往けり等のごとし。
2. 催起相 (ñijanta-dhātu) 余は、かれをして、往かしむ、かれを往かせり、等の「往かしむ」又は「往かせり」のごとし。
3. 希求相 (sananta-dhātu) かれ往かむと欲す、欲せり等のごとし。
4. 重複相 (yañanta-dhātu) かれ打ちに打つ、打ちまた打つ。
5. 擬名詞相 (nāma-dhātu) かれは王者ぶる、賢者ぶる等の王者ぶる、賢者ぶるのごとし。

§169. 相毎に二種の調あり、能動調、受動調是れなり。

1. 能動調 (karṭri-vācyā) は、一文の主辭が、其の動詞の表示する行爲不行爲の主體たることを示すものにして、「かれは人を打てり」、「かれは眠れり」等の文に於て、打ちしもの、眠りしものは、「かれ」にして、「かれ」は、即ち此等動作の主體なり、karṭri-vācyā 行爲の主體を示す調とは即ち之を云ふなり、今別ちて二種とす。
- a. 他動調 (sa-karmaka-kriyā). 行爲不行爲の結果が通例の場合には、主體以外のものに及ぶことを示す、「余はかれを打つ」等の文に於て、「打つ」行爲の主體は、余にして、其の結果の及ぶは、「かれ」なるがごとし、然れば、此の種の動詞は、其の動作の結果を被るべきものを業格におきて、始めて、完全なる意義をなすことを得

べし. sakarmaka-kriya 動作の對象を有する動詞と云へるは. 即ち此の理に依る。

- b. 自動調 (a-karmaka-kriyā) 行爲不行爲の結果が. 其の主體のみに止まりて. 他に及ぼさるることを示す. 余は眠る. かれは往く等のごとし. 即ち動作の對象たるべきものを有せざる動詞なり。
2. 受動調 (karma-vācya) 行爲不行爲の結果を被るべきものを示す調にして. かれは余の爲に打たる. 殺さる等のごとし. 他動調の動詞の場合には. 動作の對象 (karma) となるべきもの. 此の場合には主辭となりて. 主格をとるなり。

§170. 調の中に. 四種の法と三種の體あり。

1. 現實法. 余は往けり. 余は往く. 余は往かむ等のごとし
 2. 可能法. 余は往くべし. かれをして往かしめよ等のごとし
 3. 命令法. かれは往くべし. 汝は打つべし等のごとし
 4. 條件法. かれなかりせば. 余は死せしならむ
- I. 分詞體. 2. 不定體. 3. 連續體.

動詞の法は. 主辭が賓辭に對する關係如何を定むるものにして. 其の關係にして. もし實際に於て存在せば. 是れ現實法なり. かれ走る. かれ走りき. かれ走らず. かれ走らざりき. かれ走らむとす. の如し. 即ちかれの走る否は過去. 現在. 未來の孰れかに於て事實なることを示せるなり. 換言すれば. 賓辭が表示する行爲不行爲と其の主辭たる「かれ」との間に存在する關係は. 想像に基けるに非ず. 事實に基けるなり. 若し賓主二者の關係が實際に於て存在せざるも. 能力又は其の他の事情より見て存在し得べきことを示すときは. 是れ即ち可能法なり. かれ往かむ. かれ往かざるべし. かれ往くを得べし. 等の如し. 若し賓主二者の關係が實際に於ても存在せず. 又能力の上より見るも存在せず. 唯條理の上より見て. 當さに存在すべきことを示せば. 是れ命令法なり. かれは往くべく. 汝は往く可らず. 等の如し. 此の場合には往く否は事實として現はるることを云ふに非らず. 又其の能力あると否を云ふにあらず條理の上より見て. 其の事の至當なるを示せるなり. 若し. 賓辭と主辭との關係が. 或る條件によりて. 定まるときは. 是れ即ち條件法なり. 彼往かば. 余は留らむのごとし。

又法の中にも. 三種の時あり. 過去. 現在. 未來これなり. 梵語に於ては. 此の三種の時を小別して六種とせり. 然れども完全に六種の時を具せるは. 現實法のみなれば. 時を法に配すれば十種に過ぎず. 所謂十羅聲 (la-kāra) なり。(縮刷大藏經致帙八十七枚十行目)

現實法	現在	laṭ	可能法	現在	vidhi-lin
	第一過去	lan		第三過去	āçir-lin
	第二過去	lit		命令法-現在	loṭ
	第三過去	luṅ	條件法-過去	lin	
	第一未來	liṭ			
	第二未來	luṭ			

分詞體にも三種の時あり. 過去. 現在. 未來これなり。

§171. 此等の十種の時と法とを作るに. 大略五種の語基を要す。

- I. 現在語基.
 - a. 現實法の現在.
 - b. 現實法の第一過去.
 - c. 可能法の現在.
 - d. 命令法の現在.
 - e. 分詞體の現在.
2. 第二過去語基.
 - a. 現實法の第二過去.
 - b. 分詞體の第二過去 (但し受動調の分詞は. 別種の方法に依る)
3. 第三過去語基.
 - 現實法の第三過去.
4. 可能法の第三過去語基.
 - 可能法の第三過去.
5. 未來語基.
 - a. 現實法の第一未來 (第二未來は. 別種の構成法に依る)
 - b. 分詞體の未來.
 - c. 條件法.

現實法の第一過去. 第三過去及び條件法は. 語基の前に「a」の過去符を有す. 此の a の過去符は. 語基の始にある母音と合して. 複重音を作る. a + as + an = āsan. かれ等はありき. のごとし。

§172. 語尾 (vibhakti). 名詞形容詞の語尾 (vibhakti) を sup と稱するがごとく. 動詞の語尾を總稱して. tin と云ふ. 此等の語尾を附したる動詞は. tin-anta と云ふ. 所謂丁岸多聲又は底彥多聲是れなり。

動詞の語尾に二種あり爲他語尾、爲己語尾これなり。従ふて動詞に二種の區別を生ず。

1. parasmāi-pada 他^の爲^めの語 爲他語尾を附すべきもの
2. ātmane-pada 自^己の爲^めの語 爲己語尾を附すべきもの

即ち動詞中に、第一種の語尾を附すべきものと、第二種の語尾を附すべきものとの區別あるなり。若し一の動詞にして、同時に二種の語尾を有すべきものあらば、之を ubhaya-padin (兩種の語尾を兼有するもの)と稱す。

如何なる動詞が爲他語尾を有し、如何なる動詞が爲己語尾を有するかは、一に慣例に依る、印度の語典家は、之を定めむ爲め、一は他の爲にすることを示し他は己の爲にすることを示すと云へり、例せば、yajati かれは他の爲に祀る yajate かれは己の爲に祀ると云ふがごとし、然れども是れ畢竟空論のみ、但し受動調に變化せる動詞は常に爲己語尾をとる

通例梵語字書に a と書して爲己語尾を示し、p と書して爲他語尾を示す、p. a. と書せるときは、ubhaya-padi なりと見るべし。

人或は、parasmāi-pada を他動と譯し、ātmane-pada を自動と譯せるあり、吾人は茲に詳細に其の當否を論ずることを得ざれども、かゝる區別よりすれば、

as (あり)等は常に asti, asi, asmi (かれあり、汝あり、余あり)と變化して、parasmāipada なれば、他動調とせざるべからず、吾人が茲に此の區別を探らざるは、かゝる不無理あるに由る。

語尾の中に、單數・雙數・複數の別あり。數の中に第一人稱 (uttama-puruṣa 最後の人) 第二人稱 (madhyama-puruṣa 中間の人) 第三人稱 (prathama-puruṣa 最初の人) の別あり。蓋し梵語には、先づ第三人稱を掲げて、第二人稱に及ぼし、第一人稱を最後に掲ぐるを例とすればなり。

§173. 動詞の語根より、原始相能動調の現在語基を作る方法に、十種あり。従つて、動詞の種類を別ちて十種となすことを得べし。吾人は、己に其の第一種、第二種、第四種、第六種の構成法を擧げたり (§41.48 参照)。

	現在語基	語基構成音
1. bhū	あり...となる bhava (bho + a)	a
2. ad	食す ad	なし
3. hu	焼きて供す juhu (ju + hu)	なし

4. div	賭博す・遊戯す	dīvyā (div + ya §113参照)	ya
5. su	搾る	sunu (su + nu)	nu
6. tud	打つ	tuda (tud + a)	a
7. rudh	妨ぐ	rundh (ru + n + dh)	n
8. tan	展ばす	tanu (tan + u)	u
9. kṛī	買ふ	kṛīṇā (kṛī + nā)	nā
10. cur	偷む	coraya (cor + aya)	aya

上記の各動詞を暗誦せむ爲め、下の詩を誦すべし。

Bhv-ādy-ad-ādī juhoty-ādir div-ādih sv-ādir eva ca |

Tud-ādiṣca rudh-ādiṣca tana-kry-ādī-cur-ādayah ||

上記十種の現在語基中、a に終るものは、第一、第四、第六、第十の四種なり。之を一括して、第一類動詞と云ひ、自余のものを第二類動詞と云ふ。

第三十三課 問題

1. 一動詞の相を列擧すべし。
2. 一相毎に幾種の調ありや。
3. 一調毎に幾種の法と體とありや
4. 一法の中に幾種の時ありや。
5. 一十羅聲とは如何。
6. 一現實法に幾何の時ありや。
7. 一可能法の有する時如何。
8. 一分詞體の有する時幾何ありや。
9. 一十種の時法を作るに、大略幾種の語基を要するか。
10. 一現在語基より直接又は一定の變化を加へて作り得べき時と法と體とを列擧すべし。
11. 一未來語基より作り得べき時と法と體とを列擧すべし。
12. 一語尾に二種あり其の名稱を擧げよ。
13. 一原始相能動調の現在語基を作る方法に十種あり、例を擧げて示すべし。

第三十三章

第一類動詞の變化及び現實法の現在。

§174. 現實法の現在に於ける第一類動詞の語尾は

	爲他	爲己
單	mi	e
	si	se
	ti	te
雙	vas	vahe
	thas	ethe
	tas	ete

複 { mas
tha
anti

複 { mahe
dhve
ante

§175. 1. 第一種動詞は、語根に a を附加して、現在語基を作り、第六種動詞も語根に a を附加して、現在語基となす、然れども前者にありては、語勢符は語根にあり、故に語根の母音は重音となる、後者にありては語勢符は a の語基構成音にあり、故に語根の母音は變化せず (§34.参照)是れ其の同じじきが如くして、然も相異なる點なりとす。

ruh (生長す) ro'ha tud (打つ) tuda'

2. 第十種動詞の語根に aya 附加して現在語基を作る、此の際

a. 語根の終にある母音は、複重音となり。

b. 語根の中にある短母音は、重音となる。例せば cur 偷む、coraya の如し但し a は時ありて ā となることあり。

c. 語根の中にある性質上又は位置上の長母音は、變化せず (§20.2) 例せば, cint 思考す、cintaya. のごとし。

§176. 第一類動詞の現在語基の終にある「a」は、m と v とを以て始むる語尾の前には ā となり、a を以て始むる語尾の前には消滅す。

ruh. 1. 生長す. roha.

爲 他			爲 己		
單	雙	複	單	雙	複
rohāmi	rohāvas	rohāmas.	rohe(a+e)	rohāvahe	rohāmahe.
rohasi	rohathas	rohatha.	rohase	rohethe	rohadhve.
rohati	rohatas	rohanti	rohate	rohete	rohante.
naç. 4. 亡ぶ. 消ゆ.	naçya.				
naçyāmi	naçyāvas	naçyāmas	naçye	naçyāvahe	naçyāmahe.
naçyasi	naçyathas	naçyatha	naçyase	naçyethe	naçyadhve.
naçyati	naçyatas	naçyanti	naçyate	naçyete	naçyante.

§177 tud. 6. 打つ. tuda.

tudāmi tudāvas tudāmas tude tudāvahe tudāmahe.

tudasi tudathas tudatha tudase tudethe tudadhve.
tudati tudatas tudanti tudate tudete tudante.

cur. 10 偷む coraya.

corayāmi corayāvas corayāmas coraye corayāvahe corayāmahe.
corayasi corayathas corayatha corayase corayethe corayadhve.
corayati corayatas corayanti corayate corayete corayante.

§178. 第一類のある動詞は、不規則なる方法によりて、現在語基を作る。今その多く使用せらるゝものを擧ぐべし。

iç. 6. 希求す iccha. dañç. 1. 咬む. 噛む. daça.

gam. 1. 往く gaccha. mri. 6. (爲己)死す. mriya.

kram. 1. 歩む. krāma. 爲他 pā. 1. 飲む piba.

krama. 爲己 sthā 1. 立つ. tiṣṭha.

guh. 1. 隠す. 掩ふ. gūha. ghrā. 1. 嗅ぐ. jighra.

jan. 4. (爲己). 生ず. jāya. driç. 4. 見る. paçya.

prach. 6. 問ふ. pñiccha. bhram. 1. 又は. 4. さまよふ. bhrama.

sad. 1. 坐す. sīda. bhrāmya.

muc. 6. 解く. muñca.

vid. 6. 見出す. vinda. sic. 6. 灌ぐ(水などを) siñca.

(英語の find と比較すべし)。

第三十四課

雜 語

He. (間投詞) あ.	nīla. (形) 青き.
namas (不變) 歸命す(爲格を支配す).	man. 4. (爲己). 思惟す.
siddha (形) 神通を得たる.	anu-dhāv. 1. (爲他). 随ふて走る. 追ふ.
prasāda. (男) 惠. 恩. 寵.	anu-ṣṭhā. 1. (爲他) 随ふて立留る.
çiçya (男) 弟子.	nī (爲他) 持ち往く. 連れ往く.
jagat. (中) 世間. 世界.	kālarā + nī. 時を消す. 日を送る.
dāridrya(中) 貧賤.	kālena. 時を以て. 時ありて.
cakra. (中) 輪.	ratha. (男) 車.

çubh. I. (爲己) 耀く. 光彩あり, durjana. (男) 悪人.
 bhāṣ. I. (爲己) 語る. padepade. (副) 絶えず.
 yāvat-tāvat.....する間は, 其の間は. sarpa. (男) 蛇.

1.—Nīle nabhasi megho na vidyate. 2.—Dāivam eva param udyamas tu nirarthaka iti manye. 3.—Sa vyādho dhanur ādāya dhāvantaṃ mṛigam anudhāvati. 4.—Gurum tiṣṭhantaṃ çīṣyā anutiṣṭhanti. 5.—Kāvyaçāst-rānām vinodena dhīmanthaḥ kālām nayanti. 6.—Ekena cakreṇa na rathasya gatiḥ bhavati. 7.—Mūrkhō'pi çobhate tāvad yāvat kiṃ cinna bhāṣate.

8.—He dāridrya namas tubhyaṃ siddho'haṃ tvat-prasādātāḥ. |

Paçyāmyahaṃ jagat sarvaṃ na mām paçyati kaçcana. ||

10.—Durjanasya ca sarpasya varam sarpo na durjanaḥ. |

Sarpo daçati kālena durjanas tu pade pade. ||

1.—青き天空に於て雲なし. 2.—運命こそ最高のものなれ, 之に反して努力は無益なりと余は思惟す. 3.—かの獵夫は, 弓を執りて, 走る鹿を追ふて走る. 4.—弟子は留る師に従ふて留る. 5.—詩書の娛樂にて賢者は時を消す. 6.—一輪にて車の進行はなし. 7.—愚者も, 何事をも語らざる間は光彩あり. 8.—あゝ、貧賤よ, 爾に歸命す, 余は爾の恵により神通力を得たり; 余は一切の世間を見れど誰人も余を見るものなし. 9.—悪人と蛇との中にて, 蛇は勝れり, 悪人は然らず; 蛇は時ありて噛む, 然れども悪人は常に噛めばなり.

第三十四章

第一類動詞の變化—第一過去

§179. 第一過去の語尾と, 可能法の現在の語尾とは, 大略相同じ.

爲他		爲己	
第一過去	可能法の現在	第一過去	可能法の現在
am	”	i	a
s	”	thās	”
t	”	ta	”
va	”	vahi	”
tam	”	ethām	āthām
tām	”	etām	ātām
ma	”	mahi	”
ta	”	dhvam	”

an us anta ran

§180. 現實法の第一過去は, 現在語基に「a」の過去符を附加して, 語基とす. 例せば.

a + roha a + naçya a + tuda a + coraya.

I. ruh

aroham (§176) arohāva arohāma arohe(a+i) arohāvahi arohāmahī.

arohas arohatam arohata arohathās arohetām arohadhvam.

arohat arohatām arohan arohata arohetām arohanta.

IV. naç

anaçyam anaçyāva anaçyāma anaçye anaçyāvahi anaçyāmahī.

anaçyas anaçyatam anaçyata anaçyathās anaçyethām anacyadhvam.

anaçyat anaçyatām anaçyan anaçyata anaçyetām anaçyanta.

VI. tuda.

atudam atudāva atudāma atude atudāvahi atudāmahī.

X. cur.

acorayam acorayāva acorayāma acoraye acorayāvahi acorayāmahī.

第一過去は, 後代の梵語に於ては, 全く第二過去, 第三過去と同一に使用せられ, 過去の事を叙するに用ひらるるに雖も, 上代殊に「吠陀ふら—ふまな」時代に於ては三者の間多少逕庭なきにあらず, 異時吠陀語典を著すべければ, 今此に架説せざるべし.

§181. 第一類動詞の可能法の現在は, 現在語基に, i を附加したるものを以て語基とす.

roha + i naçya + i tuda + i coraya + i.

此の i は母音を以て始むる語尾に遭へば iy となる. (§66 参照)

I. ruh.

roheyam roheva rohema roheya rohevahi rohemahi.

(a+i+am=eyam) (a+i+va=eva) (a+i+ma=ema) (a+i+y+a=eya)

rohes rohetam roheta rohetās roheyātām rohedhvam

(a+i+s=es)

(a+i+y+ā=eyā)

rohet rohetām roheyus roheta roheyātām, roheran.

(a+i+t=et)

(a+i+y+us=cyus)

IV. naç.

naçyeyam naçyeva naçyema nacyeya naçyevahi naçyemahi.
 naçyes nacyetam naçyeta nacyethās naçyeyāthām naçyedhvam.
 naçyet naçyetām naçyeyus naçyeta naçyeyātām naçyeran.

VI. tud.

tudeyam tudeva tudema tudeya tudevahi tudemahi.

X. cur.

corayeyam corayeva corayema corayeya corayevahi corayemahi.

§182.

可能法現在の用法

1. 能力. Prajñā Hariṁ paçyeyuḥ. (paçya 4. paçya + ī + us).
賢者は韋紐の神を見ることを得べし。
2. 推定. Sādhavaḥ sukham labheyuḥ. (labh 1. labh + a + ī + us).
善人は幸福を得べし。
3. 希望. Icchāmi somam pibet bhavān. (pā piba + ī + t).
余は望む 貴君が蘇摩の酒を飲むことを。
殊に格言のごときものに於て屢々使用せらる。
4. 命令. Aapad-arthe dhanam rakṣed dārān rakṣed dhanair api |
不幸の爲に財を守るべし(人は)妻を守るべし(人は)財を以てするも。
ātmanam satatam rakṣed dārair api dhanair api. ||
人は自己を常に守るべし妻を以てするも財を以てするも。
人は不幸に備へむ爲め財を蓄ふべし、然れど人は財を失ふも己の妻を守るべし、己の妻も、はた、財をも失ふことあるも常に自己を守るべし。

上記四種の用法は、邦語の「べく」にて譯すべし。

5. 行爲の目的及び結果.

此の場合には通例 yena, yathā と共に來る。

Aham nagarāya gaccheyam yena tatra pitaram paçyeyam.

余は都城に行くべし。 彼處に父を見む爲めに。

6. 條件及び之れより來れる結果.

此の場合には通例 yadi, ced と共に來る。

Yadi tatra mama pitaram paçyes tat kathayer mamāvasthām.

汝若し彼處に、余の父を見ば、其の時は余の起居を語るべし。

yadi 等は前節にあれば後節には通例 tad 等來り相照應するは此種の文の構造なりとす。

第三十五課

問題

- 1.—第一過去の語尾如何。
- 2.—第一過去の語基と現在語基と異なる點如何。
- 3.—第一過去の語尾と可能法の現在の語尾と異なる點如何。
- 4.—叙説法の現在語基と可能法の現在語基と異なる點如何。
- 5.—naç の第一過去を書すべし。
- 6.—ruh の可能法の現在を書すべし。
- 7.—cur の可能法の現在を書すべし。
- 8.—可能法現在の用法を列挙すべし。

雜語

Rāja-puruṣa	(男)王臣. 吏.
cāura	(男)偷盜.
ūśaro	(男. 中)嫌地. 沮洳斥鹵の地.
bāndhava	(男)親族.
bhṛitaka	(男)奴僕.
nideṣa	(男)命令.
a-vinaya	(男)無禮. 無作法.
laguḍa	(男)棍棒.
puruṣa-kāra	(男)人爲. 人力.
vipatti	(女)不幸. 逆境.
vipad	(女)不幸. 逆境.
avasthā	(女)狀態. 起居.
dhīra	(形)剛毅なる.
vidyā-hīna	(形)學識なき.
dayā-hīna	(形)慈悲なき. 不仁なる.
krodha-mukha	(形)怒れる顔をなせる.
niḥ-sneha	(形)情なき. 愛情なき.
kath. 10.	(爲他爲己) kathaya 語る.
tyaj. 1.	(爲他)捨つ.
tud. 6.	(爲他. 爲己)打つ.
sah. 1.	(爲己)堪忍す. 許容す.
vap. 1.	(爲他. 爲己)蔭く.
hri. 1.	(爲他. 爲己)奪ふ.
sidh. 4.	(爲他)成就す.
abhi + nand. 1.	(爲己)喜ぶ.

prati + ikṣ. 1.	(爲己)待つ.	pratikṣa
sārdham	(不變)共に.	} 具格を支配す
vinā	(不變)なくしては	
balāt	(副)強ひて.	

1. Vipattāu dhīro bhavet. 2. na dharmam tyajet. 3. Rāja-puruṣā lagu-
ḍena cāuram atudan. 4. Mahati vipadi tiṣṭhann api na dharmam tyaje-
yam. 5. Guruḥ ṣiṣyāṇām āvinayam na saheta. 6. Vidyayā sārddham
mriyeta na vidyām uṣare vapet. 7. Rāvaṇaḥ Sītām Rāmasya patnīm
balād aharat.

8. Yathā hyekena cakreṇa na rathasya gatir bhavet. |

Evam puruṣa-kāreṇa vinā dāivam na sidhyati. ||

9. Nābhinandeta maraṇam nābhinandeta jīvitam. |

Kālam eva pratikṣeta nideṣam bhritako yathā. ||

10. Tyajed dharmam dayā-hīnam vidyā-hīnam tyajet. |

Tyajet krodha-mukhīm bhāryām nihsnehān bāndhavāms tyajet. ||

1. 不幸に於て人は剛毅なるべし. 2. 一人は法を捨つ可らず. 3. 一王の臣は棒にて盗人を打てり. 4. 一大なる不幸に處するも, 余は道を捨てざるべし. 5. 師は弟子の無禮を許す可らず. 6. 一人は學識を抱て死すべし, 斥鹵の地に學識を蒔く可らず. 7. 羅刹王は「ラーマ」王の妃「シター」を強ひて奪ひき. 8. 一實に隻輪にて車の進行あり得ざる如く, 人為なければ運命は完成せず. 9. 一人は死を喜ぶ可らず, 生を喜ぶ可らず, 奴僕の命令を待つ如く, 唯だ時を待つ可し. 10. 一人は慈悲なき法を捨つ可し, 學識なき師を捨つ可し, 怒れる顔をなせる婦を捨つ可し, 愛情なき親族を捨つ可し.

第三十五章

第一類動詞の命令法

§183. 命令法の語基は, 現在語基に同じ, 其語尾は

爲他	爲己
āni	āi
(現在語基のまゝにて, 語尾なし)	sva
tu	tām
āva	āvahāi
tam	ethām
tām	etām

āma	āmahāi
ta	dhvam
antu	antām

第一類動詞は, 現在語基を以て, 命令法爲他の第二人称單數に充つ, 故に特に語尾を有せず. 例せば, tuda 打つ. 汝打べしのごとし.

§184.

I. ruh

rohāṇi (§33.2)	rohāva	rohāma	rohāi	rohāvahāi	rohāmahāi.
roha	rohatam	rohata	rohasva	rohethām	rohadhvam.
rohatu	rohatām	rohantu	rohatām	rohetām	rohantām.

IV.

naçyāni	naçyāva	naçyāma	naçyāi	naçyāvahāi	naçyāmahāi.
naçya	naçyatam	naçyata	naçyasva	naçyethām	naçyadhvam.
naçyatu	naçyatām	naçyantu	naçyatām	nacyetām	naçyantām.

VI.

tudāni	tudāva	tudāma	tudāi	tudāvahāi	tudāmahāi.
--------	--------	--------	-------	-----------	------------

X.

corayāni (§33.2)	corayāva	corayāma	corayāi	corayāvahāi	corayāmahāi.
------------------	----------	----------	---------	-------------	--------------

命令法の用法。

1. 命令. Tuda 汝は打つべし, 打て.

2. 希望. Mām rakṣatu Hariḥ 韋紐の神をして余を守らしめよ。

3. 禁止. 此の場合には mā (勿れ) と共に來る。

Mā dharmam tyajata. 爾等決して法を捨つる勿れ。(可からず)

可能法の現在及び命令法は, 已に叙説せるごとく, 二者相同じき點多く, 二三特殊の用法を除けば, 其の間に井然たる畛域を劃することを得ず, 今 Pāṇini 婆爾尼の語典第三卷第三節, 第一百六十一節を見るに, 可能法の現在 (vidhi-liñ) と命令法 (lot) とは共に vidhi-nimantraṇa-āmantraṇa-adhiṣṭa saṁpraçna-prārthaneṣu とあり, 即ち vidhi 等の意義に於て用ひらるゝ義なり, 此等の點に於ては, 義務分詞は可能法の現在と用法を同じくす。

1.—vidhi 指揮, 訓誡. satyam vadet bhavān, 又は satyam vadatu bhavān 御身は眞實を語るべし. 2.—nimantraṇa 招請. Iha jalām pibet bhavān 又は iha jalām pibatu bhavān 御身は此處にて水を飲むべし. 3.—āmantraṇa 又は anujñā (許可) āgamāvyaṁ bhavatā. 又は āgacchatu bhavān. 又は āgacchet bhavān 御身は來るを得べし. 4.—adhiṣṭa 又は icchā 希望. Icchāmi bhavān āgacchet. Icchāmi bhavān āgacchatu 余は望む, 御身の來らむことを. 5.—Saṁpraçna 質疑. kim phalaṁ

labheya vā puṣpam? 又は kim phalaṁ labhāi vā puṣpam? 余は果實を得べきか、花を得べきか。
(§186i)6.—Prārthana 願請. Bhojanam labheya. 又は Bhojanam labhāi 余をして、食を得せしめよ。

§185. 現在分詞 第一類動詞の現在分詞は、爲他語尾 at (ant), 爲己語尾 māna を現在語基に附加して、之れを作る。

I. rohat (rohant 強語基). rohamāna ā (女) am. (中)

IV. naçyat (naçyant „). nacyamāna ā am.

VI. tudat (tudant „). tudamāna ā am.

X. corayat (corayant „). corayamāna ā am.

即ち、爲他語尾を附せる現在分詞の強弱語基は、叙說法現在の單數複數二者の第三人稱より、iを除きたるものに同じ。

rohanti - i = rohat. rohanti - i = rohant. (§114. §115)

§186. 1. kim(何)は、國語に於て疑問を示す「か」又は「や」のごとく用ひらる。kim phalaṁ labhāi vā puṣpam? 余は果實を得べきか、花を得べきか。

2. kimは又具格と共に來るときは「何の益かある」、「何の用かある」と譯すべし。例せば kim bahunā 多言何の益かある、何ぞ多言を要せむ。kim vistareṇa. 奚ぞ詳説を要せむ。

即ち此等の場合に於ける kim は ko'rthaḥ (kas + arthaḥ = ko'rthaḥ 何の益)又は ko guṇaḥ(何の効能)の義なり。

第三十六課

問題

1.—命令法の語尾を書すべし。 2.—ruh の命令法を書すべし。 3.—命令法の用法如何。 4.—第一類動詞の現在分詞の構造如何。 5.—kim は具格と共に來るときは其の意義如何。

雜語

sama-citta (形)平氣なる。

daridra (形)貧しき。

vyādhitā (形)病める。

pathya (形)適當なる。

niruj. (形)無病の。

dirgha (形)長く・遠き。

hrasva (形)短く・近き。

para (形)最も高く。

apara (形)低く。

payas (中)乳。

madhu (中)蜜。

vasana (中)衣服。

Kāunteya (男)クンティの子アル
チュナ

içvara (男)主人・富人

pārçva (男)脇・傍

āuṣadha (中)醫藥。

satya (中)眞實・諦

a-satya (中)虚偽・虚言

an-ṛita (中)虚言・虚偽。

pra-hri. 1. (爲他)打つ・害す。

upa-viç. 9. (爲他)坐す。

ā-nī 1. (爲他)持ち來る。

prach 1. (爲他)問ふ。

pra-viç 6. (爲他)入り込む。

pra-dā(爲他爲己)與ふ。prayaccha.

car 1. (爲他・爲己)行ふ。

vad 1. (爲他)語る。

bhri 1. 支持す・扶助す・養ふ。

1. Sarvatra sama-cittō bhava. 2. Çiçyo dhāvantaṁ gurum anudhāvet.

3. Mama grihe tiçṭhatu. 4. Mā māṁ prahara. 5. Gavāṁ payah piba.

6. Paçyemam açvam. 7. Tasya pārçva upaviça. 8. Jalam ānaya. 9.

Madhu pibet. 10. Mama vasanaṁ ānaya. 11. Gurum pṛicchatu. 12.

Asmadgrihe paviçeti kavir atithiṁ avadat. 13. Çiçyās tiçṭhato gurūn

anutiçṭheyuḥ.

14. Daridrāṁ bhara Kāunteya mā prayaccheçvare dhanam | (§72.2)

vyādhitasyāuṣadhaṁ pathyaṁ nirujas tu kim auṣadhāiḥ ||

15. Dharmāṁ carata mādharmaṁ satyaṁ vadata māṁṛitam |

Dīrghaṁ paçyata mā hrasvaṁ paraṁ paçyata māparam ||

1.—一切のものに於て平氣なれ。 2.—弟子は師走らば、從ふて走るべし。 3.—かれは余の家に居るべし。 4.—余を打つ勿れ。 5.—牝牛の乳を飲め。 6.—此の馬を見よ。 7.—かれの側に坐せ。 8.—水を持ち來れ。 9.—彼れをして蜜を飲ましめよ。 10.—かれは余の衣を持ち來るべし。 11.—かれは師に問ふべし。 12.—“吾等の家に入れ”と詩人は客に語れり。 13.—弟子は師留らば從ふて留るべし。 14.—クンティの子よ、貧しきものを救助すべし、富人に財物を與ふる勿れ。 15.—汝等は道を行ふべし、無道な行ふ勿れ。眞實を語るべし、虚偽を語る勿れ。遠く見るべし、近く見る勿れ、最も高きものを見るべし、高からざるものを見るなかれ。

第三十六章

第二類動詞

§187. 第一類動詞の現在語基には、強弱の差別なきも、第二類動詞にはこれあり、此の點に於ては、第一類動詞は、恰も名詞の母音語基の如く

第二類動詞は名詞の父音語基に比すべし。今其の強語基の來る場合を擧ぐれば

1. 現實法の現在及び第一過去に於ける、爲他の單數。
2. 命令法の爲他、爲己二者に於ける、第一人稱。
3. 命令法の爲他の單數、第三人稱。

其の他の場合には盡く弱語基を用ふ、可能法の現在は常に弱語基を用ふ、即ち

現實法の現在及び第一過去

爲他			爲己			命令法			爲他			爲己		
單	双	複	單	双	複	單	双	複	單	双	複	單	双	複
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

§188. 語尾等は略第一類動詞の語尾と同じきも、第一類動詞の

1. ethe, ete, ethām, etām は athe, ate, athām, atām なり。
2. 命令法、爲他單數の第二人稱は dhi 又は hi なり。
3. ante, anta, antām は ate, ata, atām なり、
4. 現在分詞の爲己語尾は āna にして māna にあらず。
5. 可能法の語基構成音は、爲他語尾の前には「yā」にして、us の前には ā 消滅す、爲己語尾の前には「i」にして、母音の前には、iy となる。

§189. 第二種動詞 dviṣ 惡む、強語基 dveṣ, 弱語基 dviṣ

單	双	複	單	双	複
1. dveṣmi	dviṣvas	dviṣmas	dviṣe	dviṣvahe	dviṣmahe.
2. dveṣsi	dviṣthas	dviṣtha	dviṣe	dviṣāthe	(dviṣdhve.
3. dveṣti	dviṣtas	dviṣanti	dviṣte	dviṣāte	dviṣate.

ṣ + si = k + si (§104.3 §106) = kṣi (§51.1),

ṣ + ti = ṣti (§145.1)

ṣ + dhve = ṣ + dhve (§104.3) = ḍḍhve (§105.) = ḍḍhve (145.1).

1. adveṣam adviṣva adviṣma adviṣi adviṣvahi adviṣmahi.
2. adveṣ adviṣtam adviṣtha adviṣthās adviṣāthe adviṣdhvam.

3. adveṣ adviṣtam adviṣanti adviṣta adviṣāte adviṣate.

可能法の現在.

dviṣyāt dviṣyātām dviṣyus dviṣīta dviṣīyātām dviṣīran.

命令法.

1. dveṣāṇi dveṣāva dveṣāma dveṣāi dveṣāvahāi dveṣāmahāi.
- dviḍḍhi dviṣtam dviṣta dviṣva dviṣāthām dviḍḍhvam.
- dveṣtu dviṣtam dviṣantu dviṣtām dviṣātām dviṣatām.

§190. 第二種動詞に屬する動詞中、重要なるものを擧ぐれば

1. as (爲他)あり as 強語基 s 弱語基

爲他			爲己		
asmi	svas	smas	āsām (§171 備考)	āsva	āsma.
asi	sthas	stha	āsīs	āstam	āsta.
asti	stas	santi	āsīt	āstām	āsan.
2. i (爲他)往く eti. adhi + i = adhi (爲己)讀む e (強) i (弱)

emi	ivas	imas	adhīye	adhīvahe	adhīmahe.
esi	ithas	itha	adhīṣe	adhīyāthe	adhīdhve.
eti	itas	yanti	adhīte	adhīyāte	adhīyate.

「i」には、爲己語尾の變化なし。故に adhi を以て之を示せるなり。

§191.

3. brū (爲他爲己) 語る。bro, (強) (但し父音を以て始むる語尾の前にては、bravi となる) bru (弱)。
4. rud (泣く) svap (眠る) cvas (呼吸す), an (呼吸す), jaks (食す) の動詞は、y 以外の父音を以て始むる語尾の前には i を附加す。
rud. rod 強語基又は rodi. rud 弱語基又は rudi.
roditi ruditas rudanti の如し。 (但し此の「i」は、時ありて、「ī」又は「ā」に變ず)
5. çī (爲己) 臥す。眠る如何なる。場合にても常に強語基 çe を用ふ。
çaye çevahe çemahe.
çeṣe çayāthe çedhve.
çete çayāte çerate.

第三十七課

問 題

1.—第二類動詞の現在語基が第一類動詞に異なる點を列挙すべし。2.—第二類動詞の變化中・強語基の來る場合を列挙すべし。3.—第二類動詞の語尾を書すべし。4.—第二類動詞の語尾と第一類動詞の語尾と異なる點如何。5.—第二類動詞の可能法の現在語基は、如何にして、これを作るか。6.—第二類動詞 *diviṣ* の現實法の現在を書すべし。7.—*diviṣ* に *dhve* を加へて、*dviddhve* となる理由如何。8.—*as* (あり) の強弱語基を擧ぐべし。9.—*i* (往く) の強弱語基を擧ぐべし。10.—*brū* (語る) の強弱語基を擧ぐべし。11.—*rud* (泣く) の強弱語基を擧ぐべし。12.—*ci* の現在語基を記すべし。

雑 語

bālaka	(男) 男子	dāiva	(中) 運命・宿命
vatsa	(男) 親しきもの	a-priya	(形) 愛好せざる
ravi	(男) 太陽	deya	(形) 與へらるべき (da の義務分詞)
çyena	(男) 鷹	nir-guṇa	(形) 能なき・徳なき
prithivī-pāla	(男) 國君	nir-bala	(形) 弱き・力なき
vasanta	(男) 春	udyogin	(形) 努力する
pika	(男) 郭公・杜鵑	dhanya	(形) 幸福なる
vāyasa	(男) 烏	svap. 2.	(爲他) 眠る・臥す
karin	(男) 象	çi. 2.	(爲己) 眠る・臥す
mūṣika	(男) 鼠	brū. 2.	(爲他) 語る・云ふ
udyoga	(男) 努力	ad. 2.	(爲他) 食す・atti
an-udyoga	(男) 努力せざること	rud. 2.	(爲他) 泣く・哭す
puruṣa-simha	(男) 人中の獅子	adhi + i 2.	(爲己) 讀む・通讀す
kāpuruṣa	(男) 儒夫	vid. 2.	(爲他) 知る・veti
kapota	(男) 鳩	ud + i. 2.	(爲他) 上る・udeti
tila	(男) 芝麻	upa + i. 2.	(爲他) 近く・upāiti
khatvā	(女) 臥床	pra + āp	得・達す・至る
sthitī	(女) 慣例・常道	prāptum	得ること (prāp の不定體)
rātri	(女) 夜	arh 1.	(爲他) 能くす...するを得
niç.	(女) 夜	samcintya	思ひて・(連續體)
Lakṣmī	(女) 幸福の女神	sukham	(副) 安らかに・容易に
tāila	(中) 油	satvaram	(副) 疾く
bala	(中) 力	(sa-tvarā	「いそぎを以て」・「疾く」の隣近釋)
çāstra	(中) 書		
kāraṇa	(中) 理由・原因		

1. Bālakaḥ khatvāyām svapiti. 2. Vatsa, satvaram gatvā tāsyaṁ khatvāyām çeṣva. 3. Māivam brūhi. 4. Satyam brūyāt, na tu brūyāt satyam apriyam. 5. Rātrāu candra udeti. 6. Çyenaḥ kapotān attīti sthitir eṣā jagataḥ. 7. Ato'ham bravīmi. 8. Tatra kā cin nārī roditi, pṛiccha kena kāraṇena tvam rodīṣīti. 9. Dhanyās te pṛithivī-pālāḥ sukham ye niçi çerate. 10. Udite ravāu candro'stam gataḥ. 11. Kāṇi çāstrāṇi yuṣmākaṁ putrā adhīyate. 12. Dharmaçāstrāṇi mama bālakā adhīyate.

13. Guṇi guṇam veti na veti nirguṇo balī balaṁ veti na veti nirbalaḥ | Piko vasantasya guṇam veti na vāyasaḥ karī ca simhasya balaṁ na muṣikaḥ ||

14. Na dāivam iti samcintya tyajed udyogam ātmanaḥ | anudyogena kas tāilaṁ tilebhyaḥ prāptum arhati ||

15. Udyoginam puruṣa-simham upāiti Lakṣmīḥ | dāivena deyam iti kāpuruṣā vadanti ||

1.—男子は臥床に於て眠る。2.—わか子よ、疾く往きてかの臥床に於て眠るべし。3.—かくな云ひそ。4.—人は眞實の事を語るべし、然れども耳に逆ふ眞實の事を語るべからず。5.—夜に於て、月は上る。6.—鷹は鳩を食す、かくのごときは、これ、世間のならはせなり。7.—この故に余は云ふ。8.—彼處にある婦人は泣く、何故に汝は泣くかと、問ふべし。9.—夜に於て、安々と、眠る國君は幸福なり。10.—日上りたるときは、月西に没せり。11.—汝等の男兒は如何なる書をか讀む。12.—吾が男子等は法典を讀む。13.—能ある人は能を知る、無能の人は知らず、力あるものは(他人の)力を知る、力なきものは知らず、杜鵑は春の効能を解すれども、烏は然らず、象は獅子の力を知る、鼠は知らざるなり。14.—運命なりと思ひて、人は自己の努力を廢することなかれ、努力をなさずして誰か能く胡麻の實より油を得るものぞ。15.—努力する人中の獅子には、幸福の女神近づき來る、運命によりて與へらるべしと云ふは、これ儒夫の言なり。

第三十七章

第三種動詞の變化

§192. 第三種動詞の現在語基は、語根を重複して、之を作る、本來、語根を重複して、語基を作るは、第三種動詞に止まらず、他の種類の現在語基にも往々これありとす。かの sthā の tiṣṭha に於ける。pā の piba に於ける、ghrā の jighra に於ける、皆然り。今、語根の重複に關する一般の原則を擧げむに。

§193. 1. 語根の始にある含氣音は、同種類の無氣音を以て、重複音とす dhā, おく. dadhā のごとし。

2. 語根の始にある喉音は、同種類の顎音を以て、重複音とす、即ち k. kh. は「c」を以て g. gh. は「j」を以て重複音となすなり. h. も j を以て重複音とす. hu, 祀る juhu のごとし。

3. 語根の始に於て、二個以上の父音來る時は、其の最も始にあるものを以て、重複音とす. ghrā, jighra のごとし。

4. 然れども ḡ, ṣ, ś, が語根の始に來りて、硬音其の次に來る時は、其の硬音を以て、重複音とす. sthā tiṣṭha のごとし。

5. 語根の母音は、重複音の中に、加ふべきものなれど、若し長母音ならば、短母音を以て之に代ふべく、ri, rī ならば「i」又は「a」を以て之に代ふべし. dhā は dadhā, hrī 耻づは jhri のごとし。

§194. 第三種動詞の變化 hu 祀る.(火に燒きて)強 juho 弱 juhu.

第三種動詞の爲他語尾 anti, antu は ati, atu とあり. an は ur となる. 但し此の ur の前には、語根の母音・重音となる。

1. 現實法の現在。

爲 他			爲 己		
單	双	複	單	双	複
1. juhomi	juhuvas	juhumas	juhve	juhuvahe	juhumahe
2. juhoṣi	juhuthas	juhutha	juhuṣe	juhvāthe	juhudhve
3. juhوتي	juhutas	juhvati	juhute	juhvāte	juhvate

2. 現實法の第一過去。

1. ajuhavam	ajuhuva	ajuhuma	ajuhvi	ajuhuvahi	ajuhumahi
2. ajuhos	ajuhutam	ajuhuta	ajuhuthās	ajuhvāthām	ajuhudhvam
3. ajuhot	ajuhutām	ajuhavus	ajuhuta	ajuhvātām	ajuhvata

3. 單命令法の現在。

1. juhavāni	juhavāya	juhavāma	juhavāi	juhavāvahāi	juhavāmahāi
2. juhu-dhi	juhutam	juhuta	juhuṣva	juhvāthām	juhudhvam
3. juhotu	juhutām	juhvatu	juhutām	juhvātām	juhvatām

4. 可能法の現在。

1. juhuyām juhuyāva juhuyāma juhviya juhvivahi juhvīmahī
2. juhuyās juhuyātam juhuyāta juhvithās juhviyāthām juhvidhvam
3. juhuyāt juhuyātām juhuyus juhvīta juhviyātām juhvīran

§195. dā 與ふ. 強 dadā 弱 dad 可能法の現在語基. dadyā, dadī. dhā 置く. „ dadhā „ dadh „ dadhyā, dadhī.

命令法の爲他第二人稱單數は. dehi. dhehi となる。

hā 捨つ. 強 jahā 弱 jahi{父音語尾} jah{母音語基の前及び} jahi{の前には} jah{可能法の現在には}

§196. 語根又は語基の終にある軟音の含氣音は、硬音に遭ふて、硬音の無氣音となる. 此の際。

1. 語根の始めにある軟音の無氣音は、變じて、含氣音となる。

artha - budh + s(真義を解するものは) = artha-bhut.

dadh + te (かれはおく) = dhatte.

dadh + se (汝はおく) = dhatse.

dadh + thas (汝等二人はおく) = dhatthal.

2. 然れども、語根語基の終にある軟音の含氣音が、次に來る t, th に遭ふ時は、軟音の含氣音は、自己と同種類の無氣音となり、t, th は却て dh となることあり。

budh + ta = buddha 覺れるもの. 覺者. 佛陀.

budh + tvā = buddhvā 覺りて.

labh + tvā = labdhvā 得て.

第三十八課

問題

1. 語根の始にある含氣音は語根重複の際如何に變化するか. 2. 同一の喉音は語根重複の際如何なる音を以て重複音となすか. 3. 二個以上の父音、語根の始に來る時は、其の孰れを探りて、重複音となすか. 4. 語根の母音は重複音に於て如何に變化するか. 5. huの強弱語基を記すべし. 6. -dā, hā, dhāの強弱語基を記すべし. 7. 語根の終にある、軟音の含氣音が、硬音に遭ふて如何に變化するか. 8. 同一の軟音の含氣音が、t, th, に遭ふて如何に變化するか.

雑 語

āpad	(女) 不幸. 災厄
abhibhūta	(形) 打勝れたる. 打惱されたる
Nala	(男) 國王の名
daridra	(形) 貧しき
vinaya	(中) 恭謙
samidh	(女) 薪材
māna	(男) 僞慢
mala	(男.中) 垢. 汚れ
pūjā	(女) 供養. 禮拜
kriyā	(女) 事
sahasā	(副) 急ぎて. 輕忽に
hā	3. 捨つ
pra + hā.	3. 打捨つ
dā	3. 與ふ
hu	3. 祀る (火を焼きて). 供す
dhā	3. 置く
vi + dhā	3. なす. 行ふ. 實行す. 營む

1. āpadābhibhūto Nalo bhāryām vane prājahāt. 2. daridrāya dhanam dehi. 3. agnāu ghrītam juhudhi. 4. vidyā dadāti vinayam. 5. agnāu samidho juhōti. 6. patnī patim kadāpi na jahyāt. 7. māna-malam jahihīti munir avadat. 8. mā dharmaṁ jahihī. 9. agnāu samidho dadhyāt. 10. yadi yuṣmākam gurum paçyeta tat tasya pūjām vidhatta. 11. sahasā vidadhīta na kriyām.

1.—不幸に打負けたる「ナラ」王は妃を林に捨てたり。2.—貧者に財物を與へよ。3.—火神に酥を供せよ。4.—學識は恭謙を與ふ。5.—一人は火神に薪を供す。6.—婦は決して夫を捨つ可らず。7.—僞慢の垢を捨てよと聖者は語る。8.—法を捨つること勿れ。9.—かれは火に薪をまくべし。10.—若し汝等汝等の師を見れば彼に禮をなすべし。11.—一人は急ぎて事をなす可らず。

第三十八章

第五種及び第七種動詞の變化

§197. 第五種動詞の現在語基

çru	聞く.	強語基	çriṇo	弱語基	çriṇu
su	搾る.		suno		sunu
āp	得る.		āpno		āpnu

命令法の爲他の第二人称單數は、何等の語尾をも附加せざるを法とす çriṇu 汝聞くべしのごとし。然れども āp は āpnuhi となる。

§198. çru の變化. çriṇo(強) çriṇu(弱) (§33.1)

現實法の現在。

	單	雙	複	單	雙	複
1. çriṇomi	çriṇuvas	çriṇumas	çriṇve	çriṇuvahe	çriṇumahe	
2. çriṇoṣi	çriṇuthas	çriṇutha	çriṇuṣe	çriṇvāthe	çriṇudhve	
3. çriṇoti	çriṇutas	çriṇvanti	çriṇute	çriṇvāte	çriṇvate	

現實法第一過去。

1. açriṇavam	açriṇuva	açriṇuma	açriṇvi	açriṇuvahi	açriṇumahi
2. açriṇos	açriṇutam	açriṇuta	açriṇuthās	açriṇvāthām	açriṇudhvam
3. açriṇot	açriṇutām	açriṇvan	açriṇuta	açriṇvātām	açriṇvata

命令法。

1. çriṇavāni	çriṇavāva	çriṇavāma	çriṇavāi	çriṇavāvalhāi	çriṇavāmahāi
2. çriṇu	çriṇutam	çriṇuta	çriṇuṣva	çriṇvāthām	çriṇudhvam
3. çriṇotu	çriṇutām	çriṇvantu	çriṇutām	çriṇvātām	çriṇvatām

可能法の現在。

çriṇuyām çriṇuyāva çriṇuyāma çriṇviya çriṇvīvahi çriṇvīmahī 等なり。

çriṇvanti çriṇvan, çriṇvantu の變化に於て見るごとく、語基の終にある u は a に會して v となるを常とすれども、āp のごときは、āpnuvanti, āpnuvan, āpnuvantu となる。

§199. 第七種動詞 bhid (破壊す) の變化。

bhinad (強) bhind (弱)

現實法の現在。

	爲 他			爲 己		
	單	雙	複	單	雙	複
1. bhinadmi	bhindvas	bhindmas	bhinde	bhindvahe	bhindmahe	
2. bhinatsi	bhintthas	bhinttha	bhintse	bhindāthe	bhinddhve	
3. bhinatti	bhinttas	bhindanti	bhintte	bhindāte	bhindate	

現實法の第一過去。

1. abhinadam abhindva abhindma abhindi abhindvahi abhindmahi
2. abhinat(t+s)abhinttam abhintta abhintthās abhindāthām abhinddhvam
3. abhinat abhinttām abhindan abhintta abhindātām abhindata

命令法。

1. bhinadāni bhinadāva bhinadāma bhinadāi bhinadāvahāi bhinadāmahāi
2. bhinddhi bhinttam bhintta bhintsva bhindāthām bhinddhvam
3. bhinattu bhinttām bhindantu bhinttām bhindātām bhindhatām

可能法。

1. bhindyām bhindyāva bhindyāma bhindīya bhindīvahi bhindīmahi
2. bhindyās bhindyātam bhindyāta bhindīthās bhindīyāthām bhindīdhvam
3. bhindyāt bhindyātām bhindyus bhindīta bhindīyātām bhindīran

第三十九課

問題

1.—çruの強弱基語を擧ぐべし。 2.—āpの爲他第三人稱複數の現實法現在及び第一過去を書すべし。 3.—āpの爲他第三人稱複數命令法を書すべし。 4.—bhidの強弱語基を擧ぐべし。 5.—bhinad+ti=bhinattiの理由を記すべし。

雜語

vāta (男)風	iha (副)此の世界に於て。
çarad-vāta (男)秋風	amutra (副)かの世界に於て。
sādhu (男)善き人	çuravat (副)勇者のごとく。
svarga (男)天・天國・天上の樂	çak. 5. 能くす。
çrama (男)勞苦・勉勵	ava + āp. 5. 到る・得。
paśin (男)鳥(翼あるもの)	dhū. 5. 爲他・爲己・拂ふ。
aṇḍa (中)卵	chid. 7. 嚙む・斷ち切る。
raṇa (中)戰鬪・戰陣	bhid. 7. 破壊す。
kapi (男)猿	bhuj. 7. 食す・享く。
keça (男)鬣毛	ā + ruh. 1. 登る。
agra (中)尖・端	bhaj. 7. 破壊す。
kathā (女)話・物語	dhruva. 確かなる・必定なる

1. sādhaveḥ svargam avāpnvanti. 2. çramād vinā dhanam nāvapnoti.
3. vṛikṣam āruhya kapayaḥ pakṣinām aṇḍāni bhindanti. 4. triṣṇām chinddhi. 5. tasya kathām çriṇu. 6. yat tvayā sahasā kṛitam tad anyathā kartum na çaknomi. 7. suptasya simhasya keçāgram mūsikaç chinatti. 8. ye çuravad raṇe mṛitās teṣām svargo dhruvaḥ. 9. yathā çarad-vāto vṛikṣasya pattrāṇi dhūnoti tathā tvaṁ me çatrūn bhaṅdhi.
10. yat tvayā kṛitam iha tasya phalam amutra bhukṣva.

1.—善人は天國を得。 2.—勞苦なくして人は財を得ることなし。 3.—樹に登りて、猿は鳥の卵を破壊す。 4.—怒を断つべし。 5.—かれの物語を聞くべし。 6.—余は汝の輕忽になせることを改むること能はず。 7.—眠れる獅子の鬣毛の端を鼠は嚙れり。 8.—戰陣に於て勇者のごとく死せる人には、天上の樂は必然なり。 9.—秋風の樹葉を拂ふがごとく、汝は余の敵を破るべし。 10.—汝は此の世界に於て、なせることの果報を次の世界に於て享くべし。

第三十九章

第八種及び第九種動詞の變化

§200. 第八種動詞 kri (作爲す)の變化。強 karo 弱 kuru (但し、m. y vを以て始むる語尾の前には kurとなる)。

現實法の現在。

	爲 他			爲 己		
	單	雙	複	單	雙	複
1. karomi	kūvas	kurmas	kurve	kurvahe	kurmahe	
2. karoṣi	kuruthas	kurutha	kuruṣe	kurvāthe	kurudhve	
3. karoti	kurūtas	kurvanti	kurute	kurvāte	kurvate	

現實法の第一過去。

1. akaravam akurva akurma akurvi akurvahi akurmahi
2. akaros akurutam akuruta akuruthās akurvāthām akurudhvam
3. akarot akurutām akurvan akuruta akurvātām akurvata

命令法の現在。

1. karavāṇi karavāva karavāma karavāi karavāvahāi karavāmahāi
2. kuru kurutam kuruta kuruṣva kurvāthām kurudhvam
3. karotu kurutām kurvantu kurutām kurvātām kurvatām

可能法の現在。

1. kuryām kuryāva kuryāma kurviya kurvivahi kurvīmahe

§201. 第九種動詞 aç (食す. 享く) の變化. açnā 強. açn 弱 (母音語尾の前には). açni (父音語尾の前には).

現實法の現在。

1. açnāmi açnīvas açnīmas açne açnīvahe açnīmahe
 2. açnāsi açnīthas açnītha açniṣe açnāthe açnīdhve
 3. açnāti açnītas açnanti açnīte açnāte açnate

現實法の第一過去。

1. açnām açnīva açnīma açni açnīvahi açnīmahe
 2. açnās açnītam açnīta açnīthās açnāthām açnīdhvam
 3. açnāt açnītām açnan açnīta açnātām açnata

命令法の現在。

1. açnāni açnāva açnāma açnāi açnāvahāi açnāmahāi
 2. açāna açnītam açnīta açniṣva açnāthām açnīdhvam
 3. açnātu açnītām açnantu açnītām açnātām açnatām

可能法の現在。

1. açniyām açniyāva açniyāma açniya açnivahi açnimahi

§202. 第九種動詞中. 重要なる動詞は。

1. grah 取る. 把握す. 執る. 強 grihṇā 弱 grihṇi grihṇ.

命令法. 爲他第二人称單數は. grihāṇa

2. jñā 知る. 強 jñā 弱 jñan jñāni.

命令法 爲他第二人称單數は. jñāhi.

§203. 第二類動詞の現在分詞は. 爲他の場合には. 弱語基に「at」(ant) 爲己の場合には. 「āna」を附加して. 之を作る。

2. dviṣat(ant) dviṣāna 8. kurvat(ant) kurvāna.
 3. juhvat(at) 此の場合には強弱の別なし. juhvāna 9. açnat(ant) açnāna.
juhvati-i なければなり。(§185.)
 5. çriṇvat(ant) çriṇvāna.
 7. bhindat(ant) chindāna.

第四十課

問 題

- 1.—第八種動詞 kri の強弱語基を擧ぐべし. 2.—第九種動詞 aç の強弱語基を擧ぐべし. 3.—第二類動詞の現在分詞を構成する方法如何. 4.—第三種動詞 hu の現在分詞を書すべし.

雑 語

- yavana (男) 希臘人
 mārjāra (男) 猫. 山猫
 çavaka (男) 雛
 rāja-putrī (女) 王女
 çūdratva (中) 首陀の状態
 çūdratvam gacchati かれは首陀の状態に陥る
 dṛiṣṭi-prasāda (男) 一瞥の惠
 yajña (男) 祭祀
 sūkṣma (形) 細軟なる
 sūkṣmam (副) 仔細に. 審かに
 yathā-vidhi (副) 法のごとく
 pūrva-kṛita (形) 前世に於てなされたる
 sānvaya (形) 子孫と共に (sa + an—)
 anyatra (副) 他の點に於て. 他の事に
 āçu (副) 速に. 疾く
 kri. 8. 爲他. 爲己. 作爲す
 jñā. 9. 爲他. 爲己. 知る
 çī. 2. 爲己. 臥す çayana (形) 臥する. (çe + āna. §45)
 vicārya (連續體) 考慮して
 anu-çī 2. 從ふて臥す
 an adhītya (adhi + itya) (連續體) 讀まずして
 jīva 1. 爲他. 爲己. 生く jivan + eva 生きながら
 1. kiṁ karomi? 2. kiṁ karavāṇi? 3. āpatsu mitram jāniyāt. 4. ya-
 vanāḥ çayānā bhujjate. 5. rājan, dṛiṣṭi-prasādām kuru. 6. paçyato

guroḥ ṣiṣyā avinayāṁ akurvan. 7. sūkṣmāṁ vicārya kāryāṁ kuryāt.
8. mārjārāḥ pakṣiṇāṁ ṣavakān ācnan. 9. mām jānīhi rāja-putrīm. 10.
ye yajñāṁ yathā-vidhi kurvanti te dhruvāṁ svargam avāpnvanti.
11. ṣayānāṁ cānuṣete hi tiṣṭhantāṁ cānutiṣṭhati |
anudhāvati dhāvantaṁ karma pūrva-kṛitāṁ naram ||
12. yo'nadhītya dvijo vedam anyatra kurute ṣramam |
sa jīvanneva ṣūdratvam ācū gacchati sānvayaḥ ||

1.-余は如何にすべきか。 2.-余は如何にすべきか。 3.-不幸に際して人は友を知るこそ得べし。
4.-希臘人は臥して食す。 5.-王よ、一顧の恵を垂れよ。 6.-師が見つつあるも拘らず(師の面
前にて)弟子は無禮をなせり。 7.-密かに考慮して人は事をなすべし。 8.-猫は鳥の雛を食せ
り。 9.-妾を王女なりと知れ。 10.-法のごとく祭祀を営むものは、必ず天國の樂を得。 11.-
人臥するときは、從ふて臥し、立つときは、從ふて立ち、走るときは、從ふて走るものあり宿世に
於て作れる業實に是なり。 12.-婆羅門にして吠陀を誦せず、他事に力を効すものは、其の子孫
と共に、生きながら速に首陀の状態に陥るべし。

第 四 十 章

催起相能動詞の現在語基

§ 204. 動詞の催起相とは、他をして、語根の表示する作爲をなさしめ、又
は其の状態に居らしむることを示す相にして、例せば
putro gacchati 男子は往く。 pitā putrāṁ gamayati 父は男子をして往
かしむのごとし。

其の能動調の現在語基は、第十種動詞の現在語基と同一の方法にて、
作る。(§175. 2 参照) 即ち語根に「aya」を附加し、同時に語根中の母
音は、之を重音又は複重音(もし a ならば)に變じ、語根の終にある
母音は、之を複重音に變ずるにあり。

vid 知る vedaya 知らず chid 斷つ切る chedaya 斷たす切らす
pat 落つ倒る pātaya 落す倒す jan 生まる janaya 生む

故に、第十種動詞の場合には、原始相の現在語基と、催起相の現在語
基とは常に相同じきなり、例

cur 偷む coraya 偷む、偷ます

§ 205. 但し語根にして ā に終れるものは、「aya」に代ふるに「paya」を
以てす。

dā 興ふ dāpaya 興へしむ sthā 立つ sthāpaya 立しむ
jñā 知る jñāpaya 知らしむ、知らす

§ 206. 又ある動詞は、不規則なる方法にて、催起相現在語基を作る。

ṛi 往く。 arpayā 往かしむ。
pā 飲む。 pāyaya 飲ましむ。
ji 征服す。 jāpaya 征服せしむ。
ruh 生長す。 ropaya 生長せしむ。

又は rohaya.

adhi + i 學ぶ、讀む adhyāpaya 學はしむ = 教ふ。

§ 207. 1. 第十種の動詞及び催起相の動詞に、tvā を附して連續體を作
る場合には、現在語基の終にある「a」を除き、代ふるに「i」を以てす
べし。

cint 思考す。 cintaya + tvā cintayitvā 思考して。
cur 偷む。 coraya + tvā corayitvā 偷みて。

2. ya を附して連續體を作る場合には二種の區別あり。

a. 語基の母音が、性質上又は位置上の短母音あるときは tvā の場
合に同じ、即ち sam + gam 會合す samgamaya 會合せしむ、sam-
gamayya 會合せしめて。

b. 其の他の場合には aya を除きたる後 ya を附加す。 Samtoṣ 喜
ぶ。 samtoṣaya 喜ばす。 samtoṣya 喜ばせ。 vicārya 考慮す。
vicārya 考慮して。 ā + karṇ. 10. ākarṇaya 聽く。 ākarṇya 聽きて。

第十種動詞及催起相動詞の現在語基は、上記の場合に於てのみならず、受動調の現在と
第三過去と、第二過去の受動分詞との三者に於て「aya」を失ふも、其の他の場合に於て
は其の形を保持するを常とす、但し此の場合に於ても最後の a を i となすことあり。

§ 208. 下の文例を記憶すべし。

Putro gacchati. pitā putrāṁ gamayati.
男兒は 往く 父は 男子をして 往かしむ
Sūdo'nnaṁ karoti. Vaidyaḥ sūdenānnaṁ kārayati.
庖人は食を 作る 醫師は 庖人をして食を 作らしむ
Devāḥ somam pibanti. Sa devān somam pāyayati.

群神は 蘇摩を 飲む かれは群神をして蘇摩を飲ましむ
即ち原始相能動調の動詞を變じて、催起相能動調となすときは、前者
の主辭は、後者に於て具格又は業格となるなり。

§ 209. 第十種及び催起相動詞の能動調の現在語基より aya を除きたる
ものを、此等の動詞の現在語根と云ふ。

kāraya なさしむ - aya = kār 催起相の現在語根。

第四十一課

問 題

1. 催起相能動調の現在語基を作る法如何. 2. -ā に終れる語根の催起相能動調の現在語基如何. 3. -ri, ji, adhi の催起相能動調の現在語基如何. 4. 第十種動詞及催起相能動調の連續體を作らむとせば、如何にして tvā を附加し又如何にして ya を附加すべきか. 5. 原始相能動調を變じて、催起相能動調となすときは前者の主辭は後者に於て如何なる格なるか. 6. 催起相動詞の現在語根とは如何. 7. 第十種動詞及び催起相動詞の現在語基が aya を失ふべき場合四あり列挙すべし.

雜 語

dur + ātman	(男)惡漢.	sam + vṛidh.	IO	生長す.
māmsa	(中)肉.	sam + vardhaya.		生長せしむ. 飼養す.
amṛita	(中)甘露味.	darçaya	(driç の催)	見さしむ = 示す.
lekha-pattra	(中)書簡.	lekhaya	(likh の催)	書せしむ.
sūta	(男)馭者.	nir + gam.	I.	出で往く.
nīḍa (拉 nidus)	(中)巢.	nir + gamaya		出で往かしむ.
vāyu	(男)風.	anu-kṣaṇam	(隣近釋)	刹那毎に、絶えず.
āhāra	(男)食物.	vādaya	(vad. I. の催)	云はしむ = 云はす, 打
dāna	(中)施與.			鳴す(樂器等を)
ghaṇṭā	(女)鈴.	sthāpaya	(stha. I. の催)	とせしむ.
pat. I.	落つ	adhyāpaya	(adhi + i. 2. の催)	通讀せしむ.
pātaya	落す	açaya	(aç. 9. の催)	食せしむ.

1. Simho mārjāraṁ māmsāhāra-dānena sam-vardhayati. 2. I itā putraṁ grihe sthāpayati. 3. Satvaram gatvā mām darçaya, kvāsāu durātmā tiṣṭhati? 4. Sa devān amṛitam āçayat. 5. Pitā putrān vedam adhyāpayat.

6. Guruḥ çiṣyena lekha-pattrāni lekhayati. 7. Guruḥ çiṣyasyāvinayam dṛiṣṭvā grihāt tam niragamayat. 8. Sūto ratham asthāpayat. 9. Kapayo ghaṇṭām ādāya anu-kṣaṇam avādayan. 10. Vāyuḥ pakṣiṇām nīḍāni vṛikṣād apātayat.

1. 獅子は肉食を興へて猫を飼養す. 2. 父は子を家に留め置く. 3. 疾く往きて余をして何處に惡漢が居るかを見せしめよ. 4. 彼は諸神をして甘露味を食さしめき. 5. 父は子をして吠陀經を誦せしめき. 6. 師は弟子をして、書簡を書せしむ. 7. 師は弟子の不行狀を見て、家より彼を去らしめたり. 8. 馭者は車を停めたり. 9. 猿等は鈴をとりて、絶えず打鳴らせり. 10. 風は鳥の巢を、樹より落せり.

第四十一章

受動調の現在語基

§ 210. 受動調の現在語基は、第四種動詞の場合と同じく「ya」を附加して之を作る。

dviṣ 惡む dviṣya 惡まる tud 打つ tudyā 打たる

かく作られたる現在語基は、常に爲己語尾を取るが故に、一見第四種動詞と異なる所なし。

現實法の現在. tudyate, tudyete, tudyante.

第一過去. atudyata, atudyetām, atudyanta.

可能法の現在. tudyeta, tudyeyātām, tudyeran.

命令法の現在. tudyatām, tudyetām, tudyantām.

§ 211. 第十種動詞及催起相の動詞は、其の現在語根に(現在語基より aya を除きたるもの) ya を附加し受動調の現在語基となす。(§207.備考)

pūj 供養す. pūjaya pūjyate

cur 偷む. coraya coryate

kṛi 作爲す. kāraya 作爲せしむ. kāryate 作爲せしめらる.

§ 212. 受動調の現在語基が一見第四種動詞の現在語基と區別なきが如きも、其の實太だしき異同あり。第四種動詞に ya を附加するに當り語根の母音は變化せざるも、受動調の現在語基を作る場合には然らず。即ち

1. 語根の始にある va と ya とは變化して「u」「i」とある。
vac 語る, ucyate, yaj, ijjate.
2. 語根の中にある鼻音は通例消滅す。
bandh 繋ぐ, badhyate danīç 咬む daçyate.
3. 語根の終にある ā は時ありて變して i となる。
stha 立つ sthīyate dā 與ふ diyate.
4. 語根の終にある ri は ri 又は ar となる。
kri 作爲す kriyate smṛi 念ふ smaryate.
- 一父音の後にある ri は ri となり、二個以上の父音の後にある ri は ar とあるなり。
5. 語根の終にある ri は ir 又は ūr (唇音の後にあれば)となる。
tri 渡る tīryate pṛi 盛る pūryate.

§ 213. 一語の中にある i と u とは y に遭ふて ī, ū とある。

stu 咏嘆す stūyate.
çru 聴く çrūyate.
ji 征服す jīyate.

§ 214. 受動詞の現在分詞は、現在語基に māna を附加して之を作ること
都て第一類動詞に準ず。 tudyamāna 打たるる。
kriyamāna 作爲せらるる。 ucyamāna 語らるる。

§ 215. 下の文例を記憶すべし。

cāuro dhanam corayati. 盗人は財を偷む。

1. dhanam cāureṇa corayate. 財は盗人に偷まる。

putro gacchati. 男兒は行く。

2. putreṇa gamyate. 男兒によつて行かる = 男兒は行く

即ち能動詞の動詞を受動詞の動詞となすときは、前者の主格は變じて具格となる。

上記の例に於て見る如く第一文の corayate は一定の主辭即ち dhanam を有せり、然るに第二文の gamyate は一定の主辭なく、強ひて主辭を設くれば「それは」と譯するの外なし、前者を主辭確定の受動と云ひ後者を主辭不定の受動と云ふ、梵語に於ては他動詞の動詞たるに自動たるに論なく都て之より主辭不定の受動を作ることを得べし、かかる場合の動詞を (Bhāva-vācya) と云ふ。

§ 216. tā 及 tva を名詞、代名詞、形容詞等の語基に附加して、状態、性質等を表示する無形名詞を作る。

vidvat 學識ある。 vidvat-tva (中) 學識ある状態。

çūdra-tva 首陀の状態。 nṛipa-tva (中) 國王たる状態。

kaniṣṭha 最も卑賤なる。 kaniṣṭhatā 最も卑賤なる状態のごとし。

第四十二課

問題

1. 受動詞の現在語基を構成する方法如何。 2. 第十種動詞及び能起相動詞の受動詞現在語基は如何にして之を作り得べきか。 3. 語根の終にある i, u もし y に會せばその變化如何。 4. 受動詞の現在分詞の構成法如何。 5. 能動詞の動詞を受動詞の動詞に改むるときは一文中に起る變化如何。 6. tā, tva の語基構成音の意義如何。

雜語

yuj 7. yujyate	結合す。適合す	rāja-puruṣa	(男)王臣
taḍ 10.	打つ	kṛiṣṇa-sarpa	(男)黒蛇
stu 2.	咏歎す。頌歎す	balāt	(副)強ひて
danīç 1.	咬む	loka	(男)(複數のときは)世人
han 2.	殺す	vidvat	(形)學識ある
dā 3.	與ふ	gāurava	(中)尊重せらるゝ状態
hṛi 1.	とる。奪ふ	tulya	(形)均しき
pra + çams 1.	頌揚す	sva-deça	(中)自國
labh 1.	得	çuṣka	(形)枯れたる。乾燥せる
pūj 10.	敬す。供養す	kāṣṭha	(中)木片
nam 1.	屈す。撓む	mūrkhā	(形)無學なる。愚なる
bhid 7.	破壊す	ādāna	(中)とること
yathā-çakti	(副)力を盡して	pradāna	(中)與ふること
nāiva (na + eva)	(副)決して	kṣipram	(副)疾く
karman	(中)業。事	kāla	(男)時
		rasa	(男)妙味。藥汁

1. na yujyate tathā kartum. 2. Cāuro rāja-puruṣāis tādyate. 3. Nṛpaḥ kavinā stūyate. 4. Narāu kṛiṣṇa-sarpeṇa daḥyete. 5. Putreṇa gamyātām. 6. Dharmo durjanāir atyajyata. 7. Rāvaṇo Rāmeṇāhanyata. 8. Sītā Rāvaṇena balād ahriyata. 9. Tvayā yatha-çakti dīyatām. 10. Sarvāiḥ sthīyatām. 11. Kavayo lokāiḥ praçasyante.
12. Vidvān praçasyate loke vidvān gacchati gāuravam | Vidayā labhyate sarvaṁ vidyā sarvatra pūjyate.
13. Vidvattvaṁ ca nṛpatvaṁ ca nāiva tulyaṁ kadācana | Sva-deçe pūjyate rājā vidvān sarvatra pūjyate ||
14. Namanti phalino vṛikṣā namanti guṇino janāḥ | çuṣka-kāṣṭham ca mūrkhāçca bhidyate na ca namyate ||
15. ādānasya pra-dānasya kartavyasya ca karmaṇaḥ | kṣipram akriyamāṇasya kālaḥ pibati tad-rasam ||

1.—かくなすは、不可なり。 2.—盗人は王の臣下によりて打たる。 3.—國王は詩人によりて、頌せらる。 4.—二人は黒蛇によりて、噛まる。 5.—男兒によりて行かるべし。(男兒行くべし) 6.—悪人は道を捨てたり。 7.—羅刹王は「ラーマ」王の爲めに殺されき。 8.—「シーター」は羅刹王によりて強奪せられたり。 9.—汝は力を盡して(出来るだけ)施與すべし。 10.—都ての人は佇立すべし。 11.—詩人は世人によりて、稱揚せらる。 12.—學識あるものは、世に稱揚せらる、學識あるものは、尊敬を受く學識によりて、一切のものは得らる、學識は常に(至る所)尊崇せらる。 13.—學者たるの狀態と、王者たるの狀態とは、決して、均しからず、王者は、自國に於て尊崇せられ、學者は、至る所尊崇せらる。 14.—果實ある樹は屈す、能ある人は屈す、枯れたる木片と愚人とは折らる、こゝあるも、屈せらる、こゝなし。 15.—取ると與ふるを、なさるべき事とは、疾くなされざれば、時その妙味を飲み去るべし。

第四十二課

未來語基條件法

- § 217. 未來に第一未來第二未來あり、第一未來は、今日中に發生すべき事實、又は汎然將來に於て早晚發生すべき事實を叙するに用ふ隨て、推定、希望、命令、決心の義を示すことあり。第二未來は、今日にあらずして然も一定の將來に於て發生すべき事實を示すに用ふ、通例 çvas 明日等の語と共に用ひらる。
- § 218. 第一未來語基は、語根に直接又は i を介して sya を附加し、之を作る、此の際、語根の母音は重音となる。

- kṛi 作爲す. kar+iṣyati-te budh 覺る. bhotsyati-te (§196.1)
 dā 與ふ. dāsyati-te
 tyaj 捨つ. tyakṣyati-te labh 得. lapsyate (§196)
 ji 征服す. jesyati-te
 vas 住む. vatsyati-te

§ 219. 第十種動詞及び催起相の動詞は、現在語基の終にある a を除き、之に iṣya を附加して未來語基を作る。

- cur 偷む. corayiṣyati-te
 kṛi 作爲す. kārayiṣyati-te
 sthā 立つ. sthāpayiṣyati-te

§ 220. 斯くして作られたる第一未來の變化を擧ぐれば。

kariṣyāmi,	kariṣyāvas,	kariṣyāmas.	} 爲他
kariṣyasi,	kariṣyathas,	kariṣyathas.	
kariṣyati,	kariṣyatas,	kariṣyanti.	
kariṣye,	kariṣyāvahe,	kariṣyāmahe.	} 爲己
kariṣyase,	kariṣyethe,	kariṣyadhve.	
kariṣyate,	kariṣyete,	kariṣyante.	

§ 221. 第二未來は、行爲の作爲者を表示する tri 語基の男性の主格と as (あり)の現實法現在とを合して作る、但し第三人稱は通例 as を附加せず其の場合に於ても as を附加せざること多し。

kṛi	kartri	dṛiç	draṣtri
bhū	bho-itri=bhavitri,	dā	dātri
kartāsmi	kartāsvas	kartāsmah	
kartāsi	kartāstha	kartāsthas	
kartā	kartārau	kartāras	

即ち第一人稱第二人稱に於ては、數の如何に拘はらず kartā (男、單、主)を用ひ、第三人稱に於ては數に従ひひ變化す。

- dātāsmi, 余は與へむ。
 draṣtāsi, 汝は見るべし。

kartārāu, 彼等二人は爲すべし。

§ 222. 条件法は第一未來語基に「a」の過去符を附加して語基とす、其の語尾は、第一類動詞の第一過去の語尾に同じ。

a-dāsyam	adāsyāva	adāsyāma.	} 爲他
a-dāsyas	adāsyatam	adāsyata.	
a-dāsyat	adāsyatām	adāsyān.	} 爲己
adāsyē	adāsyāvahi	adāsyāmahi.	
adāsyathās	adāsyethām	adāsyadhvam.	
adāsyata	adāsyetām	adāsyanta.	

§ 223. 条件法は實際の事實に反せる假定及び此の假定に基づける結果を示すに用ひらる。

yadi nāham abhaviṣyam tatra tadā sā pāpam akariṣyat.

若し余は彼處にあらざらましかば、彼女は罪をなせしならむ。

若し單に假定するのみにて、事實に反せる事を云ふにあらざれば条件法を用ひずして可能法の現在を用ふべし。

yadi so'tra samnihito bhavet tarhi svadeṣam cūra-vad rakṣet.

若し彼此處に居らば、其の時こそ、かれは勇しく自國を護らめ。

§ 224. 受動調の未來及条件法は、都て此等の爲己語尾を有する能動調に同じとす。

dāsyē 余は與へむ。又は余は與へられむ。

dāsyate 彼は與へむ。彼は與へられむ。

但し、此の外、或る動詞は、下に記するごとく、特種の方法にて、未來及び条件法に作るこゝあり。

nāyisyē 余は連れ往かれむ。 anāyisyē 余は連れ往かれしならむ。

§ 225. 未來分詞は、第一類動詞の現在分詞と同一の構造を有す。即ち

爲 他

爲己及び受動

kṛi kariṣyat (ant)

kariṣyamāṇa

bhū bhaviṣyat (ant)

bhaviṣyamāṇa

dā dāsyat (ant)

dāsyamāṇa

nī neṣyat (ant)

neṣyamāṇa

連れ往かむとする。

連れ往かむとする。連れ往かれむとする。

第四十三課

問 題

1. 第一未來と第二未來との用法如何。 2. 第一未來語基の構成法如何。 3. 第十種動詞及催起相動詞の第一未來語基如何。 4. 第二未來語基の構成法如何。 5. 条件法の語基構成法如何。 6. 条件法の用法如何。 7. 条件法と可能法の現在の區別如何。 8. 未來分詞の構成法如何。

雜 語

gam	往く。	gamiṣyati. ganṛi
yudh	闘ふ。(具格を支配す)	yotsyate. yoddhṛi (§196.2)
ji	征服す。	jeṣyati. jetṛi.
vriṣ	雨ふる。	varṣiṣyati. vraṣṭṛi.
pac	煮る。	pakṣyati.
vas	住む。	vatsyati.
driṣ	見る。	drakṣyati.
bhū	あり。なる。	bhaviṣyati.
ud+i	上る。	udeṣyati.
pat	落つ。	patiṣyati.
mṛi	死す。	maṛiṣyati.
tyaj	捨つ。	tyakṣyati.
nirvā	消ゆ。	
nivāpaya	消す。	nirvāpayiṣyati.
dah	焼く。	dhakṣyati. (§196.1)
prach	問ふ。	prakṣyati.
prati-vac	答ふ。	prati-vakṣyati.
adya	(副) 今日。	
çvas	(副) 明日。	
pra-sthā	出發す。	
çighram	(副) 疾く。	
çaçin	(男) 玉兔。	
çiçira-kara	(形) 冷光を有する。	
mahā-paṅka	(中) 大なる沼。大なる泥池	
a-samçayam	(副) 疑ひもなく。必ず。	

vaktri	(男) 説くもの.
çrotri	(男) 聴くもの.
nagna	(形) 裸褌の.
kṣapaṇa	(男) 修行者. 苦行者.
rajaka	(男) 浣衣者. 染絲者.
dhruvam	(副) 必らず.
nīroga	(形) 健全なる. 無病の.

1. Aham adya gamiṣyāmi. 2. Tāu gantārāu. 3. Yena tvam̐ çvo yoddhāsi tam̐ dhruvam̐ tvam̐ jetāsi. 4. Adya varṣiṣyati, çvo'pi vraṣṭā. 5. Sūdo'nnam̐ pakṣyati. 6. Gṛihāt prasthitvā vane vatsyāmi. 7. Gaṅgā-tīram̐ gatvā nadīm̐ draṣyāmi. 8. Asāu çighram̐ nīrogo bhaviṣyati. 9. Astam̐ gate sūrye çaçī çīçira-kara udeṣyati. 10. Yadi tvam̐ mahā-paṅke patiṣyasi tad a-sam̐çayam̐ mariṣyasi. 11. Yadi na pāpam̐ sa naro'tya-kṣyat tadā duḥkham̐ tasyābhaviṣyat. 12. Yadi vayam̐ bhūmāu patitam̐ agnim̐ nirvāpayiṣyāma tad agnis tasya gṛiham̐ adhakṣyat. 13. Yat tvam̐ prakṣyasi tad aham̐ yathāçakti prati-vakṣyāmi.

14. Kim̐ kariṣyanti vaktāraḥ çrotā yatra na vidyate |
nagna-kṣapaṇake deçe rajakālī kim̐ kariṣyanti ? ||

1.-余は今日往かむ. 2.-彼等二人は明日往かむ. 3.-汝は明日(yena)戦はむ人を必らず征服すべし. 4.-今日雨降らむ, 明日も雨降るべし. 5.-一人は食を烹む. 6.-家より出で, 余は林中に住まむ. 7.-恒河の岸に往きて, 余は河を見るべし. 8.-彼れは疾く健康なるべし. 9.-一日西に没したる時は, 月冷光を湛めて(有して)上るべし. 10.-汝若し大なる沼に陥らば, 必らず死せむ. 11.-かの人若し罪惡を捨てざらましかば, 彼には不幸ありしならむ. 12.-若し吾等地上に落ちたる火を消さざらましかば, 火は彼の家を焼きしならん. 13.-爾の間はむことは力を盡して余は答へむ. 14.-聴くものなき時は, 語るものありと雖も, 何をかなさむ, 裸褌行者の團にては, 浣衣者に用なし, (nagna-kṣapaṇaka は deça の形容詞にして, 有財釋なり. § 163.2 参照すべし).

第四十三章

第二過去

§ 226. 第二過去の語基は語根を重複して、之を作る。語基に強中弱の三種あり。強語基は重音又は複重者の母音を有し、中語基は重音、弱語基は平音を有す。1. 強語基の現はるゝ場合は、單數第一人稱第三人稱の爲他にして、2. 中語基の現はるゝ場合は、單數第一人稱第二人

稱の爲他語尾の前なり。其の他の場合には都て弱語基を用ふ。

§ 227. 語尾。第二過去は特殊の語尾を有す。

	爲 他	爲 己
強.中	+a va ma e	vahe mahe
中.	+tha athus a se	āthe dhve
強.	+a atus us e	āte re

此等語尾の中、父音を以て始むるものは、大抵 i を介して語尾と會す。re 語尾のごときは常に然りとす。

§ 228. gam 往く.	強 jagām.	中 jagam.	弱 jagm.
jagāma(jagama)	jagmīva.	jagmima.	} 爲他
jagamitha(jagantha)	jagmathus.	jagma.	
jagāma.	jagmatus.	jagmus.	
jagme.	jagmivahe.	jagmimahe.	} 爲己
jagmiṣe.	jagmāthe.	jagmidhve.	
jagme.	jagmāte.	jagmire.	

§ 229. 下の動詞を諳誦すべし。

jan. 生る	jajāna.	jajñus.
khan. 掘る	cakhāna.	cakhnus.
grah. 執ふ	jagrāha.	jagrihus.
han. 殺す(ghan)	jaghāha.	jaghnus.
driç. 見る	dadarça.	dadriçus.
tud. 打つ	tutoda.	tutudus.
kṛi. 作爲す	cakāra.	cakrus.
budh. 覺る	bubodha.	bubudhus.
nind. 叱責す. 譏毀す.	nininda.	ninindus.

§ 230. 父音を以て終始する語根にして、性質上又は位置上の長母音を中間に有するものは、第二過去に於ける語基に強中弱の區別なし。

nind. 叱責す	nininda.	ninindus.
kṛid. 戯る	cikriḍa.	cikriḍuh.

§ 231. 父音を以て終始する語根にして i, u, ri を中間に有するものは強語基に於て重音とあるのみ。故に二様語基を有するに過ぎず。

tud. tutoda. tutodus.
driç. dadarça. dadriçus.

vid (知る) は決して重複せず。強語基に於て i を e に變ずるのみ。

veda. 余は知りぬ vettha. 汝は知りぬ veda. 彼は知りぬ
vedma. 吾等は知りぬ vida. 汝等は知りぬ vidus. 彼等は知りぬ

§ 232. 父音を以て終始する語根にして, a を中間に有し, 語根重複の際代表音を出すを要せざるものは, 強中の語基に於て重複するも, 弱語基に於ては通例 a を e に變ずるのみにして重複せず。

pat. 落つ papāta. petus.

然れど, gam の弱語基は gem とならざる所以は, 語根重複の際 ja の代表音を出すを以てなり, khan, grahi のごときも然り。(§193参照)

第四十四課 問題

1.—第二過去の語基は如何にして之を作るか。 2.—強語基の母音は如何。 3.—中語基の母音は如何。 4.—強中二種の語基の現はれ来る場合を示すべし。 5.—第二過去の語尾を記誦すべし。 6.—gam の第二過去を記すべし。 7.—第二過去の語基に強中弱の區別なき語根は如何なる語根なるか。 8.—動詞にして、其の第二過去の語基は二種なるものあり、如何なる種類の動詞なるか。 9.—vid は第二過去に於て重複するか。 10.—強中二種の語基に於てのみ重複し、弱語基に於て重複せざる動詞あり、如何なる種類の動詞なるか。

雑語

saras-tīra (中) 池の岸・池塘。 vyāghra (男) 虎
sarasi + ja (中) 池中に生ずるもの。蓮 parivāra (男) 扈從 (周圍を圍繞するもの)眷屬。
(sarāsi + jan)
bhūmi (女) 大地・土地。 sva-vivara (男・中) 自己の穴。
mṛigayā (女) 狩獵。 çabda (男) 音・聲。
laguḍa (男) 根・棒。 upa + viç. 6. 坐す。
anu + gam. 1. 従ひ往く。

1. saras-tīra¹ upaviçya sarasi-jaṁ dadriçuḥ. 2. rājapuruso laguḍena cāuraṁ tutoda. 3. guruḥ çiyān nininda. 4. kapayo vṛikṣād bhūmau petuḥ. 5. catvāro bālakā rathena nagarāya jagmire. 6. mūṣikā bhūmiṁ cakhnire. 7. aham Ayodhyāyāṁ jagāma. 8. nṛipo mṛigayāṁ gatvā bahūn mṛigāṁç² cāikaṁ³ vyāghraṁca jaghāna. 9. açvena gacchantaṁ nṛipaṁ tasya parivāro' nu jagmuḥ. 10. Rājūḥ puruṣā sva-rājānaṁ na veduḥ. 11. mūṣiko bhūmiṁ khanitvā svavivaraṁ cakāra. 12. vṛikṣasya mūle dvāu bālakāu cikriḍatuḥ. 13. Tāv⁴ etam bālakam tutudatur iti çrutvāham⁵ tāu nininda. 14. kim tvaṁ mahāçabdam cakārtha? 15. mahāsimham dṛiṣtvā tad-bhayād vyaṁ maha-çabdam cakṛima.

1. (e+u) 2. (n+c) 3. (a+e) 4. (u+e) 5. (ā+a)

1.—池塘に坐して彼等は蓮を看たり。 2.—王の臣下は棒にて盗人を打てり。 3.—師は弟子を叱責せり。 4.—群猿は樹より地上に落ちたり。 5.—四人の小兒は車にて都城に往けり。 6.—群鼠は地を堀れり。 7.—余は難勝城に往けり。 8.—王は獵をなして許多の鹿と一疋の虎とを殺せり。 9.—馬にて往く王に王の扈從は跟ひ行けり。 10.—王の臣下は己等の王を知らざりき。 11.—鼠は地を堀りて己の穴を作りき。 12.—樹の根に(下に)於て二人の小兒は遊戯せり。 13.—彼等二人は此小兒を打てりと聞きて、余は彼等二人を叱責せり。 14.—何故に汝は大なる聲をなせるか。 15.—大なる獅子を見てこれを恐れて、(恐怖より)余等は大なる聲をなせるなり。

第四十四章

母音又は va, ya を以て始むる語根及び母音を以て終る語根の第二過去

§ 233. 母音を以て始むる語根は、強語基に於て其の母音を複重音となすのみにて重複せず。i と u とは iy, uv を以て重複せしむ。

ah 語る。云ふ。 āha かれは云へり。 i 往く。 iyāya
ad 食す。 āda かれは食せり。 (iy + āi + a)
āp 到達す。 āpa かれは到達せり。
iṣ 希求す。 iyeṣa かれは希求せり。
ri 往く。 āra かれは往けり。

然れども a 及び ri は、時ありて ān を重複音となすことあり。

arc 咏嘆す。 ānarca

§ 234. Ya, va を以て始むる語根は、i, u を以て重複音とす。

vac 語る。云ふ。 uvāca かれは云へり。 ūcus

.yaj 祀る. iyāja かれは祀る. ijus

§ 235. 語根の終にある ā 及び複母音は、強語基に於て語尾の a と合して āu となり、弱語基に於て、語尾の始にある母音又は i と會して語根の母音消滅す。

dā 興ふ. dadāu. daditha (dadātha) dadāu
 gāi 歌ふ. jagāu. jagitha (jagātha) jagāu
 pā 飲む. papāu. papitha papāu

其の他の母音は、語根の終に於て少數の例を除く外、都て一般の變化に従ふ。

§ 236. bhū

babhūva	babhūviva	babhūvima	} 爲他
babhūvitha	babhūvathus	babhūva	
babhūva	babhūvatus	babhūvus	
babhūve	babhūvivahe	babhūvimahe	} 爲己
bābhūviṣe	babhūvāthe	babhūvidhve	
babhūve	babhūvāte	babhūvire	

§ 237. as の變化。

āsa	āsiva	āsima
āsitha	āsathus	āsa
āsa	āsatus	āsus

第四十五課

問題

1.—母音を以て始むる語根は、如何にして通例第二過去の語基を作るか。 2.—「i」及「u」を以て始むる語根は、如何にして第二過去の語基を作るか。 3.—ya 及 va を以て始むる語根の第二過去の語基如何。 4.—ā 及び複重音を以て終る語根の第二過去の強語基は、a の語尾と合して如何に變化するか。 5.—bhū の第二過去を擧ぐべし。 6.—as の第二過去を記すべし。

雑語

madhura (形) 好き・樂しき・微妙なる
 gīta (形) 歌はれたる (gāi)

gīta	(中) 歌曲
nakula	(男) 大黃鼠・鼯鼠
vaṇik-putra	(男) 商人の子
saktu	(男) 麥の煎り粉
kūpa	(男) 井
deva	(男) 神・天人・主・王
ājñā	(女) 命令
svāmin	(男) 主・王・所有者
carāṇa	(男・中) 足
ābharāṇa	(中) 粧飾・莊嚴
bhūṣita	(形) 飾られたる
vacas	(中) 語.—kri 言に従ふ
Daṇḍakāraṇya	(中) タンダカ林
vana-gamana	(中) 林に往くこと
çoka	(男) 哀痛・憂愁
pīḍyamānā	(形) 苦しめられたる (piḍ の受動現在分詞)
krandana	(中) 號叫
strī	(女) 婦
antaḥ-pura	(中) 后宮
dur-bala	(形) 弱き
çaraṇa	(中) 救を求むる所・適歸する所
vi-vatsa	(形) 犢を失へる
vyāpādita	(形) 殺されたる
gāi	1. 歌ふ
ā-nī	1. 將來す・連れ來る
vac	2. 語る nṛipam vac 王に語る(業格を支配す)
prati + vac	2. 對して語る・答ふ
ā + jñā	9. 知る・聽く .ā + jñāpaya(催起相)聽かしむ・命令す
ā + yā	2. 來る
upā(upa + ā) + gam	1. 近づく

luth	6.	轉び廻はる. 伏し轉ぶ.
sam + ā + nī	1.	伴ひ來る.
pra + sthā	1.	出發す. 發足す.
rud	1.	泣く. 慟哭す.
ā + ling	1. 10.	抱く.
sam + jan	4.	(爲己) 生ず.

1. sã kanyã madhuram̐ gītam̐ jagāu. 2. kavir̐ kīrtim̐ iyeṣa. 3. sa vaṇik-putrah̐ pratyaham̐ saktum̐ brāhmaṇebhyo dadāu. 4. sa bālakah̐ kūpājalam̐¹ ānināya. 5. ghṛitena narā devam̐ ijuh. 6. ete janā nṛipam̐ ūcuḥ. 7. rājña ājñām̐ ṣrutvā rāja-puruṣaḥ̐ pratyuvāca: yathā deva ājñāpayatīti. 8. āyantam̐ svāminam̐ dṛiṣṭvā nakulaḥ̐ satvaram̐ upāgamyā svāminaḥ̐ caraṇayor̐ luloṭha. 9. sarpo nakulena vyāpāditas̐ tasthāu. 10. aḥvāt̐ patito rājā mamārā. 11. rājño gṛiḥe dvāu brāhmaṇāv̐² ūṣatuḥ.³ 12. nṛipasya ḥatam̐ putrā babhūvuḥ. 13. Janako rājā sva-kanyām̐ Sītām̐ sarvābharāṇa-bhūṣitām̐ samāniya tām̐ Rāmāya dadāu. 14. Rāmaḥ̐ pitur̐ vacanam̐ ṣrutvā tad-vacaḥ̐ kartum̐ iyeṣa. 15. sva-mātaram̐ āliṅgya sa Rāma Daṇḍākāraṇyam̐ pratasthāu. 16. Rāmasya vana-gamanam̐ ṣrutvā mātā ḥokena pīdyamānā bhūmāu papāta rurodaca. 17. tataḥ̐ mahākrandanam̐ strīṇam̐ antahpure samājajñe. 18. yo durbalasya ḥaraṇam̐ āsid̐ acakṣusām̐ ca cakṣuḥ̐ sa Rāmaḥ̐ kutra jagāmeti sarvā striyo vi-vatsā iva dhenavo ruruduḥ.

1. (t + j = §141.1) 2. (āu + ū = āvā) 3. (ūṣatus は vas の第三過去)

1. 一かの女子は、樂しき歌曲を歌へり。2. 一詩人は聞譽を希求せり。3. 一かの商人の子は毎日、麥の煎粉を婆羅門に與へたり。4. 一かの童子は井より水を持ち來れり。5. 一彼等は酥にて神を祀れり。6. 一此等の人々は、王に云へり。7. 一王の命令を聞きて、王臣は對へぬ、王の命するごとく。(なすべし)と。8. 一主人の來れるを見て、黄鼠は疾く近寄りて、主人の兩足の下に伏し轉びぬ。9. 一蛇は、黄鼠の爲に殺されて居たり。10. 一馬より落ちたる王は死せり。11. 一王の家に於て二人の婆羅門は住せり。12. 一王には百人の男子ありき (§130)。13. 一「ヂヤナカ」王は、己の女なる「シーター」を伴ひ來りて、かのあらゆる飾にて飾られたるもの(シーター)を「ラーマ」王に與へき。14. 一「ラーマ」王は父の語を聽きて、その言に従はむことを希ひたり。15. 一己の母を抱きてのち、かの「ラーマ」王は「タンドカ」林に赴けり。16. 一「ラーマ」王の林に往けるを聽きて、母は憂愁に打惱みて、地に倒れ、慟哭せり。17. 一是に於て、諸の婦人の大なる號泣は、后宮に於て起れり。18. 一弱きものの、救を求むる所にして、目なきものに、目こなれるかの「ラーマ」王は、那處に往けるかと云ひて、都の婦人は憤を失へる牝牛のごとく、慟哭せり。

第四十五章

第十種動詞及び催起相動詞の第二過去・
受動調動詞の第二過去・第二過去分詞

§ 238. 第十種動詞及び催起相動詞は、現在語基に ām を附加し, kri, bhū as の第二過去と共に第二過去を作る。

cur 偷む. coraya + ām = corayām cakre かれは偷めり.

tuṣ 喜ぶ. toṣaya + ām = toṣayām āṣa かれは喜ばせり.

kath 語る. kathayām babhūva かれ語りき.

その他. 上記の動詞の外. ās (坐す) のごときは、第二種動詞なるも、āsām cakre かれは坐せり. とする。

§ 239. 受動調動詞の第二過去は、爲己語尾を附加する能動調の動詞に、同じ。

dade かれは與へき. かれは與へられき.

cakre かれは作れり. かれは作られき.

dadṛiḥe かれは見き. かれは見られき.

§ 240. 第二過去分詞の能動調

第二過去の弱語基 + i + vas (爲他語尾)

第二過去の弱語基 + āna (爲己語尾)

例せば gam の第二過去の弱語基は jagm なり. 故に直接又は i を介して vas を附加す。

= jagmvas jagmivas とある。

又 nī 連れ往く, の強語基は nināi にして中語基は nine. 弱語基は nini なり. 故に nini + āna = ninyāna とする. jagmvas 又 jagmivas は三様語基にして、強語基は —vāms. 中 —vat. 弱 —us なり. 故に其の女性語基は —uṣī あり. (§128. §76.4 参照)。

第二過去の能動調の分詞は、後代の梵語に於て、比較的必要なし、其の最も必要なるは、受動調の分詞なりとす。

§ 241. 1. 第二過去の受動調分詞は、已に讀者の知悉せるごとく、語根に直接又は i を介して、ta 又は na を附加して之を作る. (§82 参照)。

kṛi	kṛita	mṛi	mṛita
pat	patita	labh	labdha (§196.2)
budh	buddha	gam	gata

2. 催起相及び第十種動詞も、其の現在語根即ち現在語基より aya を除きたるものに ta を附加す。

cur corita 儻まれたる。

sthā 止まる。sthāpita 止められたる。

budh 覺る。bodhi ta 覺らされたる。

自動調の場合にありては、jagmivas も gata も、意義の歸着する所は同一なれど、語典上、一文の中に於ける用法を異にす、例せば、gata は具格の名詞代名詞と共に來りて、mayā gataṁ, tvayā gatam のごとく、われ往けり、汝は往けり、の義あるも、mayā jagmivas, tvayā jagmivas は云ふことなきなり、然れど名詞代名詞の附加辭として用ひらるる場合には、二者同一なり、nagarāya gato'ham. も nagarāya jagmivān aham も「都に往ける余は」と云ふ意義に於ては同一なり其の他 dhāvita 走れる、patita 落ちたる等は、上記の例に照して、同じく知るべし。

3. 第二過去の受動分詞に vat (vant) を附加して、能動調の分詞又は普通動詞を作る。

kṛita + vat = kṛitavat (vān) かれば作爲せり。故に、此の場合には、kṛitavān = cakṛivan = cakāra なり。例

rājā sa-parivaro mṛigayām kṛitavān (cakāra) 國は扈從を卒ひて、獵をなせり。

narah sarpaṁ laguḍena vyāpāditavān 人は棒にて、蛇を殺せり。

§ 242. 次に受動調の第二過去分詞を作るべき na は、母音か、然らざれば、

g. j. d に終れる語根に附加せらる。

hā 捨つ。 hīna 捨つられたる。缺如せる。空しき

lū 切る。裁斷す。 lūna 切られたる。

bhid 破壊す。 bhinna 破壊されたる。 (§105.2)

chid 切る。 chinna 切られたる。 (§105.2)

bhaj 破壊す。打碎く。 bhagna 打碎かれたる。 (§105.2)

§ 243. 1. 分詞の kāraka. 分詞の kāraka は普通動詞の kāraka に同じ。即ち、普通動詞の形に於て、具格を支配するものは、分詞となるも具格を支配し、爲格を支配するとならば、分詞となるも、依然、爲格を支

配す。

2. 分詞の時、分詞の時を別ちて過去、現在、未來となすも、此の場合に所謂過去現在、未來は、普通動詞の場合に於ける過去、現在、未來とは、其の意義を異にするものたるを知らざるべからず、分詞にして、もし一文の普通動詞と同時に起れる行爲又は状態を示すものならば、其の行爲等のありし時は、過去なることあるも、之をば現在分詞とは云ふなれ、もし又、普通動詞の時に先てる時ならば、實際の時は過去たると、現在たると、はた未來なるとに論なく、盡く之を過去分詞と云ふを得べし、同じく、普通動詞の時に比して、これより後の時ならば其の分詞の時は未來なり。例

çayānā bhujjate Yavanāḥ 希臘人は臥して食す。

çayānā 即ち çī (臥す) の行爲と、bhuj (食す) の行爲とは、同時なることを示す。

Aham ekadā Dakṣiṇārāṇye carann apaçyam (§122.1) 余はあるとき、南方の林の中に遊びし際、見たりき、即ち car (遊ぶ) と driç (見る) とは同時にありしものなれば、apaçyam の第一過去たるに拘はらず、car を現在分詞に變化して、caran とせるなり。

Sarpo laguḍena cirasi tāçitaḥ pañcatvam upagataḥ. 棒にて頭を打たれたる蛇は、死せり、即ち、打撃せられし時は、死せるときに先てることを示せるなり。

§ 244. 分詞の用法。

分詞の用法は、從來述べ來りしものの外 (§147.1.2.等) 種々の用法あり、此等は、特に記載するを要せず、少しく意を用ふれば、自から判然すべしと雖も、暫らく其の主要なるものを掲げ、自餘は學者の推斷に委ぬべし。

1. 時。 aham ekadā Dakṣiṇārāṇye carann apaçyam. 余はあるとき南方の林の中に遊びし際見たりき。
2. 條件。 Tiṣṭhantaṁ gururṁ çiṣyo'nutiṣṭhet. 師にして、もし、立留まらば、弟子は從ふて立留まるべし。
3. 容認。 此の場合には、通例 api と共に來る。

āpadī tiṣṭhann api na dharmān tyajet. 人は苦厄の中に處するも、道を捨てざれ。

4. 方法. çayānā bhujjate Yavanāḥ. 希臘人は臥して、食す、即ち食事の方法を述べたるなり。
5. 理由. Sa simho vivarāntargatam mūṣikam alabhamāno'cintayat. かの獅子は、穴中にある鼠を捉え得ざるより、思惟せり。

第四十六課

問題

1.—第十種動詞及び催起相動詞の第二過去は、如何にして、之を作るか。 2.—受動調動詞の第二過去は如何にして、之を作るか。 3.—能動調の第二過去分詞の構成法如何。 4.—受動調の第二過去分詞の構成法如何。 5.—na は如何なる動詞に附加せらるべきか。 6.—第二過去の受動分詞に vat を附加するときは、其の意義如何、例を擧げて之を説明すべし。 7.—分詞の時と普通動詞の時と異なる點を説くべし。 8.—分詞の用法如何。

第四十六章

第三過去

§245. 第三過去は、第一過去と同じく、語基の前に附するに a の過去符を以てす。その構成法に七種あり。

- | | | | |
|---------|--------------|-----------|--------------|
| 1. 語根語基 | a + 語根 | 5. is 語基 | a + 語根 + is |
| 2. a 語基 | a + 語根 + a | 6. sis 語基 | a + 語根 + sis |
| 3. 重複語基 | a + 重複語根 + a | 7. sa 語基 | a + 語根 + sa |
| 4. s 語基 | a + 語根 + s | | |

語尾にも二種あり。第一種は、第一第二第三第七の四種の語基に附加すべきものにして、第一過去の語尾に同じ。

am	va	ma	i	vahi	mahi
s	tam	ta	thās	āthām(ethām)	dhvam
t	tām	an又はus	ta	ātām(etam)	anta(ata)

第二種は第四第五第六の三種の語基に附加すべきものなるが、語基の終にある s と合して其の状恰も as の第一過去より「ā」を除きたるに同じ。但し、爲他複数第三人稱は「sus」となり、san とはならず。

(ā) sam	sva	sma	(ā) si	(ā) svahi	(ā) smahi
---------	-----	-----	--------	-----------	-----------

(ā) sīs	stam	sta	(ā) sthās	(ā) sāthām	(ā) dhvam
(ā) sīt	stām	sus	(ā) sta	(ā) sātām	(ā) sata

§246. 語根語基. この種の動詞は bhū 又は dā のごとく ā に終る動詞にして、大抵爲他語尾をとる。

a-bhūvam	abhūva	ābhūma	a-dām	adāva	adāma
abhūs	abhūtam	abhūta	adās	adātam	adāta
abhūt	abhūtām	abhūvan	adāt	adātām	adus

§247. a 語基. lip 塗る. a-lipa 語基. m 及び v の前には、「a」は長くなり、a を以て始むる語尾の前には消滅す。

a-lipam	a-lipāva	alipāma	a-lipe	alipāvahi	alipāmahi
a-lipas	a-lipatam	alipata	alipathās	alipethām	alipadhvam
a-lipat	a-lipatām	alipan	alipata	alipetām	alipanta

§248. 重複語基. 此の種類に屬する動詞は、第十種動詞及び催起相の動詞にして、都て aya を除去したる現在語根を以て語根とす。第三過去の重複語基は重複音に重を置き、比較的本來の語根を輕視する傾向あり。故に重複音の母音は常に長母音にして、其の本來語根の母音は平音又は短母音なるを常とす。cur の現在語基 coraya より aya を除去し、cor となし、cucor とし、重複音の u を長くし、本來の語根の o を平音とし、cūcur となして、之に a の過去符を附加して、acūcur とし、語基構成音の a を加ふれば、a-cūcura となる。是れ即ち第三過去の語基なり。

jan 生る. janaya 生む. a-jijana 第三過去の語基。
a-jījanat. ajījanatām. ajījanan. 等都て第二種に準じて變化せしむべし。

§249. sa 語基. 此の種類に屬する動詞は a 又は ā 以外の母音を有して ç, ś, h に終れる動詞なり。

diç 指示す.	adikṣa				
a-dikṣam	adikṣāva	adikṣāma	adikṣi(eとからず)	adikṣāvahi	adikṣāmahi
a-dikṣas	adikṣatam	adikṣata	adikṣathās	adikṣāthām	adikṣādhvam
a-dikṣat	adikṣatām	adikṣan	adikṣata	adikṣātām	adikṣanta

第四十七課

問題

1.—第三過去の語基を構成する方法に幾種ありや。 2.—之に附する語尾に幾種ありや。 3.—此等各種の語尾を記すべし。 4.—語根語基の一例を示し、之を變化せしむべし。 5.—a 語基の一例を示し之を變化せしむべし。 6.—a 語基の終にある a は語尾と會する際、如何なる變化をなすか。 7.—重複語基の構成法如何。 8.—其の一例を示し之を變化せしむべし。 9.—重複語基に屬する動詞は如何なる動詞なるか。 10.—sa 語基に屬する動詞は如何なる動詞なるか。

第四十七章

第三過去の續

§ 250. s 語基等. 前章に述べたる語基は、皆一樣語基なりしも、s 語基等の三種は皆強中弱の語基を有す。此の點よりすれば第一第二第三第七の第三過去語基は、第一類動詞の現在語基に比することを得べく、第四第五第六の第三過去語基は、第二類動詞の現在語基に比することを得べし。

§ 251. s 語基. 爲他語尾に會して強語基となり、爲己語尾に會して中語基又は弱語基となる。

nī 導く.	a-nais 強.	a-nes 中.			
a-nāiṣam	a-nāiṣva	a-nāiṣma	aneṣi	aneṣvahi	aneṣmahi
a-nāiṣis	a-nāiṣtam	a-nāiṣta	aneṣṭhās	aneṣāthām	aneṣdhvam
a-nāiṣit	a-nāiṣtām	a-nāiṣus	aneṣta	aneṣātām	aneṣata

anes + dhvam = aneṣ + dhvam = aneṣ + dhvam (2145.1.) = aneṣdhvam.

§ 252. is 語基. 爲他語尾に會して、強語基又は中語基となり、爲己語尾に會して、中語基又は弱語基となる。

lū 切る.	a-lāvis 強.	alavis 弱.			
alāviṣam	alāviṣva	alāviṣma	alaviṣi	alaviṣvahi	alaviṣmahi.
alāviṣ	alāviṣtam	alāviṣta	alaviṣṭhās	alaviṣāthām	alaviṣdhvam.
alāviṣit	alāviṣtām	alāviṣus	alaviṣta	alaviṣātām	alaviṣata.

§ 253. sis 語基. 此の種類に屬する動詞は、ā に終れる動詞にして、然も第一種に屬せざるもの、及び e, o, ai 等に終れる動詞なり。

後者の母音は sis に會するに當り皆 ā となる。yā 往く。ayāsiṣ-am. glāi 疲困す。凋枯す。a-glāsiṣam 等是なり。

§ 254. 受動調の第三過去は、爲己語尾の第三人稱單數を除く外は、都て能動調の語基に爲己語基を附加せるものと同じ、爲己語尾の第三人稱單數に至りては、語根に i を附加して之を作る。此の際、語根の中にある母音は重音となり、語根の終にある母音は複重音となる。

nī 連れ往く.	a-nāi + i = anāyi	かれは連れ往かれき。
ṣru 聞く.	a-ṣrāu + i = aṣrāvi	かれは聞かれき。
kri 作爲す.	a-kār + i = akāri	かれは作爲されき。
diṣ 示す.	a-deṣ + i = adeṣi	かれは示されき。
budh 覺る.	a-bodh + i = abodhi	かれは覺られき。
但し dā 與ふ.	a-dāy + i = adāyi	かれは與へられき (y を挿入す)
han 殺す.	a-ghān + i = aghāni	かれは殺されき (h は gh となる)

§ 255. 可能法の第三過去. 可能法の第三過去は、爲他語尾の前にては yās. 爲己語尾の前にては sī を語根に附加して之を作る。此の際、語根の母音は、甚だ不規則なる變化をなす。即ち短母音は長母音に變じ、平音は重音となり、ā は e となるがごとし。

dā deyās dāsī のごとし。

§ 256. 可能法の第三過去の爲他語尾は、其の現在と同じ。

deyās-am	deyāsva	deyāsma.
deyās	deyāstam	deyāsta.
deyāt	deyāstām	deyāsus.

其の爲己語尾は、現在に於ける語尾と大略同じきも、語尾の始又は中に存在する t, th, dh の前には、s を挿入するの差あり。即ち āthām は āsthām となるがごとし。

dāsiya	dāsivahi	dāsīmahi.
dāsiṣṭhās	dāsiyāsthām	dāsiṣdhvam. (dā + sī + ṣ + dhvam)
dāsiṣta	dāsiyāstām	dāsīran.

§ 257. 可能法の第三過去は常に祝福祈誓の義を示すに用ひらる。殊に第

一人稱に於ては、自己の切に希望することを示す爲に用ひらる。

bhū あり……となる。發生す。bhūyāt かれをしてあらしめよ。
 kri 作爲す。 kriyāt かれをして作爲せしめよ。
 sthā 居る。留る。立つ。 stheyāt かれをして留らしめよ。
 dā 與ふ。 deyāt かれをして與へしめよ。
 vi-dhā 實行す。 vidheyāt かれをしてなさしめよ。

kṛita-artho bhūyāsam 願はくば、余をして、望を達せるものたらしめよ。
 vīra-prasavā bhūyāt 彼女をして、勇者を生むものたらしめよ。

第四十八課

問題

1.—s 語基の構成法如何。 2.—is 語基の構成法如何。 3.—sis 語基に關する動詞は如何なる動詞なるか。 4.—受動調の第三過去は能動調の第三過去の語基に爲己語基を附加せるもの、如何なる點に於て異同あるか。 5.—可能法の第三過去の語基は如何にして作るか。 6.—其の語尾は如何。 7.—可能法の第三過去の意義如何。

第四十八章

希求相—重複相—疑名詞相

§ 258. 本書已に動詞の原始相及び催起相を説き、其の調と體と時と法とを逐ふて、都て叙説し終れり。餘す所は希求相、重複相、疑名詞相の三相なりとす。此等の相は、語典上の理論よりすれば、固より原始、催起の兩相と同じく、都ての調と體と時と法とを有すべきものなれども、實際に於ては、必ずしも然らずして、其の稍々必要ありと認むべきは、現在語基と分詞體とに過ぎず。自餘のものに至りては、實際存在せざるもあり、又偶ま存在するも、其の使用せらるゝ場合、至て僅少なれば、後代の梵語を修むるものには、殆んど顧慮するを要せざるなり。

§ 259. 希求相能動調の現在。希求相能動調の現在語基は、通例、語根を重複し、直接又は i を介して sa を附加し之を作る。かくして作れる語基は、第六種動詞の現在語基に準じて變化す。但し、動詞にして、

i を介し sa をとるものは、其の語根の母音は、通例、重音となる。
 tud 打つ。 tu + tud + sa = tututsati かれは打たむと欲す
 vid 知る。 vi + vid + sa = vivitsati かれは知らむと欲す
 vi + vid + iṣa = vividiṣati ”
 budh 覺る。 bubodh + iṣa = bubodhiṣati かれは覺らむと欲す
 bubudhiṣati. bubhutsate

或る動詞は、多少不規則なる方法にて、希求相の現在語基を作ることあり。

āp 到達す。得。 ip + sa = ipsati かれは得むと欲す
 kri 作爲す。 cikir + sa = cikirṣati かれは爲さむと欲す
 dā 與ふ。 did + sa = ditsati かれは與へむと欲す
 ji 征服す。 jigī + sa = jigīṣati かれは征服せむと欲す
 labh 得。 libh + sa = lipsati かれは得ばやと思ふ
 mṛi 死す。 mumūr + sa = mumūrṣati かれは死せばやと思ふ

現實法の現在。

ipsāmi ipsāvas ipsāmas ipsāni ipsāva ipsāma

現實法の第一過去。

āipsam āipsāva āipsāma ipseyam ipseva ipsema

可能法の現在。

希求相の現在語基より、a を除きたるものを、希求相の語根と云ふ。
 ipsa-a = ips. 是れなり。

- § 260. 1. 希求相受動調の現在語基は、希求相の語根に ya を附加して之を作る。 ipsyate かれは得られむと欲せらる。
 2. 希求相の語根に、u を附加して名詞又は形容詞を作る。此の種の名詞、形容詞は、通例業格を支配す。
 āp ipsu のごとし。 ipsus 得むと欲するもの。 (§44. 参照)
 han jighāmsu mām jighāmsus 余を殺さむと欲するもの。
 3. 希求相の語根に、ā を附加すれば、抽象名詞を得。
 jānā 知る。 jījānāsā 知らむと欲する願。好奇心。
 4. 希求相の現在は、時ありて單に未來を示すことあり。
 pat pipatiṣati 倒れむとす。

§ 261. 重複相能動調の現在。重複相の能動調は、二種の方法によりて、現在語基を作る。

1. 單に語根を重複す. *dā* 與ふ. *dādāti* かれは與へ. 與ふ.
jñā 知る. *jājñāti* かれは熟知す.
2. 語根を重複して更に之に *ya* を附加す.
kram 歩行す. *camkramyate* 歩行し歩行す.
pac 煮る. *pāpacyate* 煮且つ煮る.

§ 262. 擬名詞相能動調の現在。

擬名詞相は名詞の語基より作り、名詞の示せるものとなり、又は之をなし、又は希ひ、又は之に擬するの義に用ひらる。

<i>darpaṇa</i> (男)鏡.	<i>darpaṇati</i> かれは鏡なり.
<i>panke-ruh</i> 泥中に生ずるもの.蓮.	<i>pankeruhati</i> かれは泥中の蓮のごとし.
<i>ripu</i> (男)仇敵.	<i>ripavati</i> かれは仇敵となる.
<i>go</i> (女)牝牛.	<i>gavyati</i> かれは牝牛を得むことを希ふ.
<i>rājan</i> (男)王.	<i>rājāyati</i> かれは王者に擬す. 王者ぶる.

§ 263. 擬名詞相能動調の現在語基を作る方法。

1. 名詞の語基を以て之に充つ. 此の場合には、第一種動詞のごとく變化す。
darpaṇa darpaṇati のごとし.
2. 名詞の語基に *-ya, -aya, -āpaya* を附加す. 此の場合には第十種動詞のごとく變化す。
rājan rājāyati かれは王者に擬す.
3. *kāmya, -sya, -asya* を附加す. 此の場合には第四種動詞のごとく變化す.

§ 264. その屢々使用せらるゝものは、下に記するごとし。

<i>cira</i> (形) ながく(時の)	<i>cirayati, cirāyati</i> ながびく. 遲滯す.
<i>padma</i> (中) 紅蓮の花.	<i>padmāyati</i> 紅蓮の花に似たり.
<i>tapas</i> (中) 苦行.	<i>tapasyati</i> 苦行す.
<i>namas</i> (不) 歸命. 禮拜.	<i>namasyati</i> 歸命す. 禮拜す.
<i>kṛiṣṇa</i> (形) 黒く.	<i>kṛiṣṇāyate</i> 黒くす.
<i>putra</i> (男) 男子.	<i>putriyati</i> 男子をほりす.
<i>rājan</i> (男) 王者.	<i>rājāyati</i> 王者に擬す.

第四十九課

問 題

1. 希求相能動調の現在語基は如何にして作るか.
2. 希求相の語根とは如何.
3. 希求相受動調の現在語基は如何にして作るか.
4. 重複相能動調の現在語基は如何にして之を作るか.
5. 擬名詞相の意義如何.
6. 擬名詞相能動調の現在語基は、如何にして之を作るか.

雜 語

<i>jñā</i> 知る. <i>jijñāsamāna</i> .	<i>ācārya</i> (男)阿闍梨師.
<i>druma</i> (男)樹.	<i>varṣaṇa</i> (中)降雨. 雨ふること.
<i>drumāyate</i> 樹のごとく氣取る.	<i>vaṇij</i> (男)商人. 賈人.
<i>pīḍita</i> (形)打苦められたる. 打惱める.	<i>ati-bhāra</i> (男)過重なる荷物. 負擔.
<i>Gaṅgā-kūla</i> (中)恒河の岸.	<i>vāhana</i> (中)運搬すること.
<i>samam</i> (不)共に. 具格を支配す.	<i>gardabha</i> (男)驢.
<i>sakhya</i> (中)友誼.	<i>pīḍyamāna</i> (形)打惱まされる.
<i>prīti</i> (女)歡. 好.	<i>vidvat</i> (形)學識ある. 賢なる.
<i>han</i> 殺す <i>jighāmsati</i> .	<i>ni-vārita</i> 遮障されたる.
<i>pā</i> 飲む <i>pipāsate, pipāsu</i> .	<i>ṣabda-vidyā</i> 聲明.
<i>pat</i> 落つ <i>pipatiṣati</i> .	<i>triṣ</i> (女)渴.
<i>mṛi</i> 死す <i>mumūrṣati, mumūrsu</i> .	<i>kṣud</i> (女)飢.
<i>bhū</i> なる <i>bubhūṣati</i> .	<i>dharaṇi</i> (女)大地.
<i>labh</i> 得 <i>lipsati, lipsu</i> .	<i>deṣa-antara</i> (中)異邦. 他國.
<i>pāda-pa</i> (男)足にてのむもの. 樹.	<i>prabhūta</i> (形)ただ多く. 莫大の.
<i>eraṇḍa</i> (男)伊蘭樹.	<i>ḥlāghya</i> (形)賞讚せらるべき.
<i>aṅgāra</i> (男)炭.	<i>alpa-dhī</i> (形)無學なる. 愚なる.
<i>kara</i> (男)手.	<i>nirasta</i> (形)あき.
<i>upa + dhāv</i> . 1. 急ぎ行く. 就く.	<i>uṣṇa</i> (形)熱き.
	<i>ḥita</i> (形)冷かなる.

1. *mām jighāmsuḥ cāuro rāja-puruṣāir nivāritaḥ*.
2. *Eṣa bālako ṣabda-vidyām jijñāsamānaḥ kasya cidācāryasya gṛiham upadhāvati*.
3. *Triṣā pīḍito'ham jalām pipāsur babhūva*.
4. *prabhūta-varṣaṇād Gaṅgā-kūlam*

pipatiṣati. 5. kṣudā pīḍyamāno naro mumūrṣati. 6. prabhūta-dhanam
lipsavo vañijo deçāntaram prastathuḥ. 7. Kāmasya vana-gamanam
çrutvā dharanīm gatā Kāuçalyā mumūrṣati. 8. paçya, tava gardhabho
ati-bhāra-vāhanād durbalo mumūrṣur ivā bhavati.

9. yatra vidvajjano¹ nāsti² çlāghyas tatrālpadhīr² api |
nirasta-pādape deça³ eraṇḍo'pi drumāyate ||

10. durjanena samam sakhyam prītim cāpi¹ na kārayet |
uṣṇo dahati cāngārah¹ çītaḥ kṛiṣṇāyate karam ||

1. (t+j) 2. (a+a) 3. (e+e)

1. 一余を殺さんとする盜は、王の官吏によりて抑止せられたり。2. 一この兒童は聲明を知らむと欲し、ある師の家に行く。3. 一余は渴に逼りて、水を飲まむと欲せり。4. 一甚しき降雨の爲めに恒河の岸は崩れんとす。5. 一人は飢餓に逼り死せんとす。6. 一商人は許多の財物を得むことを希ひて、他國に赴けり。6. 「ラーマ」王の林に往けるを聞きて、地に倒れたる「カーウシャリヤ」は死せんとす。8. 一見よ、汝の驢馬は、多きに過ぐる (ati) 荷を運搬せるため、力なく將に死せんとす。9. 一智者なき所には、少しく智慧あるものも稱揚せらるべし。樹なき國に於ては「伊蘭樹」も、木となるなり。10. 一人は (已をして) 悪人と共に交をなさしむべからず、好をもなさしむべからず、炭は熱したるときは手を焼き、冷却したるときは毛を黒くすればなり。

第四十九章

名詞形容詞の語基構成音 (pratyaya)

§ 265. 語基構成音にして、名詞又は形容詞の語基を構成するものは、從來已に之を説きしことあり。かの mat, vat, in 等のごとき。各種分詞の at (ant), āna, māna, ta, na 等のごとき。即ち是れなり。今此等の語基構成音を大別して、二種とす。

1. kṛit-pratyaya 及び unādi-pratyaya. にして、kṛit-pratyaya は其の名の示せるごとく、kṛi のごとき動詞の語根、又は語基に附加して、名詞形容詞の語基を作るものたり。此の kṛit に似て、然も其の性質稍々不規則なるものを unādi-pratyaya と云ふ。u 等の語基構成音の義なり。

2. Tad-dhita-pratyaya にして、tat のごとき、名詞、代名詞等の語根語基に附加して此等の語基を作る。dhana-vat (富める), dhanin (富める) 等の vat, in のごときは、是れなり。形容詞の比較級及び最上

級を作るべき tara, tama は勿論、iyas, iṣṭha のごときも。形容詞の語根に附加せらるゝものなれども。上記の定義よりすれば、其の tad-dhita-pratyaya なることを俟たざるなり。

§ 266. kṛit-pratyaya を附加して、作りたる名詞形容詞は、必ず動詞の性質を有す。各種分詞の語基は、其の一例なり。例せば kṛi に ya を附加したる義務分詞の語基 kārya のごときは、一方に於て形容詞の性質を帯び、其の變化に随ふと同時に、他方に於て、動作を表示し、動詞の性質を保有せり。其の他、不定體の tum, 連續體の tvā 又は ya のごとき。後代の梵語に於ては、不變化のものとなれるも、是れ皆 kṛit-pratyaya の變化して、或る格をとれるものに外ならず。即ち不定體の tum は、動詞の語根に tu なる kṛit-pratyaya を附加し、これを業格に變化せしめしものにして、kartu-m のごとし。又連續體の tvā 又は ya のごときも、吠陀時代の梵語に於ては、tu 等の具格なること、掩ふべからず、殊に ya は、古代に於ては、yā なりき。prārpya とあるべきを梨俱吠陀 I. 113 prārpyā (動かす) とせるは、即ち此の事實の證明して餘あるものと云ふべし。

§ 267. kṛit-pratyāya 等の主要なるものを列挙すれば。

1. tum. 不定體の語基. çro-tum. (§151)
2. tvā, ya 連續體の語基. çru-tvā, alam-kṛitya (§143) (§144)
3. am. 連續體の語基. kṛi + am = kāram なして.
4. at(ant) āna(māna). 現在分詞の語基. (§115) (§185) (§203)
5. vas(vānis. us). āna 能動調の過去分詞の語基. (§237)
6. ta. na 受動調の過去分詞の語基. (§82) (§238)
7. tavat(tavant) 能動調過去分詞の語基. kṛi-tavat 作爲せる. (§239)
8. syat(syant). syamāna 能動調. 未來分詞の語基. (§222)
9. tavya, anīya, ya 義務分詞. (§149)

§ 268. io. ti は抽象名詞を作る語基構成音にして、かく作られたる名詞は女姓名詞あり。muc + ti = mukiti (女) 解脱. vac + ti = ukti (女) 語. budh + ti = buddhi (女) 慧. (§196.2) man + ti = mati (女) 慧. (§60)

11. *tri*, *aka*. *in* 動作の主體を示す. *dā + tri = dātri* (男) 施與者. *ji + tri = jetri* (男) 征服者. *vac + tri = vaktri* (男) 説者. *nī + aka = nāyaka* (男) 引率するもの. *pac + aka = pācaka* (男) 煮る人. *vas + in = vāsin* (男) 住居する人. *vad + in = vādin* 説者. *kṛi + in = kārīn* (男) 作爲者.
12. a. 動作の主體たる名詞. 動作の名稱. 其の他種々の意義を有する名詞を作る. *ji + a = jaya* (男) 征服. *tyaj + a = tyāga* (男) 委棄すること. *śrip* 匍匐す *+ a = sarpa* (男) 蛇.
13. *ana*. 動作の名稱. 動作をなすに要する器具. 及び其の所在を示せる語基を作る. かくして作られたる名詞は. 通例中性なり.
- gam + ana = gamana* (中) 往くこと.
nī + ana = nayana (中) 導くもの. 目.
ṣru + ana = ṣravaṇa (中) 聴くもの. 耳.
cī + ana = çayana (中) 臥する處. 臥床.
mṛi + ana = maraṇa (中) 死すること.
14. *tra*. 動作の所在. 及び之に要する器具を示せる語基を作る. 此の際. 語根の母音は. 重音とあり. かくして作られたる語は. 通例中性なるが. 間々他の性となることあり.
- ṣru + tra = ṣrotra*. (中) 聴く爲の具 = 耳.
çās + tra = çāstra. (中) 教ふる爲の具 = 書.
pā + tra = pātra. (中) 飲む爲の具 = 飲器.
kṣi + tra = kṣetra. (中) 居を占むる處 = 住居土地.
vas (着る) *+ tra = vastra*. (中) 着るもの = 衣服. 此の名詞は *vas* (住む) より來れるにあらず.
damṣ + trā = damṣtrā. (§145.2) 咬む爲の具 = 牙齒.
as + tra = astra. (中) 投ぐる具 = 投鎗.
rāj + tra = rāṣṭra. (中) 王者の統治する所 = 國家. (§145.3)
15. *as*, *i*, *is*, *us*, *tu*, *u nu*. 等
- man + as = manas*. (中) 思惟するもの. 心. (uṇādi-p. の一例)
kṛiṣ + i = kṛiṣi. (女) 耕作. (uṇādi-p. の一例)
hu + is = havis. (中) 燒供. 供物. (uṇādi-p. の一例)

- yaj + us = yajus*. (中) 祭祀. (同上)
vas + tu = vāstu. (男. 中) 居. 家.
viṣ + nu = viṣṇu. 徧入せるもの = 韋紐の神.
kapila-vāstu. 迦毘羅城. 迦毘羅仙人の居處.
bhā + nu = bhānu. (男) 照臨するもの = 太陽.

第五十課

問題

1. 一名詞形容詞語基構成音を大別して二種とす. 其の名稱を列挙すべし. *kṛit-pratyaya* と *uṇādi-pratyāya* との區別如何. 3.—*kṛit* 等と *taddhita-pratyaya* との區別如何. 4.—*kṛit-p.* 等の主要なるものを列挙すべし. 5.—*tum*, *tvā*, *ya* は本來. 如何なるものなりしか. 6.—*ti* の語基構成音の意義如何. 7.—*tri*, *aka*, *in* の意義如何. 例を擧げて. 之を證すべし. 8.—*a* の意義如何. 9.—*ana* の意義如何. 10.—*as*, *i*, *is*, *u*, *us*, *tu* は如何なる種類の語基構成音なるか.

第五十章

(Taddhita—pratyaya)

§269. Taddhita-pratyaya の主要なるものは.

1. *a*, *ya*, *āyana*, *i*, *ika*, *ika*, *īya*, *eya*, *ka* 等にして. 種族. 苗裔. 宗徒. 國籍等の義を表示す. *brāhmaṇa + ya = brāhmaṇya* (形) 婆羅門の.
2. *tā*, *tva* 状態. 性質. 位置を示す. (§216) *buddha-tva*. 佛果. 佛の位. *arhat-tva*. 阿羅漢果. *vyāghra-tā*. 虎の状态. 虎の位.
3. *vat* 不變化詞を作る. *çūra + vat = çūravat* 勇者のごとく. 勇ましく.
4. *mat* (mant). *vat* (vant), *in*, *vin*. *manas + vin = manasvin* (形) 叡智ある. (§118) (§111)
5. *tara*, *tama*, *īyas*, *iṣṭha* 形容詞の比較級及び最上級を作る. (§164)
6. *iman*. 男性の抽象名詞を作る. *laghu + iman = laghirman* (男) 軽さ.
7. *maya*. 製作. 饒多の義を有する名詞. 形容詞を作る. *svarṇa + maya = svarṇamaya* 黄金製の.
8. *thā*, *dhā*. 状態及び種類を表示する不變化詞を作る.
9. *tra*, *tas*, 於格及び從格に代用すべき不變化詞を作る. (§98) (§99)
10. *tana*. は *pūrva*, *ūrdhva*, *upari*, *adhas* 及び時を表示する不變化詞に

附加して、形容詞を作る。pūrva + tana = pūrvatana (形) 昔時の。

11. taya. は数詞に附加して、名詞又は形容詞を作る。dvi + taya = divitaya 二個。
12. ita は或る名詞に附加して、形容詞を作る。puṣpa + ita = puṣpita 花咲ける。

§ 270. Taddhita-pratyaya を附加する際、従來の語基又は語根の母音及び父音の受くる變化は、一にして止らずと雖も、今其の大略を擧ぐれば、

1. 語基の中にある母音は、通例複重音となる。
2. 語基の終にある a, ā, i, ī は、語基構成音の始にある母音及び ya に會して、消滅す。

buddha + a = būddh + a = būddha (男) 佛教徒。

Kuntī + eya = Kāunt + eya = kāunteya (男) 「クンテイー」の子。

senā + ya = sāin + ya = sāinya (男) 兵士。

3. 語基の終にある u 及び ū は、母音及び ya を以て始むる語基構成音に會して、重音となる。

madhu + a = mādho + a = mādharma (男) マドフの苗裔。

4. 語基の終にある ri, o, āu は ya を以て始むる語基構成音に會して r, av, āv となる。

pitri + ya = pāitrya (形) 祖先の。 nāu + ya = nāvya (形) 船の。

go + ya = gavya (形) 牝牛の。

5. 語基の終にある n は通例消滅す。

rājan + ya = rājya (中) 王國、王位。

第五十一課

問題

1.—kṛit-pratyaya の主要なるものを暗誦すべし。 2.—a, ya, eya 等の主要なる意義如何。 3.—iman の意義如何。 4.—maya の意義如何。 5.—taddhita-pratyaya を附加する際、語基中にある母音は如何に變化するか。 6.—其の際語基の終にある母音は、如何に變化するか。 7.—語基の終にある n は如何なる變化を受くるか、例を擧げて説明すべし。

第五十一章

§ 271. śī (臥す). sthā (立つ、留る). ās (坐す) の三動詞は、本來自動調の動詞なれば、動作の對象となるべきものを有せざれども、adhi なる接頭辭と共に來るときは、場所の業格を支配す。

siṃhaḥ parvata-kandaram adhiṣṭyē 獅子は、山中の岩窟に臥せり。

siṃhāsanam adhiṣṭhāu かれは、獅子座に、立てり。

§ 272. gata なる過去分詞は、複合詞の後に來るときは、時ありて、本來の意義(往ける)を失ひ、單に(ある)の義となる。vivarāntar-gata (穴の中にある)。

kara-tala-gata. (掌裡にある)(手中にある)のごとし。

§ 273. 關係代名詞及び此より來れる接續詞が、重複して一文の中に來るときは、常に、(都て)(…する毎に)の義を有す。此の場合には、tat 及びこれより來れる副詞を重複して、後文に置き、相照應せしむ。

yam yam paçyasi tam tam brūhi (何人を見るも、其の人に汝は語るべし) yadā yadā mūṣika-çabdān ṣṛiṇoti tadā tadā sa-viçe:am tam vi-ḍalam samvardhayati. (かれは鼠の音を聽く毎に、其の都度とりわけかの猫を飼養せり)。

關係代名詞と不定代名詞とが相重なるときも亦同じ。yasmāi kasmāi cit 誰人にも。

§ 274. 賓辭は、常に一文の終にあるを可とす。然れど、物語には、賓辭として用ひられたる as, bhū 等は、一文の始に來るもことあり。(第八十二頁の下より二行目参照)

asti kasmīnçcit parvate Mahā-vikramo nāma siṃhaḥ. 或る山に(マハ—キクラマ)と名づくる獅子あり。

§ 275. Tulya (均しき), sadriça (似たる) 等都て同等、肖似、均一の義を有する形容詞は、屬格又は具格と共に來る。

devasya tulyaḥ (神に均しき). tasya sadriçaḥ (彼に似たる). Kriṣṇe-na samaḥ (クリシュナの神に比すべき)。

第五十二課

獅子と鼠と猫

1. Asti kasmīṅcit¹ parvate Mahā-vikramo nāma simhaḥ. Tasya parvata-kandaram adhiçayānasya keçāgram mūṣikah kaçcic² chinatti. Sa simhaḥ keçāgram lūnam buddhvā³ kupito bhavati. Sa tu vivarāntargatam mūṣikam alabhamāno⁴ cintayat: “kim vidheyam atra.? Bhavatu, evam çrūyate.

Kṣudra-çatrur bhaved yas tu vikramān⁴ nāiva namyate. |

Tam nihantum puraskāryaḥ sadriças tasya sānikah ||”

ttyālocya tena grāmaṁ gatvā Dadhi-karṇa-nāmā viḍālo māmśadyāhāreṇa samtoṣya prayatnād āniya sva-kandare dhṛitaḥ. Tatas tad-bhayān⁴ mūṣiks bahir na niṣarati.

2. Tenāsāu⁵ simho⁶ kṣatakesaraḥ sukham svapiti. Mūṣika-çabdaṁ yadā yadā çriṇoti tadā tadā sa-viçeṣam tam viḍalam māmśāhāra-dānena samvar-dhayati. Athāikadā⁶ sa mūṣikah kṣudhā piḍito bahiḥ samçarams⁷ tena mārjāreṇa prāpto vyāpāditaḥ khāditaçca. Anantaram sa simho yadā kadā cidapi mūṣika-çabdaṁ na çuçrāva tadopayogābhāvāt⁸ tasya⁹ vi-ḍālasāhāra-dāne mandādarō babhūva. Ato⁹ haṁ bravīmi.

Nirapekṣo na kartavyo bhṛityāiḥ svāmī kadā cana. |

Nirapekṣam prabhum kṛtvā bhṛityaḥ syād Dadhi-karṇa-vat.¹⁰ ||

1. (n+c). 2. (t+ch). 3. (budh+tvā). 4. (t+n. t+m). 5. (a+a)
6. (a+e). 7. (n+t). 8. (ā+u). 9. (tasya かれにと譯すべし.
§72.2). 10. (§267.3).

上文の翻譯

或る山に於て、「マハーヰクラマ」(大威力)と名づくる獅子ありき。かれ山の岩窟に臥せしとき、或る鼠は、鬣毛の端を齧り切り、彼己の鬣毛の端の切られたるを覺りて、怒りぬ。然れど、穴の中に潜める鼠を捕ふるに能はざりしか(a-labhamāna)。思ひき、此の際、余は如何にかなすべき。さもあらばあれ余はかく聞けり。曰はく。

小敵たりとも、威力にて決して屈せざるものあり、これを殺さむには、これと同等なる甲兵を使用すべし。

かく、思考⁷て、彼は(tena)村落に赴むきて、「ダトヒカルナ」と稱する猫を、肉等の食物にて喜ばせて、非常なる骨折の後、伴ひ來りて己の岩窟に留め置きぬ。それより、鼠は猫を恐るゝ

より(tad-bhayāt).外に出でざりき、これが爲め、獅子は、鬣毛を毀傷せられずして、安かに眠れり、鼠の音を聞く度毎に。其の都度、獅子は、とりわけかの猫に、肉食を與へて、飼養せり、かくて、或る時、かの鼠は、飢餓に苦められて、外にさまよひしとき、かの猫の爲に、捕へられて、殺され。且つ、の々に裂かれたり、やがて、かの獅子は、決して鼠の音を聽かざるに至りしとき、必要なきより、か切猫に食物を與ふるを等閑にするに至れり、是の故に、余は云ふなり、奴僕は其の主人を決して需むる所なきものとなすべからず、主人をして需むる所なきものたらしむるときは、其の奴僕は「ダトヒカルナ」となるべし。

第五十二章

§276. 一語の中に於て. i u. の後にある s 及び r は. t を以て始むる krit-pratyaya に會して. ṣ となる. catur + taya = catuṣṭaya. 四の (§269. 11).

§277. anu-rāga, sneha 等. 都て愛慕. 愛着の義を有する動詞及び名詞は. 一文の中に來るときは. 其の動作の對象となるものは. 於格をとる. Tasyām adhiçayānāni karīṣyāmi (余はかの女に對し. すぐれて愛着の念を起すべし.)

§278. namas, puras. tīras の不變化詞の終にある s は, kri の前に於て, h とならず. tīras + kṛita = tīras-kṛita (罵られたる). puras + kārya = puras-kārya (任命さるべき).

§279. nis, āvis, dus, prādus (分明に). 等の不變化詞の終にある s は. k. kh. p. ph の前に來るときは. ṣ に變ずることあり。

bahis + kṛita = bahiṣ-kṛita (外にせられたる. 排斥せられたる)

dus + kha = duḥkha 又は duṣkha (中) 不幸.

§280. ut の接頭辭. もし. sthā, (立つ). stambh (stabh). (支持す) の前に來るときは. s 消滅す。

ut + sthā = utthā (起き上る). utthāya (起き上りて).

第五十三課

陶工の家に於ける婆羅門

1. Asti Devī-kotṭa-nāmnī¹ nagare Deva-çarmā nāma brāhmaṇaḥ. Tenā² ikadā saktu-pūrṇa-çarāva ekaḥ prāptaḥ. Tam ādāyāsāu³ kumbhakārya bhāṇḍa-pūrṇa-maṇḍapāikadeçe² rāudreṇākulitaḥ⁴ suptaḥ. Tataḥ

saktu-rakṣārtham haste daṇḍam ekam ādāyācintayat: 3 “yady 5 aham saktu-çarāvām vikriya daṇḍa kapardakān prāpsyāmi tadātrāiva tāiḥ kapardakāir ghaṭa-çarāvādikam upakriyānekadhā 3 vṛiddhāir dhanāiḥ punaḥ punaḥ pūga-vastrādikam upakriya vikriya lakṣa-saṅkhyāni dhanāni kṛtvā vivāha-catuṣṭayam kariṣyāmi.

2. Anantaram tāsū sa-patniṣu 6 rūpa-yāuvanavati yā tasyām adhikānurāgam kariṣyāmi. Sapatnyo yadā dvandvam kariṣyanti tadā kopākulo'ham tā laguḍena tādayiṣyāmi.” Ity-abhidhāya 5 tena laguḍaḥ kṣiptaḥ. Tena saktu-çarāvaḥ 7 cūrṇito bhāṇḍāni ca bahūni bhagnāni. Tato bhāṇḍa-bhaṅga-ḥabdāni ḥrutvā kumbha-kāra āgataḥ. Tena tathāvidhāni bhāṇḍāny avalokya 5 brāhmaṇas tiraskṛito 8 maṇḍapād bahiṣkṛitaḥ 9

1. (nagare の形容詞). 2. (a + e) 3. (a + a) 4. (a + ā) 5. (i + a) 6. (sa-patniṣu 夫を同じくする婦の中に於て. sa-pati = 同夫. 故に之を形容詞に用ひて. 同じ夫ある婦と云はむとせば. sapati は變じて sa-patni となるを要す. §76. 5. 参照) 7. (s + c) 8. (§278) 9. (§279)

上文の翻譯

1. 「デキーコツタ」と稱する都城に、「テーブシヤルマン」と名づくる婆羅門ありき。かれある時、麥の煎粉を盛れる一の皿を得たり。これを携へて、かれは、陶器を以て充滿せる陶工の小屋の一隅に於て、日の熱に苦しめられて、打臥しぬ。かくて其の煎粉を守らむ爲め(鼠の來りて偷む恐あれば)手に一の杖をとりて、思へり。余もし、此の煎粉を賣りて、十「カバルダカ」を得ばその時は、此處にてこそ、此の十「カバルダカ」にて壺皿等を買はめ、かくて種々の方法にて、利殖せる財もて再三檳榔子、衣服等を買入れ、賣出し、十萬を以て數ふる財産を作りて、四度の結婚をなすべし。

2. やがて、此等の同じく余を夫とする四人の婦の中に、余は年若くして姿色あるものに對し、他にすぐれて寵愛を鍾むべし。もし彼等争をなさば、余は怒り杖にて打つべし。かく云ひて、かれは杖を投げたるにぞ、これが爲め、煎粉を盛れる皿は打碎かれ、其の他の許多の陶器は打碎かれぬ。是に於て、陶器の破壊せる音を聞き、陶工は來りしが、かれ、陶器のかゝる有様となれるを見て、婆羅門を痛く云ひ懲らし、小屋より外に出したりとぞ。

第五十三章

§ 281. 現在分詞は. ās (坐す). sthā (立つ) と共に一文の中に來りて、動作状態の繼續を示す. sa sarvadā paṇḍnām badham vidadhāna evāste. 彼は常に獸畜の屠殺をなしつゝ居れり。

現在分詞が as, bhū と共に來るときも、亦同じ。

§ 282. ta に終る過去受動分詞は、屬格と共に用ひらるゝときは、過去の意義消滅して、無形名詞又は現在分詞の意義を帶ぶ。

yady etad abhimatam bhavatām tarhi bhavatu. これ. もし. 汝等の希望する所ならば(希望ならば). 然らばかくすべし。

此の種の構造は. man (思惟す). budh (覺る. 知り). pūj (供養す. 禮拜す)等の動詞及びこれより來れる語の過去受動分詞に多しとす。

§ 283. 命令. 報知. 了解等の義を有する動詞の後に來りて、下の文を接續する yat, yathā は、「こと」と譯すべし。

kim na jānāsi yathāham tasya grīha-rakṣām karomi?

余が彼の家の保護をなすことを. 汝知らざるか。

§ 284. 認定. 呼稱任命. 思惟. 斷定等の義を有する動詞は、二箇の業格を支配す。

Chāgam mṛita-vatsam vadasi. 御身は. 山羊を死せる愛子なりと呼びなす。

durjanam satya-vādinam vetti かれは悪人を認めて. 眞實を語るものとなす。

jānihi mām rāja-putrīm. 妾を王女なりと知れ=余は王女なり。

§ 285. 1. ārabhya (...より始めて...以來). ūrdhvam (上に). bahis (外に) anantaram (間もなく. やがて) param (以後) prabhṛiti (以來)等の語は、從格を支配す。

Tataḥ prabhṛiti (それより以來). tasmāt param (そののち)

2. āなる關係詞. もし從格の前に來ることあり其の時は「...より」「...より始めて」又は「まで」「及ぶまで」と譯すべし。

ā nagarāt. 都に至るまで ā mūlāt. 根本より。

斯くのごとく. 同一の形にして. 殆むど. 正反對の義を有せるなり. 但し「まで」の意義の場合には. 從格よりも. 業格に伴ふを多しとす。

ā samudram 洋海に至るまで (§159.4).

第五十四課

驢馬と犬

1. Asti Vārāṇasyām Karpūrapaṭo nāma rajakaḥ. Sa cāikadā¹ nirbharam prasuptaḥ. Tad-anantaram dravyāṇi hartum tad-griham cāuraḥ praviṣṭaḥ. Tasya prāṅgaṇe gardabho baddhas² tiṣṭhati. kukkaraḥ³ copaviṣṭaḥ⁴. Tam cāuram⁵ avalokya gardabhaḥ ḥvānam āha: “Bhavato' yam vyāpāraḥ. Tat kim iti tvam uccāiḥ ḥabdaṁ kṛtvā svāminam na jāgara yasi⁶. kukkuro brūte: “mama niyogasya carcā tvayā na kāryā. Tvam eva jānāsi yathāham⁷ asya griha-rakṣām karomi. yato' yam cirān⁸ nirvrīto mamopayogam⁴ na jānāti. Tenādhunā⁹ mamāhāradāne'pi⁹ mandādarah vinā vidhura-darṇanam svāmino' nujīviṣu mandādara bhavanti.”
2. Tato gardabhaḥ sakopam āha: “āḥ pāpīyāms tvam yaḥ svāmi-kāryopekṣām karoṣi. Bhavatu. yathā svāmi jāgariṣyati tathā mayā kartavyam.” Ity¹⁰ uktvātiva⁷ cītkāra-ḥabdaṁ kṛtavān¹¹. Tataḥ sa rajakas tena citkāreṇa prabuddho nidrā-bhaṅga-kōpad utthāya¹² gardabham laguḍena tāḍayayām āsa¹³. Tenāsāu¹⁴ pañcatvam gataḥ

1. (a + e) 2. (badh 又は bandh の過去受動分詞) 3. (s + c) 4. (a + u)
5. (ḥvan を見るべし) 6. (jāgri の催起相なるが、不規則なり)
7. (ā + a) 8. (t + n) 9. (a + ā) 10. (i + u) 11. (§239.3) 12.
- (§278) 13. (§235) 14. (a + a)

上文の翻譯

1. 波羅奈斯の都に於て「カルプーラパタ」と稱する染絲者ありき、かれ、或る時、深く眠り込みぬ、それより間もなく、財物を偷まむ爲め、かれの家に盗入りしが、其の前庭に驢馬は繫がれて立ち、而して犬は坐せり、驢馬はかの盜を見て犬に云へり、是れ御身の職掌なり、然るに何故に御身は高さ聲を發して、主人を覺さざる。犬は云ひき、御身は余の職掌の穿鑿をなすべからず、御身こそ余がかれの家を守ることを知らぬ、かれ久しく事なきより余の必要を知らず、故に (tena) 今は余に食物を與ふるにも等閑となれり、辛き目に遭はざれば、なべて主人なるものは臣下を等閑にするに至るなり。
2. 是に於て、驢馬は怒りて云へり、御身は主人の事を等閑にする悪漢なり、遮莫、主人の覺むる様余はなすべしと云ひて、烈しく叫聲をなしぬ、是に於て、かの染絲者は驢馬の叫聲によりて目覺され、眼を破られたるを怒り、起上りて、驢馬を棒にて打ちぬ、これが爲め、かれは死せりぞ。

第五十五課

輕卒なる婆羅門と、忠實なる黃鼠。

1. AstyUjjayinyām¹ Mādhavo nāma brāhmaṇaḥ. Tasya brāhmaṇi bālāpatya-rakṣārtham brāhmaṇam avasthāpya² snātum nirgatā. Atha brāhmaṇasya kṛite rājāḥ ḥradham dātum āhvānam āgatam. Tacchrutvā brāhmaṇaḥ sahaja-dāridryād acintayat: “yadi satvaram na gacchāmi tadānyaḥ⁴ kaḥ⁵ cīcchrutvā³ ḥradham grahiṣyati. Ḥiḥcātra⁵ rakṣakaḥ ko'pi nāsti.⁶ Tat kim kariṣyāmi? Cira-kāla-pālitam amum⁷ sutanirviṣeṣam nakulam bālaka-rakṣārtham vyavasthāpya gacchāmi. Tathā kṛtvā gataḥ. Tatas tena nakulena bālakasamīpam āgacchams⁸ tuṣṇīm kṛiṣṇa-sarpo vyāpāditaḥ khaṇḍitaḥca.⁵
2. Athāsāu nakulo brāhmaṇam āyāntam avalokya rakta-vilīpta-mukha-pādaḥ satvaram upāgamyā brāhmaṇasya caraṇayor luloṭha. Tataḥ sa brāhmaṇas tam tathāvidham dṛiṣtvā mama putro' nena bhakṣita ityavicyāya⁹ tam vyāpādītavān.¹⁰ Anantaram yāvad upasṛityāpatyam paçyati brāhmaṇas tāvad bālakaḥ susthaḥ svapiti sarpas tu vyāpāditas tiṣṭhati. Tatas tam upakārakam nakulam nirikṣya¹¹ sa parām viṣādam agamat.

1. (i + u) 2. (ava-sthā の催起相連續體) 3. (t + ḥ) 4. (ā + a) 5.
- (s + c) 6. (a + a) 7. (adas の男性單數、業格) 8. (n + t) 9.
- (i + a) 10. (§241.3) 11. (§284)

上文の翻譯

1. 高閣街那に於て「マードハグ」と稱する婆羅門ありき、その婦、嬰兒を保護する爲め、かれを家に留めて、已れ浴せむ爲め、出で往けり、然るに婆羅門の爲に、國王より祖先の祭祀を營み、賜物を與べむ爲め、召喚來りしかば、これを聽きて、かの婆羅門は性質鄙吝なるより、思へり、もし余急き往かざるときは、その時は、誰人か他の人は聽きて、賜物を受くべし、而して此處には嬰兒を守るものは、何人もなし、されば余は如何にすべきか、此處なる黃鼠は、多年養育して、已が子と異なることなきものなれば、これを留めて、嬰兒を守らしめ、余は往くべしと、かくなして往きぬかくて、黃鼠は、嬰兒の傍に、音もせず、忍び寄れる黒蛇を殺し、裂きて切々にせり。
2. 其の後、婆羅門は家に歸り來りしが、これを見て、黃鼠は、口と足とは血に塗れながら、急ぎ近きて婆羅門の兩足の下に伏し轉びぬ、それより、かの婆羅門は、黃鼠のかゝる様せるを見て、已が子は、このものゝ爲めに敵はれたりと、深くも考へずして、かれを殺したり、やがて近寄りて嬰兒を見しとき、嬰兒は安々として眠り居り、これに反して蛇は殺されて存在せるにぞ、それより、かれは、かの黃鼠が已の恩人たることを知りて、大に哀痛せりとぞ。

第五十六課

老婦と鈴を持せる猿

1. Asti Ārī-parvata-madhye Brahmapurākhyam¹ nagaram. Atra çāila-çikhare Ghaṇṭākarnō nāma rākṣasaḥ prativasatīti jana-pravādaḥ çrūyate. Ekadā ghaṇṭām ādāya² palāyamānaḥ³ kaçciccāuro vyāghreṇa vyāpāditaḥ. Tat-pāṇi-patitā⁴ ghaṇṭā vānarāiḥ prāptā. Te vānarās tām ghaṇṭām anukṣaṇam vādayanti.⁵ Tato nagara-janāir manuṣyaḥ khādito dṛiṣṭaḥ pratikṣaṇam ghaṇṭā-rāvaçca çrūyate. Anantaram Ghaṇṭā-rāvaḥ kupito manuṣyān khādati ghaṇṭāmīca vādayatītyuktva⁶ janāḥ sarve nagarāt palāyitāḥ.
2. Tataḥ Karālayā nāma vṛiddhayā vimriçya markatā ghaṇṭām vādayantīti svayam vijñāya⁷ rājā vijñaptaḥ.⁸ “Deva, yadi kiyad-dhanopaṣkayah⁹ kriyate tadāham¹⁰ enam Ghaṇṭākarnam sādhyāmi. Tato rājñā tuṣṭena tasyāi dhanam dattam. Vṛiddhayā ca maṇḍalam kṛitvā tatra Gaṇeçādīgāuravam¹¹ darçayitvā¹² svayam vānara-priya-phalāny ādāya vanam pra- viçya phalānyākīrñāni.¹³ Tato ghaṇṭām parityajya vānarāḥ phalāsaktā¹⁴ babhūvuḥ. Vṛiddhā ca ghaṇṭām gṛihitvā nagaram āgatā sakala-loka- pūjyā babhūva.

1. (-pura-ākhyā).....「ブラフマ、ブラ」の名を有する。(有財釋)
2. (ā + dā)
3. palāy の現在分詞
4. (かれの手より)
5. (vad の 催起相)
6. (i + u)
7. vi-jñā の連続體
8. 提議す
9. (a + u)
10. (ā + a)
11. (a + iça + ādi)
12. (driç の催)
13. (i + ā)
14. (a + ā)

上文の翻譯

1. 吉祥山の中に「ブラフマブラ」と名づくる都城ありき、この山の頂に「クハントカルナ」と名づくる羅刹棲むとの噂聞へき、あるとき一人の盜、鈴を窃みて逃るゝとき虎の爲めに殺されき、かれの手より落ちたる鈴は猿の爲めに得られき、この猿等はかの鈴を絶へず打鳴らせしが、其の後都城の人々は虎の爲に嚇はれたる人あるを見、絶えず鈴の音を聞くより、やがて「クハントカルナ」は怒りて人を嚇ひ、鈴を鳴らすなりと云ひて、一切の人は都城より逃れき。
2. 是に於て「カララー」と名づくる老婦は、熟考して、猿の鈴を打鳴らすなれと、自から知り、王に申出せり。王よ、もし些少の財の出費をなされば、妾はかの「クハントカルナ」を殺すべし。是に於て、王は喜びて彼女に財物を與へき、老婦は、是に於て祭壇を作りて、「歡喜天」等

の神を供養して、(崇敬を示して)自から「ゲーナラ、プリヤ」(猿の好む)樹の果實をとり、林に入り、果實を打撒きぬ。是に於て猿等は鈴を打捨て、果實に執着したるにぞ、老婦は鈴をとりて都城に歸り、一切の世間の人々より尊敬さるゝものとなりき。

第五十七課

獅子と兎

1. Asti Mandara-nāmni parvate Durdānto nāma simhaḥ. Sa ca sarvadā paçunām badham vidadhāna evāste.¹ Tataḥ sarvāiḥ paçubhir melakaṁ kṛitvā sa simho vijñaptaḥ : Deva, kimarthaṁ sarva-paçu-badhaḥ kriyate. Vayam eva bhavad-āhārārthaṁ pratyaham ekāikaṁ paçum upadhāukayāmaḥ. simhenoktam : “Yady³ etad abhimatam⁴ bhavatām tarhi bhavatu. Tataḥ prabhṛiti pratyaham ekāikaṁ paçum upakalpitam bhakṣayannāste.⁵ Atha kadācit kasyāpi vṛiddha-çaçakasya vāsarah prā- ptaḥ. Tataḥ so'cintayat : “trāsa-hetor vinītis tu kriyate jīvitāçayā. | Pañcatvam ced gamiṣyāmi kim simhānunayena me. || Tan⁶ mandam mandam upagacchāmi.”
2. Tataḥ simhaḥ kṣudhā piḍitaḥ kopāt tam uvāca. Kutas tvam vilambād āgato'si? Çaçako'bravit : “nāham aparādhaḥ pathi simhāntareṇa⁷ balād dhṛitaḥ. Tasyāgre⁸ punar-āgamanāya çapatham kṛitvā svāminam nivedayitum⁹ atrāgato'smi. Simhaḥ sa-kopam āha. “satvaram gatvā mām darçaya¹⁰ kvāsau⁷ durātmā tiṣṭhati? Tataḥ çaçakas tam gṛihitvā gam- bhīra-kūpa-samīpam āgataḥ. Atrāgatya¹³ paçyatu svāmītyuktva tasmin kūpa-jale tasyāiva¹¹ pratibimbam darçitavān.¹² Tato'sāu darpādhmātas tasyopari² ātmānam niḥṣipya pañcatvam gataḥ. Ato budhāiḥ smaryate: Euddhir yasya balam tasya nirbuddhestu kuto balam | Paçya simho balonmattaḥ² çaçakena nipātitaḥ¹⁴ ||

1. (§281)
2. (a + u)
3. (i + e)
4. (§282)
5. (n + ā §122.1)
6. (t + m)
7. (simha + antarena 他の獅子によりて)
8. (a + a)
9. ni-vid の催. nivedayitum 知らさむが爲め. 告ぐる爲め.
10. (driç の催. 命令法.)
11. (a + e)
12. (driç darçita + vat)
13. (a + ā)
14. (ni + pat の催).

上文の翻譯

1. 「マングラ」を名づくる山に於て、「ツルヌーンタ」を名づくる獅子ありき、かれ常に獸畜を屠りつゝ居りしか。是に於て一切の獸畜打集ひて、獅子に申出でき、主よ、何故に一切の獸畜の屠殺はなさるゝか吾等は實に御身の食物の爲めに、每日一匹の獸畜を獻すべしと、獅子は云ひき、もしこれ汝等の希望ならば、かくすべしと、是れより以來每日一匹づゝ持ち來れる獸畜を食ひつゝ居りき、かくて、あるとき、ある老兎の順番到來したりしかば、かれ考へき、恐怖するが故に、生きむこゝを望みてこそ、恭謹をなすなれ、もし余死すべきものならば、余は何ぞ獅子に従ふことを要せむ、されば余は徐々として往くべしと。

2. 是に於て獅子は飢餓に逼りて、怒りてかれに云ひき、何故に汝は遲滞し來れるか。兎は云ひき、是れ余の罪にあらず、途中余は他の獅子の爲めに強ひて抑留せられたり、かれの目前にて復び來るを誓ひて、主に(之を)告げむ爲め此處に余は來れるなりと、獅子は怒りて云ひき疾く往きて余をして那處にかの惡漢の居るかを見せしめよと、是に於て兎はかれを伴ひて、深き井の側に來りしかば、此處に來りて主は見るべしと云ひて、かの井水に於けるかれ自身の映像を示しき、是に於て、かれは慢心に打煽られ、その上に己を投げて死せりとぞ、故に賢者は古より傳へ云へり。

智慧あるものには力あり、之に反して智慧なきものには如何ぞ力あらむ。見よ、力に打誇れる獅子は兎の爲めに殺されき。

第五十四章

§ 286. ◦に終れる不變化詞及び一母音より成れる不變化詞は、次に來る語の始にある母音に會して、何等の變化をなさず。例。

aho + ātma-saṁtuṣṭo jīva-lokaḥ = aho ātma-saṁtuṣṭo jīvalo. aḥ.

あゝ、自惚の浮世なるかな。

ā + evam = ā evam. あゝ、然り。

但し接頭辭又は關係詞として用ひられたる ā は、次に來る母音に會して變化す。

ā + adhyayanāt = ādhyayanāt (讀書するに至るまで) } 關係詞として用ひられたる場合
ā + ekadecāt = āikadecāt (ある處に至るまで)

ā + locitam = ālocitam (少しく見られたる) 接頭辭として用ひられたる場合

§ 287. api なる不變化詞、倘し、一文の主辭又は動作狀態の主體たる語の後に來らば、「……の方にても」「……の方はまた」「……はまた」と譯すべし。

sāpi (sā + api) mad-vacanāṁ na crosyati.

かの女の方はまた、余の言へることを聽かざるべし。

so'pi (sas + api) tad ākarṇya vyacintayat.

かれの方にても、之を聽きて、思へり。

§ 288. jan (生る). bhū (發生す). çikṣ (學ぶ)等の動詞の源因となる語は從格をとる。

ṣaṅ-mṛsika-prasava-vaçāt tābhyāṁ yūtham bhaviṣyati.

六ヶ月毎に子を産む力よりして、彼等二匹より、一の群は生すべし。

tasmād ācāryād asmadbhir hetu-vidyā çikṣitā.

かの師より、吾等は因明を學べり。

§ 289. 移動の方向及び通路は具格をとる。

çrigāla-vartmanā dhāvan 野狐の往ける途を走りつゝ、

katamena dig-bhāgena gataḥ sa jālmaḥ.

孰れの方へ、かの惡漢は行きしや。

§ 290. 或るものに對し信任し、又は安心する義を有する語、一文の中にあるときは、信任せられ、安心せらるゝもの即ち、其の對象は、屬格又は於格をとる。例せば

tvayi viçvāsaḥ 汝に對し安心は。

çriṅgiṅāṁ viçvāsaḥ 角あるものに對し安心は。

mama vacasi pratyayaḥ 余の言葉に對し、信任は。

§ 291. Havis (燒供) sarpis (新酥油) āyus (壽命) dhanus (弓)等の語は、k, kh, p, ph を以て始むる名詞と合して、複合詞を作くる際、最後の s は變じて ṣ となる。例せば

dhanus + kāṇḍam = dhanuṣkāṇḍam. 弓箭。

§ 292. yat は時ありて「…とは」と譯すべきことあり。

Aho, ātma-saṁtuṣṭo jīvaloko yad eṣā kṣudra-caṭakātmānaṁ bahu-manyate.

實に此の浮世は自惚れの世なるかな。此の賤しき遮吒迦鳥が自から誇るとは。

第五十八課

空想に耽けりし婆羅門

1. Kasmimçcid¹ adhiṣṭhāne kaçcit² Svabhāva-kṛipāṇo nāma brāhmaṇaḥ prativasati sma. Tena bhikṣārjitāḥ saktubhir bhuktorvaritāir ghaṭaḥ paripūrtaḥ. Tam ca ghaṭam nāga-dante³ valambya tasyādhasāt⁴ khaṭvām nidhāya satatam eka-driṣṭyā tam avalokayati. Atha kadācid rātrāu vyacintayat: saktubhiḥ paripūrṇo ayam ghaṭo vartate. Yadi durbhikṣam bhaviṣyati, tad anena rūpakāṇām ṣaṭam utpatsyate. Tatas tenāja-dvayam⁵ grahīṣye. Tataḥ ṣaṇ-māsikaprasava-vaçād⁶ aja-yūtham bhaviṣyati. Tato'jabhiḥ prabhūtā gā⁷ grahīṣyāmi, gobhir mahiṣir, mahiṣibhir vaḍavāḥ. Vaḍavā-prasavataḥ prabhūtā aḥvā bhaviṣyanti. Te-ṣām vikrayāt prabhūtam suvarnam bhaviṣyati. Suvarṇena catuḥ-çālam gṛham sampatsyate.

2. Tataḥ kaç cid² brāhmaṇo mama gṛham āgatya prāptavarām rūpādhyām kanyām dāsyati. Tat-sakāçāt⁸ putro me bhaviṣyati. Tasyāham⁹ Somaçarmeti⁶ nāma kariṣyāmi. Tat tasmim jānu-calana-yogye sam jāte⁷ 'ham pustakam gṛhītvāçva-çālāyāḥ⁸ priṣṭa-deça upaviṣtas⁹ tad avadhārayiṣyāmi. Atrāntare Soma-çarmā mām driṣṭvā janany-utsaṅgāḥ jānu-pracalana-paro 'çva-khurāsannavartī mat-samīparāḥ āgamiṣyati. Tato 'ham brāhmaṇim kopāviṣṭo 'bhidhāsyāmi: “gṛhāṇa¹⁰ tāvad bālakaḥ!” Sāpi¹¹ gṛha-karma-vyagratayā mad-vacanam na çroṣyati. Tato 'ham samutthāya tām pāda-prahāreṇa tādayiṣyāmi. Evaṁ tena dhyāna-sthitena tathāiva¹² pāda-prahāro datto yathā sa ghaṭo bhagnaḥ. Saktubhiḥ pāṇḍuratām gataḥ.

1. (n+c) 2. (s+c) 3. (a+a) 4. (下に於て) 5. (ās+g) 6. (ā+i) 7. (獨立於格) 8. (ā+a) 9. (e+u) 10. (grahの命令法) 11. (ā+a) 12. (ā+e) 13. (§288)

上文の翻譯

1. ある都に、ある婆羅門の「スダグアハーヅクリバナ」を名づくるからありき、かれ托鉢して得たる大麥の煎粉の、食ひ余れるを瓶に盛り、これを壁にさせる木釘に懸けて、其の下に臥床を置き、常に注目してこれを眺めき、かくて、ある夜かれ思へらく、この瓶は麥の煎粉もて満せり

もし飢饉あらば、その時はこれによりて百ルーピー生ずべし、それよりこれにて余は山羊の一對を得べし、それより、この山羊が六ヶ月毎に子を産む力あるより山羊の群、生ずべし、それより此等の山羊によりて許多の牛を余は得べし、牛より水牛を、水牛より牝馬を得べし、牝馬の子を産むより許多の鳥生ずべし、此等を賣りて、許多の黄金を得べし、此の黄金にて、四個の建物を建て、匪ぐらせる。家出來すべし。

2. 是に於て、ある婆羅門は、余の家に来りて、婚資を得たる美にして富める女を與ふべし、かの女より、余の子生るべし、かれに、余は「ソーマ・シャルマン」の名を付すべし、かくて、かれ、膝にて這ふ頃となりしとき、余は書をとりて厩の背後に坐して、これを讀むべし、そのとき「ソーマ・シャルマン」は余を見て、母の懷より一心に(para)膝にて、這ひながら、馬の蹄に近く余の側に来るべし、是に於て余は怒りて、妻に言ふべし、こもあれ子を先づ連れ往け、こ、かれは家事に氣を取られて、余の言葉を聞かざるべし、是に於て余は起り上りて、かれを、足にて蹴るべし、こ、かれ、かく黙思しつゝ、足にて蹴りしかば、かれの瓶は砕けて、かれも大麥の煎粉にて眞白になれりこそ。古代印度の文學か、西漸して、遂に歐洲に入り、今日猶ほ存在せるもの鮮なからず。就中、其の物語か、波斯・亞刺比亞の文學に翻案せられ、種々の形態の下に、現時歐洲各國の文學に散見せることは、序説印度文學の部に於て、吾人の概論せし所なるが、今其の例を示さむ爲め、本課所掲の物語の翻案をも見らるべき。英佛の物語を抄出することとせむ。

佛國の文學者中、物語の作者として、最も世に著はるゝものは「ラフォンテーヌ」に若くはなし、其の落想の奇警にして、行文の輕妙なる、夙に物語の上乗と稱せらる「ラフォンテーヌ」の書を著すに當り、主として資料を採りしは、希臘にしては、Aesop, phadros等の書にして、拉丁にしては、Horaceの書なるが、時ありて、印度の古聖 pilpayの書に負ひし所ありと云へり、pilpayは又名 Bidpaiと稱し、歐洲の中世紀に於ては、印度にかゝる聖哲ありしと信ぜられしなり、然れば「ラフォンテーヌ」の物語中明に印度の物語より脱化せりと認むべきものあり、下に抄出する「女の乳搾り」に牛乳の壺と題せる詩のごときは、婆羅門と麥粉の瓶の物語を換骨脱胎せしものたることは、殆むと疑を容れざる所なりとす。

La Laitière et le Pot au Lait.

(Fables de La Fontaine, classées par ordre de difficulté, par a. Gazier.

第九版、第五十三頁より抄出)

1. Perrette, sur sa tête ayant un pot au lait
Bien pose' sur un coussinet,
Prétendait arriver sans encombre à la ville.
Légère et court vêtue, elle allait à grands pas,
Ayant mis ce jour-là, pour être plus agile,
Cotillon simple et souliers plats.
2. Notre laitière ainsi trousseée
Comptait déjà dans sa pensée
Tant le son prix de lait; en employait l'argent;
Achetait un cent d'oeufs; faisait triple couvée;
La chose allait à bien par son soin diligent,

3. " Il m'est, disait-elle, facile
 D'élever des poulets autour de ma maison;
 Le renard sera bien habile
 s'il ne m'en laisse assez pour avoir un cochon.
 Le porc à s'engraisser coûtera peu de son;
 Il était, quand je l'eus, de grosseur raisonnable;
 J'aurai, le revendant, de l'argent bel et bon.
 Et qui m'empêchera de mettre en notre étable,
 Vu le prix dont il est, une vache et son veau,
 Que je verrai sauter au milieu du troupeau?
4. Perrette là-dessus saute aussi, transportée:
 Le lait tombe; adieu veau, vache, cochon, couvée.
 La dame de ces biens, quittant d'un oeil mari
 Sa fortune ainsi repandue,
 Va s'excuser à son mari,
 En grand danger d'être battue.
 Le récit en farce en fut fait;
 On l'appela le pot au lait.

「ラ・フォンテーヌ」は、十七世紀の後半に時めきし詩人なれば、其の用語は、現時の佛蘭語に比して、多少趣を異にする所ありて難澁通解に苦しむことなきにあらざれば、茲に其の譯文を掲ぐるこゝにせり。

「女の乳搾り」と牛乳の壺」

1. 「ペレット」と呼べる「女の乳搾り」ありけり。牛乳の壺を小褥の上に安置し、これを頭上に載せて、覽事もなく、市に到らむと志し、軽く短き衣を着て、大腿に歩み行けり。此の日は、身軽くせむ爲め、半袴の質素なるを着し、靴も踵なくして底の平なるを穿てり。
2. かく扮装てる吾等の乳搾り女は、はや既に胸の中にて、其の乳の價を算へて、其の金もて、鶏卵百個を購ひ、三度孵化せしめて、三百の鶏の雛を得て、萬事、己か深き注意もて、都合よく往けりと思ひ、獨語すらく。
3. わか家の周囲にて、鶏の雛を養ふは、己ににりては、容易の業なり。其中多少は狐にさらるゝとするも、豚一頭を購ふに足らざる程、偷み去らむとせば、狐も、餘程巧になさでは、かくまでには到らざるべし。豚を肥すには、少許の糠にて事足りぬべし、己れ、これを買入れたるときは、己に相當肥満せしものなりき。然れば、之を轉賣する場合に、其の代價を思へば、誰か牝牛と糞を、わか厩に入ることを拒むべき、やがて、われは、此等が、家畜の群に交はりて、躍り回はるを見るべしと。
4. perrette はかく思ひなしつつ、喜びに乗じて、又跳り上りたるにぞ、乳は覆りて、牝牛も、糞も、

鶏の雛も、皆徒事となり終れり。然れば、此等の財産の主たる「ペレット」は悲しげなる目して、かく覆りたる乳を打捨て、打たれもやせむと、痛く恐れて、謝罪の爲め、夫の許さして歸り往けり。此の事より一の狂言を作りしものあり、名づけて、「牛乳の壺」と云へりとぞ。これを英語に翻案せるものなり、下に記せるものは是れなり。

The Country maid and her Milk-pail. (田舎の婦と乳桶)

{ The Elementary Spelling-book. by. Noah Webster.
 { 第百四十一頁より第百四十二頁に至る。

When men suffer their imagination to amuse them with the prospect of distant and uncertain improvements of their condition, they frequently sustain real losses, by their inattention to those affairs in which they are immediately concerned.

A country maid was walking very deliberately with a pail of milk upon her head, when she fell into the following train of reflections: "The money for which I shall sell this milk, will enable me to increase my stock of eggs to three hundred. These eggs, allowing for what may prove addle, and what may be destroyed by vermin, produce at least two hundred and fifty chickens. The chickens will be fit to carry to market about Christmas, when poultry always bears a good price; so that by May-day I can not fail of having money enough to purchase a new gown. Green!—let me consider—yes, green becomes my complexion best, and green it shall be. In this dress I will go to the fair, where all the young fellows will strive to have me for a partner; but I shall perhaps refuse every one of them, and, with an air of disdain, toss from them." Transported with this triumphant thought, she could not forbear acting with her head what thus passed in imagination, when down came the pail of milk, and with it all her imaginary happiness.

第五十九課

虎皮を被れる驢馬

1. Asti Hastināpure Karpūra-vilāso nāma rajakaḥ. Tasya gardhabho' tibhāra-vāhaānd¹ durbalo mumūrṣur ivābhavat.²
 Tatas tena rajakenāsau³ vyāghra-carmaṇā pracchādyāraṇya-samīpe⁴ sasya-kṣetre mocitaḥ

Tato dūrād avalokya vyāghra-buddhyā kṣetra-patayaḥ satvaram pa-
lāyante.

Sa ca sukkena sasyam carati

Athāikadā⁵ kenāpi⁴ sasya-rakṣakeṇa dhūsara-kambala-krita-tanu-trāṇe-
na dhanuṣ-kāṇḍam⁶⁷ sajjikṛityāvanata-kāyenāikānte⁵ sthitam

Tam ca dūre dṛiṣṭvā gardabhaḥ puṣṭāṅgī gardabhīyam⁸ iti matvā ḥabdam
kurvānas tad-abhimukham dhāvitaḥ

Tatas tena sasya-rakṣakeṇa gardabho'yam iti jñātvā līlayāiva⁹ vyāpā-
ditaḥ

Suciram hi caran nityam kṣetre sasyam abuddhimān |

dvīpi-carma-paricchanno vāg-doṣād gardabho hataḥ ||

1. vāhana = vah + ana (§268.13 参照)

2. iva + abhavat. 3. (a + a) 4. (a + a) 5. (a + e) 6. (§ 291.) 7. (相
違釋) 8. (ī + i) 9. (ā + e)

上文の翻譯

「ハステイナブラ」の都に於て「カルプラー-井ラーサ」と稱ふる染絲者ありき。かれの驢馬は、すぐ
れて多く荷物を運搬せるより、殆むと死せむとせり。是に於て染絲者はかれに虎皮を着せて林の
近傍なる穀物の野に放ちたり。是に於て、田の地主等は、遙に望見して虎なりと思ひて、疾く逃れ
てざりたればかれは悠々穀物を食したり、かくてあるとき一人の穀物を番せるもの灰色の毛
布にて作りたる鎧を着て、弓箭を帯び、身を屈し、人なき所に居たり。驢馬は遙にかれを見て是れ
肥満せる牝驢なりと思ひて、聲を上げつゝ、その方に走り寄りたり。是に於て、かの穀物の番人は
驢馬なることを知りて真に兒戯のごとく、容易にかれを殺せり。實に愚なる驢馬は虎皮を被りて
久しく、田の穀物を食しながら、言葉の過失より殺されたるなり。

第六十課

刹帝利種と理髮師

1. Asty¹ Ayodhyāyām puri Cūḍā-manir nāma kṣatriyaḥ. Tena dhanārthi-
nā kāya-kleṣena bhagavānḥ² candrārdha-cūḍā-maṇiḥ ciram³ ārādhitāḥ.

Tataḥ ksīna-pāpo'sāu svapne dardanam labdhvā⁴ bhagavataḥ prasādād
yakṣeṣvareṇādiṣṭaḥ⁵: “Tvam adya prātareva kṣāuram kārayitvā lagu-
ḍa-hastah saṅ-sva-griha-dvāri nibhritam sthāsya⁶. Tato yam evāgatam⁶
bhikṣukam prāṅgane paçyasi tam nirdayam laguḍa-prahāreṇa haniṣyasi.

Tato'sāu bhikṣukas tat-kṣaṇāt sūvarṇa-pūrṇa-kalaḥ bhaviṣyati: tena
tvam yāvaj-jīvam¹⁴ sukhi bhaviṣyasi. Yad-anuṣṭhite tad vrittam.

2. Tataḥ kṣāura-karaṇāyānītena⁵ nāpītena tatsarvam ālokya⁶ cintitam. “aho
nidhi-prāpter⁷ ayam upāyaḥ. Tad aham apyevam⁸ kim na karomi”

Tataḥ⁹ prabhṛiti sa nāpita pratidinam tathā-vidho laguḍa-hastah bhikṣu-
kāgāmanam apeḥsate. Ekadā tena tathā prāpto bhikṣuḥ laguḍena hat-
vā vyāpāditaḥ. Tenāparādhenā¹⁰ so'pi nāpito raja-puruṣāis tāditaḥ pañ-
catvam gataḥ.

Puṇyā¹¹ labdham yad ekena tan¹² mamāpi¹⁰ bhaviṣyati |

Ihatvā bhikṣum ato mohān¹³ nidhyarthī nāpito mṛitaḥ. ||

1. (i + a) 2. (n + c) 3. (s + c) 4. labh + tvā) 5. (a + ā) 6. §217)
7. (-prati の属格) 8. (i + e) 9. (§285.1) 10. (a + a) 11. (t + e)
12. (t + m) 13. (atas + mo この愚痴より) 14. (隣近釋—159.4)

上文の翻譯

1. 難勝城に於て髻珠と名づくる刹帝利ありき、かれ富を希ひ、身を苦めて、半月の髻珠を戴け
る神(シワ)を久しく悦せしめき、かくて罪障滅盡したれば、睡眠中夢を得、この神の恵により
て、「クモラ」の神に命せられたり、曰く、汝實に今日早朝剃髪をなさしめて、棒を手にして己が家
の門に人知れず佇立すべし、かくて實に一人の乞食の庭前に來れるを見るべし。これを容赦なく
棒もて打殺すべし、かくてこの乞食は直ちに、黄金を盛れる瓶となるべし、これによりて汝は生
涯幸福なる人たるべし。かく實行して、此の事成就せり。
2. 是に於て剃髪をなす爲めに、連れ來れる理髮師は、この都ての事を見て考へき、ああ是れ財
を得る方便なり、然れば、余もまた何ぞかくなさくらむ、それより以來、かれ理髮師は毎日同じく
棒を手にし乞食の來るを待ちき、ある時同様の乞食を捉めて、棒もて打殺しぬ、この罪科により
て、かれ理髮師も、又王臣の爲めに打たれて死せりとぞ。

或る人が、功德によりて得たるものは、已にもまた、あるならむと思ひこの愚痴より、財貨を
求むる理髮師は、乞食を殺して、死せり。

第六十一課

象と野狐

1. Asti Brahmāraṇye Karpūra-tilako, nāma hasti. Tam avalokya sarve
ḥṛigālāḥ¹ cintayanti sma: “yady² ayam kenāpy³⁴ upāyena mriyeta,
tadāsmākam⁵ etad-dehena māsa-catuṣṭayasya svecchābhojanam bhavet.”
Tatra tan-madhyād ekena vṛiddha-ḥṛigālena pratijñā kṛitā: “mayā

buddhi-prabhāvād asya maraṇam sādhayitavyam.” Anantaram sa vañcakaḥ Karpūra-tilaka-samīpaṁ gatvā sāṣṭāṅga-pātaṁ praṇamyovāca :⁶ “deva, dṛiṣṭi-prasādam kuru.” Hastī brūte : “kas tvam kutah samayātaḥ.” So vadat : “Jambuko’ham. sarvāir vana-vāsibhiḥ paṇḍubhir militvā bhavat-sakāṣam prasthāpitaḥ.”⁷ Yad vinā rājñā sthātum na yuktaṁ tad atrūṭavi-rāje’bhīṣektum bhavān sarva-svāmi-guṇopeto nirūpitaḥ. yataḥ :

rājānam prathamam vindet tato bhāryām tato dhanam. |
rājany² asati⁸ loke’min kuto bhāryā kuto dhanam. ||

2. Tad yathā lagna-velā na calati satvaram āgamyatām devena. Ity⁴ uktvā sa vañcaka⁹ utthāya calitaḥ. Tato’sau rājyalobhākriṣṭaḥ Karpūratilakaḥ ṣṛigāla-vartmanā¹² dhāvan mahā-panke nimagnaḥ. Tatas tena hastinoktam :¹⁰ “sakhe ṣṛigāla. kim adhunā vidheyam. Panke nipatito ham mriye. parāvṛitya paṇḍya.” ṣṛigālena vibhāsyoktam :⁶ “Deva, mama puṅgava-śāntānam kṛitvottīṣṭha. Yan mad-vidhasya vacasi¹¹ tvayā pratyayaḥ kṛitas tad anubhūyatām aṣṛaṇam du’kham.” Tato mahāpanke nimagno hastī ṣṛigālāir bhakṣitaḥ.

1. (s+c) 2. (i+a) 3. (a+a) 4. (i+u) 5. (ā+a) 6. (a+u)
7. (pra-sthā の 催) 8. (獨立於格) 9. (as+u-) 10. (ā+u)
11. (§290) 12. (§289)

1. 「アラブマ」林に於て、「カルプーラ・テラカ」を名づくる象ありき、かれを見て、諸の野狐は思へり、かれ、もし、ある方便にて死せば、其の屍體にて、吾等には、四ヶ月の飽き足る程の食物あるべし。是に於て、彼等の中より、一の老狐は、誓約をなせり。余は智慧の方にて、彼の死を致すべしと、やがて、かの悪漢は象の側に往き、五體を地に投じて、禮を作し、云へり。主よ、一瞥の惠を垂れよ。象は云へり、汝は何物にして、那處より來れるか。かれ云へり、臣は野狐なり、林に住む諸獸、打集ひたる上、余は陛下の目前に派遣せられたるなり、王なくして、居るは不可なるが故に、諸の王徳を具せる陛下は、此處の林王の位に登さるる事に決定せられたり、何となれば。

人は先づ第一に、王を覓め出すべし、それより婦を、それより財を覓め出すべし、此の世界に於て王なきときは、那處より婦、那處より財來るべき。

2. 然れば、好機を逸し去らざる様、疾く陛下は來らるべしと、云ひて、かの悪漢は去りたり、是に於て、かの象は、王位の慾望に惹かされて、野狐の途を走りつゝ、大なる沼に陥りぬ。かくて彼の象は云へり、友よ、野狐よ、余は今如何にすべきか、余は沼に陥りて死せむとす、還り來りて見よ。野狐は笑ふて云へり、主よ、余の尾に縋りて起き上れ、余のごときもの、言葉に、汝は信を置きたり、故に汝は、この救ふべからざる災厄を受くべきなりと。かくて、大なる沼に陥れる象は野狐の爲に食せられたりこそ。

第六十二課

藍壺に染まりし野狐

1. Asti ṣṛigālaḥ kaṅcit svecchayā nagarasyopānte¹ bhraman² nila-saṁdhāna-bhāṇḍe nipatitaḥ. Paṅcāt tata utthātum asamarthaḥ prātar ātmānam mṛitavat³ saṁdarṣya sthitaḥ. Atha nilibhāṇḍa-svāmināsāv⁴ utthāpya⁵ dūre⁷ nītvāpasāritas tasmāt palāyitaḥ. Tato’ sāu vanaṁ gatvātmānam⁸ nila-varṇam avalokyācintayat : “aham idānim uttama-varṇas tadātmanaḥ⁸ kim utkarṣam na sādhayāmi.” Ity⁹ uktvā ṣṛigālān āhūya tenoktam¹ : “aham bhagavatyā vana-devatayā sva-hastenāraṇya¹⁰-rāje sarvāuśadhi-rasenābhīṣiktaḥ. Tad adyārabhyāsmad-ājñayā vyavahārah kāryaḥ.” Ṣṛigālāṅca tam viṣṭa-varṇam avalokya sāṣṭāṅga-pātaṁ praṇamyocuh¹⁶ : “yathājñāpayati⁸ devaḥ.” Ity¹¹ anenāiva¹² krameṇa sarveṣvarāṇya-vāṣiṣvādhipatyam tasya babhūva.

2. Tatas tena sinha-vyāghrādīn uttama-parijanān prāpya sadasi ṣṛigālān avalokya lajjamānenāvajñāya¹⁰ dūrīkṛitaḥ sva-jñātayaḥ. Tato viṣaṇṇāṁ chṛigālān¹³ avalokya kena cid vṛiddhaṣṛigālena pratijñātām : “mā viṣidata. Evaṁ ced anena vayan marmajñāḥ paribhūtas tad yathāyam⁴ naṅcyati tan mayā vidheyam. Yato’ tra vyāghrādayo varṇa-mātra-vipralābdhā ṣṛigālam ajñātvā rājānam amuṁ manyante.¹⁵ Tad yathāyam⁴ paricīyate tat kuruta. Tatrāivam¹² anuṣṭheyam yathā vadāmi. Sarve saṁdhyā-samaye tat-saṁnidhāne mahā-rāvam ekadā kariṣyatha. Tam ṣabdādam ākarṇya sva-bhāvāt tenāpi¹⁰ ṣabdaḥ kartavyaḥ. Yataḥ :
Yaḥ sva-bhāvo hi yasya syāt tasyāsāu¹⁰ duratikramah |
ṣvā yadi kriyate rājā sa kim nāṅnāty⁹ upānaham. ||

Tataḥ ṣabdād vijñāya vyāghreṇa hantavyaḥ. Tathānuṣṭhite⁴ sati¹⁴ tad vṛittam.

1. (a+u) 2. (bhram, 現在分詞) 3. (死せるごとく・副) 4. (ā+a)
5. (āu+u) 6. (ut+sthā, 催起相の連續體) 7. (§72.1) 8. (ā+ā)
9. (i+u) 10. (a+a) 11. (i+a) 12. (a+e) 13. (n+ṣ §142.2)
14. (獨立於格) 15. (§284) 16. (a+ū)

上文の翻譯

- ある野狐ありき。意に任せて。都はづれをさまよひしとき。或る藍を貯へたる壺の中に陥りぬ。其の後。それより起き出づること能はざるまゝ。翌朝に至りて。己を死せるものゝごとく装ひて居たり。かくて。藍壺の主人に引き揚げられて。遠く連れ往かれ捨てられたるより。かれより逃れたり。かくて。かれは林に赴き。身の藍色せるを見て。思ひき。余は今や。いみじき色せり。されば。如何ぞ身の榮達を計らざらむ。と云ひて。諸の野狐を召集したるのち云へる様。余は尊き林の神によりて。手づから一切の藥草の汁を塗られ。林王の位に登されたり。故に今日より以後。余の命令によりて此の林に於ける行爲は。なさるべきものなりと。かくて。諸の野狐はかれのいみじき色せるを見て。八肢を地につけて。厚く禮を施し。云へり。われ等の君の仰せらるゝごとく。この手段によりて。野狐は。林中に住む一切のものに對し。主權を有するに至れり。
- 是に於てかれは。虎等の最上の從者を得たれば。諸の野狐を見て。(自ら)恥ぢつゝ。自己の眷族を蔑視して。遠ざけたり。かくて諸の野狐は打ち嘆くを見て。年經たる一野狐は誓約をなしぬ。かれは。云へり。努め努め嘆きなせそ。吾等は。かれの弱點を知る。彼もし斯くのごとく。吾等を輕侮せば。その時は。余はかれの死する機取計ふべし。此處に居る虎等は。色のみ(mātra)欺かれて。野狐たるを知らず。かれを王なりと思へり。故に汝等。かれの知らるゝ様なすべし。彼處に於て。余の命するごとくなすべし。(即ち)黄昏の頃。かれの傍に於て。汝等都てのものは。大なる呼聲を一齊に發すべし。この聲を聞きて。かれも亦自から(自己の性質より)聲をなすべし。何となれば。實に如何なる性質か。誰人にあるにもせよ(syāt)その人には其の性質は違背し難ければなり。もし犬にして王とならば。かれ如何ぞ。靴を齧ぢらざるべき。然れば。聲より知られて。かれは。虎の爲に殺さるべしと。云ひしかば。かく實行して。此の事なりぬ。

第六十三課

牝雀と猿

- Kasminñcid¹ araṇye vṛikṣa-çākhā-kṛita-kulāyāu² pakṣi-dam̐patī prati-vasataḥ sma. Atha kadācin³ māse kāla-vṛiṣṭi-samāhatāsāumya-vāta-kam̐pita-tanuḥ kaçcid⁴ vānaras tad vṛikṣa-mūlam upāgataḥ. So'pi⁵ danta-viṇām vādayan samkucita-kara-caraṇaḥ⁶ caṭakayābhīhitah.⁷ Hasta-pāda-samāyukto dṛiçyase puruṣākṛitiḥ, | çita-vāta-hato mūḍha katham̐ na kuruṣe gṛiham ||? So'pi tad ākarṇya vyacintayat: aho, ātma-samtuṣṭo jīvaloko yad⁸ eṣā kṣudra-caṭakātmānam⁷ bahumanyate. Sva-citta-kalpito garvaḥ kasya nāma na vidyate, | utkṣipyā ṭiṭibhī pādāu çete bhaṅga-bhayād divaḥ ||
- Evaṁ vicintya tām āha: Sūci-mukhī durācāre raṇḍe paṇḍita-mānini⁸ | tuṣṇīm bhava, kariṣyāmi no cet tvām nirgrihīm aham || Evaṁ tena niṣiddhāpi⁹ punar āçraya-karaṇopadeçena tam udvejayati.

tad asāu taṁ vṛikṣam āruhya tasyāḥ kulāyam khaṇḍaçaḥ kṛitvā bab-
hañja. Ato'ham bravīmi:

Upadeço no dātavyo yādriçe tādriçe jane |

Paçya! vānara-m rkheṇa sugrihī nirgrihī kṛitā ||

- (n+c)
- (pakṣi-dam̐patī の有財釋)
- (t+n)
- (s+c)
- (ā+a)
- (§290)
- (ā+ā)
- (māna+in+i)
- (§287)

上文の翻譯

- ある林に於て。樹の枝に巢を作れる(枝に作れる巢を有する)鳥の夫婦ありき。然るに。ある日時雨を打ち混せたる烈風に身を震はせつゝ。ある猿は。その樹の下に來りたり。而して。かれは齒を「ガチ、ガチ」云はせつゝ。手も。足も。打ち縮みて居たりけるが。牝雀により云はれたり。手足も有して。汝は。人間の形を具するが如し。然れ寒き風に慄む。悪人よ。何故に汝は家を作らざるか。而してかれはこれを聞きて。思へり。あゝ自惚の世の中かな。この賤少なる雀は己をいみじきものと思ふとは。何人にか實に己の心にて作れる慢心なからむ。呼潮鳥は。天の落ちむこと恐れ兩足を上にして眠るさかや。
- かく考へて。かれに云ひき。尖れる口を有するものよ。操行悪しきものよ。淫婦よ。學者振るものよ。口を緘ぢて。黙すべし。然らざれば。余は汝をして家なしとなすべし。かく。かれによりて禁せられたるも。再び家を作る講釋をなして。かの猿を激せしめたりしかば。かれは。その樹に上りて。かの女の巢を粉碎して。破壊せり。是の故に余は云ふ。教は誰人に對しても。與へらるべきものにあらず。見よ。愚なる猿が上りて。かれ家を有する鳥を家なしとなせり。

第五十五章

§293. 一語の終にある「k」、「t」、「p」は。次に來る語の始にある「h」に會すれば。軟音即ち「g」、「d」、「d」、「b」となるは。§105に照して明白なるが此の際。「h」も亦變じて。此等の諸音と同じき種類の含氣音となる。即ち

-k+h- = -ggh- . diç + hastin = dik + hastin (§103)
= dig - ghaṣṭin (方象)

-t+h- = -ddh- . tat + hita + pratyaya = taddhitapratyaya
kāka - saṅgāt + hato haṁsaḥ =
kāka - saṅgāddhato haṁsaḥ

鳥と交はれるより。雁は殺されき。

-p+h- = -bbh- . ap + haraṇam = abbharaṇam 水を奪ふこと。

§ 294. bhos なる間投詞あり。其の終にある「s」は、次に來る軟音に會して消滅す。

bhos + brāhmaṇa = bho brāhmaṇa 於て婆羅門よ。

bhos + bhos + pānthāḥ = bho bhoḥ pānthāḥ 於て旅人等よ。

§ 295. 業格は、從來述べたる用法の外、下に記するがごとき用法を有す。

1. 時間。副詞として、一文の中に來り、動作又は状態の繼續する時間を示すことあり。例せば。

kam cit kalam 少時の間。暫時。

2. 距離。同じく動作の繼續する距離を示すことあり。

kam cin (t) mārgam 少許の途の間。

Eṣa mārgaḥ kroçam āyataḥ 此の途は、一俱盧舍の長さあり。

§ 296. 具格名詞は、guṇaḥ (效能), arthaḥ (益) prayojanam (必要) 等の語と共に、一文の中に來ることあり。かゝるときは、具格名詞に「の」の語尾を附して、譯すべし。

yadi te proyojanam dārakeṇa 若し御身には、子の必要あらば。御身もし子を欲せば。

aprajñāḥ putrāir na proyojanam. 愚なる子の必要なきなり。愚な子は、之を要せず。

§ 297. 具格名詞は、ko guṇaḥ (何の効かある), ko' rthaḥ (何の益かある) alam (輟めよ) 等の語と共に、一文の中に來ることあり、此の場合には、其のものの無用なることを表示せるなり。例せば。

ko' rthaḥ putreṇa yo na vidvān na dhārmikaḥ 學なく、道なき子は、何の益かある。

alam çankayā 疑懼することを輟めよ。

此等の具格の用法に關しては § 186.2 を参照すべし。

§ 298. 具格は、時ありて、動作又は状態の様式を示すことあり。

Te dhūrtāḥ kroçāntareṇa vrikṣa-traya-tale sthitāḥ. 彼等詐欺者は、俱盧舍を隔て、三樹の下に立てり。

Tad-ājñayā bravīmi. 余は、かれの命令に従ふて、語るべし。

Mṛigas tathāiva kāka-vacanena sthitāḥ. 鹿は、鳥の言に従ひて、かくのごとく、居たり。

第六十四課

猿と楔子

1. Asti Magadha-deçe Dharmāraṇya-saṁnihita-vasudhāyām Çubha-dattā-nāmnā kāyasthena vihāraḥ kārayitum ārabdhaḥ. Tatra kara-patra-vidāryamāṇa-kāṣṭha-stambhasya kiyad-dūra-vidirṇa-khaṇḍa-dvayasya madhye kilakaḥ sūtra-dhāreṇa nihitaḥ. Tatra ca vana-vāṣī mahān vānara-yūthaḥ krīḍanārtham āyātaḥ. Teṣveko vānaraḥ kāla-daṇḍa-prerita iva tam kilakam hastābhyām dhṛitvopaviṣṭaḥ.
2. Tatas tasya muṣka-dvayam lambamānam kāṣṭha-dvayābhyantare praviṣṭam. Anantaram saha-capalatayā mahatā prayatnena kilakam ākriṣṭavān. ākriṣṭe sati kāṣṭhābhyām cūrṇitāṇḍa-dvayaḥ pañcatvam gataḥ. avyāpāreṣu vyāpāram yo naraḥ kartum icchati |
sa eva nidhanam yāti kilotpatīva vānaraḥ ||

上文の翻譯

1. 摩揭陀國に於ける達磨林に隣れる地に「シユアハタツタ」と稱する「カーヤストハ」族のもの精舎を造らせ始めき。木匠は、其の處に、鋸にて挽き割りつゝありし材木の少許り挽き割れたる兩片の間に、楔子を挿入し置きたり。然るに、林中に棲める猿の群は、其處に遊戯せむとて多く來り、其の中の一猿は、宛がら死の神の杖にて磨かれしごさくかの楔子を兩手にて握み坐り込みたり。
2. 是に於て、かれの擧丸は、下に垂れたるまゝ、木片の間に挟まれり。やがて、かれは、本來浮躁なる性質なりしかば、非常に力を籠めて、楔子を曳き拔けり。楔子曳き拔かれしごさき、擧丸は兩木片の爲に打碎かれて、かれは死したりとぞ。
たづさばるべからざるごさき、たづさはらむとする人あり、かゝる人こそ、楔子を曳き抜きし猿のごさく、死に就くものなれ。

第六十五課

鳥の夫婦と黒蛇

1. Kasmimçcit tarāu vāyasa-dampatī nivasataḥ. Tayoçcāpatyāni tat-koṭara-sthitena kṛiṣṇa-sarpeṇa khāditāni. Tataḥ punar garbhavati vāyasi vāyasam āha: “nātha, tyajyatām ayaṁ taruḥ. Atrāvasthita-kṛiṣṇa-sarpeṇāvayoḥ saṁtatīḥ satatam bhakṣyate. Yataḥ Duṣṭā bhāryā çatham mitram bhṛityāç cottara-dāyakaḥ |
Sa-sarpe ca gṛihe vāso mṛityur eva na saṁçayah ||

Vāyaso brūte: “ priye, na bhetavyam. . . Vāraṁ vāraṁ mayāitasya mahāparādhaḥ soḍhaḥ. Idānīm punar na kṣāntavyaḥ. ”

2. Vāyasy āha: “ katham etena bālavatā sārthaṁ bhavān vighrahitum samarthaḥ? ” vāyaso brūte: “ alam anayā caṅkayā¹. Atrāsanne sarasi rājaputraḥ pratyaham āgatya snāti. Snāna-samaye tad-āngād avatāritam tūrtha-çilā-nihitam kanaka-sūtram cañcvā vidhṛityānīyāsmīn koṭare dhārayiṣyasi. ” Atha kadā cit snātum jalam praviṣṭe rāja-putre vāyasyā tad anuṣṭhitam. Atha kanaka-sūtrānusaraṇa-pravṛittai² rāja-puruṣāis tatra koṭare kṛiṣṇa-sarpo dṛiṣṭo vyāpāditaçca-

1. (§297) 2. (§40)

上文の翻譯

1. 或る樹に於て、烏の夫婦棲みき、而して、彼等の雛は、其の樹の(tat)の朽洞に棲める、黒蛇の爲に噉はれき、是に於て、牝鳥は、再び懷妊せしとき、牡鳥に云へり、わが夫よ、此の樹は捨てらるべし、吾等二人の子は、常に此處に棲める黒蛇の爲に、噉はるればなり、何となれば、

執拗なる婦と、偽の友と、口答へする下僕と、蛇ある家に棲むこと、は、即ち死なり、疑あるべからず、

牡鳥は云へり、愛するものよ、畏るゝなかれ、余は屢々、かの蛇の罪を觀忍せり、今や、再び堪へ忍ぶべきにあらず、

2. 牝鳥は云へり、かの蛇は力強し、御身如何にしてか、かれと戦ふことを得べき、牡鳥は云へり、かく疑懼することを憚めよ、此の近傍の池に、日々王子は來りて、澡浴すれば、澡浴の際、王子の身より、ニリ下せる金鎖の浴池の石の上におかれたるを、御身傍にて、啣へ、持ち來りて、此の朽洞に置くべしと、かくて、あるとき、王子は、澡浴の爲、水に入りしとき、牝鳥は、かくなせしかば、金鎖を覓めて來れる王臣等は、かの朽洞に於て、黒蛇を見て、かれを打殺せしとん。

第六十六課

三人の詐欺者

1. Asti Gāutamārānye Frastuta-yajñāḥ kaçcīd brāhmaṇaḥ. Sa ca yajñārthaṁ grāmāntarāc chāgam upakriya skandhe kṛtvā gacchan dhūrta-trayenā-valokitaḥ. Tatas te dhūrtā yady eṣa cchāgaḥ kenāpy upāyena labhyate tadā mati-prakarṣo bhavatīti samālocya vṛikṣa-tale kroçāntareṇa¹ tasya brāhmanasyāgamanaṁ pratikṣya pathi sthitaḥ. Tatṛāikena dhūrtena gacchan sa brāhmaṇo' bhilitaḥ: “ bho² brāhmaṇa, kim iti kukkuraḥ skandhenohyate³? ” viprenoktam: “ nāyam çvā kim tu yajñā-cchāgaḥ ”
2. Athānantara-sthitenānyena dhūrtena tathāivoktam. Tad ākarṇya brāh-

maṇaç chāgam bhūmāu nidhāya muhur nirikṣya punaḥ skandhe kṛtvā dolāyamāna-matiç calitaḥ. Tad-anantaram punar gacchan sa brāhmaṇas tritīyena dhūrtenoktaḥ: “ bho brāhmaṇa, kim iti kukkuraṁ skandhena bhavān vahati: ” Tad ākarṇya niçcitam evāyam kukkura iti matvā chāgam tyaktvā snātvā sva-griham yayāu. Sa cchāgo tāir dhūrtāir nītvā bhakṣtaḥ.

ātmāupamyena yo vetti⁴ durjanam satyavādinam |

sa tathā vañcyate dhūrtāir brāhmaṇaç chāgato yathā ||

1. (§298) 2. (§294) 3. (uhyate, vah の受動調) 4. (§284)

上文の翻譯

1. 喬答摩林に於て、或る婆羅門の「プラスタ・ヤヂユナ」と呼べるが居りき、而して彼祭祀を營まむ爲、他の村落より、山羊を購ひて、之を肩にし、途を往けるとき、三人の詐欺者によりて見られき、是に於て、彼等三人の詐欺者は、思へらく若し此の山羊にして、或る方便にて得られむには、智慧すぐれたる業なるべしと、斯く評定し合ひて、三株の樹の下に、一俱慮舎を隔て、かの婆羅門の來るを待ち、途上に佇み居りき、かの婆羅門往きしとき、彼處に於て、一人の詐欺者は云へる様、婆羅門よ、如何なれば犬は肩にて搬ばるゝやと、婆羅門は云へり、是れ決して犬にあらず、祭祀に用ふる山羊なりと。

2. 斯くて、間もなく、佇み居たる他の詐欺者は、同じく (tathāiva) 云ひしかば、これを聽きて、婆羅門は山羊を地上に卸し、屢々熟視したるのち、元のごとく、肩になして、心惑ひながら、往けり、是れより間もなく、途を往ける婆羅門は、第三の詐欺者によりて、云ひかけられき、婆羅門よ、御身如何なれば、犬を肩にて搬ぶにやと、これを聽きて、彼は、是れ必定犬なりと思ひて、山羊を捨て、身を洗ひ清めて、己が家に歸れり、かの詐欺者は、かの山羊を持ち往きて、食せりとぞ。

自己より類推して(比量)悪人を認めて、眞實を語るものとなす人あり、かゝる人は、山羊よりして、欺かれし、婆羅門のごとく、詐欺者の爲に欺かるべし。

第六十七課

悪き鳥と善き雁

1. Asty Ujjayinyām mahān pippala-vṛikṣaḥ. Tatra haṁsa-kākāu nivasataḥ. Kadā cid grīṣma-samayē pariçrāntaḥ kaç cit pathikas tatra taru-tale dhanuṣ-kāṇḍam¹ nidhāya suptaḥ. Tataḥ kṣaṇāntare tan-mukhād vṛikṣa-cchāyāpagatā. Anantaram sūrya-tejasā tan-mukham vyāptam avalokya kṛipayā puṇyātmanā pāpa-rahitena tat-pippala sthitenā haṁsena pakṣāu prasārya² punas tan-mukhe chāyā kṛitā. Tato nirbharam nidrā-sukhīnā pariçrāntena pānthena mukha-vyādānam kṛitam. Anantaram sva-bhāva-

dāurjanyena para-sukhāsahiṣṇuḥ sa kākas tasya mukhe puriṣotsargam
kṛitvā palāyitaḥ. Tato yāvad asāv utthāyordhvam³ nirikṣate tāvat tenā-
valokito haṁsaḥ kāṇḍena hataḥ. Ato' haṁ bravīmi:

Na sthātavyaṁ na garātavyaṁ durjanena samaṁ kva cit |
kāka-saṅgād dhato⁴ haṁsas tiṣṭhan gacchamāṇ ca vartakaḥ ||
Vartaka-kathāṁ api kathayāmi.

2. Ekadā bhagavato Garuḍasya yātra-prasaṅgena sarve pakṣiṇaḥ samudra-
tīraṁ gatāḥ. Tataḥ kākena saha vartakaḥ calitaḥ. Atha gopālasya
gacchato dadhi-bhāṇḍād vāraṁ vāraṁ tena kākena dadhi kḥādyate. Ta-
to yāvad asāu dadhi-bhāṇḍam bhūmāu nidhāyordhvam⁵ avalokate tāvat
tena kāka-vartakāu dṛiṣṭāu. Tatas tena kheditaḥ kākaḥ palāyitaḥ. var-
takaḥ svabhāva-niraparādho manda-gatis tena prāpto vyāpāditaḥ.

1. (§291) 2. (pra + sṛi の催起相連續體) 3. (utthāya + ūrdhvam)
4. (§293) 5. (nidhāya + ūrdhvam)

上文の翻譯

1. 烏闍街那に於て、大なる畢波羅樹あり、其處に雁と鳥と棲みき。或る夏の時、一人の旅客、
困憊して、其の樹下に弓箭を置いて眠れり。それより一刹那の後、彼の顔より樹の蔭移り往きぬ。
やがて太陽の光、かれの顔に照り渡りしかば、これを見て、かの畢波羅樹に棲める雁は、性質
善く、悪心なきものなれば、兩翼を伸せて、元のごとく、かれの顔に蔭を作りぬ。是に於て、困憊
せる旅客は、心地善けに、深く眠りて、口を開きぬ。やがて、本來性質悪しく他の幸福を嫉めるか
の鳥は、かれの口へ、糞便をなして、逃れ去れり。それより、かれは、起き上りて、上を見しとき、
雁を見しかば、箭にて、かれを殺せりとぞ。是の故に、余は云ふ、人は決して悪人と共に行き交留
るべからず。鳥と友となりしより、雁は留まれるとき殺され、鶴は往けるとき殺されたりと。

余は鶴の話をも語るべし。

2. 或る時、尊き禽王の祭禮にて、あらゆる鳥は、海邊に往きしかば、鶴は鳥と共にいで往けり
かくて、かの鳥は、途往く牧人の酪を盛れる甕より度々酪を食せるにぞ。かの牧人は、酪を盛れ
る甕を地上に卸し、見上げしとき、鳥と鶴とを見たり。是に於て、鳥はかれに嚇されしより逃れ
去りしも、本來罪なき鶴は、身動き遲鈍なりし爲、かれの爲に捕へられ、殺されしとぞ。

第六十八課

貪慾の罰

1. Asti kasmim̐cid adhiṣṭhāne Hari-datta-nāmā brāhmaṇaḥ. Tasya ca
kriṣim̐ kurvataḥ¹ sadāiva niṣphalaḥ kālo' tivartate. Athāikadā sa brā-
hmaṇa uṣṇa-kālāvasāne gharmaṁtaḥ sva-kṣetra-madhye vṛikṣa-cchāyāyām
prasuptaḥ. Athānatidūre valmīkopari prasāritam̐ bhīṣanam̐ bhujānga-

mam̐ dṛiṣṭvā sa cintayām āsa: “nūnam eṣā kṣetra-dēvatā mayā kādā
cid api na pūjitā. Tenedam̐ me kriṣi-karma viphalī-bhavati. Tad
asyā² aham̐ pūjām adya kariṣyāmi” Ityavadhārya kuto' pi kṣiram̐
yācitvā carāve nikṣipyā valmīkāntikam̐ upagamyovāca: “bhoh, kṣetra-
pāla, mayāitavantaṁ kālam̐³ na jñātam̐, yat⁴ tvaṁ atra vasasi, tena
pūjā na kṛitā. Tat sam̐prati kṣamasva”. Ityuktvā dūgdham̐ nived-
ya gṛihābhimukham̐ prāyāt. Atha prātar yāvad āgatya paçyati, tāvad
dināram̐ ekam̐ çarāve dṛiṣṭavān. Evaṁ ca prati-dinam̐ ekākī samāgatya
tasyāi kṣiram̐ dadāty ekāikam̐ ca dināram̐ gṛihṇāti.

2. Athāikasmin divase valmīke kṣira-nayanāya⁵ putram̐ niyojya brāhmaṇo
grāmāntaram̐ jagāma. Putro' pi⁶ kṣiram̐ tatra nītvā sam̐sthāpya ca
punar gṛiham̐ samāyātaḥ. “Dināntare tatra gatvā dināram̐ ekam̐ ca dṛi-
ṭvā gṛihītvā ca cintitavān. Nūnam̐ sāuvarṇa-dināra-pūrṇo' yaṁ valmīkah.
Tad enam̐ hatvā sarvam̐ eka-vāraṁ grahīṣyāmi”. Iti sam̐pradhārya an-
yeduh̐ kṣiram̐ dadatā brāhmaṇa-putreṇa sarpo laguḍena cirasi tāditāḥ.
Tataḥ katham̐ api dāiva-vaçād amukta-jivito roṣāt tam̐ eva tīvra-viṣa-da-
çanāis tathādaçat, yathā⁷ sadyaḥ sā pañcatvam̐ upagataḥ. Atha dvitīya-
dine tasya pitā samāyātaḥ. Sva-janebhyah̐ suta-vināça-kāraṇam̐ çrutvā
param̐ viṣadam̐ upagataḥ.

1. (獨立屬格) 2. (āi + a) 3. (§295.1) 4. (§283) 5. (nayanaの爲
格) 6. (§287) 7. (.....せし程、甚しく、かれを咬みたり)

上文の翻譯

1. 或都に「ハリ、ダツツ」を呼べる婆羅門ありき、而して、彼、農業を營みしにも拘はらず、常に
收穫なくして、時の過ぎ往くのみなりしか、斯くて、或時、熱暑の終る頃、暑に苦みて、己が地の
中に於ける樹の蔭に眠れり。然るに、其處より程遠からぬ所に、蟻塚あり、其の上に一蛇の恐る
しき形せるが、長くなりて、横はれを見て、彼は思へり、これ、地主神なること疑なし、余は未だ
曾て、かれを供養せし、ことなかりき、是の故に、余の農事は、徒事となれるなり、然れば、余は今
日彼に供養をなすべし、とかく考へたるのち、那處よりか、生乳を乞ひ求めて、皿に盛り、蟻塚の
傍に近づきて云へり、地主神よ、余はかゝる長時の間、御身の茲に棲み居れることを知らざりき
是の故に、供養をなさざりしなり、然れば、今は赦されよかしと、斯く云ひて、生乳を供じ、家に
歸れり、斯くて、翌朝來りて見しとき、一金錢の皿の中にあるを見たり、斯のごとく、毎日獨り來
りて、彼に生乳を供じ、一個づ、金錢を得たりき。

2. 斯くて、或日婆羅門は、蟻塚に、生乳を持ち往かむことを、其の子に命じ、己は他の村落に赴